室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

室蘭工業大学研究報告. 文科編 第9巻第1号 全1冊

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-05-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2948

室蘭工業大学

研究報告

文科編

（人文科学
社会科学
外国語
保健体育）

第九巻 第一号

昭和五十一年十二月

MEMOIRS

OF

THE MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Cultural Science

VOL. 9 NO. 1
Dec., 1976

MURORAN HOKKAIDO

JAPAN

Editing Committee

S. Takeuchi	President	*Chairman of the Committee*
K. Orikasa	Prof.	*Electrical Engineering*
M. Murozumi	Prof.	*Industrial Chemistry*
H; Yamaguchi	Prof.	*Mineral Development Engineering*
H. Kondo	Prof.	*Civil Engineering*
S. Hoshino	Prof.	*Mechanical Engineering*
H. Sugawara	Prof.	*Metallurgical Engineering*
H. Watanabe	Prof.	*Chemical Engineering*
H. Ichiba	Prof.	*Industrial Mechanical Engineering*
M. Obata	Prof.	*Architectural Engineering*
Y. Kumagai	Asst. Prof.	*Electronic Engineering*
S. Oide	Prof.	*Literature*
Y. Kinokuniya	Prof.	*Science*
Y. Ueda	Asst. Prof.	*Electrical Engineering (Evening Session)*
M. Yoshida	Prof.	*Chief Librarian*

All communications regarding the memoirs should be addressed to the chairman of the committee.

These publications are issued at irregular intervals. They consist of two parts, Science and Engineering and Cultural Science. When they amount to four numbers, they form one volume.

室蘭工業大学研究報告　文 科 編

第 九 巻　　第 一 号

目　　次

良心について……石 山 敬 雄（1） 1

ドイツ民謡集並びに蒐集関連文献目録……坂 西 八 郎（21） 21

ルッツ・ロェーリヒ*)：民謡概念のテキスト学的考察（研究資料）
……坂 西 八 郎（103）103

エルンスト・シャーデ：ルートヴィヒ・エルクの批判（選択）
的民謡集とかれの「民謡」—概念（研究資料）
……坂 西 八 郎（133）133

ロルフ・W・ブレードニヒ*)：大衆歌(1)のイノヴァツィオーン
スツェントゥルム(2)としてのハンブルク（研究資料）
……坂 西 八 郎（147）147

「ヘンリー八世」地誌考（後篇）……竹　内　豊（157）157

William Blake の *Newton* について ……狐 野 利 久（197）197

バドミントン選手の平衡機能の検討……小 成 英 寿（217）217

教官学術研究発表集録(昭和 50. 4. 1～51. 3.31)…… （273）273

良心について

石　山　敬　雄

Die kurze Zusammenfassung über das Gewissen

von Y. Ishiyama

(a) Es gibt zweierlei Gewissen, d. i. böses Gewissen und gutes Gewissen. Im allgemeinen hat man behauptet, daß böses Gewissen allein ursprünglich und eigentlich ist. Aber das Studium gutes Gewissens ist die wichtige Forschung, die uns hier beschäftigen soll und der wir als Lehrende und Lernende der Wissenschaft eigentlich auch nicht ausweichen können.

(b) Das Gewissen gibt etwas zu verstehen, es ruft mich. Aber es bleibt undeutlich, was mich ruft, weil das Gewissen einzig und ständig im Modus des Schweigens redet.

Eine tiefere Besinnung zeigt aber, daß beide Fragen (a) und (b) gar nicht getrennt voneinander behandelt werden können.

1.

世界は転機を迎えようとしている。新しい世紀への胎動は，既に始まっている。二度の大戦を経験した世界は，政治，経済，外交，科学，宗教，思想等において，顕著な様相を呈し始めている。植民地の解放，少数民族の台頭，人種差別の問題，大国指導者の交代，資源ナショナリズムの発生等は，イデオロギーを越えて，地球的規模において展開しつつある。これらの諸問題は，もはや資本主義，社会主義，あるいは民族主義といった枠内では，どうしようもないものとなっている。

人類は種族，民族，国家，宗教，自由圏，共産圏等の既成概念を超克して，新しい原理に立たなければならなくなった。そうでなければ，膨張を続ける

世界人口，食糧の危機，エネルギーや資源の枯渇，公害等に対処して行くことはできないであろう。今や人類は生死の関頭に，世界は破局の前に立っている，と言っても過言ではなかろう。

こうした限界状況，極悪な諸条件を前にして，問わなければならないのは，それらに対応する人類の心の在り方，すなわち，「心術」である。

「この世界においては何処にも，否，広くこの世界の外においても、ただ善なる意志の外には，無制限に善と見なされ得るようなものは，考え得られない。理解力，機智，判断力，その他名称の如何を問わず，精神上の種々なる才能と呼ばれているようなものや，あるいは勇気，果断，意図における不撓不屈などの気質の諸性質は，疑いもなく多くの点よりみて、善いまた願わしいものである。しかし，かような自然の賜物も，これを使用すべきものであり，それの固有の性質がその故に，性格と呼ばれている所の意志にして，善ならざる時には，かえってこの上もない悪となり，害となり得る」[1]のであって，世界の運命は一にかかって，人類の意志如何にある。その意志に善なる方向性を与えるのが，良心である。

今，世間を震撼させている，いわゆる「ロッキード事件」をめぐって，良心が問い直されているのも，それの一つの証しである。曰く，「大庭証人は苦痛と疲労を押して，再度喚問に応じ，所信を明確に述べた。同証人の責任感と良心は百万言の証言よりも，重く尊いものに思えた。私は深く感動した」[2]と。また曰く，「政府高官殿。全国民はちゃんと知ってますよ。真実はただ一つ。貴殿らに一片の良心と責任感があられるならば云々」[3]と，悲痛な声で「良心のめざめ」を訴えている。

その他，狂歌，川柳に託した驚き，嘆き，怒り，憤りの声，皮肉と揶揄の絶望的叫び，これらを一億総ヒステリーと冷笑してはならない。さらに，「ロッキード社の贈賄事件が明らかになると同時に，日本の各政党は代表をワシントンに送り……，それにしても日本人，しかも社会の指導層の人々が，この問題について，国家の忠誠心よりも，企業や上司，親分への忠誠心を重んじる，封建的道徳のとりこになって，黙しているのに驚きである。また自民

党から共産党まで，戦後三十年以上たっても『米国への甘え』から抜け出していないのも，不思議である」[4]に注目する時，「日本人とは何か」が問われているように，考えられる。日本人の根本的エートス，ないし体質を究明するためにも，良心に理性の光を当てなければならないと思う。

2.

良心を探究することの難渋さについて，ハイデッガーは「良心の事実の存否をめぐって，多くの議論があり，現存在の実存に対する良心の判決機能も，さまざまな評価をうけ，そしてその発言内容の解釈もまちまちである。そのために，われわれはついこの現象を，手放したくなるほどである」[5]とかこち，「けれども，この事実の疑わしさや，それについての解釈の疑わしさなどは，かえってここに現存在の根源的現象が，横たわっているということの証拠であるかも知れないのである」[6]と述べ，良心の基礎的存在論的分析，実存論的探究を始めるのである。

すなわち，良心の探究は，その存在の事実性や現象，あるいは機能や発言内容，ないしはその構造の究明にとどまるのではなく，良心を主題的に取扱うことによって，現存在の根源的現象を，実存論的にあらわにしようとするのである。

ハイデッガーの良心論は，一先ずおいて，われわれの日常的生活の中に，素材を求めて，探究を始めようと思う。そこで，先の事件の証人として，厳かに宣誓して，証人席についた人人の幼少期，彼らの心に善の芽を植えつけ，彼らのパーソナリティーの形成に預って力のあった，道徳教育の教科書を繙いてみよう。

学校教育に期待をかけ過ぎる，という非難ないし批判を熟知しながらも，冒険的試みをするゆえんのものは，「教科書の歴史」の開巻冒頭において，著者は「教科書が日本人を作った」[7]と宣言しているが，そこに真理性を見出すからである。曰く，「教科書が日本人を作った。教科書こそは，一部の国民にだけ働きかけたというのではなく，広く一般民衆の一人一人に大きな影響を

与えて，日本人を形成してきた。特に過去の日本の教育が，教科書中心の教育であっただけに，その影響は大きかった。義務教育だけで実社会に出た人達に対しては，それだけ，その人の一生を支配する程の力をもち，また，高等教育を受けた人達に対しても，そのパーソナリティ形成の基礎を養って行ったのである。このように考えて，教科書の歴史こそは，小学校の歴史であり，庶民の教育史であり，国民の形成史である」[8]と。

さて，「第十六課　良心」の一節に，「我等は何かよい事をすると，人にほめられないでも，自分で心嬉しく感じ，また何か悪い事をすると，人に知れないでも自分で気がとがめます。これは誰にも良心があるからです。この良心は，幼少の時にはまだ余り発達していないのですが，親や先生の教を受けて次第に発達し，善い事と悪い事との見わけが，はっきりつくようになります。そうなると，人の指図を受けないでも，善い事はせずには居られないように感じ，悪い事はすることが出来ないように感じます。我等は自分の良心の指図に従わねばなりません。人が見ていないからとて，自分の良心の許さないことをしては，自分で自分の心を醜くすることになります。我等はよく自分をつゝしんで，天地に恥じないりっぱな人にならねばなりません」[9]とある。

簡潔な文章であるが，良心がわれわれの心に先験的に内在すること，それは教育によって発達すること，善悪の判断をくだし，善を勧め悪を退ける働きをする良心の現象と機能，罪責と悔恨等良心に関わる，本質的な問題が取り上げられている。これらを手がかりにして，考察を深めて行きたいと思う。

良心という言葉は，孟子の「告子章句上」[10]に出て来るが，これは「仁義の心」と同じ意味で用いられ，人間に固有な良い心を意味している。これだけでは正邪善悪を見分ける能力とは，無関係のように考えられる。しかし，「尽心章句上」[11]に「良能良知」の概念がある。「良能」は修習によらず，自然によくする能力のことであり，「良知」は特に考えないでも，自然に知る能力のことである。これらとの関連から「良心」という言葉も，学ばずして正邪善悪を見わける能力を，意味するようになったのであろう。

身近かにある辞典にも,「良心とは道徳的な善悪をわきまえ区別し，悪を行なうまいとする心の働き」[12]とあり，良心的については,「良心に忠実であるさま。いいかげんですますことなく，自分の心に納得できるまで，徹底的に物事を行なうさま。誠実なさま」[13]とある。また,「良心とは①その人固有のよい心。本心　②自分のおこないについて，よしあしの判断を下す心」[14]とあり，内容的にはほとんど同じである。

西欧語[15]で良心は，*συνείδησις*(syneidesis), conscientia, conscience, Gewissen と表現されているが，これらの言葉の前綴 *συν*-, con-, Ge-は,「ともに」「いっしょに」「すべて」「まったく」の意味をもち，後綴はいずれも,「知」「学識」「見識」「知識」「熟達」を意味する。従ってこれらの言葉は，語源的には「ともに知る」ということで,「全体知」ないし「共同知」を表わす。すなわち，全体との連関において,「自己自らと共に」あるいは「他の人たちと共に」認識する作用であり，その結果としての知識である。

認識作用，知覚，意識に止まる限り，そこには未だ道徳的意味は存在しないが,「全体知」ないし「全知」，あるいは「共同知」が,「神と共に」「他者と共に」の「知」として捉えられ，やがて「神の声」「社会の声」「共同体の呼び」となり，道徳的意味を宿すようになったのであろう。

かくして,「ラテン語 conscientia は知識，認識の意味。悪い結果をこうむるのは，衝動のままに行動するからだという知識が，社会的に条件づけられて習慣化し，そういう認識によって，ある行動の傾向が禁止されている感情的色調の状態。従って道徳意識と同じ，すなわち，正邪善悪を判断し，邪悪を悔い斥け，正善を意志する知情意の統一的意識」[16]という良心の概念，ないし定義が一般的に承認されるようになったのであると思う。

ちなみに，明治初期の翻訳修身書，泰西勧善訓蒙[17]を見ると,「善悪ヲ分ツ心ヲ良心ト云フ」(第六章)「善悪ヲ別タントスルニハ，左ノ教に従フ可シ。曰ク，己レノ欲セサル所，人ニ施スコト勿レ」(第七章)「人善悪ヲ別チ，善ハ勧善ノ道ニ合ヒ，悪ハ勧善ノ道ニ背クヲ知ルノ齢ニ至リシ後ハ，自カラ善ヲ勉メ悪ヲ避ク可シ」(第八章)「人其良心ヲ以テ善悪ヲ分別ス。蓋シ人情欲ノ

惑ニ因リ，又ハ過テ良心ヲ失ヒ，悪を為スコトアリト雖モ，精神静定シテ，再ヒ良心ノ生スル時ハ，如何ニ邪悪ノ人ト雖モ，其良心に因リ己レノ悪ヲ為シタルヲ知ルニ至ル可シ。人苟モ忿怒，憎悪，怨恨，大酔等ニ因リ，其良心ヲ失フコト勿レ」（第十一章）とある。

緒言に「蓋シ，『ボンヌ』小学校ニテ児童ヲ教フルカ為メ，作リシモノニシテ，西洋勧善説ノ大成完備セシモノニ非サルナリ。因テ其記スル所，深遠ニ渉ルモノ希ニシテ，専ラ解シ易キヲ主トセリ」[18]とあるように，小学校用テキストとして編まれたものゆえ，平易な教えとなっているが，しかし深遠な哲理，宗教思想が背景にあることは否定し得ない。

ここでも良心は，善悪を分つ心として，先験的に付与されたものであり，過って良心を失い悪をなすことがあっても，精神が平静になる時は，再び良心は働き，罪の意識に目ざめるであろう，と説き良心を失うことのないよう力説している。

また，善悪を分つに当っては，己れの欲せざる所は人に施すことのないようにを規準にと，論語の一節[19]を思わせる文章であるが，「我と汝」に始まる個人の集合体の意識，「共同の知」が前提されていることにも，注目されなければならないと思う。良心は共同知，全体知として，社会的性格をもつ，個人の内面的道徳的現象なのである。

3.

良心は正邪善悪を分別する判断であるから，道徳意識に数えられるが，邪悪を斥け，正善を意志する知情意の統一的意識である限り，それは単なる道徳的意識ではない。つまり，良心は一般にいう道徳的判断とは異なり，ひたすら自己自身に関わり，自己自身に対してのみ妥当する道徳的意識である。そのうえ何よりも自己の罪責の自覚と，深く結びついているところに特色がある。

かように良心が，自己自身の内奥において，ある時は警告し，諫止し，責め，ある時は心に安らぎを与えるものとして，極めて顕著な道徳意識であり，

人格性の核心をなすものである。良心の機能の二面性を，先の修身書は「我等は何かよい事をすると，人にほめられないでも，自分で心嬉しく感じ，また何か悪い事をすると，人に知れないでも自分で気がとがめます」と，平易な言葉を使いながらも，格調高い文章で，不易の教を説いているのである。

この良心現象の二側面は，それぞれ「疚しからざる良心(gutes Gewissen)」と「呵責する良心 (böses Gewissen)」[20]と呼ばれている。ところが一般には，「良心はたしかに文字通りに『良い心』なのであろうが，現実にはかならず悪をせめる意識として登場する。よいことをしているときには，良心は沈黙している。良心は良心の呵責としてのみ現象する。良心は根源的には，悪に対する否定の声である。善を肯定することは，良心にとっては根源的なことではない。良心の本来的な形は böses Gewissen(良心の呵責)であって，gutes Gewissen（良心に疚しさのないこと）ではない」[21]あるいは「所謂呵責する良心 böses Gewissen が，良心現象の最も根源的・第一次的なものとして，挙げられなければならぬ。それに対して所謂よき良心(疚しからざる良心 gutes Gewissen）とは，実は böses Gewissen の単に一形式にすぎないともいわれる。即ちそれはせいぜい，自己の一定の行為に対する罪責の存せざることを，弁明的に信ずるものにすぎず，自らの善を積極的に主張するものではない」[22]とあるように，「呵責する良心」が良心の根源的なものであり，「疚しからざる良心」はその派生的形体に過ぎない，と考えられている。経験的事実に即して考えてみても，良心は悪に対する否定の声，「責め」「咎め」であって，善を肯定し勧めることは，良心にとっては根源的なことではなかろう。しかし，前者を強調する余り，後者を軽視してはならない。gutes Gewissen が「自己の一定の行為に対する罪責の存せざることを，弁明的に信ずるもの」すなわち，罪悪は犯していないのだ，とほっと安堵の胸を撫でおろすもの，魂に安らぎを与えるものに過ぎないもので，「自らの善を積極的に主張するもの」でなくても，己れの善き行為に人知れず喜びを感ずる素朴な心は，見過ごされてはならないと思う。まして，「よいことをしているときには，良心は沈黙している」と片付けられてはならなく，「何かよい事をすると，人にほめ

られないでも，自分で心嬉しく感じ」という良心の働きは，注目されなければならない。

いつも良心が，「過失」――「責め」――「良心の目覚め」という図式で，「呵責する良心」の側からのみ捉えることは，一面観であるのみならず，そこには常に「否定の契機」――過失ないし悪行――が前提されていることを注意深く見届けなければならない。これでは幼少期の子供たちや，青年期の若者たちの良心の訓練のためには，過失，愚行，罪悪，非行があらかじめ用意されなければならないことになる。ここには教育のために，非教育的状況が作られねばならないという，教育の逆説がある。

従って良心の芽を植えつけ，育てるためには，派生的形体と見られているgutes Gewissenに，改めて理性の光をあてる必要がある。特に幼少期の子供たちの「魂の配慮」に思いを致すならば。すなわち，些細な善行，小さな親切をも見逃がすことなく，賞賛し奨揚すること，人知れず心のほころびを感ずることの尊さを意識させること，かくして「肯定的契機」を媒介として，良心を啓蒙し訓練することが，考えられなければならない。人に知られようと知られまいと，意に介することなく善行為をつみ，内心の喜びを感ずるうるわしい心情は，気高く尊いものである。特に現今，顕在化されたもの，感覚的なもののみを実在と考える時代にあっては，内心に安らぎを与えるgutes Gewissenは，教育的見地から見直されなければならない。

ところで，内心の喜びをもって，自己満足に過ぎないと見なしたり，うぬぼれと解するのは僻目であって，むしろ謙虚にして敬虔な内心の喜びこそ，諺にもある「宵の明星や暁の明星」にもまさる美しいものである。内心の喜びといい，良心的といっても，つまるところ主観的なものではないか，という良心の主観性の問題は，道徳を越える問題である。それは良心が「全体知」「共同の声」でありながら，「個別的な意識と心情」にのみ関わるからである。すなわち，解明を拒む「罪責の意識」が，良心の根本的性格をなしており，そしてそれは徹頭徹尾「自己的」なもので，他者の容喙を許さないものだからである。ここに他の道徳的意識と異なる，良心の良心たるゆえんがあるの

であるが，古来，良心といえば罪責の意識，呵責，悔恨，あるいは警告，諫止の面が強調されて来たのは，ヨーロッパの歴史的精神的風土によるものであろう。

人間の存在は究極的には，「神と人」の関わりのもとに把握され，人間存在の根底には，「見えざる神」「隠れた神」が横たわっていた。この被造物観が良心現象の背景にあったので，罪責の意識が良心の核心となったのであると思う。その限りにおいて，個別的内面的意識である内心の喜びも，この神との出会いにおいて，考察されなければならないであろう。

4.

二つの良心について考察して来たが，呵責する良心が根源的なものである，とする立場は否定し得ないであろう。何か悪い行為をしたとき，あるいは為そうとするとき，自己自身の心の奥底から，それを責め，咎め，警告し，禁止する良心の声を，誰しも聞くであろう。

このように良心は，責める声であるが，一体誰が誰を責めるのであろう。しばらく日常的経験に即して考えてみよう。良心は既に為された悪しき行為や，愚行，過失に対しては，譴責，叱責，裁きの声として，未来の行為に対しては，警告，諫止，禁止の声として響いて来る。これらを「責めの声」として，包括することができる。

「責めの声」は自己自身の内奥から，自己自身に向かって迫って来る。その限りにおいて「良心の声」は，自己から発して自己に向かうので，責めているのも自己，責められているのも自己で，「裁く自己」と「裁かれる自己」の二つが，己れの中に存在しているように見える。しかし良心の作用は，そのように「見る自己」と「見られる自己」という，観想的反省の立場にあるのではなく，厳しく自己の全存在，全体性ないし全人格に対して，その「責任」を追及する実践的立場にある。

従って「責める自己」と「責められる自己」の二つの自己があるのではなく，存在するものは「責められる自己」のみである。それは自己という全人

格が，その全存在において責められているのであるから，自己の中には「責めることのできるもの」は存在しないからである。人格がその全体性において，裁かれ責められているのである。

また責められる自己に，罪の意識と悔恨の情がなければならないことは，いうまでもない。罪責の自覚のないところには，良心が現象し機能することはなく，従って「悔い改め」も「救済」もない。かように良心は，人間の存在に深く関わり，「責め」「罪の意識」「悔恨の情」「悔い改め」「救済」と，呼応する宗教的色彩の強い道徳的現象である。

ここで責められているものは，自己自身の全人格であり，全存在であることが明らかとなったが，では「責めるもの」は一体誰なのであろう。「良心の声」「本能の声」「内奥の声」「社会の声」「民族の声」あるいは，「神の声」とさまざまにいわれて来た。しかしいずれをも，安易に是認することはできない。

「本能の声」とすると，動物も良心をもっていることとなり，道徳的存在者の一つに数えなければならなくなるが，その妥当性を見いだすことはできない。動物には罰に対する鞭の苦痛はあり得ても，道徳的罪悪の意識は存在しない。従って「本能の声」ではない。では誰の声なのか。

そこで手がかりになるのは，良心の語源的意味である。良心の原義は「全体知」「共同知」であった。人間存在が根源的に個的存在であり，同時に社会的存在で，「共同の生の呼び」が，「良心の声」として捉えられていた。「人間とは『世の中』であると共に，その世の中に於ける『人』である。だからそれは単なる『人』ではないと共に，また単なる『社会』でもない。ここに人間の二重性格の弁証法的統一が見られる」[23]また，「我々は，『世の中』にして『人』であるところの人間に於て，『世の中』としての性格を，人間の世間性或は社会性と名づけ，それに対して『人』としての性格を，人間の個人性と名づける。人間を単に『人』と見るのは，個人性の側面からのみ人間を見るのであって，方法的抽象としては許されるが，それだけでは具体的に人間を把握する所以でない。我々はあくまでも，人間を右の両性格の統一として把握しなければならぬ」[24]のであって，個人性と社会性とは，実は人間の

二つの側面であって，相即不離の関係にある。それぞれを切り離して，個別的に考えることは，抽象的思惟としては可能であっても，生きた人間をその具体性において捉えるものではない。

個人は社会の共同性からそむきでることによって，自由な独立のものとなり，社会は個人の自由な独立性を否定することによって成り立つのである。個人が社会の中に埋没しないで，そこからそむきでて，自己を自覚すると同時に，その自己を否定して，再び社会の全体にかえり行く運動を，不断にくりかえさなければならない。この動的関係を失うと，個人中心の利己主義や，個人を抑圧する全体主義に陥ってしまう。

従って世の中，世間，世界と呼ばれるものも，もはや単なる空間的広がりではなく，人と人とのかかわり合う，共同の場としての広がりであり，いわゆる社会なのである。共同存在には自ら秩序があり，それによって共同体の命脈は維持されて行く。この共同体の「共にの声」，全体的秩序の呼びが，「良心の声」に外ならなく，良心の呼びが「社会の声」といわれるゆえんである。

人間存在の個人的契機と全体的契機が，また「孤独」を可能にするのであって，全体ないし社会のないところには，孤独ということはありえない。共同体の秩序，社会的ルールへの背反が，共同体との関連性を断ち切り，彼は社会の中にありながら，孤立し孤独なものとなる。良心の「責めの声」は，彼を社会から切り離し，他の存在者との連関を断ち，執拗に責めたてる。彼は天上に懸けるものもなく，また，地上に支えるものもないまま，この声の前にひとり立っている。この時彼は本質的に孤独なのである。だから両親や友人，親しい人人の如何なる慰めも援助も，彼をこの孤独から救うことはできない。彼の外で何が起ころうと，すべては彼にとって無縁なものである。彼に存在するものは，ただ心の奥深く抱いている罪責の念のみである。また，良心の責めに悩むものは，何よりも「独り」になろうとする。親しい人人の思いやりや慰めは，かえって煩わしいものにすらなる。彼はひたすら「責めの声」にのみ，耳を傾けようとするからである。

かように良心は社会の秩序を乱し，罪を犯した者を，共同体から引き離し

て孤独ならしめ，罪の意識に苦しみ悩ませ，悔恨の涙にくれさせるのである。従って良心の声はまた，全体性への復帰を促がす声でもある。罪を深く自覚した人間は，ただこの呼び声を通してのみ，社会に還帰できるのである。だから「良心の声」は，「責めの声」であるとともに，「呼び戻しの声」でもある。良心の声が，「社会の呼び」といわれ，あるいは「秩序の呼びかけ」「正義の体系の呼び」といわれるのは，こうした事情によるのである。

ところが，良心の責めに苦しみ，悔恨の涙にくれ，社会的償いが済み，共同体への復帰が許されたとしても，罪の意識は消え去るものではない。それどころか罪障の念は，時と共にいよいよ深まり，生涯の重い十字架となり，真に魂が憩うことのない場合がある。とすると，良心の声を「社会の声」「正義の体系の呼び」とすることに，疑義が生ずる。なぜなら社会の科する法的刑罰は，罪責の意識を軽くするであろうが，罪障の念は去らず，また，世間が赦し，当の相手が許し，自らも能う限りの償いをしても，罪の意識は業火のように燃え続け，永劫に消滅することがないからである。かように社会の力をもってしても，制しきれないものが残る限り，良心の声を「社会の声」とすることはできない。

さて，良心の呵責に苦しむものは，誰かに自己の悪行を見られたから，悩んでいるのではない。それにもかかわらず，彼は自己の行為が，すべての人に見られ，知られているかのように感じ，風の音にも脅える。あたかも一切を見通す力を宿した，絶対的な「全知」の前に，立たされているように。彼は目をそむけ，急ぎ足で逃げ，隠れ家を探し当てようとする。うまく隠れおおせたと思う瞬間，彼は鋭い「良心の声」を再び耳にする。どこへ逃れ，どこに隠れても無駄である。良心の追跡はラジカルで妥協を許さない。たちどころに彼を捕縛してしまう。それどころか，いよいよ鋭く絶対的な力をもって，彼の責任を追及する。

「責めの声」は遍在にして全能である。如何に大胆不敵なものであっても，良心の威力を前にしては，沈黙し平伏してしまう。彼の如何なる弁明も，抗弁も，防禦も，すべて徒労に終る。良心に対して彼は何の要求もなし得ない

のに，良心は彼に対して，罪を問い，責め，それに応答することを要求する。他者に対してであるならば，抗議することも，反論することも可能であろうが，良心に対しては全く無力である。

このように「良心の声」は，相互的横の関係においてではなく，いわば垂直の方向においてのみ迫り来るが，それは遍く存在し，全知全能の絶対的存在者としてある。従って「良心の声」は，「神の声」に外ならない，といわなければならないであろう。

かくして今やわれわれは，「神と人」の関わりの中に立ち，神に面座することとなる。しかしその神は，絶対的存在者であっても，われわれをはるかに越えてある，超絶的存在者ではない。なぜならば神の声は，われわれの責めを問い，応答することを要求し，回避することを許さない，人間との関わりをもつものであるからである。だが，神と人との関わりは，交互に作用し合うものではなく，垂直の方向で一方的直線的に，作用するものであることは，既に見て来たところである。

また，この絶対的存在者は，秩序とか法則とか，あるいは正義の体系といった抽象的存在者でもない。それはわれわれがオームの法則に対して，尊敬の念を抱くことがないように，それらに対して尊敬の情は喚起されないからである。われわれが「責の声」によって，罪責を自覚し，応答の責務を負う限り，絶対者は人格的存在者でなければならない。絶対者の声は如何なる言い訳けも，自己弁護も許さず，いつも絶対的力をもって迫り来るものであった。

しかしこの絶対者は，決して顕現しない。ただ「良心の呼び声」として，自らをあらわす「隠れた神」なのである。かく考察し論究して来ても，なお，人格的絶対的存在を，直ちに「神」と呼ぶことに異論があると思う。そこで神から遠ざかり，再度人間および人間存在の始源に立ち帰り，存在のもとのものを探究しなければならない。しばらくハイデッガーの周辺を遍歴してみよう。

5.

「良心はなにごとかを告知する。良心は開示するのである。……なお立ち入って良心を分析すると，それが呼び声であることが明らかになる。呼ぶことは語りの一様相である。良心の呼び声は，最自己的存在可能をめざして，現存在に呼びかけるという性格をもつが，それも現存在を最自己的責めある存在へ，呼び起こすというやり方においてである」[25]ここにハイデッガーの良心論の核心があると思う。

「呼ぶことは語りの一様相である」[26]「呼ぶことをわれわれは，語りの様相として捉える」[27]のであるから，語りに「語り手」と「聞き手」と「語られること」があるように，「呼び」にも「呼ぶ者」「呼ばれる者」「呼ばれること」の三つがある。一般に語りの世界は，共互存在の中で語られる言葉の世界と解されており，「聴取」と「沈黙」を含んでいるが，このことはそのまま，「良心の呼び」にも適用され得る。

さて，良心の呼びにおいて，呼びかけられるものは，誰であろう。それは明らかに「現存在自身」である。その現存在というのは，「ほかの人人とともに配慮的に共同存在している，世間的自己」[28]である。すなわち，日毎に新しい世間話や，好奇心や曖昧さの空騒ぎに，気をとられている現存在，他者や世界のもとに頽落している現存在の自己である。この自己が「聞き手」として，引き出されるのである。「呼び声は音もなく，まぎれもなく，好奇心をよせつけることもなく，呼びかけなければならない。このようなありさまで，呼びつつ告知するもの，それが良心なのである」[29]。

では「何を」告知するのか。この呼びかけにおいて語られるものは，「厳密にいえば何もない」[30]のである。良心は何も語らず，世界の出来事についても何も告げ知らせず，まして，呼びかけられている自己の中で，「己れとの対話」[31]を始めることを促すのでもない。ただ，「呼びかけられた自己は，己れ自身へ向かって，すなわち，最自己的存在可能へ向かって，呼び起こされる」[32]だけなのである。

良心は実は何かを告げるのではなく，「世間的—自己」の世間を断ち切り，本来的存在へと呼びさますのである。現存在は知らず識らずのうちに，世間へと頽落して，本来の自己を喪失している。そうした世間的自己へ呼びかけ，世間への聴入を打破し，本来の自己を呼び戻すのである。従って良心の呼びは，言葉でいい表わしたり，音声を伴うことを，必ずしも必要としないのである。

「良心はいつもただ，沈黙の様相で語る」[33]のであり，「呼びは沈黙という無気味な様相で語る」[34]のである。それというのも，「呼び声は，呼びかけられた者を，世間の公開的な世間話の中へ，呼びこむのではなく，まさにそこから連れだして，実存的な存在可能の秘密の中へと呼びかえす」[35]ものだからである。沈黙と無気味さは表裏をなすもので，音を伴うことなく無言で迫り来るがゆえに，かえって呼びかけられる者は，それを前にして戦慄するのである。沈黙ほど気味悪く，恐ろしいものはないのである。

こうして，「呼びかけられるもの」と「呼ぶこと」は，明らかとなったが，呼び声の主，すなわち良心の主体は，依然として不確かなままにある。良心は単独の現存在のただなかで，「何物かが私を呼ぶ」[36]という様相で，どこからともなく呼びかけて来る。「じっさい呼びかけは，決してわれわれ自身が計画したり，準備したり，随意に遂行したりしたものではない。思いがけなく，それどころか，心ならずも呼び声がするのである。他方また呼び声は，疑いもなく，私と共に世界内に存在している，ある他人から来るのでもない。呼び声は私のうちから来るのに，私を越えて来る」[37]のである。少なからず宗教的響きをもっているが，これこそ良心の呼びの真実の姿であると思う。

良心の声は，われわれ自身が考えて，発するものでもなく，そうかといって他人が発するようなものでもない。しかし内奥において響く，その声の実在を疑うことはできない。「呼ぶ者はそれが誰であるかについては，世間的には何ものによっても規定され得ない。それは，己れの無気味さの中に立つ現存在であり，異郷にあることとしての，根源的な被投的世界内存在であり，世界の無にさらされたむきだしの事実である。呼ぶ者は，日常的な世間的自

己にはなじみのないもの，いわば外来の声のようなものである」[38]すなわち，「呼ぶ者」は，世間的・日常的に確定され得ないが，無気味さの中に立つ現存在，被投的投企の不安の状態にある現存在である。

良心は「憂慮の声」[39]として，頽落の生に沈潜する現存在に呼びかける。従って，「現存在は呼ぶ者であるとともに，呼びかけられる者」[40]であって，呼ぶ者は己れの存在可能のために，被投的投企のうちで不安に戦く現存在である。呼びかけられる者は，世間への頽落のうちにある現存在で，その最自己的存在可能へと呼び起こされるのである。

かくして「呼び声」は，己れと他者，ないし己れと世界の間においてではなく，被投性のもとにある現存在と，存在可能へと呼び起こされる，現存在との「裂け目」を貫いて響く声である，ということができる。換言すれば，「存在そのもの」が，端的に現存在のうちに，いわば「垂直」に開示されることであり，「良心の声」は，存在の「現」の本来的開示である。現存在に「存在」が開示されるとともに，「世間」は消え失せる。

従って先の「呼び声がする」[41]あるいは，「何ものかが，私を呼ぶ」[42]という時の「呼び」は，単なる現存在の呼びではなく，「存在」の開示がそこでなされる，ということである。「現存在自身が良心となって，この存在の根底から呼ぶ」[43]のであって，「良心の声」は「存在の声」に外ならないのである。そしてそれはまた，一切をあらしめる最根源としての「存在」の声であるから，「良心の声」は「絶対者の声」というべきである。

ところで，「現存在の唯一の関心事である，この存在可能へ呼び起こす」[44]という時の，本来的存在ないし最自己的存在可能とは，如何なるものであろう。投企とは実存的可能性に対して，現存在が自由であるということであるが，その自由は一者の選択の中にのみあり得るものであり，他のものを選ばなかった，ないしは選び得なかった，ということに支えられてのみ可能である。

それは投企それ自身，すべてを投企できない，非的な性格を含んでいるからである。このように，「被投性の構造の中にも，投企の構造の中にも，ひと

しく本質的に非性がひそんでいる」[45]から，現存在が事実的にはいつも既に頽落として，存在している非本来的現存在の非性も，これに基づくのである。また「現存在の存在は憂慮」[46]であり，「憂慮そのものは，その本質において，底の底まで非性に浸透されている」[47]ので，現存在は現存在である限り，本来的に非的なるもの，負い目を背負うた「責めあるもの」[48]である。良心の呼びは，まさにこれをあらわにするのである。

一般に「責ある」という時は，他人に何かを借りていることを意味する。つまり他人に請求権のあるものを借りていて，それを返却しなければならない，という状態にあることをいうのである。かように「責め」は，配慮し得るもの，物在するものに関わっている。つぎに「責めある」は，あることをひき起こした，当の責任者であるということ，すなわち，あることの原因であるということを意味する。

この「責めある」の通俗の二義，つまり，「に負うている」と「の原因である」が一つになって，われわれが「罪を犯す」と呼ぶ行為となるのである。他人に対して「責め」があるということは，他人の現存在における，ある欠陥に対する「原因」「もと」であるということである。かように，現存在には「非」ということによって，規定された「非的性格」がある。この「非性」が，現存在の根底に根源的にまつわりついているがゆえに，現存在は罪を犯すものとなる。従って「責め」は，過失を犯すことによって，初めて生ずるものではない。逆に過失が，根源的に「責めある存在」に基づいて，初めて可能となるのである。

現存在は自己の存在可能の，「もと」としてあり，且つ，かかる「もと」であるべく，既に投げ出されているのである。従って現存在は，自己の存在を根本から支配し得ない。かように現存在は，その本性上投げられたものであるから，それ自身「非的存在」「責めあるもの」として，本来的に罪を犯さざるを得ない状態にある。だからといって，過失を犯すことが許され，罪悪の行為が容認されるということではない。

ここに至って，注目すべき事態が生起する。すなわち，これまでの良心に

関わる考え方,「過失—責め」の図式は,「責めある存在—過失」と,転回されなければならないであろう。

己れ自らによって,存在へともたらされたのではない被投性,すべてをなし得ない投企性,それらはつまるところ,現存在は根源的に有限なもの,つまり,「死すべきもの」「神ならざるもの」ということに外ならない。だからこそ,現存在はその有限性に耐え切れず,頽落という非本来的生存状態へと誘われるのである。そしてこの有限性は,不可避の追い越し得ない死,終末に差しかけられた現存在の根本的性格において,決定的にあらわになるのである。

「現存在の存在を,根源的にくまなく支配しているこの非性は,本来的な死への存在において,自己自身に露呈される」[49]のであり,良心の教える非性,責めある存在と,死への存在として,先駆して悟る終末論的有限性とは,同じものである。従って,現存在の存在である憂慮というのも,責めある存在,有限的存在のことに外ならなく,良心はまさにこの「責めある存在」へと,すなわち,「終末論的有限性」へと,そうしたものとしての己れの被投的投企へと,かくして,己れの存在そのものの運命性のただ中へと,正しい仕方で立ち出でるように,現存在を促すのである。

(昭和51年5月18日受理)

注

1) Kant : Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, s. 249
2) 朝日新聞:「声」, 51. 3. 5
3) 同 上, 51. 3. 10
4) 同 上, 51. 3. 10
5) Heidegger : Sein und Zeit, s. 268
6) ibid., s. 268
7) 唐沢富太郎:「教科書の歴史」, p. 1
8) 同 上, p. 1
9) 尋常小学校修身書巻六, p. 46～47 (これは国定三期教科書で,大正七年から昭和七年まで,十五年間使用された。本文を「現代仮名づかい」に改めた。

10)　新釈漢文大系4，孟子「告子章句上」；p. 392,「人に存する者と雖も，豈仁義の心無からんや。其の，其の良心を放する所以の者，亦猶斧斤の木に於けるがごときなり。旦旦にして之を伐らば，以て美を為す可けんや。其の日夜の息する所，平旦の気あるも，其の好悪，人と相近きもの幾んど希なるは，則ち其の旦昼の為す所，有之を梏亡すればなり」

11)　同上，「尽心章句上」；p. 453,「孟子曰く，人の学ばずして能くする所の者は，其の良能なり。慮らずして知る所の者は，其の良知なり。孩提の童も，其の親を愛することを知らざる無し。其の長ずるに及びてや，其の兄を敬することを知らざる無し。親を親しむは仁なり。長を敬するは義なり，他無し，之を天下に達するなり，と」

12)　岩波国語辞典（第二版），p. 1059

13)　同上，p. 1059

14)　角川漢和中辞典，p. 915

15)　*συνείδησις*, a joint knowledge, consciousness, 2. conscience (Greek-English Lexicon p. 672)

conscientia, a knowing of a thing together with another person, joint knowledge, consciousness (A Latin Dictionary p. 426)

16)　哲学辞典（平凡社），p. 1247

17)　箕作麟祥譯述：泰西勧善訓蒙（紀元二千五百三十三年刻）巻之上，第一篇「良心及ヒ善悪ノ分別」

18)　同　上，緒言；箕作麟祥識

19)　新釈漢文大系1，論語「顔渕第十二」；p. 255

20)　新倫理講座III,「人間と倫理」；p. 111

21)　岸本芳雄他共著：「倫理学」，p. 84

22)　新倫理講座III，p. 111

23)　和辻哲郎：「倫理学」上巻，p. 12

24)　同　上，p. 20

25)　Heidegger：Sein und Zeit, s. 269

26)　ibid. s. 269

27)　ibid. s. 271

28)　ibid. s. 272

29)　ibid. s. 271

30)　ibid. s. 273

31)　ibid. s. 273

32)　ibid. s. 273

33)　ibid. s. 273

34)　ibid. s. 277

35)　ibid. s. 277

36) ibid. s. 277
37) ibid. s. 275
38) ibid. s. 276
39) ibid. s. 277
40) ibid. s. 277
41) ibid. s. 277
42) ibid. s. 277
43) ibid. s. 277
44) ibid. s. 277
45) ibid. s. 285
46) ibid. s. 284
47) ibid. s. 285
48) ibid. s. 282
49) ibid. s. 306

ドイツ民謡集並びに蒐集関連文献目録

坂　西　八　郎

Materialien deutscher Volksliedsammlungen

Hachiro Sakanishi

Den vorliegenden Materialien deutscher Volksliedsammlungen liegen die Belege des DVA zugrunde. Durch die Freundlichkeit von Herrn Hauptkonservator Dr. R. W. Brednich war es möglich, daß uns die umfangreichen Materialien für die Volksliedforschung in Japan als erste Information zur Verfügung gestellt wurden.

本研究報告文科編第八巻第三号（昭和五十一年一月）258（77）～292（112）ページの間に記載された文献にひきつづき，こゝに若干の資料を記載する。こゝに記載するものは，主として1900年以降発行された単行本並びに蒐集に関連する文献である。当資料作成作業に参加したドイツ民謡文庫の研究員，とくに煩雑な実務連絡を担当された文庫秘書M・ガイルマン女史 Frl. M. Geilmann に深く謝す。

Rodewald, F. : Neues Volks-Liederbuch. Enthaltend 26 der neuesten Volkslieder und Couplets der Gegenwart.
Hannover : Verlag Fr. Rodewald, o. J.

Aeschbacher, C. : Deutsche Volkslieder bearbeitet.
Leipzig u. Zürich : Verlag Gebruder Hug & Co.

Das Allotria Buch. Die beliebtesten Stimmungslieder.
Ausgabe Allotria. Klavier mit Text.
Mainz : Schott's Söhne, o. J. 47 S. m. Not.

Deutsch, C. : Klavierfibel. Schule f. Blattspiel mit 103 Volksliedern.
Leipzig : Steingräber-Verlag. (Ed. Nr. 2604).

Flublätter. Die„Arbeitsgemeinschaft für Volkslied und Laute", in Oberhollabrunn (Niederösterr.) von Ferd. Back begründet, gibt Lieder mit Lautenbegleitung in Form von Flugblättern heraus.
Auslieferung in Wien durch den Lehrerhausverein. Bisher sind 18 Lieder erschienen.
Angez. : DVl 27, 139.

Häseler, A. : Neues Wandervogelalbum. 4 Bde.
Hamburg : Domkowsky u. Co.

Hatzfeld, J. : Das Brünnele. Deutsche Volkslieder für gemischten Chor. 3 H. 1. Teil(Musik im Haus Bd 36).
München-Gladbach : Volksvereins-Verlag.
Bespr. DVl 31, 156.

Freut euch des Lebens.
Leipzig : Carl Kühle. m. Clavierbegl.
Angez. : DVl 40, 168.

Fritz, B. : Aùswahl leichter ein-und zweistimmiger Volkslieder mit Zitherbegleitung, nebst einer kurzen Vorunterrichtslehre für die Zither. Neubearbeitet.
Donauwörth : C. Auer. 64 S. quer 4.

Der fahrende Gesell. Begleitungen von A. Keil. Reichenberg : Verlag Stiegel.
Bespr. der 12. Auflage : Heimatbildung 9 (Reichenberg 1927—1928), 139ff.

Holzinger, J. : Volksliederband. 50 der schönsten Volkslieder, für zwei Flügelhörner arrangiert. Zwei Teile zu je zwei Heften.
Steyr : E. Kaltenbacher.
Angez. : DVl 33, 115. (1931).

Kranz, A. : Liederkranz für kleine Musikanten. Bd. I. Die Jahreszeiten im Volkslied. op 30, 1—4.
Leipzig : Verlag Fr. Portius.
Angez. : Zs. f. Musik 97, 653ff. (1930).

Kurz, H. : Wanderliederbuch zum Gebrauch in der Schule und

auf froher Wanderschaft. Eingdr. Bilder von L. Richter.
München : R. Oldenbourg 187, 86 S. 8°.

Alte und neue Lieder, mit Bildern und Weisen. . . im Auftrag des Verbandes deutscher Vereine für Volkskunde und der preußischen Volksliedkommission herausgegeben von J. Bolte, M. Friedlaender, J. Meier, F. Panzer und M. Roediger.
Leipzig : Insel-Verlag, o. J.
Rez. : Heimatbildung 18, 156.

Deutsche Liederlust. Eine Auswahl der vorzüglichsten Volkslieder mit einstimmigen Tonweisen für gesellige Kreise.
Gütersloh : Verlag von C. Bertelsmann, o. J.

Neues Volks-Liederbuch. Eine Sammlung der in den mittlern und niedern Ständen beliebtesten Lieder und Gesänge.
Znaim : M. F. Lenk, o. J. 94 S. kl. 8°. (S. 1—6 fehlen).

Lott, W. : "Der Landchor", eine Sammlung für gemischten Chor.
Leipzig : Kistner u. Siegel.
Angez. : Die Musik 28, 394.

Notenblätter aus dem Hohner-Verlag.
Troffingen : M. Hohner, 57 Nummern.
Angez. : DVl 40, 167.

Othegraven, A. v. : Jahreskränzlein. 31 Volks-und Kinderlieder für Mezzosopran und Geige. (Musik im Haus Bd. 58).
München-Gladbach : Volksvereins-Verlag.

Othegraven, A. v. : Deutsche Volkslieder für Mezzosopran und Bariton mit Klavier.
München-Gladbach : Volksvereins-Verlag.

Philipp, E. : In des Lebens Maien. 100 der schönsten deutschen Volks-u. Wanderlieder für die deutschen Jugend herausgegeben. 3. Auflage.
Berlin : H. Agitz 1927. 64 S. 16°.

Reichs-Lieder. Deutsches Gemeinschafts-Liederbuch. Neumünster : G. Ihloff & Co, o. J. 431 S. gr. 8°.

Rüdinger, G. : Nun singet und seid froh. Für 1 bis 3 Frauen-u. Kinderstimmen. Mit Klavier oder Orgel op. 62. München-Gladbach : Volksvereins-Verlag.

Rüdinger, G. : Sieben alte Volkslieder für Männerchor. op. 96. Augsburg u. Wien : Anton Böhm & Sohn.
Angez. : Hess. Sängerwarte 14, 55.

Rüdinger, G. : Der Maibaum. Volkslieder fur gemischten Chor. op. 42. (Musik im Haus Bd 28). München-Gladbach : Volksvereins-Verlag.

Seifert, A. : Der Rosenstrauch. (Musikalisch Hausgärtlein, hrsg. von W. Hensel. H. 3.) Augsburg : Bärenreiter-Verlag.
Bespr. : Singgemeinde 1, 135.

Thießen, H. : Liebe, alte Weisen für gemischten Chor, gesetzt von H. Thießen. Nr. 1 A.
Leipzig : Kistner & Siegel.
Angez. : Die Musik 33, 405.

Neues Volksliederbuch für gesellige Kreise. Eine Auswahl der schönsten und beliebtesten Volkslieder. II. Theil des "Blumenstrauß für Sänger". (Reutlinger Volksbücher Nr. 55).
Reutlingen : Verlag von Enßlin & Laiblin, o. J.

Volkstein, P. : Mitten im Garten. Neue Volkslieder, mit Lautensatz von Arnim Knab.
Wolffenbüttel u. Berlin : Gg. Kallmeyer Verlag. 28 S.

Was singet und klinget. Liederbuch des Bundes deutscher Jugendvereine.
Sollstedt.
Angez : Unterm Rosenhut 1, 108.

Weckmeister, W. : Deutsches Lautenlied.
Berlin : Verlag N. Koster. 666 S.

Adler, M. : Volks-u. Kinderlieder.
Halle : Buchdruckerei d. Waisenhauses 1901. 29 S.

Henninger, K. : Neues Wunderhorn. Die schönsten deutschen Volkslieder aus alter und neuer Zeit mit Singweisen und Bildern.
Berlin : Verlag von Fischer & Franke (Titelzeichnung datiert : 1902). VIII, 238 S. 8°.

Kopp, A. : Ein Sträußchen Liebes-Blüten.
Leipzig 1902.

Reiter, J. : Vierzig Volkslieder aus dem deutschen Liederhort von L. Erk und F. Böhme ausgewählt, für Soloquartett oder Chor gesetzt. Partitur Ausg. 1.
Liederheft des deutschen Volksliedervereins in Wien 1904.
Bespr. : Zs. f. österr. Vkde 10, 118.

Michow, A. : 377 Couplets, Lieder und Walzerlieder—Texte. Die berühmtesten Lieder Deutschlands ausgewählt und mit Angabe der Komponisten und Verleger versehen.
Berlin : A. Michow 1905. 160 S.

Lobsien, W. : Nun singet und seid froh! Deutsche Volkslieder, gesammelt.
Bremen . Carl Schünemann 1906.
Angez. : Niedersachsen 12, 121.

Funk, W. : Volkslieder mit Gitarre oder Klavier bearbeitet.
Leipzig : Breitkopf u. Härtel 1907.
Angez. : Zs. d. intern. Mus. Ges. 9, 46.

Pommer, J. : 27 deutsche Volkslieder im Satze für gemischten Chor.
Wien : 1907, 67 S. 8°.
Angez. : Blümml, Beitr. zur dt. Volksdichtung(Wien 1908), 185.

Schiffels, J. : Der Sängerfreund. Volks-u. volkstümliche Lieder, 4 stimmiger Satz.
Hamm : 1907, 159 S. 8°.

Angez. : Blümml, Beitr. zur dt. Volksdichtung(Wien 1908), 185.

Schneider, B. : 101 heitere Volkslieder aus dem 15. bis 19. Jahrhundert, ausgewählt und für 3 stimmigen Frauenchor bearbeitet.
Leipzig : 1907. 207 S. 8°.
Angez. : Blümml, Beitr. zur dt. Volksdichtung(Wien 1908), 185.

Wolzogen, E. L. F. v. : Hundert deutsche Volkslieder. Ausgewählt, bearbeitet und zur Laute gesungen. 1908. 96 S. 8°.

Fricke, H. u. J. Maas. : Liederbuch. Sammlung ein-u. mehrstimmiger Lieder. 33. Auflage.
Hamburg : 1909. 228 S.
Angez. : Ant. Kat. 219 v. H. Th. Wenner, Osnabrück, Nr. 1560.

Peslmüller, J. : Aus entschwundenen Tagen. 50 echte Volkslieder in Wort und Weise 15. bis 19. Jahrhundert, ausgewählt im Auftrag des Vereins für Volkskunst u. Volkskunde. Musiksatz von C. Schmitt.
München : 1909. III, 90 S. Querformat.
Rez. : Zs. f. Vkde 20, 410.

Prümers, A. : Philipp Friedrich Silcher, der Meister des deutschen Volksliedes.
Stuttgart : 1910. 96 S. m. 5 Taf., 2 Faks. Not. u. chronol. Werkverzeichnis.

Roux, W. : Hallisches Liederblatt. (S. 2) : Für die Hallische Ortsgruppe des „Wandervogel E. V." Herausgegeben u. mit Lautensätzen versehen von W. Roux. Buchschmuck von P. Boock. 48 S. 8°.

Böse, H. : Volkslieder für Heim und Wanderung. Im Auftrage der Zentralstelle fül die arbeitende Jugend Deutschlands herausgegeben.
Berlin : Buchhandlung Vorwärts 1914. XII, 280 S. m. Not. 8°.

Schmalstich, C. : Das deutsche Volkslied. Eine Auswahl der schönsten Heimatlieder nebst einem Tongemälde.

Berlin : Richard Birnbach 1915. 134 S. 4°.

Moll, F. : Volkslieder, gesammelt und für die Laute gesetzt. H. 1 bis 5.
Leipzig : Hofmeister 1914.

Jugend und Heimat. Erinnerungen eines Fünfzigjährigen. (Verfasser : W. Langewische?).
Ebenhausen b. München : Brandt Verlagshandlung 1916. 314 S. 8°.

Krome, H. : Was die Wandervögel singen… Eine Zusammenstellung von H. Krome mit einer leichten… Zupfgeigenbegleitung… versehen von H. Schmidt-Kayser.
Berlin : Verlag von R. Birnbach, I. Vorwort datiert 1917, 188 S., II. Vorwort datiert 1918, 172 S.

Moll, F. : Lustige Liedlein zur Laute.
Graz : Böhm 1920.

Albert, H. : Spielmusik für Gitarre oder Laute. Leichte Unterhaltungsmusik.
Leipzig u. Berlin 1921. 17 S. m. Not. 8°.

Götsch, G. : Der Jungfernkranz. Meine liebsten Volkslieder zur Laute und Geige. Bearbeitet.
Wolfenbüttel : Julius Zwißler 1921. 136 S.

Naumann, H. : Deutsche Volkslieder. (Quellenbücher der Volkshochschule, hrsg. von der Volkshochschule Thüringen, 7. H).
Langensalza : Beyer u. Söhne 1921. 32 s. Auswahl für Seminarübungen.
Angez. : Zs. f. Dktunde 36, 310.

Sprüngli, Th. : Das deutsche Volkslied.
Köln : Tonger 1921.
Rez. : DVl 28, 52ff.

Neumann, K. : Der Spielmann. Liederbuch für Jugend und Volk.
Burg Rothenfels : Quickbornhaus, o. J. 4. Auflage.

Vorrede datiert 1922. 384 s. (Im allgem. aus gedruckten Quellen).

Fontana, O. M. : Der Garten Immergrün. Deutsche Volkslieder. Leipzig, Wien u. Zürich : E. P. Tal & Co Verlag 1922. 309 S. kl. 8°.

Werle, H. : Werle's Liederschatz, 3 H. Mainz u. Lgg : Schott's Söhne 1922.
Bespr. : Singgemeide 1, 61.

Baußnern, W. v. : Alte Volkslieder dreistimmig gesetzt. 5. Auflage. Marburg : Elwert 1923. 53 S.

Hensel, W. : Das Aufrecht Fähnlein. Liederbuch für Studenten und Volk. Volksliederbuch mit meist zwei-u. dreistimmigen Sätzen : enthält gegen 200 Lieder, dreistim- besonders viele fränkische.
Leipzig u. Eger : Böhmerland-Verlag 1923. 230 s.

Hensel, W. : Die Finkensteiner Blätter. Ein lebendiges Liederbuch in monatlicher Folge herausgegeben.
Augsburg : Bärenreiter-Verlag, I. 1923, II. 1924. 8°.

Rosen u. Rosmarin : Auswahl deutscher Volkslieder.
Leipzig : Schoeßmann 1923. 93 S.m. Bildern.

Böse, H. : Das Volkslied für Heim und Wanderung. 2. Auflage. Berlin : Arbeiterjugendverlag 1923. XX, 294 S.

Lämmle, A. : Deutsche Volkslieder ausgewählt.
Stuttgart : Fleischhauer & Sohn 1923. 144 S.

Wirth, A. : Das deutsche Volkslied. Ausgewählt und erklärt.
Dresden : Ehlermann 1923. 88 S. (Deutsche Schulausgaben Nr. 109)
Angez. : Zs. f. Dtkunde 38, 397.

Böhm, A. u. F. Burkhart : Fahrendes Volk. 250 deutsche Volkslieder mit Lautenbegleitung, im Auftrag der studentischen Verbände Jungösterreich und Neuland herausgegeben.

Wien : Volksbundverlag, 1923. 362 S. kl. 8°.

Das Wandervogelbuch. 2. verbesserte Auflage.
Rudolstadt i. Thüringen : Greifenverlag 1923. 108 S.m. Abb.4°.

Kickstat, P. : Die liebe Maienzeit. Deutsche Volkslieder mit allerlei Instrumenten, ein-u. mehrstimmig zu singen, Gesetzt. Wolfenbüttel : J. Zwißler 1924. 32 S. (F. Jöde, der Musikant. Beiheft Nr. 3.) .

Kraus, : Von Volksliedbüchern.
In : Unterm Rosenhut 1(1924) , 106—107. (Bibliographisches) .

Seelig, C. : Das neue Wunderhorn.
Leipzig : Feuer-Verlag 1924. 328 S.kl.8°.

Ameln, K. : Deutsche Zwiegesänge, zur Neuausgabe im„Musikalisch Hausgärtlein"
In : Die Singgemeinde 2(1925), 70—75.

Arnold, K. : Liederbüchlein für Alpenfreunde. Zusammengestellt und herausgegeben. 4. unver. Auflage.
München : Bergverlag R. Rother 1924. VI, 192, V S. kl.8°.

Baumann, P. : Alte und neue Lieder für gemischten Chor.
Stuttgart : Verlag der Freien Waldorfschule, o. J.
Bespr. : Singgemeinde 2, 56.

Baußnern, W. v. : Heitere Volkslieder. N. F. der alten Volkslieder. In dreistimmiger Bearbeitung. 3. Auflage.
Marburg : N. C. Elwert'sche Verlagsbuchhandlung 1925. 40 S.

Dahlke, E. : "Fürs Haus", Kinder-und Volkslieder mit leichter Lauten-oder Gitarrebegleitung bearbeitet.
Leipzig u. Berlin : N. Simrock 1925.
Angez. : Zs.f. Musik 92, 228.

Fritz, B. : Auswahl leichter ein-und zweistimmiger Volkslieder mit Zitherbegleitung nebst einer kurzen Vorunter-

richtslehre für die Zither. Neu bearbeitet. Bd 1., 2. Donauwörth : Buchhandlung L. Auter 1925. Bd 1(6. Aufl.), 64S. Bd 2(2. Aufl.)80 S.

Goffelje, K. : Ein Singebüchlein für Freunde guter deutscher Hausmusik, enthaltend eine Reihe alter weltlicher und geistlicher Volkslieder, mit mehrstimmigen Sätzen versehen.
Wolfenbüttel : Zwißler 1925. 16S. gr. 8°. (Hausmusik Heft 1) .

Hatzfelt, J. : Tandaradei. Ein Buch deutcher Lieder mit ihren Weisen aus acht Jahrhunderten.
München-Gradbach : Volksvereins-Verlag 1925. Ausgabe mit Klampfegriffen. 3. Auflage. VI, 382 S. kl. 8°.
Bespr. : DVl 29, 44.
Angez. : Die Musik 18, 919 ; Neue Musik-Ztg 47, 134.

Heckt, G. : op. 66. Alter Sang, neuer Klang. Deutsche Volkslieder meist älterer Zeit für dreistimm. Frauenchor frei bearbeitet. Heft 2.
Berlin : C. F. Vieweg 1925. 8°.

Heckscher, K. : Die Volkskunde des germanischen Kulturkreises. An Hand der Schriften E. M. Arnds und gleichzeitiger wie neuerer Parallelbelege dargestellt.
Hamburg : Martin Riegel 1925. 560 S. 8°.
Angez. : ZtVR. 31, 64ff.

Hensel, W. : Der singende Gesell. Lieder für Fahrt und Herberge in einfachem Satz.
Ausgsburg : Bärenreiter-Verlag 1925. 64 S.kl.8°.
Rez. : DVl 28, 85.

Herrmann, W. : op. 143. Deutsche Volkslieder als Duette mit Pianoforte bearbeitet.
Leipzig : Simrock 1925.

Jöde, F. : Altdeutsches Liederbuch im polyghonen Satz zu zwei

Stimmen. Neubearbeitete Auflage. 159 S. 8°.
Angez. : Die Musik 18, 378.

Kageler, L. : Deutsche Volkslieder aus dem 15. bis 19. Jahrhundert. Auswahl und dreistimmiger Tonsatz für 2 Sopran- und eine Altsimme.
Leipzig : C. Merseburger 1925, 1926.
Bespr. : DVl 29, 44.

Klaas, R. : Das goldene Buch der Lieder. 950 Volks-und volkstümliche Lieder. Natur und Heimat… für Gesang und Klavier oder für Klavier allein herausgegeben.
Berlin : Globus Verlag 1925. 774 S.4°.

Laesecke, R. : Das neue Lautenspiel, 8 neue und alte Volkslieder zum Lautenspiel und zur Lautenbegleitung nach neuer Lehrmethode bearbeitet und eingedruckt. Heft 1. 1925.
Angez. : Halbms. f. Schulmusikpflege 21, 15.

Das deutsche Lied. Ein Jahreskreis 1926.
Wolfenbüttel : Gg. Kallmeyer 1925. (Abreiß-Kalender mit alten deutschen Liedern).
Angez. : Die Musik 18, 615 ; Singgemeinde 1, 18ff.

Blankenburger Lieder.
Bad Blankenburg : Evang. Allianzhaus. 1925. 152 S. kl.8°.

Müller, A. : Deutsche Volkslieder, zweistimmig. 3. unveränd. Auflage.
Dresden : Zinzendorfhaus 1925. 99. S. kl. 8°.

Muenzer, O. : Das Landliederbuch. 6. Auflage von des Landwirts Liederbuch.
Leipzig : Reichenbach'sche Verlagshandlung 1925. 208 S. kl. 8°.

Neemann, H. : Alte deutsche Lautsche Lautenlieder.
Berlin : C. F. Vieweg 1925.
Angez. : Die Gitarre 7, 77ff.

Notung, : Das deutsche Gesandbuch. 3. Auflage.
Leipzig : Th. Weicher 1925. 133 s. m. Abb. kl. 8°.

Otto, Th. : Perlen alter Tonkunst. Eine Auslese der schönsten Volkslieder und Kunstgesänge des A-capella-Stils aus dem 13. bis 19. Jahrhundert für drei bis vierstimmigen Frauenchor bearbeitet. Bd. 1.
Berlin : C. F. Vieweg 1925. VIII, 384 S.

Reden, G. K. v. : Volkslieder zur Gitarre oder Laute. Aufgezeichnet und herausgegeben.
Leipzig : F. Hofmeister 1925. 87 S. m. 1 Titelbl. 8°.

Rein, W. : Deutsche Lieder vergangener Jahrhunderte, für drei Stimmen im polyphone Satz. 3. erweiterte Auflage.
Wolfenbüttel : J. Zwißler 1925. 1. Bd. 64 S., 2. Bd. 32 S.8°.

Rüdinger, G. : op. 49. Rund um die Linde. Volkslieder für gemischten Chor.
München-Gladbach : Volksvereins-Verlag 1925.

Schäublin, J. J. : Lieder für Jung und Alt. Neubearbeitete Ausgabe, 119 Auflage.
Basel : Helbing & Lichtenhahn 1925. XII, 384 S.

Schmalstich, C. : Das deutsche Volkslied. N. F. Bearbeitet für Klavier mit beigefassten Texten.
Berlin : Birnbach 1925. VII, 155 S. 4.

Schmidt, E. F. : Drei Laub auf einer Linden. 7 alte Volkslieder zu 4, 5 und 6 Stimmen polyphon gesetzt.
Augsburg : Bärenreiter-Verlag 1925. (Musikalisch Hausgärtlein H. 8)

Schneider, B. : Ein Liedlein läßt uns heben an. Ein Volksliederbuch für dreistimmigen Frauenchor.
Leipzig : Steingräber 1925.
Beser. : DVl 27, 63 ; 31, 158 ; Zs. f. Musik 92, 164 ; Singgemeinde 2, 181.

Schumann, Th. : Der Lautenschläger. Eine Liedersammlung mit Lauten-oder Gitarrenbegleitung. (Hansa Ausgabe) .
Leipzig : Domkowsky & Co 1925. 845 S. kl. 8°.

Siegel, R. : op. 7. Sechs deutsche Volkslieder. Duette für Mezzosopran und Bariton mit Begleitung eines kleinen Orchesters oder des Pfte.
Mainz : Schott's Söhne 1925.

Deutsches Sky-Liederbuch. Herausgegeben von der Schneeschuhabteilung der Sektion Schwaben und Österreichischen Alpenvereins.
Stuttgart : Schwäb. Schneelaufbund 1925. 115 S. m. Abb. u. Not. kl. 8°.

Sotke, F. : Wir zogen in das Feld. Fahrtenlieder T. 2. 2. Auflage.
Iserlohn : Sauerland-Verlag 1925. 32 S.8°.

Marburger Taschen-Liederbuch.
Marburg : A. Ebel 1925. 103 S. 16°.

Rheinisches Taschenliederbuch.
Hoursch & Bechstedt 1925. 64 S. kl. 8°.

Volks-Wander-und Reigenlieder.
Berlin : P. Schmidt 1925. 32 S. 16°.

Was man heute singt.
Köln : Wamahsi-Verlag 1925. Bd. 19 : 16S., Bd. 21 : 32 u. 8 S.

Was singet und klinget. Bearbeitet von B. Schneider und R. Nenninger. Notenausgabe.
Sollstedt : Buchverlag der Bundes deutscher Jugendvereine 1925. 4.: Weihnachts-und Neujahrslieder (S. 49-64).

Werle, H. : 25 altdeutsche Volkslieder und Gesänge.
Mainz : Schott's Söhne 1925. (1.Heft aus der Sammlung „Schul-u. Hausmusik" von H. Werle).
Angez. : Neue Musik-Ztg 46, 145 ; Singgemeinde 1, 61.

Winkelhage, A. : 16 deutsche Volkslieder. Ein Volksliederkonzert fur gemischten Chor bearbeitet.
Hannover : Hampe 1925.

Witzke, W. : 40 auserlesene alte deutsche Volkslieder für drei Stimmen in polyphonem Satz.
Ostervieck : Zickfeld 1925. IV, 76 S. 8°.
Bespr. : DVl 29, 28.
Angez. : Neue Musik-Ztg, 47, 134 ; Halbms. für Schulmusikpflege 21, 115ff.

Witzke, W. : 60 auserlesene alte deutsche Volkslieder für zwei, drei, und vier Stimmen, zum Teil mit Instrumenten in polyphonem Satz.
Osterwieck : Zickfeld 1925. IV, 107 S. 8°.
Angez. : Halbms. für Schulmusikpflege 21, 115ff.

Zack, V. : Zwanzing schöne alte Volkslieder, für gemischten Chor gesetzt, herausgegeben durch den Steirischen Sängerbund.
Graz : Alpenlandbuchhandlung „Südmark" 1925. IV, 47 S. kl. 8°. (2. Auflage 1933).
Bespr. : DVl 28, 93ff.
Angez. : Neue Musik-Ztg. 46, 565.

Zack, V. : Alte liebe Lieder. Volksweisen hochdeutsch und in der Mundart und auch schöne Jodler, ausgewählt und für zwei und drei Frauenstimmen gesetzt.
Graz : Alpenlandbuchhandlung 1925.
Bespr. : DVl 27, 77ff.

Baußnern, W. v. : Alte Volkslieder, dreistimmig gesetzt. Heft 1, 6. Auflage.
Marburg : N. G. Elwert'sche Verlagshandlung 1926. 53 S.

Boldt, F. : Deutsche Volkslieder mit eigenen Scherenschnitten.
In : Dt. Mh. 2 (Leipzig 1926), 545—551.

Brahms, J. : Neue Volkslieder von Brahms. 32 Bearbeitungen nach der Handschrift aus dem Besitz C. Schumanns. Zum ersten Male herausgegeben im Auftrag der deutschen Brahms-Gesellschaft von M. Friedlaender.
Berlin : Deutsche Brahms-Gesellschaft 1926. 64 S. 2°.

(Bearbeitungen nach Kretzschmer-Zuccalmaglio).
Angez. : Zs. f. Vkde 35／36, 208.

Bundesliederbuch. Jahrbuch des deutschen Sängerbundes.
(Dresden 1926) , 46－51.

Eberlein, G.u.Th.Knolle : Volksliederbuch für die deutsche Jugend. 5. Auflage.
Jena : E. Diederichs 1926. 301 S. m. Abb. kl. 8°.

Fritz, B. : Volkslieder mit Zitherbegleitung. Auswahl leichter ein-und zweistimmiger Lieder. Neu bearbeitet. 2 Bde.
Donauwörth : C. Auer 1926. (wenig echte Volkslieder).
Bespr. : DVl 24, 45.

Göbels, H.u.E.Veltgens : Hohenecker Singebuch. Zs. f. Heidhausen-Ruhr (Haus Hoheneck).
Hoheneckverlag 1926. 112 S. kl. 8°.

Guttmann, A. : Chorsammlung des deutschen Arbeiter-Sängerbundes. Gemischte Chöre ohne Begleitung.
Berlin : Verlag des deutschen Arbeiter-Sängerbundes 1926.
Bespr. : Die Musik 19, 205.

Hensel, W. : Der Prager Spielmann. Ein Sing-und Spielbüchlein. 2. umgearbeitete und erweiterte Auflage.
Augsburg : J. Stauda 1926. 39 S. 4°.(Singbüchlein a. d. Böhmerwald 1).
Angez. : Hochschulwissen 3, 372ff ; Halbms. f. Schulmusikpflege 21, 31ff.

Hensel, W. : Heimliche Minne. Alte Weisen im Zwiegesang für Frauen-und Männerstimme gesetzt.
Augsburg : J. Stauda 1926. 16 S. (Singbüchlein a. d. Bohmerwald 7) .

Hermann, W. : Deutsche Volkslieder. Als Duette mit Klavierbegleitung bearbeitet. op. 143. 2 Hefte mit je 10

Liedern.
Leipzig : Simrock. gr. 4°.
Bespr. : DVl 28, 34.

Hoffmann, F. : op. 26. Sechs Volkslieder für 2 mittlere Stimmen m. Pianof. -Begleitung.
Kassel : Simon 1926.

Klaas, R. : Alt-Heidelberg. Die beliebtesten Kommers-, Studenten-u. Volkslieder. Vollständige Texte mit Klavierbegleitung.
Berlin : Globus Verlag 1926. 459 S. 8.

Kroner, H. : Die Singschar. Zehn Volkslieder zur Begleitung mit zwei Geigen, Flöte und Lauten nach Wahl von H. K. E. Bloch. 2 Hefte.
Berlin : Theaterverlag.
Bespr. : DVl 24, 61ff. ; Zs. f. Musik 95, 574.

Kubitz, P. E. : Wiener Lieder-Album mit Gitarrenbegleitung.
Wien : A. Goll 1926. X, 407 S. gr. 8°.

Liederbuch der Ostpreußen. Eine Sammlung ausgewählter Lieder für alle Gelegenheiten.
Berlin : Gebrüder Engelke 1926. 64 S. 16°.

Rambold, F. H. : Unser Singbüchlein. Schöne alte Lieder mit Einführungen.
München : Verlag Possenbacher 1926.
Bespr. : Bayerland 37, 64 : Ostbayr. Grenzm. 15,52.
Angez. : Neue Musik-Ztg. 47, 241ff.

Reiter, J. : Echte deutsche Volkslieder. Heft I. 40 Volkslieder aus dem „deutschen Liederhort" von Erlk-Böhme, ausgewählt und für Sopran, Alt, Tenor und Baß (Soloquartett oder Chor) gesetzt. Partiturausgabe.
Linz : R. Pirngruber 1926.
Bespr. : DVl 29, 75ff.

Reiter, J. : Echte deutsche Volkslieder. Heft II. 40 alt-und neudeutsche Volkslieder für drei und vier Frauenstimmen.

Linz : R. Pirngruber 1926.
Bespr. : DVl 30, 21.

Reiter, J. : Echte deutsche Volkslieder. Heft 3. 25 Heimatlieder aus Niederösterreich, Steiermark, Salzburg, Bayern und der Schweiz. (Satz für Sopran, Alt, Tenor und Baß).
Partiturausgabe.
Linz : R. Pirngruber 1926.
Bespr. : DVl 29, 75ff.

Richar, E. : 32 deutsche Volkslieder, ausgewählt und für gemischten Viergesang (Chor) gesetzt. (Flugschriften und Liederhefte, herausgegeben von dem deutschen Volksgesang-Verein in Wien, 19 Heft).
Wien : Verlag des deutschen Vollksgesang-Vereins 1926. 76 S. kl. 8°.

Sammlung der beliebtesten Bundes-, Soldaten-, Volks-u. Vaterlandslieder 2. Auflage.
Braunschweig : Keck u. Wesche 1926. 60 S. 16°.
(Umschlagtitel : Liederbuch für den Königin-Luise-Bund. Gau Braunschweig).

Scharfe, E. u. A. Strube : Das Jahr in Liedern. Eine Sammlung alter und neuer Weisen für Kirchen - , Jugend-u. Schulchöre. Zwei-u. dreistimmig gesetzt.
Leipzig : Carl Merseburger 1926. 166 S. 8°.

Schmitz, J. u. H. Hoffann : Sammlung deutscher Soldaten-u. Volkslieder. Zusammengestellt und herausgegeben.
Berlin-Halensee : A. Stein 1926. XV, 260 S. 16°.

Sotke, F. : Unsere Lieder. 7. stark vermehrte Auflage. Zusammemgestellt.
Iserlohn : Sauerland-Verlag 1926. 128 S. m. Abb.

Kleines Taschen-Liederbuch. Alte und neue Volks-, Kommers-, Soldaten-u. Wanderlieder. 7. Auflage.
Leipzig : Franz Winter 1926. 64 S. 16°.

Volksliederbuch. Eine Auswahl der schönsten Volks-

Wander-und Gesellschaftslieder.
Leipzig : Verlag O. Dietrich, o. J. (1926) . 112 S. 16°.
Bespr. : DVl 29, 98.

Böse, H. : Das Volkslied. Für Heim u. Wanderung. 1. 3. verbesserte Auflage.
Berlin : Arbeiterjugend-Verlag 1927. III, XX, 316 S.m. 1 Abb. kl. 8°.

Böhm, A. : Fahrend Volk. Ein deutsches Volksliederbuch. 2. vollständig neubearbeitete Auflage.
Wien : F. Baumgärtner 1927. 555 S. m. Abb.kl.8°.

Dahms, W. : Hanseatisches Liederbuch für gesellige Kreise. Hoch und plattdeutsche Lieder. Unter Mitwirkung von W. Stahl u. a. gesammelt von W. Dahms.
Lübeck : Verlag Gebrüder Borchers 1927.
Bespr. : DVl 30, 128.

Eckhardt, F. : Auf fröhlichen Pfaden ! 60 Lieder für Gesang (Mandoline) mit Lauten-u. Gitarren-begleitung.
Neukirchen : Missionsbuchhandlung Stürsberg u. Co. 1927. 64 S. kl. 8°.

Gättke, W. : Rokoko-, Schäfer-und Spielmanns-Weisen. Worte und Weisen (Lieder zur Laute) .
Lautensatz von M. Englert. 3. Auflage.
Hamburg : Buch-Ein u. Verkaufsgenossenschaft Hammerbrook. 1927. 36 S. kl. 8°.

Giehs, P. : Vom Leben und Leiden, eine Folge altdeutscher Volkslieder, für Männerchor, Solostimmen und Orchester.
Heidelberg : Verlag Karl Hochstein 1927.
Bespr. : DVl 30, 20.

Niedersächsischer Liederfreund. Ein Singbuch für Schule und Haus. Auf der Grundlage der Liedersammlung des Pädagogischen Vereins und des Liederbuchs von Martens und Plügge neu bearbeitet und herausgegeben vom Pädagogischen Verein in Altona.

Flöten-, Lauten-und Violinbegleitung von H. Laubach.
Flensburg : A. Weßphalen 1927. 8°.

Stierling, H. : Von Rosen ein Krentzelein. Alte deutsche Volkslieder. Neue Ausgabe mit alten Melodien.
Langewiesche : 1927. 267 S.
Angez. : Dt. Volkstum (1927) , 970 ; Zs. f. Vkde 37, 148 ; DVl 30, 115.

Gramberg, G. : Volks-und Wanderliederbuch. Ausgabe mit Noten. Eine Sammlung der beliebtesten Lieder für Schule und Haus. Zusammengestellt.
Reutlingen : Enßlin u. Laiblin 1927. 295 S.kl. 8°.

Heimat-und Fahrtenlieder.
: Plauen : Verlag das junge Volk 1927. 2. Auflage 32 S. m. eingedr. Bildern von W. Schulz.

Hensel, W. : Lerch und Nachtigall, ein Singebüchlein.
Augsburg : J. Stauda. 1927.
Bespr. : Hochschulwissen 4, 347.

Hensel, W. : Wach auf, festliche Weisen in alten und neuen Tonsätzen, vom Turm zu blasen oder in Gemeinschaft zu singen. Dem deutschen Volke dargebracht.
Augsburg : J. Stauda 1924. 75 s. 4.

Hensel, W. : Das Aufrecht Fähnlein. Liederbuch für Studenten und Volk.
Augsburg : J. Stauda 1927. 208 S.
Bespr. : Hochschulwissen 4, 118 u. 180ff.

Hermann, A. : Fest im Takt. Leichte Tonstücke, Sing-und Tanzweisen zum Gebrauch beim Turnunterricht. 4. unveränderte Auflage.
Berlin : Weidmann : 1927. VIII, 86 S. gr. 8°.

Hermann, H. : A-capella-Chorliedsuite, für achtstimmigen Doppelmännerchor, nach alten deutscher Texten.
Heidelberg : Verlag Karl Hochstein 1927.

Herzog, K. u. J. Hoffmann : Sängerlust. 4.Auflage. (Darin reiche Auswahl altdeutscher Lieder).
Berlin : 1927 (?) .

Hirschberg, W. : 8 deutsche Volkslieder für Gesang mit Pianoforte.
Berlin : Simrock 1927 (?) .

Jöde, F. : Altdeutsches Liederbuch in polyphonem Satz zu zwei Stimmen. Heft 1. 2.
Wolffenbüttel : G. Kallmeyer 1927.
Neubearb. Aufl. 88 S. kl. 8°.

Jöde, F. : Alte weltliche Lieder für gemischte Stimmen.
Wolfenbüttel : G. Kallmeyer 1927. 175 S. gr. 8°.

Kickstat, P. : Die liebe Maienzeit. Deutsche Volkslieder mit allerlei Instrumenten ein-u. mehrstimming zu singen. Gesetzt.
Wolfenbüttel : G. Kallmeyer 1927.
Bespr. : DVl 30, 99ff.

Leichtentritt, H. : Alte teutsche Liedlein. Mehrstimmige Lieder alter deutscher Meister aus der Sammlung „Meisterwerke deutscher Tonkunst" für den Vortrag beabeitet. 5 Hefte.
Leipzig : Breitkopf u. Härtel. 1927 (?) .

Lentvai, E. : Frohgesang. Deutsche Volkslieder aus 6 Jahrhunderten in Form von Variationen für Männerchor.
Mainz : Schott 1927.

Lendvai, E. : op. 42. Vier variierte Volkslieder für Frauenchor.
Leipzig, o. J.

Lerche, J. : Das Wort zum Lied. 2000 der beliebtesten Konzertlieder im Texte. Eine Textprogramm-Sammlung für Hörer der Funk-, Konzertbesucher und Grammophonfreunde. 3. unveranderte Auflage.
Berlin : E. Bote u. G. Bock. Bd. 1. 1927. 338 S. Bd. 2. 1928. 296 S. gr. 8°.

Mendelsohn, A. : op. 99. Zehn Volkslieder für Männer Chor.
Leipzig : Breitkopf u. Härtel 1927.

Otto, Th. : Perlen alter Tonkunst. Eine Auslese der schönsten Volkslieder und Kunstgesänge des A-cappela-Stils aus dem 13. bis 19. Jahrhundert. Für 3 bis 4 stimmigen Frauenchor beabeitet. Heft 13. 32 S.,Heft 14. S. 33—64. 1927.

Otto, Th. : Perlen alter Tonkunst. Eine Auslese der schönsten Volkslieder und Kunstgesänge des A-capella-Stils aus dem 13. -19. Jahrhundert. Auslese B fur vierstimmigen gemischten Chor.
Berlin-Lichterfelde : C. F. Vieweg 1927.

Rein, W. : Deutsche Lieder vergangener Jahrhunderte. Heft 1.2.
Wolffenbüttel : G. Kallmeyer 1927.

Reiter, J. : Echte deutsche Volkslieder. Heft 12. 30 mundartliche Volkslieder für drei und vier Frauenstimmen.
Linz : Verlag R. Pirngruber 1927.
Bespr. : DVl. 30, 21.

Rüdinger, G. : op. 63. Im Wald und auf der Haide.22 Volkslieder für gemischten Chor.
München-Gladbach : Volksvereins-Verlag 1927.

Schering, A. : Einstimmige Chor-und Solo-Lieder des XVI. Jahrhunderts mit Instrumentalbegleitung. Mit untergelegtem Klavierauszug hrsg. 2 Teile.
Leipzig : Breitkopf u. Härtel 1927 (?) .

Die neuesten Schlager.
Köln : J. Böttger 1927. 4,32, 4 S.16°. (Was man heute singt. Bd 30) .

Schelleberg, E. L. : Das deutsche Volkslied. Ein Hausschatz von über 1000 der besten deutschen Volkslieder, herausgegeben für Gesang und Klavierbegleitung. 2. vollständige, neu durchgesehene Auflage.
Berlin-Lichterfelde : Verlag für Kultur und Menschenkunde 1927. X, 343 S. m. Not. gr. 4°.

Schneider, B. : op. 53. Aus güldnem Brunnen. 33 deutsche Volkslieder für gemischten Chor (3 bis 5 stimmige Wechselgesänge, Soli und Chor).
Leipzig : Steingräber-Verlag, o. J.

Scholtis, H. H. : 26 Volkslieder für Sopran, Alt, Tenor und Baß, gesetzt.
Wien : 1927.
Angez. : DVI 32, 87ff.

Templin, K. : Wann wir schreiten Seit' an Seit'. 30 Lieder in ein -und zweistimmigem Satz für sanges-und wanderfrohe Jugend, gesammelt und herausgegeben.
Köslin : Selbstverlag (Betrieb : Bezirksjugendpfleger Lück).
Bespr. : Rhein-Jug. 15, 702.

Traupel, Ph. : Unser Lied.
Basel : E. Birkhäuser & Cie 1927. 86 S. 8°.

Ziegler, W. : Heuberg-Spielmann.
Weiblingen (Stuttgart) : G. Stürner 1927. 102 S. m. Abb. kl. 8°.

Brandt, D. u. C. v. Knebel. : Allerlei Volkslieder am Klavier zu spielen und zu singen. Bearbeitet.
Buchschmuck M. Willigi-Ulbricht.
Verlag der methodischen Schriften des Tonika-Do-Bundes e. V. 1. Folge, 1928.
Bespr. : DVI 31, 157.

Creutzburg, H. : Melodienschatz zum deutschen Volksliederbuch, bearbeitet und herausgegeben vom deutschen Verein in Livland.
Riga : J. Deubener. 1928.
Bespr. : DVI 30, 115.

Decker, W. : Schweizer Liederborn. Eine Sammlung von 200 der beliebtesten Lieder.
Reutlingen : Enßlin & Laiblin 1928. 147 S. kl. 8°.

Burschenliederbuch. Herausgegeben vom Verband der

katholischen Burschenvereine Bayerns.
Regensburg : Geschäftsstelle der Katholischen Burschenvereine 1928. XVI, 423 S.m. Not. u. Abb. kl.8°.

Auf Fahrt ! 1. Schön ist die Welt (Wanderlieder). 2. Jesus ist schöner (Andachtslider).
Berlin : Buchhandlung des Ostdeutschen Jünglingsbundes 1928. 128 S. 16., 2. unver.
Aufl. 1930. 128 S. gr. 8°.

Fromm, E. Lieder und Bewegungsspiele. Gesammelt und bearbeitet.
Leipzig : Teubner. 9. durchgesehene Auflage. 1928. VIII, 224 S. kl. 8°. 10. wesentlich veränderte Auflage. 1930. XVI. 100 S. kl. 8°.

Gersbach, R. : Der kleine Kamerad. Soldaten-, Volks-, u. Traditionslieder mit Klavierbegleitung. Neubearbeitet von O. Hatlenberger.
Berlin : Kameradschaft 1928. III, 155 S. 4°.
(Gersbach, der kleine Kamerad, m. Not.).

Gramberg, G. : Volks-und Wanderliederbuch. Eine Sammlung der beliebtesten Lieder für jung und alt. Zusammengestellt.
Reutlingen : Enßlin und Laiblin 1928 143 S. kl. 8°.

Kleines Turner-und Wander-Liederbuch. „Gut Heil".
Enthaltend 45 der schönsten Turner-, Wander-u. Gesellschafts-Lieder usw.
Stuttgart : Gut Heil-Verlag P. Mahler 1928. 32 S. 16. (Umschlagt) .

Hensel, W. : Finkensteiner Liederbuch. Jahrgang 1 bis 5 der Finkensteinerblätter.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1928.
Angabe v. Jg. 1—4 : Halbms. f. Schulmusikpflege 22, 64.

Krauss, B. : Heimatklänge 25 der schönsten dreistimmigen Lieder. Volks-, Heimat-, Wanderlieder zur Laute oder Gitarre. Partitur-Ausgabe.

Leipzig : B. Krauss 1928. 39 S. 4°.

Lautner, R. : Von der edlen Musik. Ein Lieder-u. Spielbuch für die deutschen Jugendgemeinschaften. Zusammengesetzt und eingerichtet.
Warnsdorf : E. Strache 1928. IV, 47 S.

Lied hoch. Liedertextbuch für Männerchor. Neue und vermehrte Auflage der Ausgabe „Auf der Wacht ! "
Leipzig : P. Zschocher 1928. 115 S. m. 1 Abb.- S. Part. kl. 8°.

Ochs, S. : Deutsche Volkslieder für gemischten Chor. Heft 1—5.
Berlin : E. Bote u. G. Bock 1928.

Pommer, J. : 21 deutsche Volkslieder für gemischten Viergesang gesetzt, aus dessen Nachlaß zusammengestellt und hrsg von. E. Richar. Flugschriften und Liederhefte zur Kenntnis und Pflege des deutschen Volksliedes Nr. 20.
Wien : Verlag des deutschen Volkgesang Vereins 1928. 58 S. 1 Titelbl. kl. 8°.
Bespr. : DVl 31, 157.
Angez. : Halbms. f. Schulmusikpflege 23, 180.

Reyss, K. u. F. Spieser : Frau Nachtigall. Volkslieder vom 12. Jahrhundert bis zur Gegenwart.
Straßburg : 1928. 166 S.

Rein, W. Deutsche Lieder vergangener Jahrhunderte zu drei Stimmen. Gesamt-Ausgabe.
Wolfenbüttel : G. Kallmeyer 1928. 56 S. 8°.

Scholl, E. : Lasset uns singen und fröhlich sein. Volksliedersätze für gemischten Chor, Einzelstimmen u. Instrumente.
Mainz : Matthias-Grünewald-Verlag (Auslieferung : H. Rauch in Wiesbaden) 1928. 30 S. 4°.

Siegl, O. : Acht deutsche Volkslieder in polyphonem Satze.
München-Gladbach : Volksvereins-Verlag 1928.
Angez. : Halbms. f. Schulmusikpflege 22, 187ff.

Kleines Taschen-Liederbuch.
Reutlingen : R. Bardtenschlager 1928. 96 S. 16°.

100 Volkslieder. Mit einem Anhang. 33. vermehrte und durchgesehene Auflage. Ausgewählt vom Seminarlehrer-Kollegium in Ludwigslust.
Neubrandenburg : Brünslowsche Verlagsbuchhandlung 1928. 120 S. 8°.

Volkslieder aus alter und neuer Zeit.
Berlin : W. Pinkert 1928. 33 S. 16°. Deutschlands Liederbuch. Bd. 7.
Bespr. : DVl 30, 129.

Weber, L. : Musik nach Volksliedern. Heft 1. Stücke für gemischten Chor mit und ohne Instrument.
Wolfenbüttel : Kallmeyer 1928. 42 S. 4°.
Angez. : Zs. f. Schulmusik 2, 24 ; Zs. f. Musik 98, 35.
Heft 2. Für 2 bis 4 gleiche Stimmen A-cappella.
Wolfenbüttel : Kallmeyer 1928. 10 S. 4°.
Angez. : Musik 21, 612.
Heft 3. Einstimmig mit Instrumenten.
Wolfenbüttel : Kallmeyer 1928. 12 S. 4°.
Angez. : Musik 21, 612.

Brinckmann, W. : Unsere volksthümlichen Gedichte und Lieder aus dem neunzehnten Jahrhundert.
Eine Probe von 20 Liedern. Festschrift der Gelehrtenschule des Johanneums zur Feier des vierhundertjährigen Bestehens der Hamburger St. Johannisschule. 1529—1929., 31—51.

Deutsch, L. : Klavierfibel. Eine Elementarschule des Blattspielens. Zusammengestellt aus Volksliedern aller Nationen. 1. Heft. Deutsche Vorschule mit Lieder-Textheft.
Leipzig : Steingräber-Verlag 1929.
Angez. : DVl 32, 88ff.

Hertel, P. : Heimatklänge. Lieder. 2. erweiterte Ausgabe.
Leipzig : J. Klinkhardt 1929. IV, 92 S. m. Abb. 8°.
Bespr. : DVl 31, 158.

Angez. : Halbms. f. Schulmusikpflege 23, 188.

Jäde, F. : Frau Musika. Ein Singbuch fürs Haus.
Berlin : Deutsche Buch-Gemeinschaft 1929. 522 S. 4°.
Angez. : DVl32, 138, Musik im Leben 5, 398.

Jöde, F. : Die Singstunde. Lieder für alle. Jahreskreis 1.
Wolfenbüttel : G. Kallmeyer 1929. 52 S.m. Abb. kl. 8°.
Angez. : DVl 33, 65 ; Zs. f. Vkde 39, 321.

Kageler, L. : Deutsche Volkslieder aus dem 14. bis 19. Jahrhundert. 8.verbesserte Auflage. 1. Heft. Für 2 Soprane und 1 Altstimme.
Leipzig : Carl Merseburger 1929. 63 S. 8°.

Kirle, A. : Liederbuch.
Wien : Hölder-Pichler-Tempsky A, G. 1929. 192 S. 8°.

Kittlitz, W. : Unser Liederbuch.
Hamburg : Brüderanstalt, Agentur des Rauhen Hauses. 1929. 447 S. m. Abb. kl. 8°.(Notenausgabe) . ; 1929. 301 S.m. Abb. kl. 16°. (Textausgabe) .

Lämmle, A. : Deutsche Volkslieder, ausgewählt. 4. Auflage.
Stuttgart : Fleischhauer u. Sohn 1929. 152 S. 16°.

Landvolk-Liederbuch.
Berlin : Landvolk-Verlag 1929. 94 S.m. Abb. kl. 8°.

Liedebuch. Textsammlung ausgewählt. Männerchöre und einstimmiger Lieder. Bearbeitet vom Musikausschuß und herausgegeben vom Vorstand des Verbandes niedersächsischer Männergesangvereine von 1902.
Hannover : Gebr. Janntle 1929. 164 S. 16°.

Deutsches Liederbuch. 50 bekannte Volks-u. Studentenlieder.
Berlin : Berlin Uni., deutsches Institut für Ausländer 1929. 61 S. 8°.

Muenzer, O. : Das Landliederbuch. Notenausgabe mit Bezeichnung der Lauten-bzw. Klavierbegleitung. Unter musikalischer Mitarbeit von B. Röthig.

Stuttgart : Frankh. 1929. 363 S. kl. 8°.

Reuschel, K. : Volksliedersammlungen.
In : Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte 3(1923) , 492ff. (Hrsg. v. Merker u. Stammler).

Ries, G. : Dorflieder. Eine Sammlung bester Volksgesänge in ein-, zwei-u. dreistimmigen Sätzen mit angedeuteter Begleitung. Gesammelt und herausgegeben.
Ansbach : C. Brügel u. Sohn 1930. (ersch. 1929) . 178 S. kl. 8°.
Bespr. : DVI 32, 103.

Rüdiger, G. : op. 75. 40 deutsche Volkslieder für gemischten Chor.
Augsburg : Böhm u. Sohn 1929.
Bespr. : DVI 31, 157.

Fahrende Scholaren. Ein Singbuch.
Großpriesen i. Böhmen : Führichhaus 1929. XII, 161 S. 8°.

Silcher, F. : Sämtliche Männerchöre, komponiert und gesetzt nebst einem Anhang von Trauerliedern. 1. Gesamtausgabe.
Stuttgart : A. Auer's Musik-Verlag 1929. XIII, 418 S. kl. 8°.
Angez. : DVI 32, 58.

Kleines Taschen-liederbuch. (Neudruck) .
Reutlingen : R. Bardtenschlager 1929. 96 S. 16°. (Umschlägt).

Deutsches Vereins-u. Taschen-Liederbuch. Mit Angabe der Melodien-Anfänge.
Reutlingen : R. Bardtenschläger 1929. 526 S. 16.

Zimmermann-Frohnau, P. : Ausgewählte Volkslieder N. F. 4.
Berlin : Aufbau-Verlag 1929. 23 S. 8°.

Zuschneid, H. : Freiburger Taschen-Liederbuch.
Freiburg : Herder 1929. VIII, 295 S. kl. 8°.

Bein, W., P. Dehne u. K. Meinberg : Volksklänge Liedersammlung für

gemischten Chor.
Hannover : Verlag Adolf Hampe 1930. 324 S.
Angez. : DVl 34, 49.

Grohse, W. : Gern gesungene Weisen für Schule und Haus. Als Liederanhang herausgegeben.
Leipzig : Carl Merseburger 1930. 16 S. gr. 8°.

Hannemann, C. : Lobeda-Singebuch. Herausgegeben von C. Hannemann unter Mitarbeit von E. Lendvai und W. Rein. Hamburg : Hanseatische Verlagsanstalt 1930. 1. Volkslieder und volkstümliche Gesänge. 307 S.m. Abb.
Bespr. : DVl 33, 66.

Jöde, F. : Laßt uns singen ! Ein Liederbuch für das Haus.
Berlin : Deutsche Buch-Gemein schaft 1930. 399 S. 8°.

Jode, F. : Weltliche Lieder und Gesänge für gleiche Stimmen.
Wolfenbüttel : G. Kallmeyer 1930. 172 S. gr. 8°.
(Chorbuch Teil 6) .

Meder, H. : Deutsches Taschenliederbuch.
Schwäbisch-deutscher Kulturverband, 1930. 144 S. kl. 8°.

Pfister, P. F. u. K. J. Winter : „Lieb' Nachtigall". Ein Büchlein zu Spiel und Sang fur unsere Buben und Mädchen. Buchschmuck von W. Meger-Speer. 2. verbesserte Auflage.
Düsseldorf : Verlag der Katholischen Schulorganisation Deutschlands 1930.
Angez. : DVl 32, 88.

Schweizer, W. : Schatz-Buechli. Ein Schatz von Liedern für dreistimmigen Männerchor.
Wolfenbüttel : G. Kallmeyer 1930.

Kohlers Taschen-Liederbuch, für das deutsche Volk. Enthaltend 550 der beliebtesten Volks-, Studenten-, Trink-, Turner-, Soldaten-, Wander-etc. Lieder.
E. Minden : W. Kohler 1930. 305 S. kl. 8°.

Andersen, L. : Deutsche Heimat. Die schönsten Volks-, Wander- und Studentenlieder. herausgegeben für Pianoforte m. Text.
Mainz : Schott's Söhne 1931.

Burkhart, F. : Aus dem Wundergarten des deutschen Volkslieds. Zwölf Volkslieder für gemischten Chor, bearbeitet von J. P. Tonger.
Köln : 1931.
Angez. : DVl 34, 82.

Fliedner, F. : Liederbuch. Eine Sammlung volkstümlicher Lieder aus alter und neuer Zeit für gemischten Chor und Posaunenchöre. Heft 1.
Hamburg : Nordbund 1931. 52 S. gr. 8°.

Frank, P. : Meine schönsten Lieder. 263 der beliebtesten alten und neuen Volks-, Sport-u. Wanderlieder. Textbuch.
Frankfurt : Bratfisch 1931. 112 S. kl. 8°.

Gruger, H. u. J. : Liederfibell. 2. Teil.
Breslau : Ostdeutsche Verlag sanstalt 1931. 40 S.
Angez. : Die Musikpflege 2, 325.

Hensel, W. : Strampedemi. Ein Liederbuch von Jungen Trutz und Art. Für ein bis zwei Stimmen eingerichtet und meist mit Begleitbuchstaben versehen. 2. umgearbeitete Auflage.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1931. 192 S. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 270) .
Angez. : Zs. f. Schulmusik 4, 160.

Jöde, F. : Weltliche Chorgesänge für gemischte Stimmen.
Wolffenbüttel-Berlin : Kallmeyer 1931. 166 S. gr. 8°. (Chorbuch Teil 4).

Morgan, B. G.,M. Griebsch u. A. R. Hohlfeld : Neues deutsches Liederbuch. Texte und Melodien nebst erklärenden und biographischen Anmerkungen.
Herausgegeben im Auftrag der deutschen Abteilung der Staats-Universität von Wisconsin.

Boston : D. C. Heath and Company 1931. V, 162 S. 8°. (Heath's modern language series) .
Angez. : Der Auslanddt. 15,343.

Neumann, K. : Der Spielmann. Liederbuch für Jugend und Volk. Mit Klaviersätzen versehen von H. M. Dombrowski. Mainz : Matthias-Grünewald-Verlag 1931.300 S.4°; 10. Auflage. 1944. 360 S.
Angez. : Zs. f. Musik 98, 310 ; Zs. f. Schulmusik (1932) , 97ff.

Rosenberg, H. : Neue Chorsammlungen.
Bespr. : Die Musikpflege 2, 417—423.

Rupprecht, K. : Aus des Knaben Wunderhorn. Neue Weisen alter Lieder.
München : Max Hueber Verlag 1931. (Textuntersuchungen) .
Bespr. : Bayr. Bll. f. d. Gymn. Schulm. 67, 361.
Angez. : Frank. Heimat 10, 326.

Sambeth, H. M. : Der singende Alltag. Ein Stück Weges in Volksliedern dem deutschen Haus gezeigt.
Düsseldorf : Pädagogischer Verlag 1931. 96 S. 8°.
Angez. : DVl 34, 83.

Eine Kleine Sammlung deutscher Volkslieder Herausgegeben vom deutschen Volksverband in Polen.
Lodz : Libertas 1931. 14 S.
Angez. : DVl 34, 124.

Sotke, F. : Unsere Lieder. N. F.
Iserlohn : Sauerland-Verlag 1931. 48 s.kl.8°.

Winkelhake, A. : Vier alte Volkslieder für dreistimmigen Männerchor (Einzelblätter).
Hannover : Verlag Adolf Hampe 1931.
Angez. : DVl 34, 19.

Bajer, H. : Was der Deutsche singt. Deutsche Kampf-und Freiheitslieder und andere. Zusammengestellt, bearbeitet und herausgegeben.
Berlin : Nationaler Schallplatten-Dienst 1932. 95 S. kl. 8°.

Hensel, W. : Strampedemi. Liederbuch. (Spielstücke).
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1932. 16 S. 8°. (Umschlagt).

Alte und neue Lieder. Mit Weisen und mit Bildern von L. Richter. Im Auftrag des Verbandes deutscher Vereine für Volkskunde und der Preußischen Volkslied-Komission herausgegeben. Die Durchsicht des Textes besorgte J. Bolte, die der Melodien M. Friedlaender. Die Lautenbegleitung rühren von P. Kickstat.
Leipzig : Insel-Verlag 1932. (Insel-Bücherei Nr. 18).

Segebrecht, H. : Gesungen und gesprungen ! Eine Singfibel. Verse, Lieder, Spiele zu O. Zimmermanns Hansafibel und ihren Heimatausgaben. Mit einem Geleitwort von O. Zimmermann.
Braunscheig, Berlin, und Hamburg : Westermann 1932. VIII, 99 S. kl. 8°.

Sotke, F. : Aufbruch. Alte und neue Lieder.
Iserlohn : Sauerland-Verlag 1932. 40 S. 8°.

Sturm, P. : Klingklarei. Ein Jahrtausend deutschen Liedes. Herausgegeben mit Bildern von H. Thoma.
Barmen : E. Müller 1932. 478 S. m. Not. kl. 8°.

Wickenhauser, R. : 25 alte deutsche Volkslieder in 3-stimmigen Satz für Gesangvereine und höhere Lehranstalten bearbeitet.
Breslau : Handel 1932. 16 Bll. (Umschlagt) .

Beitl, R. : Deutsche Volkslieder. Von Siedlung, Haus und Ackerflur, von Glaube und Volk, von Sage, Wort und Lied des deutschen Volkes.
Berlin : Deutsche Buch-Gemeinschaft 1933. 542 S. m. Abb.4.

Andersen, L. : Deutsche Heimat. Die schönsten Volks-, Wander-u. Studentenlieder. Vollständiges Textbuch.
Mainz und Leipzig : Schott's Söhne 1933. 87 S. kl. 8°.

Cotta, J. : Wirklich brauchbare Gesangsvorträge und Couplets nach bekannten Melodien.

Dresden : Rudolph'sche Verlag 1933. 95 S. 8°.

Fliedner, F. : Deutscher Sang. Lieder alter und neuer Zeiten aus dem Volk und für das Volk für 4 gemischte Stimmen, Posaunen-Chöre, Gemischte Chöre.
Hamburg : Buchhandlung des Nordbundes 1933. 107 S. 8°.

Geilsdorf, P. u. R. Trägner : 15 Volkslieder für gemischten Chor. Ausgewählt und gesetzt.
Leipzig : E. Eulenburg, o. J.

Hannemann, C. : Kleines Lobeda-Singebuch für Männerchor. Eine Auswahl von Volksliedern, Gesängen und Kanons aus dem 1. und 2. Band des Lobeda-Singebuches für Männerchor.
Hamburg : Hanseatische Verlagsanstaltung 1933. 63 S. 8°.
Angez. : Harmonie 25, 132 ; Dt. Sängerbundesztg 25, 578.

25 Jahre Volksliederbuch.
In : Illustrierte Zs. f. Touristik d. Mark Brandenburg 29 (1933), 150.

Jochum, O. : Die Lust hat mich gezwungen … 21 Volkslieder für Männerchor. op 34.
Augsburg und
Wien : Anton Böhm & Sohn 1933.
Angez. : Die Musik 25, 700.

Deutsche Kampf-und Volkslieder. über 100 der beliebtesten Kampf-, Marsch-u. Volks-lieder. Vorwort : M. Freitag.
Reutlingen : Enßlin & Laiblhn 1933. 64 S. kl. 8°.

Koehler, F. : Laßt uns singen ! Mit Buchschmuck von B. Beanitz.
Langensalza ; Berlin und Leipzig : J. Beltz 1933. 196 S. kl. 8°.
Angez. : Allgem. Sänger-Ztg. 27, 178

Lipphardt, W. : Gesellige Zeit. Liederbuch für gemischten Chor.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1933. 136 S. 8°. (Bären-

leiter-Ausgabe 615).
Bespr. : Musikpflege 4, 246ff.
Angez. : Die Musik 25, 940 ; Dt. Sängerbundesztg. 25, 578.

Löns, H. : Der kleine Rosengarten. Volkslieder, gesungen von F. Jöde.
Jena : Diederichs 1933. 83 S. kl. 8°.

Löns, H. : Der kleine Rosegarten. Volkslieder. Mit Musik von F. Jöde. Ausgabe für Klavier.
Jena : Diederichs. 1933. 61 S. 4°.

Ludwig. F. : 66 deutsche Volkslieder in kanonischer Weise für Klavier.
Münster : 1933. Im Selbstverlag des Autors. 3 Hefte.
Bespr. : Zs. f. Musik 100, 835.
Angez. : Musikpflege 4, 344.

Scholtys, H. H. : 10 deutsche Volkslieder für eine Singstimme mit Klavier.
Verlag des deutschen Volksliedvereins 1933.
Angez. : DVl 35, 51.

Thiel, C. : Geistliche und weltliche Volksweisen, bearbeitet für gemischten Chor.
Berlin : Verlag W. Sulzbach 1933.
Angez. : Allgem. Musikztg. 61, 346.

Das deutsche Volkslied in losen Blättern. Klosterneuburg bei Wien : Volksliturgisches Apostolat 1933.
Angez. : DVl 36, 49.

Deutsches Volks-Liederbuch. Alle bekannten Lieder des deutschen Volkes, Studenten-und Soldatenlieder, sowie Gelegenheits-und Trauerlieder. 3. verbesserte Auflage.
Arad : „Arader Zeitung“ 1933. 160 S. 8°.

Willms, F. : "Fünf fröhliche Lieder" für vierstimmigen gemischten Chor A cappela, (1. Frühe Wanderung, 2. Die ungarischen Husaren, 3. Bettelmanns Hochzeit, 4. Nachtigall und Frosch, 5. Bauernwalzer).

Mainz : Schott's Söhne 1933.
Angez : Die Musikpflege 4, 139ff.

Das kleine Wunderhorn. Deutsche Volkslieder (Nachwahl : F. A. Hünich).
Leipzig : Insel-Verlag 1933. 79 S. kl. 8°. (Insel-Bucherei Nr. 439).
Angez. : DVI 36, 80.

Benoit, G. : Aus allen Gauen. Lieder, wie sie ein Volk zeichnen. Zum ein-und mehrstimmigen Singen und Spielen auf allen Instrumenten herausgegeben.
Berlin : Verlag Grenze und Ausland 1934. 127 S. 8°.
Angez. : DVI 37, 36.

Blachetta, W. : Deutsche Volkslieder. Im Auftrag der Funkstunde Berlin (Volksliedsingen), u. a. herausgegeben. Heft 2 : Singstimmen.
Berlin : „Jugend-Funk" 1934.

Blumensaat, G. : Lied über Deutschland.
Potsdam : Voggenreiter.
Angez. Thüringer Fähnlein 6, 206.

Brather, F. : Deutsches Volksgut. Ein Volkskundliches Lese-und Arbeitsbuch.
Berlin : de Gruyter 1934.
Angez. : Zs. f. Dtkde 49, 663.

Dosse, H. : Unsre Fahne flattert uns voran, eine Sammlung von Marsch-, Volks-u. Landsknechtsliedern (Textbuch).
Berlin : Ufaton-Verlag 1934. 30 S. kl. 8°.

Hannemann, C. : Lobeda-Singebuch für gemischten Chor. Herausgegeben von C. Hannemenn unter Mitarbeit von W. Rein und H. Lang. 1. Volksweisen in alten und neuen Bearbeitungen.
Hamburg : Hanseatische Verlagsanstalt 1934. 172 S. 8°. Lobeda-Singbücher Bd. 3).
Bespr. : DVI 37, 55ff.

Hensel, H. : Finkensteiner Liederbuch Bd. II.

Kassel : Bärenreiter-Verlag 1934. (Finkensteiner Blätter Jg. 6—10).

Der Holderstrauch. Alte deutsche Volkslieder in Wort und Bild. Scherenschnitte von I. Beckmann.
Warendorf : Heine 1934. 38 S. 8°.

Koschinsky, F. : Volksliedbearbeitungen für 3—4stimmigen Männerchor mit einigen Blasinstrumenten.
Leipzig : Kistner & Siegel. 1934.
Angez. : Musikpflege 5, 294ff.

Deutscher Liederschatz. Eine Sammlung der bekanntesten und beliebtesten Volkslieder.
Stuttgart : Ludemannsen 1934. 40 S. kl. 8°.

Linke-Hohkirch, E.: Reihe A. F.
Langensalza, Berlin und Leipzig : J. Beltz 1934.

Lipphardt, W. Das Männerlied. Liederbuch für Männerchöre.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1934. 136 S. 8°.
Bespr. : Dt. Sängerbunesztg. 26, 610.

Losch, S. u. K. Seidelmann : Lieder der Spur.
Potsdam : Ludwig Voggenreiter Verlag 1934. 32 S. 8°.

Masing, O. : Volkslieder aus neuerer Zeit.
Leipzig : Eichblatt 1934. 66 S. gr. 8°.

Rein, W. : Tanz mir nicht mit meiner Jungfer Käten !
Tanz-und Scherzlieder von W. Rein u. a.

Rathensteiner, J. : A German Garden of the heart. German lyrics from the Volkslied and R. M. Rilke. Translated.
St. Louis : Mo. Herder Book Co. 1934. XIX, 508 S. 8°.
Angez. : Der Auslandsdt. 19, 310ff.

Schüler, K. : Neues Singen. Eine Liederfolge für 2, 3 oder 4 beliebige Stimmen.
Berlin-Lichterfelde : Vieweg 1934. Heft 1. 32 S.

Schulten, G. : Der Leierkasten. Alte Bänkelsängerlieder und Lie-

der fürs Herz.
Potsdam : Voggenreiter-Verlag 1934. 30 S. kl. 8°.

Schulten, G. : Der Kilometerstein. Klotzmärsche, Lieder für die Landstraße, Musik zum Tageslauf und allerlei Unsinn. Eine Sammlung für soldatische Gruppen.
Potsdam, Voggenreiter-Verlag 1934. (2. erweiterte Auflage. 1935) . 86 S.m. Not. kl. 8°.
Angez. : Neue Bücher aus d. Reich 11, 1936.

Deutsche Volkslieder.
Stuttgart : Franckh 1934. 46 S. kl. 8°. (Das deutsche Gedicht 11. 2. Auflage) .

222 deutsche Volkslieder. In Einheitstext und Einheitsmelodie.
Berlin : Trowitzsch u. Sohn 1934.
Angez. : Das Thüringer Fähnlein 4, 58

Wehrli, W. : Durch Gebirg und Tal. Liederbuch für Heim und Fahrt.
Zürich : Hug & Co 1934. 112 S. 8°.

Werlé. H. : Liederbogen.
Langensalza, Berlin und Leipzig : J. Beltz 1934. 1. Froher Anfang-Fahrt ins Ferienland. 15 S. 8°.

Arens, H. : Frühe deutsche Lyrik. Ausgewählt und mit einer Einleitung von A. Hübner.
Berlin : Weidmannsche Buchhandlung 1935.
Bespr. : Dichtung u. Volkstum 39, 363—386.

Becker, H. : Vier deutsche Volkslieder. op. 12. Für Männerchor bearbeitet.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1935.
Angez. : Die Musikpflege 6. 274.

Ernst, H. : Nun wollen wir singen das Abendlied ! Eine Sammlung alter lieber Lieder für Singstimmen mit Blockflöten und Geigen gesetzt.
Leipzig : A. Strauch 1935. 15 S.

Gatter, J. : Zwei heitere Volkslieder für gemischten Chor und Instrumente. op. 86.
Zürich u. a. : Hug 1935.
(Die Leineweber haben eine saubere Zunft. Es wohnt ein Müller an jenem Teich) .

Giesbert, F. J. : Deutsche Volkslieder in allerlei Mundarten. Die schönsten Dialekt-Lieder aus allen deutschen Gauen. Für 1 oder 2 Blockflöten(S. -und A-Flöte) oder 2 andere beliebige Melodie-Instrumente (Violinen, Mandolien, Klar. usw.) mit Text, nach Belieben mit einer Laute (oder Gitarre) oder auch mit Ziehharmonika bearbeitet und herausgegeben.
Mainz : Schott's Söhne 1935. 8°.

Hannemann, C. : Der Volkschor. Liederbuch des Reichsverbandes der gemischten Chöre Deutschlands.
Unter Mitarbeit des Musikausschusses des Reichsverbandes herausgegeben. Bd. 1, 2.
Hamburg : Hanseatische Verlagsanstalt 1935. 78, 94, S. kl. 8°.
Angez. : Völkische Musikerziehung 1, 552.

Hauf, E. : Wir singen. Neue Liederblätter, ausgewählt und herausgegeben.
Stettin : Hunnius 1935. 4 S. 8°.
1. Lieder für Feier und Fahne. (Weisen und Sätze von A. Seifert) .

Hensel, W. : Das aufrecht Fähnlein. Liederbuch für Studenten und Volk, insonderheit für unsere volkstümlichen Männerchöre.
Kassel : Bärenreiter-Verlag. Neuauflage. 1935. 236 S.
Angez. : Zs. f. Musik 102, 209.

Hensel, W. : Kampf und Spiel. 1—10. Auflage.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1935. 41 S. 8°. (Hensel :Der singende Quell Teil 2) .
Angez. : Neue Bücher aus d. Reich 11, 16 ; Die Musikpflege 6, 274ff.

Hübschmann, W. : Drei gemischte Chöre aus "Des Knaben Wunderhorn". 1935.
Zürich u. a. : Hug u. Co.

Jochum, O. : Das Volkslied. Eine Sammlung alter deutscher Weisen, bearbeitet für gemischten Chor. op. 61.
Augsburg u. Wien : Anton Böhm u. Sohn 1935.
Angez. : Die Musikpflege 6, 354 ; Allgem. Musikztg. 64, 511.

Kaschinsky, F. : Volksliedbearbeitungen für drei-bis vierstimmigen Männerchor mit einigen Blasinstrumenten.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1935 (?) .

Lang, H. u. A. Schaller : Volkslieder für Männerchor.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1935.
Alte weltliche Lieder und ein Zwiegesang.(Sing-u. Spielmusik Nr. 7.).
Zürich u.a. : Hug u. Co. 1935.
Neues Liedgut in neuen Sammlungen.
In : Die Musikpflege 5, 457—459. (1935) .

Lißmann, K. : Alte Volkslieder. (Geusenlied, Maienfahrt, Hans Beutler). Für Männerchor gesetzt.
Köln : P. J. Tonger 1935.
Angez. : Völkische Musikerziehung 1, 552.

Mönkemeyer, H. : Laßt uns singen. Fröhliche Lieder und Gesänge zum Singen mit Blockflöten, Gamben, Lauten u. a. Instrumenten.
Celle : Moeck 1935.
In : Krefelder Liederbll. Ltg. 11—12, 81—96. (gr. 8, Moeck's gelbe Musikhefte Nr. 19) .

Moser, H. J. : Tönende Volksaltertümer.
Berlin-Schöneberg : M. Hesse 1935. VIII, 351 S. m. zahlr. Abb. 1 Titelbl. gr. 8°.
Angez. : Zs. f. Kirchenmusiker 18, 56 ; DVl 38, 56 ; DVl 38, 55 ; Der Gral 30, 562ff ; Der Auslandsdt. 19, 962 ; Zs. f. Dtkde 49, 671 ; Zs. f. dt. Bildung 13, 154.

Moser, H. J. : Tönende Volksaltertümer. Diagonale durch ein neues

Werk als Selbstanzeige.
In : Die Musik 27(1935) , 462−430.

Der Volkschor. Das Liederbuch der gemischten Chöre. Herausgegeben vom Musikausschuß des Reichsverbandes der gemischten Chöre Deutschlands e. V.1935.
Angez. : Die Musikpflege 5, 408−410.

Naumann, E. : „All mein Gedanken, die ich hab" und „Muskatellerlied". Zwei Mannerchöre.
Berlin : Afa-Verlag 1935.
Angez. : Allgem. Musikztg. 62, 462.

Niedermann, G. : Zwei Volksliedbearbeitungen für 3-stimmigen Frauenchor.
Zürich u. a. : Hug u. Co. 1935

Rein, W. : „Lob der Arbeit". Ein Kranz deutscher Lieder für gemischten Chor, A capella.
Leipzig : Verlag von F. E. Leuckart 1935.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 30, 103.

Stallberg, O. : Sechs alte deutsche Volkslieder für 3 und 4 Stimmen bearbeitet. 3 Hefte.
Wolfenbüttel : Gg. Kallmeyer 1935.
Angez. : Zs. f. Dtkde, 49, 672.

Wickenhauser, R. : Drei deutsche Volkslieder für vierstimmigen Männerchor, A capella, Werk 101.
Leipzig : Rühle u. Wendling 1935.
Angez. : Dt. Sängerbundesztg. 27, 310.

Wolter, W. : Allerlei Volkslieder zum Singen und Spielen auf ein oder zwei Blockflöten in −c− (Tenor oder Sopran) oder Sopran −c″− und Alt −f′− und anderen Melodieinstrumenten mit Klavier oder Lautenbegleitung ad lib.
Celle : Moeck 1935. 32 S. 4. (Moeck' s gelbe Musikhefte Nr. 30).

Zentner, J. : Zwei Volksliederbearbeitungen für 3-stimmigen Männerchor.

Zürich u. a. : Hug u. Co. 1935. (Wenn ig es Pnurechatzli war. Wilhelm bin ich der Telle).

Aeschbacher, W. : Zwei Volkslieder in Variationenform für Männerchor.
Leipzig : Ernst Eulenburg 1936.
Angez. : Signale f. d. musikalische Welt 94, 738.

Denckler, H. : Was Deutschland singt ! Volkslieder, Marsch- und Soldatenlieder, Sturm-und Kampflieder.
Berlin : H. Denckler-Verlag 1936. 45 S. kl.8°.

Denckeler, H. : Wir werden weiter marschieren.
Berlin : H. Denckler-Verlag 1936. 29 S. m. Abb. kl. 8°.

Erdlen, H. : „Kommt, singt und klingt !" Zwei-und mehrstimmige Volkslieder für jede Art von Besetzung. Zum Singen und Spielen für Marsch, Fahrt, Lager, Schule & Haus.
Heidelberg : Hochstein & Co. 1936.
Angez. : Hess. Sängerwarte 13, 109.

Hanemann, F. : Sechs deutsche Volkslieder. Für Männerstimmigen leicht gesetzt.
Iserlohn : Franz Hanemann 1936.

Hansen, W. : Die Spiele der deutschen Bauern. (1 Heischereim und 3 Schnaderhüpferln).
In : Volkstum u. Heimat 3(1936) , 27—30.

Hensel, W. : Weg und Ziel.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1936. 44 S. 8°. (Hensel : Dar singende Quell 7. 3., Bärenreiter-Ausgabe 900).
Angez. : Die Musikpflege 7, 264ff.

Heyden, R. : Es sang gut Spielmann. Alte deutsche Volksweisen.
Wolfenbüttel : Gg. Kallmeyer 1936.
Bespr. : Dt. Musikkultur 1, 316 ; Die Volksschule 33 53 16.

Kraft, W. : Volkslieder für Singstimme und Instrumente.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1936. (Bärenreiter-Ausgabe 1083) .

Angez. : Dt. Musikkultur 1, 316 ; DVl 39, 100 ; Musikpflege 9, 31.

Lemacher, H. : „Drei Lilien". „Die Sonne scheint nicht mehr". Volksliedbearbeitungen für 3-stimmigen Männerchor.
Köln : P. J. Tonger 1936.

Lieder fur Alle. 25 Folgen deutscher Liedblätter.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1936. (Bärenereiter-Ausgabe 1030) . 52 Bll. 8°.
Angez. : DVl 39, 118.

Lipphardt, W. : Gesellige Zeit. Liederbuch für gemischten Chor. Zweiter Teil.
Kassel : Bärenreiter Verlag 1936. (Bärenreiter-Ausgabe 910) .
Angez. : Musik Woche 4／34, 13ff.

Müller, R. : Zwei Volkslieder. 1. : Maienzeit bannet Leid. 2. : Weiß mir ein schönes Röslein.
Zürich u. a. : Hug u. Co. 1936.

Naesen, P. : Die Grenzwacht am Hohlweg. Ein Heckenbuch.
Freiburg i. Br. : Herder 1936. (Darin Vogelstimmenausdeutung, Hirtenrufe u. a.).
Angez. : Vierteljahrsbll. f. Luxemburg. Sprachwissenschaft N. F. 2, 172ff.

Pfannenstiel, E. : Vom Geist und Lied der jungen Nation.
In : Musik u. Volk 3(1935/1936), 120-124.

Plenzat, K. : Bauernspiegel. Schwänke und Schnurren, Sprüche und Lieder aus dem Bauernmund. Buchschmuck von C. Streller.
Leipzig : Eichblatt 1936. 146 S. 8°.(Eichblatts deutsche Heimatbücher 104/107).

Sambeth, H. M. : Deutsche Volkslieder. Eine Liedauswahl.
Veröffentlichungen aus der Akademischen Auslandsstelle an der Universität Bonn, Wintersemester (1936/37), 1-60. (BonnerBlätter).

Sartorio, A. : Blütenlese. Eine Sammlung beliebter Volkslieder, Opernmelodien und Original-Kompositionen in leichtem Arrangement. Teil. 1. im Violinschlüssel. Teil 2. Violin und Baßschlüssel.
Zürich : Hug u. Co. 1936 (?).

Schittenhelm, H. : Deutsche Tanz-und Volksweisen.
Mainz : Schott's Söhne 1936.
Angez. : Die Volksmusik 1, 394.

Simon, H. : „Drei Laub auf einer Linden". Heft 1. 2.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1936.
Angez. : Signale f. d. musikal. Welt 94, 738.

Stürmer, B. : 3 Volksliedbearbeitungen für vierstimmigen Männerchor.
Köln : P. J. Tonger 1936.

Volkslieder. Berlin, München u. Oldenbourg 1936. 63 S. m. 1 Titelbl. 8°. (Deutsche Gedichte Heft. 35/36).
In : Allgem. Sänger-Ztg. 30 (1936).
(Über : G. Schulten : "Der Kilometerstein").

Hundert deutsche Volks-und Kommerslieder. : Den Fahrgästen seiner Schiffe zur Erinnerung gewidmet.
Bremen : Norddt. Lloyd 1936. 48 S. kl. 8°.

Volkslied-Sätze zeitgenössischer Komponisten. A. Clemens, 6 Volksliedbearbeitungen. R. Müller, Zwei Zeitlieder, W. Sendt, Madrigal. Für 4-stimmigen Männerchor. H. Lang, Bauernspruch, W. Sendlt, Media vita. Für gemischten Chor.
Köln : P. J. Tonger 1936.

Zschiesche, A. u. O. Leis : Wenn die bunten Fahnen. Klampfenlieder. Buchschmuck von F. Bernecker.
Plauen : Wolff 1936. 58 S. kl. 8°.

Binder, F. : Drei feuchtfröhliche Lieder. Bearbeitet für Männerchor mit Instrumenten.
Findelberg : Karl Hochstein 1937. („Muss i denn zum Städtele hinaus", „Kommt ein Vogel geflogen", „Liebesscherz")

Angez. : Sängerbundesztg. "Nordmark" F. 2, 28.

Blankenberg, W. : Neue Volksliedbearbeitungen.
In : Zs. f. Hausmusik 6, 41-50.

Däubner, F. : Singendes Volk. Bunte Sing-und Spielhefte.
Karlsbad-Donitz : Verlag G. Hohler 1937. J. F. Der Winter ist vergangen 1937.
Angez. : Dt. -mährisch. Heimat 23, 362.

Dietrich, F. : Gesellige Lieder aus dem deutschen Volkserbe. Zum Singen am Klavier, mit einem Melodieinstrument (Flöte, Geige) nach Belieben.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1937.16 S. (Bärenreiter-Ausgabe 1141).
Angez. : DVl 39, 118 ; Musica 8, Nr. 11, 12 ; Die Volksschule 33, 316 ; Werk u. Wille 4, 358 ; Volk u. Scholle 15, 187 ; Volkslied u. Hausmusik 5, 121.

Distler, H. : op. 16. Neues Chorliederbuch. 1. F. Bauernlieder. 2. Minnelieder. Für gemischten A-capella-Chor.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1937.
Angez. : Signale 45, 688.

Eichenauer, R. u. G. Pallmann : Unser das Land. Ein Liederbuch des deutschen Dorfes.
Wolfenbüttel,
Berlin u. Köln : P. J. Tonger 1937. 201 S.
Angez. : Volksmusik (1938), 86 ; Musikpflege 8 ; Dt. Tonkünstlerztg. 34, 144ff.

Gumbel, P. : Musikalisches Hausbüchlein.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1937.
Angez. : DVl 39, 139.

Hoffmann, A. : Vivat, jetzt geht's ins Feld.
Wolfenbüttel : Kallmeyer Verlag 1937. 28 S.
Angez. : Die Volksschule 33, 316 ; Musikpflege 9, 334.

Hoffmann, A. : „Wenn alle Brünnlein fließen".
Frankfurt a. d. Oder : Verlag G. Bratfisch 1937. (Frankfurter Blockfötenhefte Nr. 5).

Angez. : Bll. d. Singbewegung in Thüringen 4, Nr. 1, 11.

Jode, F. : Der kleine Rosengarten. Volkslieder von H. Löns. Vertont vonF. Jöde. Ausgabe für Blockflöte.
Jena : Diederichs 1937. 129 S.

Klaass, R. : Das goldene Buch der Lautenlieder. Eine reiche Auslese Volks-und volkstümliche Lieder mit doppelter Lautenbegleitung. Neu bearbeitet von K. Wolki.
Berlin : Globus-Verlag 1937. 355 S. 8°.

Lieder für die Landjugend. Zusammengestellt von der Abteilung Landjugend im Reichsnährstand in Zusammenarbeit mit dem Kulturamt der Reichsjugendführung. Folge 1, 2.
Wolfenbüttel und Berlin : Kallmeyer 1937ff. 1. Auflage 32 S. 2. Auflage 30 S.

Liederbuch für gemischten Chor. Herausgegeben vom deutschen Sängerbund 118 mehrstimmige unbegleitete und begleitete Gesänge in Original Sätzen und Bearbeitungen.
Leipzig : Zschocher 1937. 251 S. (Umschlagtitel : Liedebuch des DSL).

Unser gemischtchöriges Liederbuch. Herausgegeben vom deutschen Sängerbund.
Leipzig : Zschocher 1937.
Rez. : Hess. Sängerwarte 13, 66-67.

Linder, A. : Deutsche Weisen. Die beliebtesten Volkslieder und Gesänge für Klavier. Textbuch.
Stuttgart : Auer's Musik-und Buchverlag 1937. 136 S. kl. 8°.

Passthory, C. v. : Sechs Lieder im Volkston. Für hohe und mittlere Stimme mit Klavierbegleitung.
Braunschweig : Verlag Henry Litolff 1937.
(Darin : In lichter Farbe steht der Wald ; Da droben auf dem Berge ; Morgen muß ich fort von hier ; Der Maie, der Maie, der bringt uns Blümlein viel).

Angez. : Musikerz. 3, 353 ; Singnale 95, 440.

Mainzer Singebuch.
Mainz : Schott's Söhne 1937.
Angez. : Musikpflege 8(1937/1938), 228.

Sendt, W. : „Aus tiefen Weh". „Unsrer lieben Frau Traum". Für gemischten A-capelle Chor. 1937.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32,28.

Deutsche Volkslieder in Bildern, Sammelabum.
München : Kathreiner. 2. F. 37 S. m. eingek. farb. Bildern. 1937. 4°. 3. F. 1937. 40 S. 4. F. 1937. 44 S.

Arlt, G. O. and C. B. Shomaker : Kleiner Liederfreund : two hundred and two popular German Songs.
New York : Crofts 1938. 181 S. 16°.

Baum, R. : Geselliges Chorbuch. Lieder und Singradel in einfachen Sätzen für gemischten Chor. Veröffentlichung des Arbeitskreises für Hausmusik im Reichsverband der gemischten Chöre Deutschlands.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1938. 123 S. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 1300).
Angez. : Süddt. Sängerztg. 33, 31 ; Dt. Sängerbundesztg. 30, 635 ; Musik u. Kirche 10, 280ff. ; Volkslied und Hausmusik 5, 122ff.

Bautze, A. : „Als wir nach Frankreich zogen" ; „Morgen will mein Schatz abreisen" ; „Unsere liebe Frau von kalten Bronnen".
Verlag Kistner u. Siegel.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 55-56 ; Hess. Sängerwarte 14, 55ff.

Behr, H. : „Glück auf ihr Bergleut" ; „Glorwürdige Königin" für Männerchor.
Köln : Verlag Tonger.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 55-56.

Erdlen, H. : „Kein schöner Land".
Leipzig und Zürich : Geber. Hug & Co. 1938.

Geilsdorf, P. : Volkslieder für gemischten Chor.
Heidelberg : Verlag Hochstein 1938.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 33, 12.

Geilsdorf, P. : „Volkslieder im Satz für gemischten Chor“ 12 Lieder.
Heidelberg : Verlag Hochstein 1938.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 145.

Götsch. G. : Fröhliche Chorlieder. 6. neu durchgesehene Auflage.
Wolfenbüttel und Berlin : Kallmeyer 1938. 23 S. gr. 8°.

Gumbel, H. : Beiträge zur Geistes-und Kulturgeschichte der Oberrheinlande, F. Schultz zum 60. Geburtstag gewidmet.
Frankfurt : Diesterweg 1938. VIII, 244 S. m. 6 Tafel.
(Darin drei volkskundliche Aufsätze von L. Pinck, M. Ittenbach und A. Spamer).
Angez. : Zs. f. GO, N. F. 52, 215ff.

Koch, R. : Liederbuch. 9. Auflage. Neubearbeitet.
Braunschweig : Appelhaus 1938. 64 S. kl. 8°.

Koschinsky, F. : „Als ich an einem Sommertage“. ; „Der Kurfürst von Hessen“.
Verlag Kistner und Siegel.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 55-56.

Latzke, H. : “Volksliedersuite”.
Leipzig : Verlag Paul Zschocher 1938.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 56.

Lamerdin, K. : Dreißig Jahre „Zupfgeigenhansl“.
In : Musik in Jugend u. Volk 1 (1937/1938), 576-578.

Leib, W. : „4 Schnurren“(nach Volksliedern)für gemischten Chor ohne Begleitung (Spinn, spinn, meine liebe Tochter ; Weib, sollst ham gehn ; Annemarie ; Kuckucksständchen).
Heidelberg : Verlag Hochstein 1938.
Angez : Süddt. Sängerztg. 32, 113.

Lemacher, H. : „Widerwiderrum“.

Verlag Kistner und Siegel.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 55-56.

Ein neues Liedblatt des deutschen Sängerbundes.
In : Hess. Sängerwarte 14, 137.

Die Liedblatter. "Singendes Volk". Rückschau auf 30 Liederblätter-Blatt 30 „Lustig ist die Jägerei".
In : Hess. Sängerwarte 14, 171.

Lott, W. : Deutsche Chormusik. Singebuch des Reichsverbandes der gemischten Chöre Deutschlands. Unter Mitarbeit des Musikausschusses des Reichsverbandes herausgegeben.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1938. (Auswahl der Chorliteratur von 1400—1900).
Angez. : Die Musik 30, 484—485 ; Dt. Sängerbundesztg. 30, 437 u. 578.

Maier, M. : „Lieblich gesellt". „Die Fisch im Wasser wohnen". Sammlung der „Landchor". Reihe C. Blatt 15—16.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1938.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 55—56.

Othegraven, A. V. : Vier Volkslieder für gemischten Chor.
Augsburg : A. Böhm 1938.
(Hab mein Wage voll geladen—Wenn die Soldaten durch die Stadt marschieren—Es soll sich halt keiner mit der Liebe abgeben).
Angez. : Dt. Sängerbundesztg. 30, 562.

Poppen, H. : Volkslieder zum Singen und Spielen. (Winterwende ; Das bucklige Männlein ; Zeit isch do). Für gemischten Chor mit Begleitung.
Heidelberg : Verlag Hochstein 1938.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 32, 114.

Schiegg, A. : Das deutsche Lied, wie ich es nach Noten singen lerne. Grundlegende Gesangschule für Schule und Haus. Bearbeitet und herausgegeben. 3. Auflage.
München und Berlin : Oldenburg 1938. 56 S. gr. 8.

Schneider-Heise, A: „Ich habe Lust im weiten Feld". "Auf, auf zum fröhlichen Jagen" (Bearbeitungen).
Heidelberg : Hochstein 1938. Sängerey Nr. 11 u. 12.
Angez, : Süddt. Sängerbundesztg. 32, 65.

Stemmle, R. A. : Ihr lieben Leute höret zu. Schöne Romanzen und hochtragische Moritaten, ergreifende Volksballaden und echte Drehorgellieder. Gesammelt und herausgegeben. Satz und Weise von E. Nick. Zeichnungen von E. O. Plauen.
Berlin : Schützen-Verlag 1938. 2234 s. 8.

Swannel, A. E. K. : Fifty German folk songs, coith airs.
London : Harrap 1938. 104 S. 8°. (Boston : Heath 1938).

Wiebach, K. : Sprüche und Liedchen. Aufgezeichnet. (Mit 4 Sprüchen, 1 davon mit Melodie).
In : DVl 40, 124.

Auf und singt.
Wuppertal : R. Brockhaus 1939. 47 Bll. 8°.

Benoit, G. : Lieder und Kanons.
Potsdam : Voggenreiter 1939. 31 S. 8°.

Dietrich, F. : Fröhliche Musikanten. Lieder zum Singen und Spielen, gesetzt aus dem Liederbuch für Schule und Haus „Klingendes Erbe".
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1939. 16 S. (Bärenreiter-Ausgabe 1294).

Edmunds, H. : Sechs deutsche Volkslieder. Bearbeitet für eine mittlere Singstimme und Streichquartett.
Selbstverlag 1939. 12 S.

Hensel, W. : Zwiegesänge.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1939. 16 S. Aus : Finkensteiner Blätter. (Bärenreiter-Ausgabe 1298).

Hensel, W. : Blüh nur, blüh mein Sommerkorn. Lieder zur Gitarre.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1939.

Aus : Finkensteiner Blätter. (Bärenreiter-Ausgabe 1297).

Heyden, R. : Kein schöner Land. Eine Sammlung von Liedsätzen und Kanons für Anfänge und den Aufbau des mehrstimmigen Chorsingens.
Wolfenbüttel u. Berlin : Kallmeyer 1939. 46 S. gr. 8°.
Angez. : Die Musik 31, 475.

Hoffmann, A. : Der Jahresring. Alte und neue Weisen im dreistimmigen Chorsatz für die singende Gemeinschaft.
Berlin-Lichterfelde : Vieweg 1939. 87 S. 8°.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 34, 75 ; Die Musik 32, 63.

Löns, H. : Der kleine Rosengarten.
Jena : Diederichs 1939. 86 S. 8°. (Deutsche Reihe, Band 13. Feldpostausgabe 1943).

Löns, H. : Das Löns-Liederbuch. Herausgegeben von H. Heeren und O. Koch. Klaviersätze von H. Fischer. Neue umgearbeitete Auflage.
Berlin-Lichterfelde : Vieweg 1939. 48 S. 4°.

Manding, H. : Siehst du im Osten das Morgenrot? Lieder des Volkes. Zusammengestellt.
Königsberg : Pädagogische Verlagsgemeinschaft Ostpreußen 1939. 127 S. kl. 8°.

„Neue leichte Männerchöre",im Satz von verschiedenen Komponisten.
Mainz : Verlag Schott's Sohne 1939.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 33, 100.

Napiersky, H. : Wohlan, die Zeit ist gekommen. Fröhliche Chorlieder. 2. Auflage.
Wolfenbüttel u. Berlin : Kallmeyer 1939. 12 S. gr. 8°.
Angez. : Musikpflege 8.

Schlageter, W. : Vier alte Weisen, für Männerchor gesetzt.
Karlsruhe : Süddt. Musikverlag, Fritz Müller 1939.
Angez. : Süddt. Sängerztg. 33, 47.

Strecke, G. : Fünf deutsche Volkslieder für gemischten Chor

bearbeitet.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1939.
Angez. : Zs. f. Musik 107, 282.

Werkmeister, W. : Deutsches Lautenlied. Neuausgabe.
Berlin-Lichterfelde : Verlag Adolf Köster 1939. 839 S.
Angez : Die Musik 32, 19.

Wölki, K. : Das goldene Akkordenbuch. Deutsche Volkslieder und-tänze. Eingerichtet fur Gesang und Chromat. Akkordeon oder für Akkordeon allein. Herausgegeben unter Mitarbeit von E. Naumann und R. Richter.
Berlin : Globus Verlag 1939. 247 S. 4.

Der Volkschor. Liederbuch des Reichsverbandes der gemischten Chöre Deutschlands. Bd. 1.
Hamburg : Hanseatische Verlagsanstalt 1939.

Ein neuer Männerchorband des DSB.
In : Hess. Sängerwarte 15, 23—24.

Beethoven, L. van : Neues Volksliederheft. Für eine Singstimme und Klavier mit Begleitung von Violine und Violoncello herausgegeben von G. Schünemann.
Leipzig : Breitkopf & Härtel 1940. (23 Volkslieder aus Tirol, der Schweiz, Schweden, Spanien usw.).
Bespr. : DVl 45, 86ff.

Freut Euch des Lebens. 205 ausgewählte Volks-, Rhein-u. Soldatenlieder. Texte.
Leipzig : D. Rather 1940. 103 S. kl. 8°.

Hild, F. : Zwei Volksliedsätze für dreistimmigen Jugendchor und Instrumente.
Leipzig : Kistner u. Siegel 1940.

Jöde, F. : Unser Mutterlied. Ein Hausbuch für alle.
Potsdam : Voggenreiter 1940. 83 S. gr. 8°.

Kaestner, H. u. H. Spittler : „Fröhlich laßt uns musizieren". Ein Spielbüchlein für den Gruppen unterricht mit Klavier zu drei und vier Händen (Auch für Klavier und Melodie-

instrumente). herausgegeben und gesetzt.
Ed. Schott 2697 1940. (beruht vorwiegend auf Volkslied und Volkstanz).
Angez. : Zs. f. Musik 108, 591.

Reusch, : Zwie alte Volkslieder in neuen Sätzen.
In : Die Volksschule 35 (1939/40), 213.

Roelli, H. : Moritaten und Zutaten. 224 bunte Lautenlieder. Durchsicht z. Teil Ergänzung der Lautensätze von H. Leeb.
Zürich u. Leipzig : Amstutz & Herdeg 1940. 48 Bll. m. Abb.

Siegl, O. : Drei Volkslieder für Sopran, Geige und Klavier. Werk 114.
Augsburg : Anton Böhm & Sohn 1940.

Soldaten Singen am Rhein. Die Schönsten neuen und die unvergänslichen alten Rhein-u. Soldatenlieder.
Köln : Hoursch & Bechstedt 1940. 31 S. kl. 8°.

Beethoven, L. van : Volkslieder in Originalbegleitungen für Klavier. Herausgegeben von K. Herrmann.
Leipzig u. Zürich : Hug u. Co. 1941. 20 S. qu. 8°.

Gneist, W. : Kleines Liederbuch.
Kassel u. Wilhelmshöhe : Bärenreiter-Verlag 1941. 39 S. (Bärenreiter-Ausgabe 1253). 2. erweiterte Auflage 1951.

Schwertner, F. : Opern-, Operetten- Schlager-und Modelieder-Texte.
Leipzig : Schwertner 1941. 64 S. kl. 8°. (Schwertners Liedertexte Bd. 2).

Schöne alte Volkslieder : Mit farbigen Bildern nach Holzschnitten von H. Gutgesell.
Wolfenbüttel u. Berlin : Kallmeyer 1914. 15 S. 8°.

Götsch, G. : Singende Mannschaft. Einfache Chorlieder für drei gleiche Stimmen gesetzt.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1941.
Angez. : Die Musik 34, 234 ; Zs. f. Musik 109, 165ff.

Forster, B. M. v. : Lehrschule für Ziehorgel und auch für Zither 1-5. S. Paolo-Appiano, Inst. Mariengarten 1942. (1. Aller Anfang ist schwer, 8 Bll. ; 2. Volkslieder, 8 Bll. ; 3. Alles im Dreivierteltakt, 8 Bll. ; 4. Volkslieder 8 Bll. ; 5. Tänze, Märsche u. Walzer, 8Bll.).

Volkslieder für drei Frauenstimmen gesetzt von E. Richar.
In : DVl 44, 72.

Vertrieb von Liederheftchen, im Rahmen des Winterhilfwerkes 1942/1943.
In : DVl 44, 96.

Barm, R. : Geselliges Chorbuch. Veröffentlichung des Arbeitskreises für Hausmusik im Reichsverband der gemischten Chöre Deutschlands. Teil 2.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1943. 2. Neue Lieder und Gesänge für gemischten Chor. 182 S. 8°. (Bärenreiter Ausgabe 1699).

Beimdiek, W. : Deutsche Volkslieder aus alter und neuer Zeit. Buchschmuck : S. Kateneier. 1. Auflage der Feldausgabe.
Gütersloh : Bertelsmann 1943. 84 S. kl. 8°. (Kleine Feldpost-Reihe).

Götsch, G. : Singende Mannschaft. Einfache Chorlieder für 3 gleiche Stimmen. Nebst volkstümlichen Kanons von F. Dietrich u. a. verbesserte Auflage. Einmalige Sonderausgabe der Zentrale der Frontbuchhandlungen.
Paris u. Kassel : Bärenreiter-Verlag 1943. 112 S. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 1599).

Korda, V. : Flieg her, flieg hin! 1943. Volkslieder für Singstimme und Alt-Blockflöte.
In : Zs. f. Spielmusik, (Juni 1943), Ht. 117.

Der Leierkasten. Alte Bänkelgesängerlieder und Lieder fürs Herz. Zeichnungen, H. Rothfuchs. 4. Auflage.

Potsdam : Voggenreiter 1943. 64 S. kl. 8°.

Strube, A. : Kleines Chorbuch zu deutschen Volks-und Soldatenliedchen. Heft 1, 2.
Leipzig : Merseburger & Co.
Heft 1 : Für 3 Männerstimmen. 1944. 112 S. kl. 8°.
Heft 2 : Für 3 gemischte Stimmen. Sopran, Alt, Bariton. 1943. 128 S. 8°.

Ich Singe mit, wenn alles singt.
Bielefeld : Bechauf 1946. 8 Bll. kl. 8°. (Umschlagtitel).

Lieder fur Feier und Gemeinschaft.
Berlin : Magistratsdruckerei 1946. 24 S. 8°.

Unsere Lieder. Sonderdruck Teil 1.
Frankfurt : St. Michael-Verlag 1946. 21 S. kl. 8°.

Volksliederbuch.
Weimar : Thüringer Volksverlag 1946. 120 S. m. Not. u. Abb. kl. 8°.

Wo wir uns finden. 22 alte Volkslieder. Von Elfriede Kienitz-Epp geschrieben und mit Zeichnungen versehen.
Waibstadt bei Heidelberg : Verlag Kemper 1946. 44 S.

Volks-Liederbuch.
Weimar : Thüringer Volksverlag 1946. 119S. m. Abb. kl. 8°.

Volks-Liederbuch.
Weimar : Thüringer Volksverlag 1946. 63 S. m. Abb. kl. 8°.

Webels, W. : Das fröhliche Liederbuch. Arrangement. Volkslieder und lustiger Sang für frohe Stunden.
Essen-Stehle : Webels 1946. 32 Bll. kl. 8°.

Weisen von Abschied. Liebesfreund und Liebeslied.
Berlin : Das Neue Reich 1946. 40 S. 8°.

Arnim, L. A. v. u. C. Brentano : Des Knaben Wunderhorn. (Auszug).
Alte deutsche Lieder. Ausgewählt von L. Bäte.
Gütersloh : Bertelsmann 1947. 319 S. 8°.

Arnim, L. A. v. u. C. Brentano : Eine Auswahl alter deutscher Lieder mit einer Einführung von D. Pfeffer aus des Knaben Wunderhorn.
Heidelberg : Jedermann Verlag 1947. 64 S. kl. 8°.

Arnim, L. A. v. u. C. Brentano : Des Knaben Wunderhorn. Texte und Vorlagen in Auswahl herausgegeben von K. Schreinert.
Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht 1947. 48 S. 8°. (Göttinger Lesebogen zur deutschen Literaturgeschichte, Reihe 2, Heft 3).

Balladen, ernste Gesänge, Abendlieder. Herausgegeben im Auftrag des Magistrats von Groß-Berlin, Abteilung für Kunst, Amt für Volkskunst.
Berlin : Das neue Berlin 1947. 32 S. m. Abb. kl. 8°.

Freiberg, A. : Wir singen. Kleine Liedersammlung für Alt und Jung.
Kaiserslautern: Verlag für Literatur und Politik 1947. 32 S. m. Abb. kl. 8°.

Unser Lied.
Hamburg : Hamburger Buchdrucks-und Verlagsanstaltung. Auerdruck 1947. 53 S. kl. 8°. 2. unveränderte Auflage 1948.

Volksliederbuch. Herausgegeben vom Pädagogischen Institut Weilburg.
Oberursel / Lahn : Konpaß Verlag 1947. 278 S. kl. 8°.

Wir singen! Eine Textliedersammlung. Bearbeitet von A. Fassel. Zeichnungen von R. Rohrmüller.
Offenbach-Main : Bollwerk-Verlag 1947. 94 S. kl. 8°.

Arnim, L. A. v. u. C. Brentano : Des Knabenwunderhorn. Alte deutsche Lieder. In einer Auswahl nach dem Original. Ausgewählt und neu herausgegeben von H. Weber.
Berlin : Fundament Verlag 1948. 286 S. 8°. (Umschlagt).

Beckerath, A. v. : Es sang gut Spielmann. Schöne alte Volkslieder mit Ritornellen zu 3 bis 4 Stimmen bearbeitet. Zeich-

nungen von K. Weinert.
Berlin u. Leipzig : Volk u. Wissen 1948. 16 gef. S. 8°. (Volk u. Wissen Sammelbücherei. Gruppe 1, Serie E, Heft 2).

Borris, S. u. H. Martens : Chorbuch für gleiche Stimmen.
Berlin u. Leipzig : Volk u. Wissen 1948. 274 S. m. Abb. 8°. (Das Musikschulwerk Bd. 6).

Büchtger, F. : Es taget vor dem Walde. Volksliedsätze für gemischten Chor.
Wolfenbüttel : Möseler 1948. 16 S. 8°.

Duis, E. : Volkslieder. Ein Sing-und Musizierbuch. Bearbeitet und herausgegeben.
Wolfenbüttel u. Hannover : Wolfenbütteler Verlagsanstaltung 1948. 124 S. 8°.
(Arbeitsbücher für die Lehrerbildung Bd. 10).

Freizeitlieder.
Wuppertal-Elberfeld : R. Brockhaus 1948. 32 S. (Umschlagtitel).

Fröhlich laßt uns singen.
Bad Salzuflen : MBK-Verlag 1948. 8 S. 8°. (Kleine Lichter, Heft 84).

Kalkschmidt, E. : Vom Memelland bis München.
Hamburg-Bergedorf : Stromverlag 1948. 311 S. 8°.

Mein Lied in der Tasche. Heft 1.
München : R. M. Siegel, Musik Ed. 1948. 29 S. kl. 8°.

Liedheft. 1. 2.
Potsdam : Potsdamer Verlag 1948. je 16 S. 8°.

Selbach, P. : Froher Sang-heller Klang. Ein Liederbuch für Fahrt und Heim. Bd. 1.
Ludwigshafen : Selbach 1948. 168 S. kl. 8°.

Burkhardt, H. u. W. Lipphardt : Der Singer. Ein Liederbuch für Schule und Leben.
Kassel u. Basel : Bärenreiter-Verlag 1949. 124 S. kl. 8°.
Teil 1 : Unterstufe 1.-4. Schulj, Die Bilder stammen

von P. Jordan u. W. Harwarth. (Bärenreiter-Ausgabe 891).

Chemin-Petit, H. : Kommt, ihr Gespielen. Chorbuch zu deutschen Volksliedern. Heft 1. 3.
Hamburg : Merseburger & Co. 1949.
1. Für 3 gleiche Stimmen. 63 S. kl. 8°. 3. Für 3 gemischte Stimmen. 63 S. kl. 8°.

Dalgaard, H. og P. Nydahl : Wir singen. 50 tyske Sange. 2. Oplag.
København : Gjellerup 1949. 51 S. 8°.

Esser, B. u. H. Kumetat : Liederbuch für Schule und Haus.
Bochum : Kamp 1949. 206 S. 8°.

Götsch, G. : Deutsche Chorlieder.
Wolfenbüttel : Möseler. Teil 1. 1949. 108 S. teil 3. 1951. 104 S. 8°.
Angez : Zs. f. Musik 111, 379. (Teil 1).

Hohmann-Heim, : 55 zweistimmige Volkslieder. Neuausgabe.
Oberholsten : Gagriel 1949. 17 S. 4°.

Lauerer, E. : Unsere Lieder und Spiele. Eine Sammlung für Familie, Kindergarten, Hort und Heim. Zusammengestellt.
Neuendettelsau : Buchhandlung der Diakonissenanstalt 1949. 81 S.

Lieder und Chöre zur Feiergestaltung.
Berlin u. Leipzig : Volk u. Wissen 1949. 64 S. gr. 8°.

Lipphardt, W. : Altenberger Liedsätze. Herausgegeben von W. Lipphardt unter Mitarbeit von H. Kulla und A. Lohmann.
Freiburg i. Br., Berlin u. Düsseldorf : Christopherusverlag 1949. quer 8°.

Lott, W. : Deutsche Chormusik. Neu bearbeitet von W. Klink. Bd. 1. 2.
Lippstadt : Kistner & Siegel 1949/1950.
1. Singebuch für gemischten Chor 153 S. 8°.

Marx, K. : Im Lebenskreis. Alte und neue Lieder für Singstimmen und Instrumente in neuen Sätzen.
Hamburg : Merseburger & Co. 1949. 16 S.
(Leben im Lied. Liedsätze mit Genehmigung des Bärenreiter-Verlags, Kassel).

Mayr, A. : Das Liederbuch. Herausgegeben und gestaltet.
Salzburg : O. Müller 1949. 240 S. 8°.

Meisen, K. u. H. J. Dahmen : Rheinische Volksliedblätter in drei Liederreihen :
1. Der Jahreskreis. 2. Der Lebenskreis. 3. Klingende Landschaft. Erschienen aus Reihe 1 zwei Weihnachtsliederblätter für Männerchor, aus Reihe 3 zwei Standesliederblätter vom Niederrhein für gemischten Chor.
Bonn 1949.

Metzler, F. : Risch, rasch, angefaßt. Spiel-und Reigenlieder für Singstimmen und Instrumente in neuen Sätzen.
Hamburg : Merseburger & Co. 1949. 16 S. (Leben im Lied).

Metzler, F. : Das Schloß in Österreich. Alte Volksliedballaden für Singstimmen und Instrumente in neuen Sätzen.
Hamburg : Merseburger & Co. 1949. 16 S. (Leben im Lied).

Meyer-Frank, H. : Ein-und mehrstrophige Volkslieder. (Vom Geist der Dichtung).
In : Gedächtnisschr, f. Robert Petsch (Hamburg 1949), 296—305.
Zit. : Bibliogr. d. dt. Zs. Lit. 99, 985.

Müller, P. : Unser Liederbuch.
Heidelberg : Kammerer 1949. 96 S. m. Abb. 8°. (Teil 1).

Musik aus dem Born alter Volksweisen.
In : Vier Viertel 3(Berlin 1949) Ht 1, 10.
Zit. : Bibliogr. d. dt. Zs. Lit. 100, 832.

Rein, W. : Deutsche Lieder vergangener Jahrhunderte für drei Stimmen. Heft 1 : Weltliche Lieder.
Wolfenbüttel : Möseler 1949.
Angez. : Zs. f. Musik 111, 379.

Rohde, W. : Fröhliche Weisen. Zusammengestellt.
Berlin : Das neue Leben 1949. 63 S. 8°. (Singt mit Heft 4).

Rothenberg, F. S. : Das junge Lied. 80 Lieder der Christenheit.
Stuttgart : Quellverlag in Kommission.
Auslieferung : Eichenkreuzhaus, Kassel-Wilhelmshohe 1949. etwa 40 Bll. kl. 8°.
Berlin : Evangelische Verlagsanstalt 1952. (m. Not).

Schaller, E. : Der klingende Siebenstern. Lieder in 7 Tonweisen.
Ausgabe A. B. Salzburg : Om. Müller 1949. 4°.
A. Für Singstimme und Gitarre 15 S. B. Für mittlere Singstimme, Violine, Bratsche u. Cello. (Salzburger Musikbücherei. Große Spielhefte Nr. 11a u. 11b).

Schmidt, H. W. u. A. Weber : Das Kleine Liederbuch. Eine Auswahl von Volksliedern für gleiche Stimmen.
Köln : Tonger 1949. 62 S. 8°.

Schmidt, S. : Der Tag verglüht im Abendrot. Abendlieder, zusammengestellt als 3. Teil der „Lieder Verlorenen Rotte".
Speyer : Elfert 1949. 31 S. 8°.

Surkau, H. W. : Darum lob ich den Sommer.
In : Der Kirchenchor 9, 51—51.

Träder, W. : Hustedter Singbuch. Volksliedsätze für dreistimmigen gemischten Chor.
Wolfenbütter : Möseler 1949 51 S.
Zit. : Zs. f. Musik 111. 154.

Unser Lied, unser Leben. Eine Sammlung alter und neuer Lieder.
Berlin : Dietz 1949. 176 S. m. Abb. kl. 8°.

Wolters, G. : Mein Schätzlein hör ich singen. Liedsätze für gleiche Stimmen.
Wolfenbüttel : Möseler 1949.
Zs. f. Musik 111, 559.

Arnim, L. A. v. u. C. Brentano : Des Knaben Wunderhorn. Auszug. Ausgewählt für Schule und Haus von V. Fadrus. 3. Auflage. Bilder von M. Flatscher.
Wien : Österreichischer Bundesverlag, Verlag für Jugend und Volk 1950. 79 S. kl. 8°.

Baum, R. : Geselliges Chorbuch. Lieder und Kanons in einfachen Sätzen für gemischten Chor. Teil 1.
Kassel u. Basel : Bärenreiter-Verlag 1950. 123 S. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 1300).

Breuer, H. : Der Zupfgeigenhansl. Herausgegeben von H. Breuer unter Mitwirkung vieler Wandervögel.
Mainz : Schott's Söhne 1950. 195 S. m. Abb. kl. 8°. Umschlagt.
(Ed. Schott 3586 ; Mit Genehmigung von Verlag Friedrich Hofmeister, Leipzig).

Burkhart, F. : Es taget vor dem Walde. Ein Kreis deutscher Minnelieder für gemischten Chor und Blasinstrumente.
Augsburg : Anton Böhm und Sohn 1950. 24 S.
Zit. : Zs. f. Musik 111, 607.

Gemeinschaftsliederbuch. Ausgabe B. Begleitbuch mit allen Texten. Im Auftrag des Gnadauer Gemeinschaftsverbandes herausgegeben.
Gießen : Schmitz 1950. 574 S. kl. 8°.

Giesbert, F. J. : Der Lautenschläger. 1. F. zur Laute oder Gitarre. 1950.
Angez. : Ant. Kat. 229 von Th. Wenner, Osnabrück, Nr. 1572.

Klink, W. : Singebuch für Männerchor.
Lippstadt : Kistner u. Siegel 1950. 154 S. 8°. (Lott, W. : Deutsche Chormusik Bd. 2).

Kranz, A. : Mein Liederschatz, deutsche Volkslieder. Zusammengestellt.
Leipzig : Pro Musica Verlag 1950. 126 S. kl. 8°.

Lavater, H., E. Marki u. H. Oser : Der Sänger. Liedersammlung für Männerchor herausgegeben.
Zürich : Musikverlag zum Pelikan 1950. 146 S. kl. 8°.

Leibl, E. : Singendes Land. Liederblätter für Heimat und Volk. Heft 2, 15—24.
Lübeck : Musikverl. Soziales Kulturhilfswerk 1950. quer 4.

Rosen Lieder.
Stuttgart : Galerie Lutz & Meyer 1950. 16 S. kl. 8°. (Rom : 1950).

Neues Liederbuch. Alte und neue Volkslieder.
Erfurt : Thüringer Volksverlag 1950. 197 S. kl. 8°.

Preime, H. : Neues Sing-und Spielbuch. Alte und neue Lieder mit allerei Instrumenten zu musizieren. 2. Auflage.
Kassel u. Basel : Bärenreiter-Verlag 1950. 165 S. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 1800).

Schulten, G. : Der Kilometerstein. Eine lustige Sammlung. 8. Auflage. Bilder von H. Rothfuchs.
Wolfenbüttel : Möseler ; Bad Godesberg : Voggenreiter 1950. 123 S. kl. 8°. (1. Aufl. 1934).

Schwarz, H. : Singefibel. Mit graphischem Schmuck von A. Wiemers.
Opladen : Verlag Junge Welt 1950. 63 S. 8°. (Neue Segel. Teilausgabe Teil 5).

Silcher, F. : Unser Silcher–30 der schönsten Lieder von F. Silcher. Ausgewählt und herausgegeben von Th. Koob. Akkordeon-Bearbeitung von A. Fett. (3. : H. Schönwalter. Geschenkband-Ausgabe).
Trossingen : Hohner 1950. 64 S. kl. 8°. (Ed. Hohner. Best. Nr. 35296).

Aichele, K. u. H. Feifel : Unser Liederbuch. Für norddeutsche Kinder.

Schulj. 5—8. Illustrationen von A. Finsterer.
Stuttgart : Klett 1951 152 S. 8°.

Aichele, K. u. G. Wirsching : Unser Liederbuch für Hessen. Auswahl der Lieder aus Hessen von F. Szymichowski unter Mitarbeit von H. Feifel.
Frankfurt : Hirschgrabenverlag 1951. VII, 136 S. gr. 8°.

Aichele, K. u. W. Bock : Singende, klingende Welt. Lieder, Chöre, musikalische Werklehre für Mittelschulen und ähnliche Anstalten. Teil 1.
Stuttgart : Klett 1951. vii, 184 S. m. Abb. gr. 8°. (5. bis 8. Schuljahr).

Ackermann, A. u. H. Akkermann u. a. : Wir jungen Musikanten. Musikbuch für Schule und Haus. Illustrationen nach farbigen Entwürfen von H. Wellmann. Bd. 1. 2.
Oldenburg : G. Stalling 1951. 168 S. 8°. 1. m. Singfibel. für 1. -4. Schuljahr. 2. m. Abb. für 5. Schuljahr.

Baentsch, H. : Volkslied-Klavierschule. Einzel-und Gruppenunterricht. 5. erweiterte Auflage.
Tutzing : Schneider 1951. 44 S.

Bruder Singer. Lieder unseres Volkes, herausgegeben von H. P. Gerick, H. Moser, A. Quellmalz, K. Vötterle.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1951. 229 S. m. Not.

Feurer, J. u. S. Fisch u. R. Schoch : Singt und Spielt. Neue Begleitsätze zum Schweizer Singbuch. Gesammelt und herausgegeben für Mittelstufe.
Zürich : Musikverlag zum Pelikan 1951. 30 S.

Grcte, G. : Chorbuch für gleiche Stimmen. 1—5 stimmige Weisen und Sätze für Frauen-und Kinderchöre, Schulchöre und Kurrenden. Teil 1.
Berlin-Dahlem u. Gelnhausen : Burckhardt Haus Verlag 1951.
1. Kirchenjahr, 55. Bll.

Hensel, W. : Unser Land im Lied. In Zusammenarbeit mit dem

kulturellen Arbeitskreis der deutschen Heimatvertriebenen in Bayern (Melodien Buch).
München : „Christ Unterwegs" 1951. 158 S. 8°.

Keldorfer, V. : Klingendes Salzburg.
Wien : Amalthea-Verlag 1951. 195 S. m. Abb. (Darin auch das Volkslied).
Angez. : Die Musikforschung 5, 276.

Kernich, F. : Sudetendeutsche Liederhefte. Herausgegeben im Auftrag der Ackermann-Gemeinde.
Landsberg i. Lech : Heinrich Hohler Verlag.
1. F. 1951. 31 S. m. Mel. ; 2. F. 1951. 31 S. m. Mel. ; 3. F. 1951. 31 S. m. Mel. ; 4. F. 1953 31 S. m. Mel.

Kinzel, W. : Sattel und Kanu. Lieder der Blockhütte. Übersetzung und musikalische Bearbeitung vom W. Kinzel. Grafik von A. Wiemers.
Opladen : Verlag Junge Welt 1951. 12 Bll. kl. 8°. (Liederhefte der jungen Welt 2).

Lutz, W. : Mein Volksliederbuch. 60 Volkslieder für Klavier, leicht gesetzt. (Ed. Schott 4100).

Lehner, L. : Das Almfahren.
Volkslied aus Österreich und Salzburg. -Wenn i mei Diandl hals'ntua. Volkslied aus Kärnten. Gemischter Chor, Partitur.
Wien : Krenn 1952. 1 S. 4°.

Lieder-Zusammenstellung. Zusammengestellt vom Kathorischen Pfarramt Arnstadt.
Heiligenstadt : Eichsf. -Cordier in der Arbeitsgemeinschaft Thür. Verleger 1951. 120 S. kl. 8°.

Die Liedergarbe. Lieder der Landjugend. Zusammengestellt von Referat Landjugend, Haus Altenberg. Schmuckzeichnungen von W. Mellmann.
Freiburg i. Br. : Christophorus-Verlag 1951. 92 S. kl. 8°.

Liederbuch, des deutschen Sänger-Bundes. Auswahlband für Frauenchor.

Wolfenbüttel : Möseler 1951. 231 S. m. Not. kl. 8°. (Rückentitel : Frauenchore).

Lieder unserer Gemeinschaft. Herausgegeben vom Ländlichen Fortbildungswerk der Landwirtschaftskammer für Niederösterreich und Wien.
Wien : 1951.

Maschner, F. : In die Berg bin i gern. Heimatlieder für Gesang und Akkordeon. Bearbeitet. Zeichnungen von Schenker-Langer.
Trossingen : Hohner 1951. 63 S. kl. 8°.

Mit Sang und Saitenspiel. 2. Auflage.
Zürich : Verlag der jungen Kirche 1951. 32Bll. kl. 8°.
3. Auflage. 1952.

Moissl, G. u. Sigesmund. : Chorbuch fur gemischte Stimmen. Ausgewählt und durchgesehen. Teil 2.
Wien : Hölder-Pichler-Tempsky ;
Graz u. Wien : Leykam ;
Wien :Österreichischer Bundesverlag für Jugend und Volk 1951.

Der Hamburger Musikant. Bearbeitet vom Musikausschuß der Gesellschaft der Freunde des Vaterländischen Schul-und Erziehungswesens in Hamburg. Teil B.
Hamburg : Verlag der Gesellschaft der Freunde des Vaterländischen Schul-und Erziehungswesens ;
Wolfenbüttel u. Hamburg : Möseler 1951. 192 S. 8°.

Nun wollen wir singen das Abendlied. Scherenschnitte von Margalisa Pomplum-Brenner. Mit Liedern im zweistimmigen Notensatz für Gesang oder Blockflöten oder Geigen.
Lahr-Dinglingen i. Baden : St. Johannisdruckerei 1951. 12Bll.

Pöhler, A. : Die Klampfe. Lieder für Wandervögel und Nesthocker. Zur Zupfgeige bequem zurecht gesetzt von A. Pohler.
Berlin-Lichterfelde : Chr. F. Vieweg. 159 S. kl. 8°.

Spittler, H. : Volkslied-Büchlein für Klavier, Klaviersatz von H. Spittler, bezeichnet von J. A. Burkard. Neudruck.
Mainz : Schott's Sohne 1951. 19 S. (Ed. Schott 2692).

Strube, A. : Brunn alles Heils. Choralbuch für dreistimmigen Frauen-oder Kinderchor. Melodien und Texte nach dem evangelischen Kirchen-Gesangbuch.
Berlin : Evangelische Verlags-Anstalt 1951. 127 S. 8°. (Ed. Merseburger 328).

Strube, A. : Die Helle Sonn. Choralbuch für dreistimmigen gemischten Chor.
Melodien und Texte nach der Evangelische Verlagsanstalt 1951. 127 S. m. Not. 8°.

Theilkuhl, W. : Deutsches Land und deutsches Leben. 6th. edition with 3 mass and 2 diagr.
London : Methuen 1951. X, 214 S. m. Abb. u. Not. 1 gef. Kt. 8°.

Zangius, N. : Geistliche und weltliche Gesänge um 1620. Bearbeitet von H. Sachs. Textrevision von A. Pfalz.
Wien : Österreichischer Bundesverlag 1951. XXIV, 89 S. 1 Bl. 4°.
Publicationen der Gesellschaft zur Herausgabe der Denkmäler der Tonkunst in Österreich (Umschlagt, Denkmäler der Tonkunst in Österreich, Bd. 87).

Beliajus, Vytautas Fd. : Golden Bridge. German Folk Recreation. Co-operative Recreation Service.
Ohio : Delaware 1952. 36 S.
Rez. : von M. Karpeles in Journal of the International Folk Music Council 5, 84.

Der Burgmusikant. Notenausgabe. Herausgegeben von Jugendburg Gemen. Gestaltet von C. Fasbender, B. Wormland u. e. Mitarbeiterkreis. Buchschmuck von W. Schopp. 2. Auflage.
Buer : Post 1952. 368 S. kl. 8°.

Derlien, M. : Mütter singen.
In : Hausmusik(1952), 108—111.
Zit. : Bibl. d. Musikschrifttums 1952—53, 88, Nr. 2304.

Doppelbauer, J. F : O du schöner Rosengarten. 15 Volkslieder für gemischten Chor.
Wien, Graz u. Köln : Styria 1952.

Erdlen, H. : Singe mit! Das rechte Lied zur rechten Zeit. Ausgewählt und bearbeitet. Unter Mitarbeit von W. Tebje.
Hamburg : Nordenverlag 1952. 224 S. kl. 8°.

Haas, J. : Das Jahr im Lied. Ein Volkslieder-Oratorium nach alten deutschen Weisen mit verbindenden Worten von L. Andersen für Sopran-, Alt-, Tenor-u. Baß-Solo, Sprecher, für gemischten Chor und Orchester, op. 103. Textbuch.
Mainz : Schott's Söhne 1952. 28 S. 8°.

Klingende Heimat. Eine Sammlung der schönsten deutschen Volkslieder. Vollständiges Textbuch.
Hamburg : Sikroski 1952. 91 S. kl. 8°.
(Hierzu sind erschienen : Klavierausgabe mit überlegtem Text und Violine mit überlegtem Text).

Kraus, E. u. F. Oberborbeck : Gar fröhlich zu singen. Kernlieder für die deutsche Schule. 1. -9. Schuljahr.
Wolfenbüttel : Möseler 1952. 64 S. kl. 8°.

Kretzenbacher, L. : Folk songs in the Folk Plays of the Austrian Alpine Regions. With musical illustrations.
In : Journal of the International Folk Music Council, 4, 45—49.

Laßt uns singen. Altbekannte Volks-u. Kinderlieder. Mit Bildern von B. Schwatzek.
Wien u. Heidelberg : Übereuter 1952. 28 S. 4.

Müller, E. -S. : 113 ausgewählte Volkslieder. Liedauswahl u. Zusammenstellung.
Breklum : Chr. Jansen 1952. 64 S. kl. 8°.

Köpf, J. : Suppinger Liederbuch.
Stuttgart : Schwäbischer Albverein 1953. 95 S. m. Mel.

Rüb, O. u. F. Szymichowski : Auf der Höhe da droben. Wegscheidelie-derbuch. Lieder und Tänze.
Frankfurt, Berlin u. Bonn : Diesterweg 1953. 112 S. kl. 8°. (Rücktitel : Wegscheide-Liederbuch).

Schering, E., Pastor Lic. : Unser Liederhort.
Hannover-Kleefeld : Diakonenanstalt Stephansstift 1953. kl. 8°.

Schwatzek, B. : Laßt uns singen. Altbekannte Volks-u. Kinderlieder. Mit Bildern.
Wien u. Heidelberg : Übereuter 1952. 28 S. 4.

Singt alle mit! Volkslieder von heute und aus alten Tagen. Text und Melodien. Heft 1. 2.
Hamburg : Sikorsli 1950—1952. kl. 8°.
Je 64 S. 1. Zweistimmiger Satz von Reinhard Müller 1950. 2. Zweistimmiger Satz von Horst Behlen 1952.

Tagger, sen. H. : Aus meines Großvaters Liederbuch. Vignetten von R. Szyszkowitz.
Graz, Wien u. Altötting : Styria 1952. 62 S. m. Not. 13 Bll. 5. 8°.

Tittel, E. : Es wird scho gleich dumpa. Aus der Steiermark. Gemischter Chor, A-cappela, Partitur.
Wien : Doblinger 1952. 2 S. gr. 8°.

Alt, M. u. J. Eßer : Musica Musikbuch für Realschulen. Unter Mitarbeit von G. Reismann und Th. Hennes. Bd. 1.
Düsseldorf : Schwann 1953.
4. verbesserte und erweiterte Auflage des Liederbuches für Realschulen 136 S. 8°.

Anderluh, A. : Ein fröhliches Lied zur rechten Zeit. Für Männerchöre. Partitur. Heft 1. 2.
Klagenfurt : Kollitsch 1953. 1. 15 S. ; 2. 15 S. 8°.

Anderluh, A. : Uns bleibt die Trauer. A-cappela Chöre, Partitur. Heft 1−3.
Klagenfurt : 1953.
1. Gemischte Chöre, 15 S. ; 2. Männerchöre, 15 S. ; 3. Gemischte Chöre, 15 S.

Dité, Louis : Die Unbeständige.„Schöner Augen, schöne Strahlen". Volksweise aus Schlesien und Brandenburg, 1747. Für gemischten Chor a capella bearbeitet. Partitur.
Wien : Bosworth 1953. (Ausgabe 1954). 2 S. 4°.

Dité, Louis : Jungfräulein, soll ich mit euch gehn. Volksweise. Bearbeitet für gemischten Chor a capella. Partitur.
Wien : Bosworth 1953. (Ausgabe 1954). 4 S. 4°.

Dité, Louis : Ich weiß mir'n Maidlein. Volksweise. Bearbeitet für gemischten Chor a capella. Partitur.
Wien : Bosworth 1953. (Ausgabe 1954). 4 S. 4°.

Kommt und singt. Liederbuch der Katholischen Jungschar. Verantwortung von W. Lussnig. Herausgegeben von Katholischen Jungschar Österreichs, Bundesführung.
Wien : Fährmann-Verlag 1953. 48 Bll. m. Abb. kl. 8°.

Neue Lieder für Chor-und Singegruppen. Das neue Leben im Dorf.
Berlin : Tribüne 1953. 48 S. m. Not. 8°. (Umschlagt).

Unser Liederbuch. Herausgegeben von O. Daube, E. Forneberg u. a. Teil 1.
Dortmund : Drüwell 1953−1955. 8°.
1.Laßt uns beginnen, fröhlich zu singen. 48 S. 2. Nun fanget an, ein gut Liedlein zu singen. 48 S. 1954. 3. Frisch auf, singt all, ihr Musici, 64 S. 1955.

Rüb, O. u. F. Szymichowski : Auf der Höhe da droben. Wegscheidelieder buch. Lieder und Tänze. Die Bilder zeichnete M. Bertina.
Frankfurt, Berlin u. Bonn : Diesterweg 1953. 112 S. kl. 8°. (Rückentitel : Wegscheide-Liederbuch).

Sang und Klang der Heimat. Deutsche Volks-und Heimatlieder. Textbuch.
Leipzig : Harth-Musik-Verlag 1953. 78 S. kl. 8°.

Schäfer, R. : Das spielen und singen wir gerne! Volks-und Kinderlieder für eine C-Blockflöte oder ein anderes Melodieinstrument mit einer zweiten Stimme ad libitum und unterlegtem Gesangstext. Für den Unterricht und das häusliche Musizieren zusammengestellt.
Wien : Doblinger 1953. 29 S. quer kl. 8°.

Schilling, K. : Der Turm. Lieder der Jungen. Teil 2.
Bad Godesberg : Voggenreiter Verlag 1953. 36Bll. 8°.
Teil 3. Geschrieben und gestaltet von H. Jöhn. Teil 5. Hoch vom Galgen wimmerts. 1954. 16Bll. 8°.

Schmiedel, G. : Munteres Handbüchlein für die Chorarbeit. Eine Laienfibel für jeden, der mit Chören zu arbeiten hat.
Halle : Mitteldeutscher Verlag 1953. 151 S. m. Abb. u. Not. kl. 8°.

Seidelmann, K. : Der Grünschnabel. Eine Sammlung alter und neuer Lieder für junge Menschen.
Bad Godesberg : Voggenreiter Verlag 1953. 86 S. kl. 8°.

Bruder Singer. Lieder unseres Volkes. Herausgegeben von H. P. Gericke, H. Moser, A. Quellmalz, K. Votterle.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1953. 235 S. m. Abb. kl. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 1250).

Frohes Wandern. Liedersammlung. 5. veränderte Auflage.
Zürich : Züricher Liederbuchanstalt 1953. 28 S. kl. 8°.

Zelt-und Konferenz-Lieder.
Gladbeck : Schriftenmissions-Verlag 1953. 62 S. kl. 8°.

Zschiesche, A. : Querfeldein, Ein-und zweistimmige Fahrtenlieder mit Gitarre ad lib., erweiterte Ausgabe.
Mainz : Schott's Söhne 1953. 28 S. kl. 8°. (Ed. Schott 3587).

Der Zupfgeigenhansl, Herausgegeben von H. Breuer unter Mitwirkung vieler Wandervögel. Mit leichter Gitarrenbegleitung versehen von H. Scherrer.
Mainz : Schott's Söhne 1953. 291 S. m. Abb. 8°. (Umschlagt). (Ed. Schott 4055).

Baum, R. : Geselliges Chorbuch. Teil 2.
Kassel u. Basel : Barenreiter-Verlag 1954. 180 S. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 1699).

Clerc, P. : Laßt uns singen! Deutsche Lieder. Ausgewählt Abb. von R. Alliot.
Paris : Didier 1954. 42 S. kl. 8°. (Der deutsche Erzähler).

Drei kleine Bruder Singer. Liederbuch zum Täglichen Gebrauch für jung und alt.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1954. 83 S. kl. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 3000).

Ebeler, T. : Heitere Lieder zum Mitsingen. Köln : T. Ebeler 1954. 4Bll. kl. 8°.

Frisch gesungen! Ein Blumenstrauß der schönsten Volkslieder.
Colmar : Alsatia 1954. 141 S. kl. 8°.

Fröhlin, H. : Laßt uns wieder singen.
In : Schw. Spiegel 29, Nr. 8 (Zürich 1954), 39—44. (Volksliedpflege).

Graf, B. : Das stille Tal. Volkslied aus dem 18. Jahrhundert. 1. Für Männerchor A-capella bearbeitet. Partitur. 2. Für gemischten Chor A-capella bearbeitet. Partitur.
Wien : Haslinger 1954. Je 3 S. 4°.

Hensel, W. : Spinnerin Lob und Dank. Ein neues Mädchenliederbuch. Für häusliche und gesellige Kreise, doch auch für stille Stunden. Die Blumenbilder fertigte W. Harwarth. Nachdruck.
Kassel und Basel : Bärenreiter-Verlag 1954. 197 S. m. Not. 8°.

Hollmann, H. : Musikhefte zum Hören und Singen. Heft 4.
Graz, Wien u. München : Stiasny 1954.
4. Wir verstehen Musik 43 S. 1 Bl.

Lechthaler, J., G. Moisse u. S. Schnabel : Lieder fürs Leben. Ein Sing- und Musizierbuch für die Jugend. Mit Kulturkundlichen Anmerkungen. Buchschmuck von H. Wulz. 8. unveränderte Auflage.
Wien : Holder-Pichler-Tempsky ;
Graz u. Wien : Leykam ;
Wien : Österreichischer Bundesverlcag, Verlag für Jugend und Volk 1954. 304 S. gr. 8°. (Österreichische Schulmusik Bd. 4).

Unser Liederbuch. Herausgegeben von O. Daube, E Forneberg u. a. Teil 2—3.
Dortmund : Crüwell 1954—1955. 8°.
2. Nun fanget an, ein gut Liedlein zu singen. 1954. 48 S.
2. Frisch auf, singt all, ihr Musici 1955. 64 S.

Ludwig, E. : Singende Jugend. Ein Liederbüchlein mit alten und neuen Weisen für Fahrt und Rast.
München : Elvira-Druckerei 1954. 66 S. m. Abb. 1 Bl. 8°.

Neumeyer, H. : Wandere und sing'! Alte und neue Volkslieder. Die neuen Melodien sind mit Vortragszeichen für Gitarre und Akkordeon versehen. Wanderlieder, Heimatlieder, Jagtlieder, Lieder des Frohsinns, Lieder des Feierabends.
Regensburg : Bosse 1954. 102 S. kl. 8°.

Pfingsten, E. : 322 beliebte, leichtere Männerchorlieder. Texte mit Takt-und Tonangabe. 4. erweiterte Auflage.
Wuppertal-Elberfeld : J. H. Born 1954. 72Bll. kl. 8°.
(Derselbe : 186 beliebte Männerchor-Liedertexte mit Takt und Tonangabe. 3. Auflage. 1950. 46Bll.).

Reichslieder. Deutsche Gemeinschaftsliederbuch.
Neumunster i. Holstein : Ihlhof 1954. 281 S. kl. 8°.

(Dasselbe : 1952. als Neuausgabe v. 1931. 144Bll. kl. 8°. ; 1952. 270Bll. 8°.)

Rein, W. : Volksliederbearbeitungen für Chor zu kunstvoll ?
In : Dt. Sängerbundesztg 43, 261-271.
Zit. : Bibliogr. d, dt. Zs. Lit., 109, 1646.

Rein, W. u. H. Lang. : Der Wundergarten. Deutsche Volkslieder. Herausgegeben und gesetzt. Melodie-Ausgabe ein-und zweistimmig.
Mainz : Schott's Söhne 1954. 142 S. kl. 8°. (Ed. Schott 4375).

Schilling, K. : Der Turm. Lieder der Jungen.
Bad Godesberg : Voggenreiter Verlag. 1954-1955. 8°. 1. 34 Bll. ; 2. 34 Bll. ; 3. 34 Bll. ; 4. 34 Bll. ; 5. Hoch vom Galgen wimmertz 15 Bll. Gesamtausgabe, 2. verbesserte Auflage. 1955 165 Bll.

Schlee, M. : Volkslieder für Posaunenchöre. In Zusammenarbeit mit W. Hamm.
Nürnberg : Verband e. V. Posaunenchöre in Bayern 1954. 99 S. 8°.

Seitz, R. : Fein sein, beiander bleiben, Volksliedsätze für drei Blockflöten oder andere Melodieinstrumente. Bearbeitet. Partitur.
Wien : Doblinger 1954. 11 S. quer kl. 8°.

Der kleine Bruder Singer. Liederbuch zum täglichen Gebrauch für jung und alt.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1954. 83 S. kl. 8°. (Bärenreiter-Ausgabe 3000).

Schrceder, H. : Es steht ein Lind. 50 deutsche Volkslieder in Sätzen für Klavier.
Köln : P. J. Toger 1954. 48 S. m. Not. kl. 4°.

Straka, W. : Der silberne Pfeil. Im Auftrag der Jugend des deutschen Ostens herausgegeben.
Bad Godesberg 1954. 100 S. m. Not.

Wandere und sing! Alte und neue Volkslieder.

Regensburg : 1954. 102 S. m. Mel.

Andersen, L. : Mein Heimatland. Die schönsten Volks-, Wander-, Scherz-und Trinklieder. Neuausgabe mit vollständigem Text. Vollständiges Textbuch.
Mainz : Schott' s Söhne 1955. 94 S. kl. 8°.

Kittlitz, R. : Unser Liederbuch. Die Auswahl der Lieder besorgte R. Kittlitz. Neuausgabe.
Hamburg : Agentur des Rauen Hauses 1955. 428 S. kl. 8°.

Lieder für uns alle. Hausmusik.
In : Zweimonatsschr. f. Haus u. Kammermusik, Chorweisen u. Musikerziehung 19 (1955), 185-188.

Mingotti, A. : Singe, wem Gesang gegeben. Ein Hausbuch für Sangesfrohe.
München : Heimeran 1955. 110 S. 8°.

Chemin-Petit, H. : Kommt, ihr Gespielen. Chorbuch zu deutschen Volksliedern. Bd. 4—6.
Berlin : Merseburger 1956. kl. 8°.
2. Fur 3 gleiche Stimmen, 47 S. ;
4. Fur 3 gemischte Stimmen, 47 S. ;
5. Fur 4 gemischte Stimmen, 45 S. ;
6. Fur 5 gemischte Stimmen, 32 S.

Dalgaard, H. og P. Nydahl: Wir singen. 50 tyske sange, 3 oplag.
København: Gjillerup 1956, 28 Bll. 8°.

Unser Liederbuch für Baden. Herausgegeben von K. Aichele, H. Feifel, W. Hardle und G. Wirsching. Schuljahr 5—8.
Stuttgart : Klett 1956. VII, 136 S. m. Not. 8°. (Bestellnummer 182).

Unser Liederbuch für Baden. Herausgegeben von K. Aichele, H. Feifel, W. Hardle und G. Wirsching. Schuljahr 1—4.
Stuttgart : Klett 1956. 112 S. m. Abb. 8°. (Bestellnummer 172).

Unser Liederbuch für norddeutsche Kinder. Heraus-

gegeben von K. Aichele u. a. Schuljahr 5—8. 5. Auflage.
Stuttgart: Klett 1956. VII, 152 S. m. Not. 8°. (Bestellnummer 184).

Unser Liederbuch für norddeutsehe Kinder. Herausgegeben von K. Aichele und G. Wirsching. Auswahl der Lieder im Plattdeutschen von R. Schuljahr 1—4. Stuttgert : Klett 1956. 112 S. (Bestellnummer 174).

Liederbuch für Schieswig-Holstein. Herausgegeben vom Schleswig-Holsteinischen Heimatbund. Bearbeitet von H. Mathiesen und H. Schwensen.
Wolfenbüttel : Möseler Verlag 1956. 356 S. kl. 8°.

Unser Liederbuch für Württemberg, Herausgegeben von K. Aichele und G. Wirsching unter Mitarbeit von H. Feifel. Schuljahr 1—4. 5. Auflage.
Stuttgart : Klett 1956. 112 S. m. Not. u. Abb. 8°. (Bestellnummer 171).

Rinderer, L. : Singen macht groß Freud.
Innsbruck : Edition Helbling 1957. 46 S. kl. 8°.

Pfannenstiel, E. : Fünf Bicinien.
Wolfenbüttel : Möseler Verlag 1957. 15 S. quer kl. 8°.

Straub, A. : Und sind ewiger Klang. Erzählungen und Volkslieder.
Bayreuth : Baumann 1957. 120 S. kl. 8°.

Goertz, H. : Lieder aus der Küche. Perlen vergessener Poesie. Gesammelt mit alten Singweisen und geschmückt mit anmutigen Bildern.
München : Ehrenwirth Verlag 1957. 62 S. kl. 8°.

Cornelissen, Tn. : Der Kreis. Deutsche Volkslieder, Gesänge und Kanons mit vollständigen Texten. Melodie-Ausgabe. Neue erweiterte Ausgabe.
Berlin-Lichterfelde : Musikverlag Robert Lienau ca. 1958. 156 S. kl. 8°.

Goertz, H. : Ernst, ach Ernst, was du mir alles lernst. Berliner Lieder durch ein Jahrhundert.

München : Ehrenwirth Verlag, o. J. 63 S. m. Abb. kl. 8°. (ca. 1960).

Goertz, H. : Rosen auf den Weg gestreut. Lieder aus der Gartenlaube.
München : Ehrenwirth Verlag, o. J. 63 S. m. Not. u. Abb. kl. 8°. (ca. 1962).

Das frohe Rheinliederbuch. Eine Sammlung der meistgesungenen Lieder von Rhein, Wein und Liebe. Vollständiges Textbuch. Bd. 2.
Mainz : Schott's Söhne 1957. 11 S. kl. 8°.

Kneip, G. : Deutschland im Volkslied. 714 Lieder aus den deutschsprachigen Landschaften und Europa. Mit Texten und Quellenangaben, einstimmig.
Frankfurt : C. F. Peters Verlag 1958 ff. 419 S. m. Zeichnungen von P. Zollna.

Wagner, H. : Dir, ferne Heimat. Deutsche und europäische Volkslieder.
Bad Godesberg 1957.

Lieder der Gegenwart.
Leipzig : VEB Friedrich Hofmeister 1958. 212 S. m. Not.

Jeßler, F. : Windrose. Lieder, Kanons und Chöre. Zusammengestellt von F. Jeßler.
Bad Godesberg : Voggenreiter-Verlag 1961. 157 S. m. Abb. u. Not. kl. 8°.

Schneider, W. : Deutsche Weisen. Die beliebtesten Volkslieder für Klavier mit Text. Herausgegeben und gesetzt.
Stuttgart : Lausch & Zweigle 1958. 320 S. 4°.

Katt, L. : Die klingende Stunde. Lieder und Kanons.
Wolfenbüttel : Möseler Verlag 1959.

Wolters, G. : Das singende Jahr.
Wolfenbüttel : Möseler Verlag 1959. kl. 8°.

Deutsche Volkslieder. Herausgegeben von Goethe-Insti-

tut München.
München : Heuber 1960.

Wolters, G. : Das singende Jahr. Kernliederbuch.
Wolfenbüttel : Möseler Verlag 1960. 76 S. kl. 8°.

Watkinson, G. : Kleines Gastgeschenk. Lieder aus meinem Tagebuch.
Bad Godesberg : Voggenreiter-Verlag 1961. 67 S. kl. 8°.

Rufener, R. : Deutsche Volkslieder.
In : Die Kulturelle Monatszeitschr. 22 (1962) Ht. 10, 71−74.

Knorr, E. R. v. : Deutsche Volkslieder. 168 Volkslieder und volkstümliche Lieder.
Stuttgart : Philipp Reclam 1962. 264 S. quer.

Schilling, K. : Der Turm. 453 Lieder für Jungen. Herausgegeben unter Mitarbeit von H. Köning sowie D. Dorn und H. Schwank.
Bad Godesberg : Voggenreiter-Verlag 1962. 419 S. m. Not. u. Abb. kl. 8°.

Schulten, G. : Der große Kilometerstein. Eine lustige Sammlung.
Wolfenbüttel, Zürich u. Bad Godesberg : Möseler Verlag 1962. 7. Auflage. 296 S. m. Not. u. Abb. kl. 8°.

Erk, L. Ch. u. F. M. Böhme: Deutscher Liederhort. Auswahl der vorzuglicheren deutschen Volkslieder, nach Wort und Weise aus der Vorzeit und Gegenwart gesammelt und erläutert von L. Erk. Nach Erks handschriftlichem Nachlaß und auf Grund eigener Sammlung neubearbeitet und fortgesetzt von F. M. Böhme. 3 Bde.
Hildesheim : Georg Olms ; Wiesbaden : Breitkopf u. Härtel 1963. Reprographischer Nachdruck d. Amg. Leipzig 1893/1894.
Rez. : Hess. Bll. f. Vkde 55, 222ff.

Goertz, H. : Mariechen saß weinend im Garten. 171 Lieder aus der Küche.

München : Ehrenwirth-Verlag 1963. 258 S. m. Not. u. Abb. gr. 8°.
Rez. : Österr zs. f. Vkde 66, 53.

Hara, T. : Auslese deutscher Volkslieder. Zusammengestellt, erläutert und übersetzt von T. Hara, musikalisch versehen von T. Takimoto. Ausgabe Japanisch-Deutsch.
Tokyo : Sansyusya Verlag 1964/1965. 123 S. m. Not. u. Abb. kl. 8°.

Roberts, H. : A treasury of German ballads.
New York : Unger 1964.

Stier, A. : Ilsenburger Liederbuch. Neue Weisen und Chorsätze
Berlin : Evangelische Verlags-Anstalt 1964. 53 S. 8°.

Wolf, H. : Unser fröhlicher Gesell. Ein Liederbuch für alle Tage. 7. erweiterte Auflage.
Wolfenbüttel, Zürich : Möseler : Bad Godesberg : Voggenreiter 1964. 454 S. kl. 8°.

Hartmann, H. : Volks-, Trink-und Wanderlieder. Vollständiges Textbuch. Neuauflage.
Darmstadt : Teich 1965. 51 S. kl. 8°.

Bresgen, C. : Über die Berge weit. Neue und alte Lieder.
Bad Godesberg : Voggenreiter 1965. 51 S. kl. 8°.

Lieder der Heimat. Ein deutsches Liederbuch für unsere Freunde in der Welt. Schwaben International. Zusammengestellt von U. Gerlach.
Stuttgart : Schwabenwerk 1965. 136 S. kl. 8°.

Mattes, W. : Hermann Prey singt deutsche Volkslieder. Für eine mittlere Singstimme und Klavier. Herausgegeben und bearbeitet von W. Mattes nach der Electrola-Langspielplatte „Waltstars singen Lieder ihrer Heimat-Hermann Prey"
Koln, Wien u. London: Bosworth Edition, o. j. 51 S. m. Not. kl. 4°.

Lieder der Volker. Die Musikplatten des Instituts für Lautforschung an der Universität Berlin. Katalog und Einführung herausgegeben von dems. Institut.
Berlin-Schöneberg : Max Hesses Verlag 1936. (Vorwort : J. Bose).
Angez. : Musik Woche 4/50, 19ff.

Reinhard, K. : Das Berliner Phonogrammarchiv.
In : Die Musikforschung 6(1953), 46—49.
Zit. : Bibl. d. Musikschrifttum (1952—1953), 14, Nr. 327.

Hoerburger, F. : Katalog der europäischen Volksmusik im Schallarchiv für Musikforschung Regensburg. Für die Unesco zusammengestellt und herausgegeben durch das Institut für Musikforschung Regensburg. (Zugleich Bd. 1. der „Quellen und Forschungen zur musikalischen Folklore").
Regensburg : Bosse 1953. 189 S. 8°. (Schallarchiv. Serie C. Bd. 3.).
(Enthaltend : Verzeichn. Südtirol. Volksl. Bandaufn. aus d. Sammlung Quellmalz).
Rez. : Die Musikforschung (1954), Ht. 4, 503—504.

Katalog, der Tonbandaufnahmen B 1 bisB 3000 des Phonogrammarchivs der Öserreichischen Akademie der Wissenschaften in Wien.
Wien : Kommissionverlag Hermann Böhlaus Nachf., 1960. VI, 211 S. gr. 8°.
(Österreichische Akademie der Wissenschaften 81. Mitteilung der Phonogrammarchivs-Kommission).

Hedblom, F. : Die Wissenschaftliche Schallaufnahme. Einige Erfahrungen und praktische Gesichtspunkte aus Schweden.
In : Phonetica 6(1961) ht. 4/2, 6—17.

Salmen, W. : Deutsche Volkslieder auf Schallplatten.
In : Die Musikforschung 15 (1962), 270—273.

Wünsch, W. : Über Schallaufnahmen südosteuropäischer Volksepik

in der Zeit von 1900—1930.
In : Bericht über d. Intern. Musikwissenschaftlichen Kongreß : Kassel 1962. (Kassel 1963), 317—318.

Blume, C. : 100 Lieder zur Laute oder Gitarre. Bearbeitung sämtlicher Nummern.
Köln : Verlag von P. J. Tonger, 211 S. m. Mel. quer 8°.

Burkhardt, M. : Lautensang und Klang. 25 lustige Lieder für Wandervögel, Pfadfinder und fröhliche Lautengesellen.
Berlin : Globus. 57 S. m. Mel. quer 8°.

Moll, F. : Volkslieder. Gesammelt und für die Laute gesetzt. Heft 1., 2., 3., 4., 5.
Leipzig : Friedrich Hofmeister.
i. u. 3. je 29S.,
4. 19 S.
u. 5. 23 S.
quer 4.

Rathmann, O. : Spielmanns Lust und Lied. 111 Lieder und Gesänge zur Gitarre oder Laute mit vollständigen Textversen. Rühles Musikalische Taschenaugabe Nr. 28. 96 S. m. Mel. kl. 8°.

Stave, J. : Spelemann, fang an! Ein Lernbüchlein für kleine Blockflötenspieler in Bildern und Noten.
Kassel : Bärenreiter-Verlag

Schmidt-Reinicke, H. : Deutsche Reigen. Für Violine und Klavier. op. 15.
Würzburg : Edition Grosch 1927.
(Ännchen von Tharau-Abschied-drei Röselein).
Angez. : Halbmonatsschr. f. Schulmusikpflege 22, 40.

Dahlke, E. : Das deutsche Lied-für Violine. Zum Gebrauch im Violinunterricht sowie in Schule und Haus. Unsere schönsten und bekanntesten Volkslieder für 2 oder 3 Geigen, oder für eine Singstimme mit Begleitung von 1 oder 2 Geigen, oder (zum Teil) für zwei Singstimmen mit Begleitung von 1 Geige.

Essen : Baedeker 1927.
Angez. : Halbmonatsschr. f. Schulmusikpflege 22, 64.

Kuhl, J. : Posaunenbuch. Ein Volksliederbuch. Teil. 4.
Gütersloh : C. Bertelsmann 1928. 112 S.

Der Pfeiffersgsell. Eine Sammlung von Vortragsmusik für Blockflöte. Mit einer hinzukomponierten zweiten Stimme versehen von H. Scherrer.
Leipzig : Friedrich Hofmeister 1931.
Bespr. : DVl 34, 66.

Ziemann-Molitor, : 200 alte deutsche Volkslieder für die Fünfton-Flöte, für Fünfton-Glockenspiel, für das pentatonische Spiel auf der Geige und zum Singen. Zur vornehmliche Pflege des Musikalischen in der Kindheit bis zum 9. Lebensjahre.
Hamburg : Ziemann-Molitor 1931. VIII, 75 S. 8°. (Liederheft 2).
Angez. : Die Quelle 82, 435.

Schmidt, A. : Meine Blockflötenlieder. Eine Sammlung der besten und meistgesungenen Lieder aller Schulgattungen für die Blockflöte gesetzt und herausgegeben.
Berlin : Trowitzsch 1932. 80 S. 8°., mot einer Grifftab. Heft 2. 47 S. 2Bll.

Muller, E. : Variationensuite im alten Stil über ein Schweizer **Volkslied für Flöte und Klavier.**
Basel : Ernst Vogel 1934.

Bohnet, A. : Weisen zur Mundharmoniha. Die schönsten Volkslieder für Einzelspiel oder zum gemeinsamen Musizieren bearbeitet.
Trossingen : M. Hohner 1936. 151 S. 8Bll. kl. 8°.
Angez. : DVl 40, 167.

Giesbert, F. J. : Deutsche Volkslieder für Blockflöten, und Klavier oder Laute oder 3 Blockflöten, oder beliebige andere Instrumente gesetzt.
Mainz : Schott's Söhne 1936. 2 Hefte.
Angez. : Zs. f. Hausmusik 6, 185 ; Die Musik 272, 869.

Hannenheim, N. v.: Instrumentalbearbeitungen auslandsdeutscher Volkslieder.
In : Die Volksmusik 1, 283—286.

MaaB, G. : Kleine Musiken nach plattdeutschen Volksweisen für Melodieinstrumente : Blockflöten, Violinen.
Wolfenbüttel u. Berlin : Kallmeyer 1936. (Musikblätter der Hitler-Jugend Nr. 14/15).
Angez. : Die Volksmusik 1, 303.

Schlee, M. : Volkslieder für Posaunenchöre in Sätzen von W. Hensel.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1936.
Angez. : Die Volksmusik 1, 143.

Ergmann, W. : Volksliedsätze für Klavier.
In Völkische Musikerziehung 3 (1937), 324—328. (Kritische Wertung an Hand mitgeteilter Beispiele).

Halbig, H. : Neuzeitliche Volksliedbearbeitungen. Zu Paul Hoffers „Hundert Jahrhunderten" „Es entsprungen..." „Der kleihe Rosengarten."
In : Völksische Musikerziehung 3 (1937), 557—562.

Heyden, R. : „Es ist ein Ros entsprungen..." Sonderheft 3 zum Flötenspielbuch von R. Heyden.
Verlag A. Nagel 1937.
Angez. : Bll. d. Singbewegung in Thüringen 4, Nr. 1, 10.

Hoffer, P. : Variationen über Völkslieder. Spielmusik für Klavier.
Lobeda-Spielhefte. 1937.
Angez. : Völkische Musikerziehung 3, 35.

Hoffer, P. : Hundert Spielstücke zu deutschen Volksliedern aus sieben Jahrhunderten. Heft 1—5.
Braunschweig : Henry Litolff's Verlag 1937.
Angez. : Volksmusik (1938), 138 ; Musik in Jugend. u. Volk 1, 181.

Löns, H. u. F. Jode: „Der kleine Rosengarten". Ausgabe für Blockflöte.
Jena : Eugen Diedrichs Verlag 1937.

Angez. : Zs. f. Musik 105, 64.

Lorenz, F. : Mit Flöte und Fiedel. Alte und neue Volkslieder in neuen Sätzen für Blockflöten und andere Melodieinstrumente.
Leipzig : Merseburger & Co. 1937. 36 S. 1/2 Heft, Einstimmige Kinderlieder mit Begleitung.

Maaß, G. : Kleine Musiken nach plattdeutschen Volksweisen.
Wolfenbüttel-Berlin : Kallmeyer 1937.
Angez. : Dt. Musikkultur 1, 316 ; Die Volksschule 33, 316.

Preußner, E. : Instrumentalbearbeitungen von Volksliedern.
In : Die Volksmusik (1937), 367—375.

Rein, W. : Spielmusik nach Volksliedern I, II.
Hamburg : Hanseatische Verlagsanstalt 1937.

Bresgen, C. : Sind wir nicht die Musikanten.
Wolfenbüttel : Kallmeyer 1938. (Volkslieder in mehrstimmigem Instrumentalsatz).
Angez. : Musikpflege 9, 417ff.

Kohler, A. W. : Kinder-und Volkslieder, als Anleitung zum Klavierspiel.
Düsseldorf : Kommissionsverlag Franz Suppan 1938.
Angez. : Signale f. d. mus. Welt 96 (1938), 692.

Lechner, K. : Es taget vor dem Walde und andere alte Weisen für 2 und 3 Blockflöten oder andere Melodieinstrumente.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1938. 15 S. (Bärenreiter-Ausgabe 1256).

Muller, A. : Mit Posaunen! Ein Liederbuch für evangelische Volks-und Hausmusik. Bd. 1. 2.
Dresden : Posaunen-Verlag J. Weihermüller 1938. 1. 4. Auflage. VII, 128 S. ; 1938. 2. 2. Auflage. 170 S.

Moiser, L. : Lustig wohlauf! Lieder und Tänze aus den Alpenländern für die diatonische Handharmonika. Aufgezeichnet und bearbeitet. Holzschnitt und Zeichnungen von E. v. Dombrowski. Heft 1—4.

Graz, Wien u. Leipzig : Leykam 1938. Je 16 S.

Ackermann, E. : Zum Flöten und Singen. Volkslieder und Kinderlieder. Marsch-und Tanzweisen für 2 Blockflöten, bearbeitet.
Zürich u. Leipzig. Gebr. Hug & Co. 1939.

Hensel, W. : Kleine Volksliedsätze für drei Musikanten.
Kassel : Bärenreiter-Verlag 1939. 31 S. kl. 8°.
Aus : Finkensteiner Blätter. (Bärenreiter-Ausgabe 1296).

Starke, H. : Neue Akkordeon-Schule für Einzel-und Gruppenunterricht. Unter besonderer Berücksichtung des Volksliedes. Bd. 2.
München : Pressler 1956. 56 S.

(Received May 18, 1976)

ルッツ・ロェーリヒ*)：民謡概念のテキスト学的考察
（研究資料）

坂　西　八　郎

Japanische Übersetzung
Lutz Röhrich : Die Textgattungen des popularen Liedes

Hachiro Sakanishi

*) フライブルク大学（西ドイツ）民俗学科主任教授・ドイツ民謡文庫所長

「人々はひっきりなしに民謡民謡と口に出しては言うが，その実何を指して民謡と言うのか，必ずしもしっかりと分っているわけではない（ゲーテ）」[1]。

はじめに ―― 状況と前提 ――

自著「民謡の概念の歴史」において，ユーリアン・フォン・プリコウスキーはこう述べている。「民謡研究はますます盛になっているので，この学のなすことはますます明解になり，一致したものになっていく，といった一見もっともな推定は，明らかに謬論なのである」[2]。このような主張は，部分的に正しいだけである。「民謡」*（Volksgesang）という概念の存在は，まもなく200年の歴史をもつことになるが，民謡とはそもそも何か，人々はこれについて昔の方がより多くを知っていた，民謡について鋳造した諸概念はますます論争の種となり，内容不明瞭なものとなっていく，ということはいずれにしろあり得ない。とは言え，「フォルクス・リート」（Volkslied）という言葉は，

次第に細分化しつつある研究にとって，とり扱う歌唱現象を総括する概念としては不適当になってきている。その結果，いっそう「民謡」という用語を止めた方がよいのではなかろうか，ということがくり返し提案されてきた。かなり多くの同僚研究者たちにとって，そもそも「民謡」という専門用語を相かわらず用いるということは，もはやちりの積った昔のできごとなのである。この人たちは，この用語のかわりに，「ポプュラーなうた」(das populare Lied;Popularlied),「グループのうた」(Gruppenlied),「民衆の歌唱」(Volksgesang),「下広庶民のうた」(grundschichtiges Singen),「素人のグループのうた」(laienmäßiger Gruppengesang) など[3] の表現を用いている。歌唱の領域における専門用語は，この現在，そして今日にいたるまで，しかも「プロテスト —— 抵抗のうた」(Protestsong) にいたるまで，創造的に作りだされてきている。「フォークソング」(Folksong) もまた「民謡」よりは現代的であり，青年むきであり，そして国際的なひゞきをもっている。しかし，外国語による歌唱の表現に逃げこんでも，またあやまった観念をいだいたまゝでいることになり，これはなおさら許されない。だいたいドイツ語の「フォルクス・リート」Volkslied という言葉からして，英語の「ポプュラー・ソング」(Popular song) の直訳語なのである！

1）ヴァイマラー・アゥスガーベ 1，41，2。 69 頁。

2）ユーリアン・フォン・プリコウスキー「音楽的著作における民謡概念の歴史。ドイツ精神史断章」。ハイデルベルク 1933 年 514 頁。

3）フリッツ・ボーゼ「民謡 —— シュラーガー —— フォークロア」〈民俗学雑誌 63 (1967 年)〉所収 43 頁以降に多くの研究者の討議記録が掲載されている。さらに，ドーリス・シュトックマン 「アルトマルクの民衆の歌唱」ベルリン 1962 年。ヴォルフガング・ズッパン 「民衆の歌唱」の項〈歴史と現代における音楽 —— 以下MGGと略記す〉所収 13 頁 1923 欄 カッセル 1967 年。ヘァマン・バゥズィンガー「『民衆詩』(Volkspoesie) の詩形態」 ベルリン 1968 年 (= ゲルマニスティクの諸基礎 6） 247 頁。

＊ 以下 日本語の「民謡」という用語は，すべてドイツ語の Volkslied の訳語である。

民謡はあれでもない，これでもない，として論をおしすゝめてゆけば，民謡とは何かについて，多分より容易に規定されるかもしれない。そしてこのやり方は，われわれが若干の定義をしめだしさえすれば――真剣にやってはみたがやはり満足のゆかない，といった種類の若干の定義をしめだしさえすれば，もっとも分別のあるやり方に思われる。これらまた，民謡は「縛られない歌唱だ」といった単純な諸定義にあてはまるのみならず，ほとんどすべての他の定義の試み，例えばオットー・ボェッケルの定義にもあてはまる。ボェッケルはこう言っている。「民謡は，自然（未開）諸民族のもろもろの感情から直接生じた歌唱である」，と。同じく「国民の全歌謡財」という意味の「民謡」定義も，歌唱の正確な形態および状況の分析には適さない仮構であることは明瞭である[4]。人々は「民謡」の概念を，素人のうたう，職業的歌手のうたうものではない，つまり人工的なものではないという意味をこめて規定しようと試みた。「民謡とは，素人の間に，すなわち職業としてやってゆけるようには教育されなかった歌手の間に広まっていて，そしてその歌手たちによってうたわれるすべてのうたを指す」[5]。しかしこれもまた部分的にだけ満足し得る定義にすぎない。民謡はまたそもそも，すべての人が知っているとか，誰でもが好み聴きうたううたであることを必ずしも要しない。民謡は「すべての人の口」にうたわれることを決して必要としない。民謡はさらに，「民衆のために作詞され，あるいは作曲され」たうただと単純に言うこともできない[6]。すべての否定的なこれらの定義は，結局民謡概念を全く拒否することにおいて頂点に達する。例えば，エァンスト・クルーゼンはこう書いている。「要するに民謡というものは，民衆のなかに発生しはしなかった。それは必ずしも古い必要はないし，必ずしも美しい必要はない」[7]，そして「わたしはざっくばらんにこう主張したい，われわれがヘルダー以来その概念を用いてきた意味における民謡というものは，全然存在しないのだ」[8]，と。

4）エァンスト・クルーゼン　「研究対象としてのグループのうた」〈民謡研究年報 12（1967年）〉所収　40頁。

5）ジャン・M・ラーメロウ　「新聞雑誌的媒体としての民謡と歴史的典拠」〈民謡研究年報　14（1969年）〉所収　14頁。

かつてヘルダーは民謡をこう定義している。それは，有名無名の作者によるうたであって，歌唱可能であるもの。とくに，教育に害されない人間によって実際にうたわれるようなうた。その際，このうたは，うたのもつ自然な，情熱的で生々と躍動する内容と，そして簡単で，部分的には不完全な外的形式において，こうした人々の性格を正確に反映するのである。―― パウル・レーヴィ「民謡概念史」ベルリン 1911年（＝アクタ・ゲルマニカⅦ）317頁。

6）「民謡」という用語が広まってほどない頃，1806年にゲーテはイェーナ文学新聞で行った「少年の魔法の角笛」書評において，この概念の仮構的性格について，このような言葉をもって述べている。「この種の詩は，本来民衆によってもまた民衆のためにも作詩されたものではないのにもかゝわらず，われわれは何年来これを民謡とよぶことにしているのだ」。―― エァンスト・クルーゼン　上掲書　36頁を参照されよ。

7）エァンスト・クルーゼン　「民謡。発堀と仮構」。ケルン　1969年　144頁。

民謡研究分野の学者たちのみならず，広範な人々，とくに現代の青年たちは，民謡概念につきまとう不快感を感じている。あらゆるセンチメンタルな情感のこめられたもの，祖父たちのやった男性合唱 ―― またはそのレパートリのもつロマンティク，あるいはまた学校唱歌の強制などに対する反対の傾向がこゝにひそんでいるのだが，これはよく分る。あるラジオのアンケートにこたえて12才の一少女は，「民謡をわたしは好まない。なぜならわたしたちはこのうたを学校でうたうのだから」[9]，と書いている。また学校とか青年グループでなされた他の調査データもこうした発言を支持している。すなわち，「民謡は小さな子供かまたは年輩の人たちむけのものである」――「現代の生活には民謡は合わない。民謡のなかには現実に存在しないことが語られている」――「民謡はいつもこうメソメソしている」――「民謡は子供用雑貨品だ…」――[10]。人々はなるほど，「フォークロア」なら何よりどっさり好む。だがしかし，このことは「少し違うこと」なのである。民謡嫌いと「怖じてうたわない」ことの説明もなされている。「それは心理学的および社会学

的に理由づけられうる。個々人の独立性，心情の差異が大きくなればなるほど，グループでうたうことによって心情的な高揚をはかるといったことに対して抑制が働らくようになる」[11]。

9）ヒンリヒ・ズィウツ　「ドイツの民謡の歌唱における民謡と流行歌（Modelied）の関係」〈民謡研究年報　12（1967年）所収　1頁。
10）ヴァルター・ヴィオラ　「民謡の衰退とその第二の存在」〈音楽時事問題　Ⅶ。今日の民謡〉所収　カッセルおよびバーゼル　1959年　23頁。
11）エァンスト・クルーゼン　「民謡」　上掲書　207頁。

民謡概念にくわえられる批判，疑惑や今日の状況における絶望にもかゝわらず，フォークロア研究者や音楽民族学者は，もちろんのこと自分の研究対象を依然として「民謡」となづけることを止めてしまおうとはしない。その例としては，たゞヴェアナー・ダンケァト，ヴォルフガング・ズッパンの概説，あるいはエァンスト・クルーゼンの論述――この書はまさにその題目に対し根本的に対立する書である――これを挙げればよい。つまり，進歩的な諸論文といえども民謡概念をディスカッションからしめだしてしまうことはなかった。フライブルク ブライスガウの官立のドイツ民謡文庫は，依然として伝統的な「ドイツ民謡文庫」という名称をもっているし，その他伝統的なものをすべて受け継いでいるのである。移植後，間もなく200年以上におよぶ同化をつゞけ，他に置き換えの言葉がないこの民謡という用語の概念を抹殺してしまうことは全く不可能だからである。いづれにせよ専門用語として絶対的に妥当通用し，異論のない，あるいは一般的な日常語の世界でちゃんと存在の権利を主張しているといった言葉は，これ以上にはないのである。こうして本書「便覧」も「民謡の」という題名を付して刊行されることになった。とはいえ本書の刊行者も寄稿者も，ヘルダーの民謡概念を以て着飾ることはできないということ，ヘルダーの意味する民謡については，もはや論じ得られる状況では全くないということ，「民謡」という単語は，もはや研究対象を示す論題とはなり得ない，ということなどでは一致了解している。研究

対象は，極めてさまざま異なる観点，文芸学的・美学的，音楽民族学的，歴史学的，社会学的，心理学的により詳しく細分し，多角的に照射することができる。伝統的な民謡概念を擁護しようと思わなくても，従来「民謡」という用語が指し示してきたものを学問的に究明しようとすることはできるのである。人々がこの学問上の部門を「民謡研究」となづけようと，あるいはなづけまいと，それは問題ではない。というのも，研究の名目は決定的なことではなく，決定的なことは内容，すなわち諸設問と諸方法なのである。以上の次第であるから，民謡研究とは，非常にさまざまな学問的傾向を包みこむディスカッションの場として了解されなければならない。

12) ヴェアナー・ダンケァト 「西洋の民謡研究」 ベルンおよびミュンヘン 1966年（ダルプ双書 98)。
13) ヴォルフガング・ズッパン 「民謡。その蒐集と研究」。シュトゥットガルト 1966年（メツラー双書 52)。
14) エァンスト・クルーゼン 「民謡。発堀と仮構」。ケルン 1969年。

今日まで，民謡研究は一般に妥当する民謡の概念を作りださなかった，あるいはまたそもそも「フォルクスバラーデ」(Volksballade) —— 民衆の物語詩，中世の舞踏歌 —— とは何か，これを正確に定義することもせずに，いわゆる「ドイツ民謡集」(Deutsches Volksliedwerk 現在までバラーデの部のみ5巻)の刊行をはじめたと言って人々は民謡研究を批難したのであった。だが，「民謡」(同じく，「フォルクスバラーデ」) というのは，専門語，つまり学者の使う言葉である。この言葉は，「自然に生じた」ものでもなく，「自生した」ものでもない。すなわち本来民衆の言葉による概念なのでは決してなく，ある一定の精神史的情況から生じたヘルダーによる造語であって，文学研究上の学術用語 (terminus technicus) である。われわれは，物語研究においても類似した諸事例をみとめる。学者ではない普通の人々の世界に属する「語り」(Erzähler) は，通常「民話」(Sage) という言葉を口にしない。この種の報告は，かれらにとっては「体験」であり，「実話」等々なのである。また，民

謡の歌唱者についても類似の関係がある。今日のフォークロア研究者が信頼しうる歌唱をそこから記録するところの，うたの保存者ほとんどすべてが，「民謡」とか，「何々のバラーデ」という言葉を口にしない――この概念をかれらはせいぜい教育による経験や，学校や歌唱協会によって知っているだけである。――必要とあれば「古い」とか「古風なうた」，「料理屋のうた」(Wirtschaftslied)，「盗賊のうた」(Räuberlied)，「兵士のうた」(Soldatenlied) などとは口にする。あるいは個々のうたのジャンルを方言によって表現することはできる。例えばバイエルン方言の「愉快なうた」(Gaudilied)，「クスタンツル」*) (Gstanzl)，またシュヴァーベンの「ラッペディツレ」**) (Rappeditzle) など[15]。さて，以上の考えから導きだされるのであるが，「民謡」は，歴史的に相対的な概念である。この概念は，すでに何百年も前から，「もろもろの民謡」がうたわれていた時代にすら，かつて存在したことがない，こういうしろものである。そして中世においても，またそれにひきつづく何百年の間にも，誰一人この用語を口にするということがなかった。全くなかった。民謡の歴史において，この概念自体は非常におそく現われてきた――それはやっとヘルダー (Johann Gottfried von Herder 1744－1803)が仮構 (Erfindung) したものである。とはいえ民謡情況は，それを説明するために鋳造された概念が通用するにいたる何百年も以前から，それとしてずっと存在してきている[16]。そしてこの情況に即したうたの名称も，もちろん決して規範となって一般的に妥当するというものではないにせよ，やはり存在した。「いずれにせよ，民衆の歌唱と芸術的声楽曲の対立は，すでに中世において広まり，ぎこちない関係となっていた」[17]。こうしたなかに，「普通の人々の声楽曲」(musica vocalis usalis)，「野卑なうた」(cantus vulgi) という言葉が，「上流の人々の音楽」(musica artificialis) とか「きちんとしたうた」(musica regulata) という，主流的概念に対立する概念としてたち現われる。中世の著述家たちは，「野卑なうた」(vulgares cantilenae) という諸表現を用いている。さかのぼればすでに古代人は，「野卑な歌詞のうた」(cantica poetarum vulgarium)，「田舎のうた」(rustica carmina)，「田舎の古いうた」

(rusticum vetus canticum) といった言葉を知っている。ところが「民謡」(carmes populare) という言葉は一度も現われないのである！ 15世紀以来ドイツ語の「農民のうた」(Purengesangk) とか「村のうた」(dorpsanc) という諸概念もまた現われてきた。ミカエル・プラエトーリウスは，1916年に，ヴィラネラ (Villanella) ―― 19行2韻詩 ――を，「農民や下層の手職人たちがうたう農民のうた」(Bawrliedlein) [49]となづけた。初期の歌集に散見される民衆の用語による名称としては，「草(場の)うた」(Graßliedlein)，「巷の流行のうた」(Gassenhawrlein)，「騎士のうた」(Reutterlied)，「鉱山夫のうた」(Bergkreyen)，「すてきな新しいうた」(hüpsch new Lied)，「徒弟職人のうた」(Gesellenlied)，「街道のうた」(Strassenlied)，その他がある[20]。実際民謡概念にはさまざまなとらえ方がある ―― これはプリコウスキーの書の副題が語るとおり[21]――，「ドイツ精神史の一断片」をそれぞれに示しているのである。上に掲げた表現は，全体として，民衆の歌唱の歴史的・相対的な，またたゞ単に部分的な現象の諸名称にすぎないのである。にもかゝわらず，「民謡」という用語がたゞ補助概念にすぎないのに較べれば，それぞれに含蓄をもった表現である。それらのうたの内容は，この民謡という概念をもって内実を適切に，かつ包括的に示すのには，あまりにも重層的である。

*), **) 内容を示す日本語表記は不可能である。

15) エアンスト・クルーゼン 「グループのうた」＝4) 38頁。
16) パウル・レーヴィ 「民謡概念史」＝5) 3頁。
17 ヴァルター・ヴィオラ 「歴史的考察による『民謡』の一般的諸テーゼの基礎づけによせて」〈民謡研究年報 14 (1969年)〉所収 6頁。
18) ヴァルター・ヴィオラ 「基礎づけによせて」＝17) 6頁以降。
19 同上 7頁。
20) パウル・レーヴィ 「民謡概念史」＝5) 4頁。
21) ユーリアン・フォン・プリコウスキー 「民謡概念の歴史」＝2)。

こうしたやゝこしさは，口頭伝承のあらゆるジャンル，「昔話」，「民話」ま

たは「笑話」の定義などには少なからずつきまとう。散文の民衆芸術を定義する場合も，今日では，あのグリムのジャンル分けよりはより詳しく個別分けをしなければならないのであるから[22]，これは民謡研究ではなおさらのことである。「民謡」総体は，子細に検討してみると，実際には異なるジャンル，さらにより詳しく分類し得るジャンルを束にした，うたの全体をなづける総称概念であることが判明する。したがってうたの諸概念，諸名称が少ないというよりはむしろ多すぎるという状況である。そしてまさにこのことが，概念の紛糾全体の原因になっていると思われる。レーヴィおよびフォン・プリコウスキーは，ひっくるめて100を越える定義を数えあげたし，ローリツ・ボェトカーによって出版された民衆文学の学術用語辞典は，ドイツ語の見出し語「民謡」の項目に，アルファベット順に「わかれのうた」(Abschiedslied) から「同業者のうた」(Zunftlied) まで並べ，100を越える同義（類）語や部分概念を提示している――こゝではそれに相当する外国語の見出しというものは考えられていない。こうした用語の堆積に整理を与え，造語の楽しみに制限を加えることもせざるを得ないであろう。いづれにせよ，いろいろな概念，名称を考えることにつきまとう不確かさを減らしたい，というのがわたしの頭にあることである。不統一な学術用語は，実に民謡研究の根本悪であって，これは従来の民俗学全体にもみられることなのである。多くの概念が全く学的反省もされずに用いられてきた。民謡のもろもろのジャンルが，そもそも一つの体系の部分々々となっているのかどうか，これは問題である。

22）ルッツ・ロェーリヒ　「民話」　シュトゥットガルト　1966年（メッラー双書55）　1頁以降。

23）ヨーロッパ地域　国際民族・民俗学辞典　第II巻。民俗文献（ゲルマン系），執筆ローリツ・ボェトカー。コペンハーゲン　1965年。とくに180頁以降および316頁以降。

＊）以下にロェーリヒは，注22）に挙げた書「民話」のはじめの章，「定義と用語」に展開した整理の方法を民謡に適用していく。

諸概念の雑多を整理しようと試みると[24]，さまざま異なる標識がはっきりとしてくる。とくに用語を内容，伝播，出所と時代，機能，構造，形式と様式にふりわけることが要請される。これにとゞまらず，民衆の――ないし日常会話の言葉，あるいは方言による民謡概念が，学問用語による洗練された諸概念と並列して存在する[25]。ドイツ語領域にだけ属する専門用語と国際的用語，歴史的に用いられる用語と一時的な用語，テキストに関連する用語と音楽学的用語，といった並列もありうる。うたの部門別分類にとって決定的に重要なのはその伝承形式である。それがビラ刷りうたか，あるいは信頼しうる記載であるか否かということ，またそれは手稿民謡集によるのか，印刷された民謡集によるのか，ということである。アルファベット順配列はもちろんもっとも容易ではあるが，これはまたもっとも無意味である。テキストに関連する初行索引は，うたのはじめが非常に変化し易いか，あるいは同型化や定型化の傾向――例えば，「何と朝はゆく…」(Wie früh ist auf…)，あるいは「たかい山の上に立ち…」(Ich stand auf hohem Berge…)，――こうした傾向を示すので問題がある。

24) 1968年にプラハから出されたある雑誌において，専門用語に関する似たような区別の試みをウラジーミル・カルブスィキーは行ったことがある。

25) 例えば，「兒童の」(Child-) または「非兒童のバラード」(Non-Child-Ballads)。

諸概念の整理*)

1 内容に関連する用語

とくにテキスト学的な概念形成は，題材と内容から出発する。これに属するのは「世俗」(1)および「宗教歌」(2)（「聖歌」(2)′），「愛のうた」(3)，「故郷のうた」(4)，「物語うた」(5)，「歴史的事件のうた」(6)などである。それぞれの

グループは，より詳しく内容に関連した題材群に分けることができる。すなわち「物語うた」という概念は，物語内容がまたもや一定の物語の範疇にしたがって分けられうることを可能とする。すなわち，「民話のバラーデ」[7]，「童話のバラーデ」[8]，「笑話のバラーデ」[9]，「聖人伝話のうた」[10]，「なぞうた」[11]など。これらのジャンルの内部では，さらに小さな構成要素 narrative units ―― 物語の構成諸単位 ―― にしたがって分類される。さまざまな葛藤をつくりだしている諸情況，劇的な諸情景 dramatic elements ―― 劇的諸要素，劇的光景や主題などによって分類される ―― ちょうどこの分類上の諸問題は，バラーデ研究者の間で激論がかわされているのではある[26]。「歴史的事件のうた」は，歴史的事象やそこに登場する英雄ないしその敵によって分類される（例えば，「トルコ人のうた」[12]，「オイゲン公のうた」[13]，「マールボロウのうた」[14]，「シンダーハネスのうた」[15]など）。「宗教歌」は，一定の宗教上の人物をうたったうた（「マリアのうた」[16]，「聖人のうた」[17]）か，あるいは内容として一般的な宗教上の選択テーマ（例えば「祈願のうた」[18]，「感謝のうた」[19]，「賛えうた」[20]，「神による慰のうた」[21]）をもっている。同じく「愛のうた」も内容から決定されることが少なくない。愛のうたは，幸運な，または不幸な愛をうたう。忠実さや裏切り，愛人たちの一定の仕草や，雰囲気（例えば「わかれのうた」[22]）をうたう。

26）フライブルク ブライスガウ，ブルノー，ウトゥシュタインなどで開催された学会記録を参照されたい。民謡の分類，タイプによる体系化，および保管，とくに物語うたに関して。これらのことは本格的に促進され，なおかつ国際的規模の恒常的な論争がもたれることがのぞまれる。アーチャー・テイラー「民謡の一覧表と分類」〈民謡研究年報　13（1968年）〉　1～25頁も参照されたい。

＊）以下ロェーリヒは，1―7節に区分して用語の整理を展開しているが，本稿ではこゝに提示された用語を暫定的な日本語表記として示す。（1），（2）等の記号を付し，原語は各節1，2等のうしろにまとめて記載することにする。若干の重複は存在する。

(1) weltliches Lied; (2) geistliches Lied; (2)′ Choral; (3) Liebeslied; (4) Heimatlied; (5) erzählendes Lied; (6) historisches Ereignislied; (7) Sagenballade; (8) Märchenballade; (9) Schwankballade; (10) Legendenlied; (11) Rätsellied; (12) Türkenlieder; (13) Prinz-Eugen-Lieder; (14) Marlborough-Lieder; (15) Schinderhannes-Lieder; (16) Marienlied; (17) Heiligenlied; (18) Bittlied; (19) Danklied; (20) Loblied; (21) Trostlied; (22) Abschiedslied.

2 形式からみた用語[27)]

うたの詩節構成，構造と形式に関する報告は，例えば以下の諸概念をつくる。「一詩節のうた」[(1)]，「詩行のみによるうた」[(2)]，「二行詩」[(3)]，「三行詩」[(4)]，「四行詩」[(5)]，「八行詩」[(6)]，「詩節を連作するうた」[(7)]など[28)]。また「詩節の連鎖するうた」――前詩節最終詩行を次の詩節の最初の詩行にくりかえす――，「詩節が次第に膨脹するうた」[(9)]，「数えうた」[(10)]，「詩節付加のうた」[(11)]，「アルファベットのうた」[(12)]，「問答のうた」[(13)]，「畳句うた」[(14)]，「畳句をもつバラーデ」[(15)]，「カライドスコープ――万華鏡の」[(16)]，または「モザイクうた」[(17)]（すなわち個々の構成要素の交換や置換が可能）など。うたの音楽的形式を指標としては，「労働の拍子のうた」[(18)]，「高音のうた」[(19)]，「混成曲」[(20)]などがある。内容に関連したうたの名称にくらべ，形式からする名称は少なく，個々のうたの性格づけにくらべ，歌群やジャンルの分類にはあまり役に立たない。

27) 民謡の形式的標識の一覧をハインリヒ・ゼーマンは作成した。「民謡と著作権」博士論文 フライブルク ブライスガウ 1965年 86頁以降。

28) 詩節を際限なく付加してゆくうた，例えば，「司祭は牛を飼っていた」は，600詩節以上のものが流布している。

(1) Einstropher; (2) Zeilenlied; (3) Zweizeiler; (4) Dreizeiler; (5) Vierzeiler; (6) Achtzeiler; (7) Gerüststrophenlied; (8) Kettenlied; (9)

Schwellied; (10) Aufzähllied; (11) Additionslied; (12) Alphabetlied; (13) Dialoglied; (14) Kehrreimlied; (15) Refreinballade; (16) Kaleidskop-; (17) Mosaiklied; (18) Arbeitstaktlid; (19) Tenorlied; (20) Quodlibet.

3　歌唱者（一群）による分類

名称分類の第三のグループは，うたの保有者や歌唱者によってそれぞれの歌群を分けていくことである。まづその第一は，(a)　性別と年令別による区分，たとえば「童歌」[1]，「青年グループのうた」[2]，「学生歌」[3]，「男性のうた」[4]，「婦人のうた」[5]，「少女のうた」[6]，「婦人の詩節」[7]，「修道女の訴えのうた」[8]など。すなわち，女性がわの言明としてうたわれるうたや，また詩節であっても，もちろん男性によってうたわれることはあり，その逆もある。ミネザングでは，婦人の詩節はたしか男性の言いたいことを婦人にうたわせた詩節であった。春歌[9]，兵士-[10]および同業者のうた[11]は，主として「男性のうた」であるが，もいろん婦人によってもうたわれるのである。(b) 社会のグループ別による区分。「水夫のうた」[12]，「傭兵のうた」[13]，「外国に移民する人のうた」[14]，「兵士のうた」[15]，「学生歌」[16]，「鉱山夫のうた」[17]，「労働者のうた」[18]など。この職能身分的なうたのグループに属すのは，とくに「同業者の」および「職人のうた」[19]（例えば，「織工のうた」[20]，「仕立屋のうた」[21]，「紛屋のうた」[22]など）や，修業で各地をまわる職人の徒弟のうたである。その場合に，社会「グループ」には名種あり，例えば――社会学的な表現をすれば――「フェイス・トゥ・フェイスのグループ」，すなわし直接おたがいに個人的接觸をもっている小さな原始的なグループもあれば，第一義的なグループ，例えば「兵士」なども存在する[29]。(c)　歌手の種類と数による区分。「独唱のうた」[23]，「単声のうた」[24]，「多声のうた」[25]など。誰がうたうのか，如何なる人物またはグループの要求がそのうたによって充されるのか，これに従って，うたはまた「単唱歌」[26]と「複唱歌」[27]と

に分けられる。単――わたし，複――わたしたち，という人称代名詞は，うたのはじめにもっともしげく用いられてもいる。若干の芸術家は著名なソリストとして，今日有名な民謡をうたっている。エスター・オファレム，ハインチェ，エアンスト・ネーガーなどの名前は，多くのかつ非常にさまざまな傾向をもつ人々の好みによって受け入られているようである。(こういった歌手の活動は大抵は短命であり，一時的でかつ時流に規制され，それぞれにマネージメントに左右されるのである)。(d) さて，この分類にはなおさまざまな一般的概念も入ってくる。というのも，あるうたをうたうグループや，あるうたをたゞ知っているというグループの存在を標識として，それぞれのうたを決定してゆく分類方法というのもあるからである。すなわち，「グループのうた」[28]，「共同体のうた」[29]，「社交歌」[30]，「協会のうた」[31]，「集団（大きな開いた集団）でうたううた」[32]など。そもそも「民謡」という表現自体も，グループをなしたうたの保存者，担い手に依拠して作りだした術語といえる。とはいえ，「だれにも好まれるうた」というような，すなわち実際上全「民衆」にうたわれる，あるいは非常に好んでうたわれるといった，しかもすべての世代と社会層を横断してうたわれるというような民謡というものはない。エアンスト・クルーゼンは，この状況をこう描きだしている。「『ラインの守り』(Die Wacht am Rhein) をうたう人は，『インターナショナルのうた』(Internationale) をうたわない。誰が子守うたをうたうのだろうか？ 『あゝエルスライン，可愛いエルスライン』(Ach Elslein, liebes Elslein) のうたが好きでたまらない人は，『ミュンヘンにあるホーフブロイハウス』(In Munchen steht ein Hofbrauhaus) のうたをうたいたがらない。こちらで『神はわが堅き城』(Ein' feste Burg ist unser Gott) が響きわたれば，あちらには『洗礼の約束のうた』(Fest soll mein Taufbund immer stehen) が鳴りわたる」[30]。

29) ウィルヘルム・ベルンスドルフ 「社会学辞典」 第二版 シュトゥットガルト 1967年 「グループ」の項（397頁）を参照されたい。

30) エアンスト・クルーゼン　「グループのうた」(＝4))　36頁。

(1) Kinderlied; (2) Jugendgruppenlied; (3) Burschenlied; (4) Männerlied; (5) Frauenlied; (6) Mädchenlied; (7) Frauenstrophe(n); (8) Nonnenklage(n); (9) Erotische Lieder; (10) Soldaten-; (11) Zunftlieder; (12) Seemannslied; (13) Landsknechtslied; (14) Auswandererlied; (15) ＝ (10) (16) Studentenlied; (17) Bergmannslied; (18) Arbeiterlied; (19) Handwerkerslied; (20) Weberlied; (21) Schneiderlied; (22) Müllerlied; (23) Sololied; (24) einstimmiges Lied; (25) mehrstimmiges Lied; (26) Ich-Lied; (27) Wir-Lied; (28) Gruppenlied; (29) Gemeinschaftslied; (30) Gesellschaftslied; (31) Vereinslied; (32) Massenlied.

4　動機による用語

概念の第四のグループは，歌唱の諸動機――すなわち，どのような機会にうたわれるのか，ということを問題とする。もっとも頻度の高いのは，一年または一日の経過における，歌唱の機会または時刻による区分（「朝のうた」[1]，「夕のうた」[2]，「糸繰り部屋のうた」[3]など）である。「しきたりのうた」[4][5]は，もっとも豊富である（例えば，「三博士のうた」[6]，「待降（旧教）または降臨（新教）節のうた」[7]，「聖体節のうた」[8]，「新年のうた」[9]，「復活祭のうた」[10]，「キリスト受難のうた」[11]，「クリスマスのうた」[12]など）。これと並んで人生の過程で生ずるしきたりも挙げられる（例えば，「誕生のうた」[13]，「結婚のうた」[14]，また葬式や通夜でうたわれる「弔（葬送）歌」[15]や「哭歌」[16]など）。さらに「巡礼のうた」[17]とか「旅のうた」[18]などの概念は，別の歌唱動機を暗示している。動機によってうたの名称をつけるやり方は，近代技術文化以前の時代に好んでうたわれた，労働過程をうたううたにも適応された。それは「労働歌」[19]（または「労働に即したうた」[20]であって，これには例えば，「杭打うた」[21][22]，「ぶどう絞りのうた」[23]，「乳しぼりのうた」[24]，「バター造りのうた」[25]，「ホップ摘みのうた」[26]，「草

とりのうた」[27],「レース編みのうた」[28],「編みもののうた」[29]などがある。

(1) Morgenlied; (2) Abendlied; (3) Spinstubenlied; (4) Brauchtumslieder; (5) Brauchlieder; (6) Dreikönigslied; (7) Adventslied; (8) Fronleichnahmslied; (9) Neujahreslied; (10) Osterlied; (11) Passionslied; (12) Weihnachtslied; (113) Geburtstagslied; (14) Hochzeitslied; (15) Totenlied; (16) Totenklage; (17) Wallfahrtslied; (18) Wanderlied; (19) Arbeitslieder; (20) Arbeitsleitende Lieder; (21) Rammerlied; (22) Pilotenschlagerlied; (23) Kelterlied; (24) Melklied; (25) Butterlied; (26) Hopfenpflückenlied; (27) Jätelied; (28) Klöppellied; (29) Stricklied.

5 歌唱の場所と時

この分類であつかわれるのは,「教会のうた」[1],「合唱団のうた」[2],「学校唱歌」[3],「アルプスの牧場のうた」[4],「大道歌」[5]などのみならず,「宮庭のうた」[6]とか「市のうた」[7], また「大道のバラーデ」[8]や「巷のうた」[9]など一連の比較的古い用語もあつかわれる。

例えば「シユヴァーベンの」[10]とか「バイエルンの」[11], あるいは「フランケンの」[12]とか —— 方言指示を無視すれば —— こうした地域的諸規定は決して本当のジャンル分けにはならない。なぜならば, うたは通常は地域を越えてうたわれ, シュタムの領域によって区分されえないし, しばしば言語領域さえ越えてゆくからである。とはいえもちろん, 民族グループに結合したうたや, きわめて風土に密着した区分もありうる。「マリヤの—」[13] および「聖人伝説のうた」[14]は, カトリック地域に限定される。密猟(—— したがって禁猟) の[15], および「ヨーデルのうた」[18]は, もっぱらアルプス地方に限定される。シュナーダヒュップフル[19]の詩は, 昔のバイエルン人の居住地帯に行きわたっていた。(だがこれも,「地平圏の拡大」,「フォークロリスムス」とか「国内の異国情緒」などが, 上記のようなうたを遍ねく提供するにいた

る以前のことである！)。言語島と他の後進地帯は，非常に古い歌謡財を保存している[31]。また，うたの豊富な地域もあれば，うたの少ない地域もある。あるうたや，一定のうたの群が少ないと言われる事も，しばしば先入見(「フリースラント人は堅物でうたわない」(Frisia non cantat) や，不充分な蒐集活動に帰せられるのである。

31) エーリヒ・ゼーマンおよびヴァルター・ヴィオラ　「民謡」〈ドイッチェ・フィロロギー・イム・アウフリス〉所収　第二巻　ベルリン　1954　10頁以降。

(1) Kirchenlied; (2) Gesangvereinslied; (3) Schullied; (4) Almlied; (5) Bänkellied; (6) hofelied; (7) Marktlied; (8) Straßenballade; (9) Gassenhauer; (10) schwäbliches; (11) bayrisches; (12) fränkisches; (13) Marien-; (14) Legendenlieder; (15) Wilderschützen-; (16) Almlieder; (17) Jodeln; (18) Jodellieder; (19) Schnaderhüpfel.

6　機能論的用語

動機と緊密に結びついているのは，いろいろなうたの機能であって，これが民謡の特殊な名称をみちびきだしたのである。うたの機能やうたを用いる目的が，例えば「旅の」[1]，「行進の」[2]，「舞踏の」[3]，「腕を組んでうたう」[4]，「酒の」[5]，「眠りのうた」[6]などを作りだした。「お願いのうた」[7]は，そのうたに生活必需品や他の贈り物について願いごとが言い現わされているうたである。「賛えうた」は，特定の人物を賞賛する。なおまた故郷とか自分の職業とかを賞賛するものもある。またうたにされたものすべて，すべてのうたは，多かれ少なかれ純粋に人を楽しませる機能を果す。根本においては，すべての民謡はある一定の機能を果す――それが人を楽しませるものであれ，人をとがめるものであれ，また教訓的・道徳的なもの，戦斗えと励ますもの，攻撃的なもの，緊張をほぐすもの，眠るように人を和げるもの（子守うたの

ごとく)，労働過程にリズムを与えるもの，晴やかな気分にするもの，笑をさそうもの，色情をおこさせるもの，自己顯示の機能など，其の他いろいろである[32]。うたの「普遍的な存在性」というものがある。というのも，民謡はそもそも何かに適用された歌唱だからである。民謡はもっとも広義な機能をもっている。ある民謡が慣習，祝祭，生活上の習慣，労働に属すかによって，大抵はその機能が決定される。無数のしきたりのうたが「賛えうた」である[33]。少なからざる数の物語うたが事件の報知や「あたらしい新聞」の機能を果してい，それらは「新聞歌」(8)となっている。歴史的事件のうたと英雄のうた，なおまた職人のうたの一部分も，その機能からして，しばしば「賛えうた」や「ねぎらいのうた」(9)，あるいはその反対の「あざけりのうた」(10)である。職能身分のうたは少なからず「社会的批判のうた」(11)であって，機能的にジャンル分けすれば，「政治・社会問題にかゝわる」(12)，「かけひきにあやつられた」(13)，「社会的批判のうた」(14)，「農民の訴え」(15)，「民主的性格の民謡」(16)，「抵抗のうた」(17)(18)などとなる。

きわめて明らかなごとく，あるうたやうたの一グループの機能が存在するのみならず，いろいろな種類の機能や，諸機能の一体系というものも存在する。心理的・気質的，心情的，道徳的，社会的，民俗慣習的および物質的な機能などである。これらの諸機能は，演唱・歌唱の動作と密着している。すなわち，ある描寫法の果す機能は，その一回ごとの歌唱の間にそれぞれ一つのヴァリアンテを提示するのであって，あるうたの一タイプそのものを示すということではない。しかしいずれにせよ，うたの機能性については，将来より深く研究しなければならないであろう。とくにいわゆる「指導された歌唱」，たとえば，学校，教会の集まりおよび歌唱協会などの場合について。上に詳述した諸例によって明らかなことは，機能を示している用語は，内容に関連するジャンルの名称を横断していることである。そしてこのような横断はいたる所になされている。ゆえに，こうした用語分類の試みは，みかけ上明瞭な境界をつくるだけであるし，問題性もこゝにひそむ。それぞれの分類が規定する性質と異なる名称と共鳴してしまうからである。「傭兵のうた」，

これは15ないし16世紀の兵士たちにうたわれたうたであるが，さまざま異なる内容に関連する。それは例えば，「酒のうた」または「戦争のうた」[19]，「歴史的事件のうた」あるいはまた「愛のうた」でありうる。あるいは，この職能身分が特殊な社会的諸問題とかゝわりをもてば，「職業身分のうた」[20]，「同業者のうた」でありうる。またこのうたは，あざけりのうたのグループに入り，あるいはエロティックな民謡財に属しうる。またこのうたは「社会批判のうた」，あるいはまた「わかれのうた」でありうる，もしこれが旅から旅えと修業する徒弟奉公の青年の口にうたわれるならば。非常に多くの職人のうたから結局「旅のうた」ができた。一つの職人のうたにおいて，職能身分，仕事内容，あるいは労働用具を入れ換えれば，かなり多くの職業をうたうことに役立つ。ゆえに，うたの「第一次的—」(Primär-) および「第二次的機能」(Sekundärfunktion) の区別がなされたのは正しいのである[34]。同じように，1914年に生じた兵士のうた，「フランスで多くの人がたおれた」(In Frankreich sind viele gefallen) は，革命的な労

ロイナで多くの人がたおれた
ロイナで多くの労働者の血が流れた
(Bei Leuna sind viele gefallen
Bei Leuna floß Arbeiterblut…)

働者のうた[21]えと機能転換をとげた。第一次大戦のセンチメンタルな兵士のうたは，いまや1918年以降の労働者の間には，「革命のうた」[22]として現われる。諸機能が相互に入りまじっているだけでなく，ジャンル自体が入りまじっている。そしてとくに，かなり多くの用語が，充分には精密なものでないことが判明している。「結婚のうた」は，結婚のしきたりのさまざまな区節にうたわれる。したがって，このうたは，「花嫁が親もとをはなれてゆくうた」[23]，「花嫁の花冠のうた」[24]，「冠りもの（しばしばヴェール）のうた」[25]，「結婚式前夜の無礼講のうた」[26]。「あざけり（からかい）のうた」，「嫁入り

道中の道ふさぎのうた」[27],「宗教歌」[28],「結婚生活のうた」[29],または「結婚式をなげくうた」[30]などでありうるし,また「三博士のうた」,「カーニバルのうた」[31],「五月のうた」[32],「新年のうた」[33],「聖霊降臨祭のうた」[34]あるいは「市のにぎわいのうた」[35]でもありうるのである。

こゝにあげた,うたの保存者にしたがったジャンルすべてにわたり,難題が生ずる。これらのうたは,その人々に「よって」うたわれるのか,その人々の「ための」うたなのか? この保存者は,そのジャンルのうたの利用者なのか,それとも創作者なのか? 「紛屋のうた」は例えば実際紛屋によってうたわれうる(例えば「職人の労働の賞賛」—— ないし「賞賛のうた」において)。しかしこれはまた —— しかも大多数の場合 —— その機能上あざけりのうたでもありうる。紛屋自身もごくまれにではあるが積極的な歌手でありうる。「酒のうた」は愛飲家によりうたわれえよう,しかし何を飲むのかということもうたの題材となりうる。「子供のうた」は子供たちによって創作され,うたわれる。しかしそれらのうたは,大人によって子供たちのために創作される場合もありうる。ゆえに,うたは「それ自体として」存在するのみならず,さまざまな動作のあり方,諸事件,諸行為あるいは精神態度と密着している。

以上の区分の試みはすべて決局純粋にテキスト学的な分類である。民族・音楽的分類に関しては,本書の第二部*が報告するのであろう。その方面の分類は全く異なる地平でなされる。ヴォルフガング・ズッパンを引用しておくことにしよう。「ドイツ民謡において普通なされている,物語および歴史歌,愛の,労働の,職業のうたなどえの区分けは,民衆詩のテキストやテーマの内容からなされたのであって,音楽的特性とは関連がない。…ある民謡を職業のうたとして整理することは,テキストの判定ということに基づいて行われる。メロディーをみて —— テキストなしで —— このメロディーの背後に,陽気にはしゃいだテキストがあるのか,厳粛なテキストがあるのか,宗教的テキストがあるのか,春歌のテキストがあるのか,そういうことを看取することはできないとおもわれる」[38]。

＊「民謡便覧　第二部」　R・ブレードニヒ／L・ロェーリヒ／W・ズッパン編（1974年刊　ミュンヘン）を指す。

32）エァンスト・クルーゼン　「グループのうた」（＝4））　31頁以降。
33）ヒンリヒ・ズィウツ　「カレンダー祭りにおける賞賛のうた」　ゲッティンゲン1966年。
34）エァンスト・クルーゼン（＝4））　31頁以降
35）ヴォルフガング・シュタィニッツ　「労働者歌曲と民謡」　ベルリン1965年。〈ドイツ科学アカデミー　研究報告　言語・文学・芸術部門〉所収1965年度　第8分冊　5頁以降。
36）ズィークフリート・グロッセ　「ドイツ民謡における水車小屋と紛屋」　〈オーストリア民謡研究年報　11（1962年）〉　8—35頁。
37）エァンスト・クルーゼン　「時事的なうた」　〈民俗学雑誌　53（1956／57年）〉所収　184頁。
38）ヴォルフガング・ズッパン　「民謡」（＝13））　27頁以降。

（1）Wander-;（2）Marsch-;（3）Tanz-;（4）Schunkel-;（5）Trink-;（6）Schlaflieder;（7）Heischelieder;（8）Zeitungslieder;（9）Loblied;（10）Spottlied;（11）sozialkritische Lieder;（12）engagierte-;（13）manipulierte-;（14）gesellschaftskritische Lieder;（15）Bauernklagen;（16）Volkslieder demokratischen Charakters;（17）Protestlied;（18）Protestsong;（19）Kriegslied;（20）Ständelied;（21）revoluzionäres Arbeiterlied;（22）revoltionäres Lied;（23）Brautabschiedslied;（24）Kranzlied;（25）Haubungslied;（26）Polterabendlied;（27）Wegsperrunglied;（28）religiöses Lied;（29）Ehestandslied;（30）Hochzeitsbitterlied;（31）Fastnachtslied;（32）Mailied;（33）Neujahrslied;（34）Pfingstlied;（35）Rummeltopflied.

7　民間伝承化の度合 —— 結語にかえて

諸カテゴリー（すなわち諸名称，諸定義，諸概念）の最後の区分けは，うたの民間伝承化の度合によってなされる。古い諸民謡集や諸論文は，「民謡風歌曲」（volkstümliches Lied）や「民謡調のうた」（Lied im Volkston）といったことについて述べている。個々の芸術歌曲の沈降に疑問の余地がないわけ

ではない。というのは，非常に多くのうたの概念は，少なくとも高度に文化的な概念である。例えば学術的用語である「ミネリート」とか「舞踏曲」(ナイトハルト)，「宗教歌」，「学生歌」，「職匠歌人のうた」なども，高度に文化的な概念である。ジョン・マイアーの学術用語となった「民衆にうたわれる芸術歌曲」[39]は，なるほど民間伝承化の過程の方向を暗示してはいる。しかしかれは，この過程の継続期間とその強度については述べなかった。民謡研究は，芸術の大衆化の方向の分析，あるいは，芸術の享受者に関するある種の研究ということにはとゞまらない。だが民謡研究はある一定のうたの諸カテゴリーについては，自分の能力外の研究対象であると宣言した。なぜならば，それが民間伝承化していないか，あるいは不充分にしか伝承化していないからである(「芸術歌曲」)[40]。他の諸カテゴリーに関しては，うたの民間伝承研究は，そのうたが大衆化しているにもかゝわらず，学問研究には入らないと拒否したものもある。例えば「シュラーガー」や「ヒット」など。なぜならば，その民間伝承化過程は充分にながい期間をかけて醸成された過程ではなく，あまりにも短期間になされたか，あるいはその途中ないし未だ全く見きわめがつかないからである。音楽著作権協会が，年に20万回以上公けに演奏されるものを「シュラーガー」とみなしているので，それ相当の演奏回数をほこるうたは，一般に好まれ，そして拡まっていなければならず，そうであれば民謡とされうるであろう[41]。もちろん，シュラーガーはなぜ短命なのか，という問題にも解決はあたえられなければならない。

39) ジョン・マイアー 「民衆の口にうたわれる芸術歌曲。資料と研究」ハレ 1906年。

40) それに反し「社交のうた」はドイツ民謡文庫で研究されている。このうたの概念は，ホフマン・フォン・ファラースレーベンにより導入された。

41) ハインリヒ・ゼーマン 「民謡と著作権」(=27)) 76頁。

大衆化過程は波状を示している。すでに忘れられたうたが，再生しうる。このうたは，あらたな加工，ポピュラーな歌集による印刷，レコードにおさ

めること，あるいはテレビによる放映などによって，再びあたらしい土壌を獲得することができる。ありとあらゆる種類のうたが，その起源や起源にまつわる束縛から解き放たれた。ある一つのうたが，それぞれ異なる状況に適応するということ，また一般的に適応するということがあり得る。こうした意味において，うたの「第二の」――また最近は「第三の存在」について語られてきている[42]。また一方，民間伝承の消滅過程もある。後退的過程があるかとおもえば，また中断のない，あるいはますます拡散する諸形態もある。「あともどり」や「フィードバック」が民謡の領域におけるほどぼやけている所は他にはない。また今日なお学校や合唱団などの広範な層で「古い民謡」がうたわれてもいる。そのかぎりでは，この歌唱現象は，ほとんどかならず人為的なうたの保護奨励に基づいている。その場合にはさまざまな種類のうたの作りかえがなされている。これらの諸過程は，「再生」，「加工」，「再発展」，「機能転換」，「フォークロリスムス」などの用語によってその性格が示される[43]。

42）ハインリヒ・ゼーマン「民謡と著作権」（＝27））　46頁。アードルフ・J・アイヒェンゼーア　「イン高地帯における民衆の歌唱」　ローゼンハイム　1969年。
43）本書第二部（＝23）直前＊注）におけるフェーリクス・ホェールブァガーの論考を参照されたい。

さまざま異なる民謡の諸概念を瞥見すれば，大衆的な，あるいはグループに密着した歌唱の領域における諸用語の発展と差異がわかるのである。これを概観した結果，それぞれの総括的概念とその下位概念の，時代との結合性や相対性が分る。人々が「民謡」という大きな領域に数え入れるこの区域に生ずるこうした現象について，こう設問してもよかろう，すなわち，これらの歌群の共通の諸標識は何であろう。これらの歌群は，ある共通の総括的体系の一部をなすのか，その共通の標識は，「民謡」の一般に妥当する規定に到達するのに充分なものであるか否か，と。以下にそのような標識の数項をまとめる試みをしよう。

(1) 「民謡」という表現は，きわめて異なる種類の，そして不等質の諸現象をまとめた集合概念である。それは，形式的には，テキストおよび音楽関係の領域における非常に広いひろがりをもっていて，もっとも単純な諸現象（例えば子供のうた，ヨーデル）から大衆化した芸術歌曲まで含む。時間的には最古代から現代までの領域を含む。何時の時代にもうたは明らかに存在したし，しかもさまざまの種類のうたがあった。ゲルマン諸種族の戦争のうたや英雄のうた，「バルディトゥス」（これについてはタキトゥスが「ゲルマニア」に報告している）から現代のフォークおよびプロテストソングまで，ミネゼンガーやトルバドゥールのうたからシュラーガーまで。歌唱は人間の自然的な活動であり，時代を超えた素朴な要求である。ホモ・カンタス(homo cantas)は時間と空間を超えた存在である。とはいえ，歌唱現象はつねに文化的および社会的な重層構造において確認される。

(2) 概念「民謡」は，その部分概念である「歌曲」と同じように，本質的に不変な事象といったものの標識をなしているわけではない。そしてこれは，…のうたといった複合語についてもあてはまる。この複合構成の若干のものは，つねに古高地ドイツ語時代にまで追跡されうる（例えば，"wini-"「友情の—」，"scip-"「舵（権力）の—」，"todliod"「葬送のうた」），下って，中高ドイツ語の諸形態（例えば，"wic-", "sige-", "blutlied"）[44]などにも見出しうる。だが古高地ドイツ語の時代にまでさかのぼりうる歌曲の概念とちがって，民謡の概念は18世紀初頭が創出したものである[45]。

44) ギュンター・ミュラーおよびゲオルク・ライヒァルト 「歌曲」の項〈ドイツ文学史事典 第二版 第二巻 ベルリン 1965年〉 42—62頁，とくに43頁。
45) ハンス・シュヴァルツ 「古高地ドイツ語の『リオト liod』とその言語領域〈PBS 75（1953年）〉 321—365頁。

(3) 民謡には，手稿か印刷によるうたの出現によって中断される必要のなかった口頭伝承も属する。民謡はうたわれるものである。それは単にテキス

トとして存在するのみではなく――詩もそうだが――歌唱として存在するのである。テキストなしのメロディーのみということもありうる「例えば，ヨーデル歌唱)。たゞリズム構造をてがかりにうたを確認することも可能である。その場合は通常音楽的側面が優先する。その側面に対して，しばしばテキストが充分適応するのである。無趣味な，センチメンタルな，すなわち，この精神史的に盛時を過ぎてしまった諸テキストは，これに付着しているメロディーがいまなを人々を感激させ人々の気に入るならば，その限りでは人々に受容されるのである。

(4) 口頭伝承では，うたの作者や由来，あるいはうたが受容されるための諸根拠というものは問題にならない[46]。とはいえ，民衆の気に入りのうたを創作した一連のすばらしい作者たちは知られている。その人たちを数えあげてみれば，そこにはちゃんとした教育を受けた人もいれば，教育を受けていない人もあり，第一級から第五級までの詩人，作曲家と素人，国会議員，閣僚，神父，兵士，食堂の主人，農民，鵞鳥の番人，また織工がいる。それぞれ，時代の趣好と民謡に対する姿勢にしたがい，いわゆる教育を受けた人の民謡えの参加は変化し一定ではない[47]。「民衆の口にうたわれる芸術歌曲」は，やっと17，18，19世紀になってはじめて人々にうたわれだしたわけではない。この過程は，何時の時代にもあったことは明らかである。ワルター・フォン・デァ・フォーゲルヴァイデや他のミネゼンガーたちのうたもまた，当時はだれも「芸術歌曲」に対立する「民謡」ということを口にしなかったのにもかゝわらず，実に多くの人々にうたわれた[48]。民謡は，「個人のうた」(Individuallied) でもなく，芸術詩でもなく，みなの精神的所有物である。うたの個人的芸術歌曲えの近さ，距離は，具体的ジャンルにより，また場合々々により異なる――例えばバラーデはより近く，しきたりのうたでは遠い[49]。大体において民謡は，非文学的な，うなわち口頭で集団的に伝承されるうちに形成されたテキストとメロディーの構造として成立する。探索可能な作者や，もはや探索のできない個々の，あるいは集団的な作者群[50]とは無関係に，

民謡は民間伝承化の過程をたどったのである。この過程は，すでに終ったか，あるいは進行中でありうる。

46）ハインリヒ・ゼーマン　「民謡と著作権」（＝27））　87頁。
47）同上　33頁。
48）同上　51頁。
49）ヒンリヒ・ズィウツ　「賛えうた」（＝33））　2頁。
50）テキストの詩人と作曲家が同一人物でない場合に，もっとも単純な共同著作権が発生する。ハインリヒ・ゼーマン　「民謡と著作権」（＝27））　33頁。

(5)　民謡は暫進的で集団的な作りかえの成果である。「民間伝承の作品は，享受者の趣好とは無関係には存在しない――歌手ないし歌手群の趣好と無関係には」[51]。ゆえに民謡は，一連の集団的な存在としての標識をもっている。その特徴は，形式性と非一個人性である。非常に多くの集団的諸形式が宝庫をなしている[52]。民謡の保存者はおのおのにこの諸形式を技術的にものにし，また一方これらの諸形式は，民謡の保存者に対して，所与の領域の中でかれが個有の創造的想像力を発揮するよう強制する。個々の登場人物とその名前は類型化され，その人物たちはまた類型的に行動する。固定した諸形式が広い範囲を占めている。とくにうたのはじめとかおわりにそれは顕著である。そこには紋切り型の修飾語，詩行，言い廻し，形式的な脚韻構成，くりかえされる光景と象徴，特殊なスタイル（例えば並置・対比，くり返し，対立，具体性，跳躍的描寫）などがある。うたい変え過程において非定型のものが定型に，個人的なものが集団的なものに席をゆずる。もとの個人的なうたが結局集団的な標識をもったうたになるのだが，個人の独創力に集団的な諸限界が置かれる。うたは「単純素朴なものえと昇化」する[53]。

51）ヴォルフガング・シュタイニッツ　「労働者歌曲」（＝35））。
52）ハインリヒ・ゼーマン　「民謡と著作権」（＝27））　27頁および86頁。
53）同上　94頁および39頁。

(6)　民謡の保存者と歌手は，さまざま異なる種類のグループ（諸共同体，諸団体）でありうる。社会的あるいは職業的な，家族的な，政治的な，協会組織の，または年令別グループ，居住地を一にする，あるいは言語によって条件づけられた，といった共同体などがある。「フォークロアの作品は，それが共同体によって受け入れられる場合にのみ存在する。この作品のうち，共同体が承認をあたえ再生をつゞけるもののみが存在する。共同体の要求がかわれば，民謡もまたかわる[54]」。上掲の諸グループの所属員のすべてが必然的に歌手でもある，ということはない。個人の保持する歌謡財は，積極的（自らうたう）か，また受動的（聴くのみ）であるかによって，それぞれちがうであろう。

54）ヴォルフガング・シュタイニッツ　「労働者歌曲」（＝23））。

歌唱の実施，すなわち民謡の実現と再生は，一つのグループに結びついているのではない。歌唱は個々人によっても，また一グループ（共同体，団体）によってもなされる。とはいえ，また個人的な，「独りひそかにうたう」ということもありうる。共同体的にうたわれるならば，そのグループはもちろん歌唱に義務を負う。ともにうたわない聴衆は我慢できなくなる。国民的賛歌とか教会の合唱の場合に，この緊張が直接高められるといった現象がみられる。ともにうたわない人は，非音楽的である，とみなされるのではなく，国民的賛歌やコラールが示している共同体や，その教会の教区外の人とされる[55]。

55）ハインヒリ・ゼーマン　「民謡と著作権」（＝27））　93頁。

(7)　民謡は，ある一定の変転能力をもつ。ほとんどすべての歌手は，みなあれこれの方法でうたを変える。「ある人は何かを付け加え，またある人は何かを取り去る」。

民謡蒐集者はゆえにその度ごと，うたの生存のたゞ一端を聴くだけで，昨晩うたわれても今日は再び違ったようにうたわれる，といったことを経験するだけである。

56) ルイ・ピンク 「エルザスにおけるゲーテの蒐集民謡。ロートリンゲン地方のメロディー並びにヴァリアンテ。シュトラースブルクのゲーテ手稿より。ファクシミリ印刷」 メッツ 1932年 49頁。
57) ハインリヒ・ゼーマン 「民謡と著作権」(=27)) 108頁。

うたい継がれてゆくということがうたを民謡にするのである。うたい変えによって,さまざま異なるジャンルから生じた多くのヴァリアンテをみれば,われわれはうたがどれほど民衆に適合するものになったかを測ることができる。「ドイツ民謡文庫」にも伝統的な民謡が集められているが,これらの民謡には少なくとも二種類の異なるヴァリアンテがある。ポピュラーなうたの主要な標識の一つでなければならないのは,テキストならびに音楽上の類型変化の諸傾向であって,これは,さまざまな構成要素の変化性と安定性として研究されなければならないし,これはまったく集団的伝承の結果である。こうした点で,民衆に適合するジャンルが,通常(高い—)文学と区別されるのである[58]。

58) ヴォルフガング・シュタイニッツ 「労働者歌曲」(=35)) 10頁。ヘァマン・シュトローバハ 「変化性。法則性と條件」〈民謡研究年報 11(1966年)〉所収 1—9頁。

(8) 民謡の標識は,最後にその大衆性にある。少なくとも何年も何十年もそれを保っていることが必要である。民謡は,ある程度ながい生命を保ち,日常の要求や一時的な時事性を超え,人々をかなり長い間とらえているものでなければならない。うたの伝承はそれぞれにきわめて違うものでありうる。うたからうたえ,うたのジャンルからジャンルえの連続性を保っている。シュラーガーはひきつゞき「エヴァーグリーン」[61]となり,すでにかなり以前から,「ヒット」や「トップ・ヒット」として何年も何十年もうたわれ,ポピュラーな大衆曲となった。この連続性は,その他民謡のさまざまな部分的な構成要素にもみられる。テキストの内容面,形式面,また音楽的側面などにお

ける連続性が存在する。もちろん他面において，恒常的な変革，変化，そして順応がある。古いテキストが突然あたらしいメロディーと結びつく。そしてよく知られたメロディーにあたらしいテキストが作詞される（コントラファクトゥーア）こともある。なぜあるテキストが古くなり忘れられたか，という問題も重要であるが，またなぜある伝承が非常にながく保たれるのか，ということもまたきわめて刺激的である。こゝでは明らかなごとく，たゞ文献学的および音学的考察が必要であるのみならず，心理学的な原型をさぐる研究もまた必要なのである。

（昭和51年5月20日受理）

59）ハインリヒ・ゼーマン　「民謡と著作権」（＝27））　109頁。

60）ヘァマン・バウズィンガーおよびヴォルフガング・ブリュックナー「連続性？民俗学的課題としての歴史性と継続」　ベルリン　1969年。

61）例えば「ラ・パロマ」のうたは，すでに100年うたわれている。ハンフ・クリストフ・ウォルプス　「シュラーガー。　その蒐集，分析，記録」　ブレーメン　1963年。

エルンスト・シャーデ：ルートヴィヒ・エルクの批判（選択）的民謡集とかれの「民謡」－概念

（研究資料）

坂　西　八　郎

Japanische Übersetzung

Ernst Schade : Ludwig Erks kritische Liedersammlung und sein „Volkslied“ — Begriff. Erstes Kapitel, Leben und Wirken Ludwig Erks.

Hachiro Sakanishi

ルートヴィヒ・エルクの生涯と活動

ルートヴィヒ・クリスチャン・エルクは，1807年1月6日に中部ドイツのヴェツラーという町に生まれた。父はアーダム・ヴィルヘルム・エルク[1]といい，その地の小学校教師・教会オルガニスト兼合唱隊指揮者をつとめていた。母はアンナ・バルバラ・エルク（旧姓ゴェート）[2]といった。ルートヴィヒが4才になったときに父は一家をひきつれてヴェツラーを去り，当時フランス軍の占領下にあったウォルムスに引越した。それは，父エルクがウォルムスでルター派教会学校の数師の職および三位一体教会のオルガニスト兼合唱隊指揮者の地位につくためであった。エルク家はウォルムスにはちょうど一年住んでいたゞけであったが，この滞在は後日のルートヴィヒ・エルクの成長にとって，大きな意味をもつことになった。エルク家と交際した人の中

には，あのドイツ教育史に有名なアードルフ・ディースターヴェーク（1790－1886年）がいた。かれもちょうど当時ウォルムスで教師の仕事にたずさわっていた。ディースターヴェークは，しばしばエルク家を訪ね，丁度ヴェツラーから来ていたザビーネ・エンスリーン（1794－1866年）という，エルクの母アンナの姪と知り合い，後年この娘と結婚した。ディースターヴェークとルートヴィヒ・エルクはこうして親類になったのであった。ディースターヴェークはのちのちまでなにかとルートヴィヒ・エルクに目をかけ，援助を与えることになった。

アーダム・ウィルヘルム・エルクは一年の後にウォルムスにおける仕事を止め，また家族を連れてフランクフルト・アム・マイン近傍のノイ・イーゼンブルクに赴き，しばらくこの地に暮し，1813年にランゲン近傍のドライアイヒエンハインの役場の書記，教師兼教会オルガニストになった。

この地にルートヴィヒ・エルクは6才から13才まで暮したのであった。この時代に，父と隣の町ゴッツェンハインの教師であったヴィルヘルム・ヴァイマルという人から，オルガン演奏とヴァイオリン演奏に関して，はじめて系統的な教育を受けた。数年の後に父が病気になり，教会のオルガン演奏を定期的には引き受けられなくなると，11才になったばかりの息子ルートヴィヒが父の代理をやってのけたのであった。

1820年1月31日，父のアーダム・ヴィルヘルム・エルクは死んだ。12才のルートヴィヒ・エルクは，残された4人の子供の最年長であった。かれは，父の友人でかつ自分の名付け親であったヨーハン・バルタザル・シュピース（1782—1841年）という人にひきとられ，シュピース師がオッフェンバハ・アム・マインに設立していた兒童教育施設で教育を与えられた。ついで当地のベルナルト神学校で，同じくシュピース師によって小学校教師になる教育を受け，そしてそのまゝ音楽教師に任命されることになったのである。

ヨーハン・バルタザル・シュピースは，クリスチャン・ゴットヒルフ・ザルツマン（1744—1811年）とヨーハン・ハインリヒ・ペスタロッツィ（1746—1827年）という当時のすぐれた教育家の志向を信奉した人で，当時進歩的

教育家という名声を享受していた[4]。ルートヴィヒ・エルクは，シュピース師をたゞ一般的な教育理論の上ですぐれた先生，指導者と思っていたゞけではなく，音楽教育の上でもまたすぐれた人だと思っていた。その頃ミヒヤエル・トラウゴット・プファイファーとハンス・ゲオルク・ネーゲリの著作「ペスタロッツィの諸原則による歌唱教育理論」（チューリヒ　1810年）が刊行されると，シューピスは，当時の考え方にとっては最新のこの書物に拠ってベルナルト神学校の音楽教育を実施した。この教育というのは，聴音と読譜の系統的な訓練を要求するものである。

合唱についてエルクが積んだはじめの頃のいろいろな経験は，オッフェンバハに住んでいた時のものである。エルクはある合唱団に参加したが，これはシュピースの援助で編成され，まずアントーン・アンドレ（1775—1842年），のちにはその教え子アーロイース・シュミットという人が指揮をしたのであった。これは混声合唱団であった[7]。エルクはさらに，ベルナルト神学校の生徒たちと一緒に，当時すでに名声を拍していた隣地フランクフルト・アム・マインの，シェルブルという人の指導下にあった「ツェツィーリエ合唱団」をも訪ねうたったのであった。

さらに，エルクがより深い音楽的教養を身につけるのに役立ったのは，当時非常に高い評価を得ていたヴァイオリン教師レーオンハルト・ラインヴァルトとの交友，またアーロイースおよびヤーコプ・シュミット（1789乃至1796年生）との交友であった。この兄弟は2人とも有名なピアニストであって，1824年から25年にかけてフランクフルトとオッフェンバハに住み，シュピースとしげく住き来していた。

1826年にエルクが19才になったとき，アードルフ・ディースターヴェークは自分が校長をつとめているモェルスの師範学校の音楽教師としてエルクを招聘した。エルクはこれに従ったのだが，シュピースは気を悪くし，また人々はエルクを恩知らずだと非難した。これは当然のことである。とはいえエルクがモェルスに赴くにいたった決定的な理由は，その地で得たより高い収入であり，それによって母と妹たちを養うことができ，さらに職業上のよ

りよいチャンスにめぐまれるかもしれないという見込みであった[8]，しかし，エルクはシュピースのために何かをしなければならないとどれほど思っていたことであろうか，これはエルクがのちに自分の最も重要な書物，「ドイツ民謡の宝」(――以下「Eドイツ民謡集」)をシュピースに捧げていることからも分る[9]。

モェルスにあってエルクは，小学校音楽教員の養成という新しい任務を，きわめて批判的に遂行した。かれはとくに先ず学校に適した歌集がないことを問題にした。そこでかれは自分の師範学校で用いるために自作の手稿歌集を編纂しようと計画した。この歌集を書物として出版するようにというディースターヴェークの提案を，エルクははじめてことわった。しかしディースターヴェークもあきらめず，「さまざまな作曲家による学校唱歌」という本を刊行するようにすゝめた。この学校唱歌が一般の認めるところとして受け入れられるのをみて，エルクは後続の三巻を刊行した[10]。

これがきっかけになって，学校唱歌集がのちのち出版されてゆくのであるが，この本は年令（学年）別の順序で，低学年用の子供のうたにはじまり，師範学校生用の多声合唱にいたるという構成である[11]。さらにエルクは，音楽教育のための理論書も著わした。それは「小学校の歌唱教育のための方法序論」（クレーフェルト　1834年）といったものである。

教職にたずさわっている学校教員にあたらしいうたを提供し，音楽教育の最新の諸方法に習熟させることを考え，かれはモェルスの師範学校における教科課程と平行して，現職教員のための特設コースを一度設けたことがある。またそのほかに，ヒルデンの教師W・シュロェッサーとともに，「山獄地方教師歌唱祭」を開催し，これを現職教員の継続的教育の会となした。歌唱祭の第一回目は1834年にレムシャイトで開催され，以降ルーァオルト，ドゥイスブルクと場所を変え，また再びレムシャイトで開催された。

音楽教育の領域における活動に並行して，エルクはモェルスの町の公的な音楽生活にも登場した。かれは1835年に有名なフランスのヴァイオリン演奏家フランソワ・フェミ（パリ　1790年生）と何回も演奏会を開いている。

1832年に師範学校長アードルフ・ディースターヴェークはモェルスを去り，ベルリン市立師範学校長となった。当時すでに，かれはエルクを一緒にベルリンに連れてゆこうと計画していた。これは3年後に実ることになった。エルクはベルリンに移るまえに，モェルスのある商人の娘フリーデリケ・ホルディングスハウゼン（ルール河畔ケットヴィヒ　1810年生）と結婚した。

師範学校における教職活動の観点からすれば，モェルスからベルリンに働く場所を変えたことは，エルクにとっては決して満足すべきことにはならなかった。教育の前提となる音楽の知識があまりにも学生側にないこと，多くの生徒たちがこの課目に殆んど興味を示さないことについてエルクはなげいた。その結果，かれはすでに1838年にはヘッセン州のフリートベルクの師範学校への転勤を，また1845年にはシュールプフォルタの学校への転勤を考慮している。大都市における生活もまたかれの気に入らなかった。とにかくかれは再び田舎に転勤したかったようであるが，音楽学上の諸活動では，ベルリンの如き都市のみがさまざまな條件を与えてくれる。これがエルクをひきとめていたのである。

ベルリンで師範学校音楽教師の地位につくやいなや，かれは司教座聖堂コーラスの指揮をひき受けた。とはいえこの歌唱隊の財政基盤や組織・制度的諸前提はこの当時きわめて不備であったので，なにをやってもうまくゆかず，すでに2年後，かれは指揮者をやめてしまった。1824年にフェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ（1809—1847年）が助手になり，ペテルスブルク宮延聖歌隊を模範としてコーラスの再編をはかってからはじめてこの合唱隊は諸成果をあげ，非常な名声を拍すことになった[15]。1836年から1847年までエルクはベルリン・ズィング・アカデミーに属した。このズィング・アカデミーは，当時ルンゲンハーゲン教授（1778—1851年）の指導下にあった[16]。

1843年になってエルクは自分の構想にもとづくコーラス，エルク男性合唱協会を設立し，ひきつづき1852年にはエルク混声合唱協会を設立した。両合唱団の演奏会は，間もなくベルリンの大きな演奏会には何百人という，いや

しばしば千人をはるかに超える聴衆が押し寄せるのであった。名高い音楽批評家の筆になる批評も，両合唱団の特筆すべき業績について語っている。

エルクは合唱指揮者として有名になったのみではなく，歌曲集，合唱曲集の編集，原典研究に基づく民謡集の編纂によっても頭角をあらわしてゆく。その結果かれは非常に多くの音楽家や音楽学者と知り合い交わることになった。かれがこの人たちとかわした話し合いは，かれの音楽学的諸研究に影響をおよぼすものであったから，かれ自身はこの知人たちについて，自分の音楽の素養を深めてくれる人々として感謝をこめて述べている[17]。交わりを結んだ人々には次の如き人々がいた。ベルリンのS・W・デーン教授（1858年没），エルクはこの人と古い記譜法を現行の記譜法に移しかえる作業をおこなった。音楽学者であり「ライプツィヒ・アルゲマイネ・ムズィークツァイトゥング紙」の編集者，ライプツィヒのG・W・フィンク（1783—1846年）。ベルリンの宮廷司教座聖堂オルガニスト，ルートヴィヒ・ヘルヴィーク（1773—1838年），この人は，ツェルターの協力者であってベルリン・ズィングアカデミーとベルリン・リーダーターフェルにおいて重要な役割を果した人である。ベルリン大学音楽研究所長A・B・マルクス（1799—1866年）。ダルムシュタットの音楽学者ヨーハン・クリスチアン・マルクヴォルト（1778—1866年），エルクはダルムシュタット地方をひっきりなしに訪ねていたが，その度にこの人と会っていた。同じくダルムシュタットの法律家ゴットフリート・ヴェーバー（1779—1839年），この人の職業は弁護士であったが並々ならぬ音楽家，音楽理論家であって，音楽雑誌「ツェツィリア」を創刊し，その刊行をつゞけた人物である。

民謡研究の点では，エルクはホフマン・フォン・ファラースレーベン（1798—1874年）の弟子と自称している。エルクは1841年からホフマンの死まで，個人的な交際，書簡のやりとり，共著の書物により非常に親密な関係にあった。また[18]，1847年までベルリンに住み，のちミュンヘンに移り民間にあって活躍したF・フィリッツ博士に対して，エルクは古いコラール研究に関する多大の励ましに対し感謝している[19]。エルクはかれと共同で16および17

世紀の巨匠たちの古いコラールの諸楽章を刊行した[20]。

すでに1839年に，エルクはグスタフ・シリングとルートヴィヒ・シュポーア（1784—1859年）によって設立された「ドイツ音楽・音楽学国民協会」の遠隔地会員に選任されたのであるが，これによってかれの音楽学領域における活動の真価が認められることになった[21]。

1849年に，当時ヨーロッパの音楽界で指導的な位置にあったオルガニスト，カペルマイスター，そして音楽学者でありブリュッセル音楽院の長であったフランソワ・ヨーゼフ・フェティ（1784—1871年）がベルリンにやって来た。フェティはS・W・デーン教授の紹介でエルクと大いに語ることになった。とくにかれはエルク男性合唱団の演奏練習に立ち会っている。「パリ音楽雑誌」に発表した論文において，フェティはベルリンで受けた諸印象を報じている。その報告でかれはとくにエルクの民謡研究，音楽教育，教会音楽の領域における活動を大いに賞賛した。

自分の諸刊行物を通じて，エルクは他の多くの学者たちや公的活動にたずさわる人々とも接触するに至った。またゲルマニストのフリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン（1780—1856年），フィリップ・ヴァッケァナーゲル（1800—1877年），アントーン・ビルリンガー（1834—1891年）およびヨハネス・マティーアス・フィルメニヒ（1808—1889年）などの人々とも書簡による交流をしていた。

おそらくホフマン・フォン・ファラースレーベンを通じてかれはベッティーナ・フォン・アルニム（1785—1859年）と知り合いになったのであろう。その交際は，1848年以降に関しては証拠をもってあとづけし得る。1852年にかの女ベッティーナは自著「デーモンとの会話」（ベルリン　1852年）をエルクに献じている。かの女はその書物にこう書き入れた，「この本は貴方の義母からのものです。」エルクはこれについて，日記に書き留めている。「1852年にベッティーナ・フォン・アルニムはわたしに贈るために持参してくれた本のタイトルの所にこんなことを書いてくれた —— 鉛筆がき —— 」[22]。

アヒム・フォン・アルニム「全集」がヴィルヘルム・グリムによって刊行

されるに際して（22巻 ベルリン 1839—56年），ベッティーナ・フォン・アルニムは，「少年の魔法の角笛」の第4巻目を，アルニムの遺した手稿をまとめて刊行してくれるようエルクに依頼した。その他にもかの女は「魔法の角笛」の大衆版をエルクに出版してもらおうという計画をもっていた[24]。しかしこの出版は実現されなかった。ヤーコプ・グリム（1785—1863年）ともエルクは良い関係を結んでいたことが日記の記録からも明らかである[25]。

このような人々との諸関係を過大に評価してはならないとはいえ，やはりこの諸関係は，音楽学とゲルマニスティク，そして教育学に係わる多種多様な関心と多面的な学問上の仕事によって，エルクが次第に確立していった立場がどのようなものであったかを示しているのである。

エルクが緊密な関係にあった上にみた人々の多くは，当時のドイツを覆う絶対主義的支配に反対して，諸地方の政府が民主化のための最初の措置をとるように激励し，また斗いを展開したいろんなグループのどれかに属していた。この意味において，教員関係ではアードルフ・ディースターヴェークが原動力であった。この政治的諸努力にはエルクもまた参加していた。プロイセン王（1840—61年）のフリードリヒ・ウィルヘルムⅣ世は，1849年に「訓戒」を宜し，神の信仰と王の臣下たる忠誠心を根絶やしにした責任をとらせるために，師範学校教員を減給處分にした[26]。校長ディースターヴェークは，すでに1847年に上に述べた政治的な問題が理由で免職され，正当な時期の来ないうちに退職させられてしまった。エルクは職にとゞまってはいたが師範学校でけん疑を受けた教師たちの仲間に属し，当局から睨まれていることを給料の問題からさとった。かれは何年間も昇格させられなかったし，また他の教員とは反対に昇給もさせられなかった。

エルクはまたホフマン・フォン・ファラースレーベンが政治的理由からベルリンを追放されたとき，汽車まで見送った人であり，その後もかれと連絡をとり続けた。「わたしにとってかくも友人の多いベルリンも，友として何かをしてもらいたいと思うと，とたんに友人がみな消え失せてしまう」。とホフマン・フォン・ファラースレーベンは1850年6月8日付でルートヴィヒ・

エルクに書いている。そしてかれは二三のたのみごとを果してくれるよう依頼した。エルクにあてたホフマンの多くの手紙。それもちょうどこの時期に差し出されたものは，エルクがこの苦しい時期にホフマンの味方になっていたことを示している。かなり多くの共著の刊行物は，ホフマン・フォン・ファラースレーベンとエルクのこの長期にわたる友情の成果である[27]。大衆が主導権をにぎってやる民主化や，ドイツ連邦の結成を宣伝するあらゆるものをやっつけていた政府は，エルクとホフマンの共同の著述活動にも権力をもって食い込んで来た。とうとう1852年12月にホフマン・フォン・ファラースレーベンとエルクによって出版された「ドイツ民謡本」（ライプツィヒ　1848年）は，「警察の手によってつぶされてしまった」。この様子をエルクは日記に書きとめている[28]。

エルクはドイツの様々異なる地方への旅行を企てた。かれは母や，妹のアンナ，その夫ルートヴィヒ・グロックを訪ねるときに，オーデンヴァルトや，ダルムシュタットとハイデルベルク間の山岳地帯にある村々をとおる徒歩旅行をしばしばやっている。ハイデルベルクからさかのぼるネッカルの谷，ライン中流地方，キンツィヒの渓谷，上ヘッセン，テューリンゲン，ハルツ，マグデブルク周辺，さらにベルリンの近郊とくにオーデル・ブルッフ，さらにザクセン，シュレーズィエンおよびボェーメン地方に至るまでの各地を，かれは度重なる旅，徒歩旅行によって知った。かれはある場所に汽車か馬車で到着すると，友人たちとしばしば何日も歩き，名所を訪ねたり，またうたを探しだしては記載する，という目的をもって歩きまわった。この旅行や徒歩旅行に関しては，かれの日記中の諸記録が伝えている。記録は要点を書きつけ，それぞれ旅行目的を挙げているという形で極めて簡潔になされているとはいえ，実に一目瞭然たるイメージをあたえてくれる。

かれは率いる男性合唱団ともザクセン・スイス，ハルツ，チューリンゲンおよびラインの諸地方にかなり長期の演奏旅行にでかけている。かれがこの諸旅行を企てた意図は，団員間の交流を深め，さらに若干の予定した演奏と即興演奏によってこの合唱団の宣伝をするということであった。

広範な旅行をルートヴィヒ・エルクは企て，有名な図書館を訪ねた。それというのも，うたの研究や学術上の発表のために必要とする，うたの記録や書物を調べあげるためであった。この目的のために，かれはベルリン市内の図書館以外にダルムシュタット，ハイデルブルク，シュトゥットガルト，ミュンヘン，ニュールンベルク，カッセル，ハーノーヴァー，ゴェッティンゲンおよびヴォルフェンビュッテルの諸図書館を訪ね歩いた。

家庭生活の方では，かれの人生はきびしいものであったといわなければならない。かれには7人の子供たちがいた。息子の一人は幼少で，また娘のマティルデは18才にしてこの世を去った[29]。すでに1848年に，かれの妻は8番目の子供を出産しようとして死去した。当時2才から12才までの子供たちが残されていたわけである。かれにとって妻の死は大きな打撃となった。この過酷な運命に堪えてかれは長年にわたり学問研究を続けなければならなかった。のちにかれの息子のうち二人はアメリカに渡った。オットーの方はかれと手紙のやりとりが続いていたが，ルートヴィヒという息子の方はアメリカで消息が絶えてしまった。エルクはすでに60才を過ぎてからドロテア・ホルツハウアー（旧姓リューデッケ　1826—1906年）という，親しくしていた教師の未亡人と再婚した。

高令になってから，師範学校音楽教師としての，また学問分野におけるかれの諸業績は当局からも認められた。1857年にかれは宮廷指揮者の称号を与えられ，1873年にはかれは「赤いわしの勲章」が授けられた。1862年にかれはニュールンベルク・ゲルマーニッシェス・ムゼーウムの学術委員会正会員に任命されていた。1876年6月10日，かれの勤続50年記念の日に，師範学校はかれの意向に反して大々的に記念行事を行い，とくに教授称号を与えた。

同年かれはエルク混声合唱団の指揮をかれの教え子，後の宮廷指揮者グスタフ・ゲーブルに譲った。男性合唱団の指揮の方は74才になって，すなわち1881年にやっと止めた。

1877年3月22日，かれは師範学校音楽教員を退職した。そしてかれは未完の学問上の仕事を完成したいと思った。しかし間もなくかれの健康状態は悪

化し，仕事を完成することができなくなった。

ルートヴィヒ・エルクは，1883年11月25日死去し，ベルリンのエリーザベス墓地に葬られた。かれの墓は今日ベルナウアー街の両ドイツ国境の背後（東側）にある。

（昭和51年5月20日受理）

1） アーダム・ヴィルヘルム・エルク　1779年3月10日　ザクセン－マイニンゲンのヘルプフに生る。マイニンゲン師範学校卒；教師兼書記；1802年8月10日以降ヴェツラー教会合唱指揮者，オルガニスト兼教師；1811—1812年ウォルムに移住；1812年フランクフルト移住；1813—1820年ランゲン近傍ドライアイヒェンハインの書記，教師兼オルガニスト；1820年1月31日死去。

2） アンナ・バルバラ・エルク（旧姓ゴェート）　1783年ヴェツラーに生る。1866年5月17日死去。

3） ヨーハン・バルタザル・シュピース　1782年オーバーマースフェルト（ザクセンマイニンゲン）に生る。1799年マイニンゲン師範学校卒。1801年フランクフルトのケンマート学校の教師；1805—1807年ギーセン大学に学ぶ；1807年ラウバハにおいて教頭；1811—1830年オッフェンバハ・アム・マインにて第二司祭，ベルナルト学校教師；1831—1841年フランクフルト近郊シュプレントリンゲンの首席司祭。

4） L・エルク：「ヨーハン・バルタザル・シュピース」（「ドイツ音楽協会及び愛好者のための雑誌」）1841年1号　389—392頁。

シュピースに関し：（「音楽学および音響芸術レキシコン」G・シリング編）シュトゥットガルト　1849年。

F・W・ゾンマーラート：「オッフェンバハ・アム・マインの学校制度の歴史」オッフェンバハ　1892年　95頁以降。

Ed・ベルレ：「ヨーハン・バルタザル・シュピース。ヘッセン国民教育運動の先覚者」（「フォルク・ウント・ショレ」誌）1929年7号　51—54頁。

5） ダルムシュタット学校新聞におけるシュピースの諸論文。特に「学校と家庭における歌唱の教授について」，「歌唱協会の目的にかなった構成について」，「一般歌唱協会の規約について」，「男性合唱について」，「教会合唱団について」，「ダルムシュタット地区の四部合唱について」，「民謡歌唱本について」，「教会音楽について」。

6） 正式なタイトルは，「ペスタロッツィの原則による歌唱教育理論，教育学的基礎づけミヒァエル・トラウゴット・プファイファー，方法的整理ハンス・ゲオルク・ネーゲリ」。チューリヒ　1810年。

7）　小合唱団のための手書きのノートは（ソプラノ，アルト，テノールおよびバスにそれぞれ），28合唱曲，うちモーツァルト作曲16，ハイドン5，デュシェク5である。

8）　ディースターヴェークによるエルク招聘について：アンナ・バルバラ・エルクあてディースターヴェークの書簡　1826年4月23日付。

　エルクがシュピースのもとを去った理由について：ダルムシュタットのヨーハン・ハインリヒ・クリスチァン・リンクあてL・エルクの書簡　1831年6月1日。

9）献呈の辞：わが師ヨーハン・バルタザル・シュピースに捧ぐ。その教えと書物により功績高き司祭および教師にして，わが名づけ親，養父たるシュピースに永遠の愛をこめて。

10）　L・エルク：「さまざまの作曲家による単声，二声，三声，四声合唱曲集」エッセン　ベーデッカー　第一分冊　1　1828年，第二分冊　2および3　1829年，増補版1834年。

11）付録参照：エルク著作目録――児童および学校歌集。

12）　参照：ダルムシュタットのJ・Chr・H・リンクあてエルクの書簡　1831年6月1日。

13）　同：L・グロックあてエルクの書簡　日付なし（推定　1838年）。

14）　同：同　1845年8月5日。

15）　カール・シュルツェ：「L・エルク」ベルリン　1876年　26頁以下。

　パウル・オーピッツ：「ベルリン王立司教座聖堂設立50年記念によせる略史」ベルリン　1893年。

　ホゥゴゥ・リーマン：音楽辞典（1916年版）。「ドームコール」の項　254頁および「エルク」の項　290頁。

16）　マルティン・ブルンマー：「ベルリン・ズィング・アカデミー史」ベルリン　1891年249頁。

17）　L・エルク　年譜　1867年　19頁。

18）　ハインリヒ・ホフマン・フォン・ファラースレーベン：「わが生涯」ベルリン　1892年。その中ではじめてエルクに触れている箇所：「ルートヴィヒ・エルク来訪。かれは王立師範学校の音楽教師である。かれはW・イルマーと6冊の『民謡とその旋律』を出版した。これは価値ある歌集である。……。かれは魅力的な研究をやり蒐集も多い。われわれはほとんど民謡について語った」。

　ホフマン・フォン・ファラースレーベン書簡集（H・ゲルステンベルク編集　ベルリン　発行年不詳）：「わが友に」。

19）　L・エルク「年譜」1867年　19頁。

20）　「16および17世紀の巨匠の四声合唱曲，L・エルクおよびFr・フィリッツ編」エッセン　1845年（150合唱曲）。

21）

22）　L・エルク「日記」第2冊。

23) 「少年の魔法の角笛」 L・A・フォン・アルニムおよび Cl・ブレンターノ蒐集による古ドイツ歌集。第4巻，アルニムの手書き遺稿によりL・エルク編 ベルリン 1854年。（全集 新版 －W・グリム編－ 第21巻 遺稿：第5巻）。

24) L・グロックあてL・エルクの書簡 1861年6月5日。「この機会に君に言っておきたい。アルニム夫人がわたしに魔法の角笛の第4巻（しかも御主人の遺稿原稿により）の出版を依頼された。それから（私の編集により）魔法の角笛の大衆版を作成しなければならない」。

25) 1855年9月エルクはJ・グリムを訪問し，グリムに「Eドイツ民謡集」を贈呈した。エルクは1855年12月24日J・グリムから「ドイツ神話学」を贈られ，手紙がそえてあった。1859年11月のシラー祭に際してL・エルクはJ・グリムから酒杯を贈られた。――今日ヴェツラーのエルク文庫に所蔵。エルクはシラー祭を記念して歌曲を刊行した：1）シラーの歌曲。エルク編曲混声合唱曲 ベルリン 1859年。2）シラー祭のための男声6部合唱曲（1859年11月10日），およびその他多声用曲 エルク編 ベルリン 1859年。

26) ヴォルフガング・クラフキ：「教育科学」フランクフルト・アム・マイン 1970年 33頁。

27) L・エルクおよびホフマン・フォン・ファラースレーベンの共著：「学校歌集100曲集」 ライプツィヒ 1848年。「若きドイツのための37曲集」 ライプツィヒ 1848年。「ドイツ民謡本」 ライプツィヒ 1848年。「兵士の生活」「新しいうた（……）」ベルリン 1852年。「たのしくうたおう」。詩の歴史に寄せて ハノーファー 1854年。「ドイツ教会歌史」 ハノーファー 1854年。「民謡風歌曲集」 ライプツィヒ 1869年。「16および17世紀のドイツの社交歌集」 ライプツィヒ 1860年。「四季」 ベルリン 1860および1864年。「新旧兒童歌集」 ベルリン 1873年。

28) L・エルク「日記」第2冊 20頁。

29) L・エルクにあてたホフマン・フォン・ファラースレーベンの書簡，クリスマス 1855年。 この12月7日エルクの娘が死去したのであった。詩は，「父と子らは，広間に入り来る……」。第5詩節「クリスマスツリーは明るい燈をつけてかゞやくが，そのかゞやきの中で父の心は憂いにしずむ，数日前に最愛の娘を失ったのであった」。

ロルフ・W・ブレードニヒ*):大衆歌[1)]のイノヴァツィオーンスツェントゥルム[(2)]としてのハンブルク（研究資料）

（上）

坂　西　八　郎
（協力：奥　野　不二子**)）

Japanische Übersetzung

Rolf W. Brednich : Hamburg als Innovationszentrum popular Lieder

Hachiro Sakanishi

「うたの研究」[(3)]と都市の伝承関係（問題）というのは，かって一致したことのない概念の組み合わせである。われわれの専門領域民俗学の昔からの考え方・構想やこれに依存する伝統的民謡研究においては，都市は場をしめず，研究対象とされなかった。民俗学一般も民謡研究も，農民的—農村的伝承諸形式の収集と調査に如何に集中したことであろうか。村の歌唱機会，例えば織物部屋の，酒場の，また共同作業や，祝祭や民俗慣習などにおけるうた，これらが収集・調査の中心に位置していた。都市は，この遺蹟や前工業時代における「口づたえにより—文字を媒介としない」伝承に集中した研究方向の中で，民俗学者の管轄外にある伝承空間なのであった。都市の伝承物は「低級な音楽」の生みおとしたもの，価値のないものとして，それどころか有害危険な産物としてしりぞけられた。19世紀のうたの研究者で，今までに都市

や大都市で民謡を記録するという考えに到達した者はいなかった。調査領域としては，いわゆる大都市から離れた遺蹟地帯が優先的に選び出された。自分の家の前で生起したことを人々は気にかけないものである。こうしたことの多くの例の一つ：著名な民謡収集家ルートヴィヒ・エルクは19世紀に数千のうたを発表し，また18,925編をくだらない未印刷の記載をのこした。だがかれの長年の居住地ベルリンで蒐集したものは，全部でたった11編の子供のうたにすぎないのである[1)]。

（1） 原語 populares Lied。日本ではポピュラー・ソング popular song の用語が用いられる。これを日本語に訳す必要がないほど普及している。
（2） 原語 die Innovatiin。以下「イノヴァツィオーン」を用いる。生産的革新的再生の意。
（3） 「うたの研究」die Liedforschung，これは「歌曲研究」，すなわち「芸術歌曲」の研究を意味せず，民謡研究を意味する。

原注1） 其他の例参照，ロルフ・W・ブレードニヒ：Städte als Innovationszentren der Volksüberlieferung. In : Kultureller Wandel in 19. Jahrhundert. Protokoll der Arbeitstagung der Kommision für Lied-, Musik- und Tanzforschung vom 23.—25. 3. 1972 in Wetzlar, hrsg. von R. W. Brednich. Freiburg 1972, S.63—68.

とりわけ19世紀のブルジョア的民謡研究は，非農民的な社会層，特に都市のプロレタリアートの演奏諸形式や音楽生活の調査を，計画的・意識的に研究領域から除外することを心得ていた。こうした確認[(4)]をいまさらこゝで論議むしかえす必要はない。古い研究に対する批判はいろいろに必要であるが，過去のことをゆるがせにしたことを論難するよりも，新しい手がかりのためのものの考え方，将来の民謡研究の可能な課題を問題としよう。

（4） 参照，W・シュタィニッツ：Deutsche Volkslieder demokratischen Charakters aus sechs Jahrhunderten, 2 Bde. Berlin 1954, 1962. とくに第1巻および第2巻の序文。

本学会の設定テーマは，うたの研究の従来の構想に対しても新しい考え方をもつように強いる。数週間前に，アメリカのインディアナ州ブルーミングトンにおいて，「現代世界の民俗学」というテーマによる研究会議が開催された。そこにおいても，一日が「都市の民俗学」というテーマにあてがわれた。この事実は，他の国でもわれわれの側と似たような問題がたてられていることを示している。われわれは，このブルーミングトン会議で次のことを学ぶことができた。すなわち，アメリカ合衆国では都市民俗学研究は今日までの所よい伝統をもっている。そして遅くともバークレーから生じたフリー・スピーチ・ムーブメント以来，フィラデルフィアのニグロ・プロレタリアートの物語，都市の売春婦やベトナム行きパイロットなどのうたを研究することは，もう決していかゞわしい事ではないのである。伝統とは絶えず新しく創造されるべきものである，とするならば，――すでに19世紀にシドニー・ハルトラント[2)]が定式化したように――，どんな都市でも蒐集に価する―または研究に価する伝統を保持し示すことができなければならない。ここで伝統とは，とくにわれわれの伝統的な規範の外にある諸伝統を意味するのである。大都市民俗学は，従来からのありきたりのカテゴリーを都市の諸関係に適用しようと苦心したり，従来の田舎についての収集や調査の方法を都市に移しかえようとのみ試みるかぎり，必然的に袋小路に入って外には出られなくなってしまう。大都市民俗学えとそゝのかされるわけは，伝統，継続性，共同社会といったわれわれの慣用的なカテゴリーや，伝統的なジャンルの諸表現，童話，伝説，聖徒物語，笑語，民謡などがもはや適切なものではなく，多様に新しい物によって置き換えられなければならないからである。

2） Folk-Lore Journal. Bd. 3 (1885), S. 117.

わたしは，自分に与えられた任務にしたがい，うたおよび農村と都市の歌謡文化の差異をとりあげることにとゞまりたい。われわれが今日なお民謡について語ろうとするならば，すなわち，口頭伝承により一文字を介さず伝え

る，そして社会的諸機能を果すような伝承形式について語ろうとするならば，この種の伝承形式が局地限定的に具現される場所として農村が求められる。その基盤としては分業を行っていない農民の経済活動，あるいは前工業的な職人層が存在する。伝統的な「第一の存在」としての民謡は，工業化により狭い後進地帯に押しもどされた。生き生きとした原初的な伝承に関して，われわれは場合によってはまだ民俗慣習の・ないしは子供のうたについてならば語ることができる。「民謡創作のための社会的な基盤は，単純な家計である。人々は自分自身の需要のために民謡を生産し，他の生産物を買うために生産するのではない。ゆえに使用価値が問題になる。本来の意味におけるいわゆる聴衆というものは存在しない。なぜならば，民謡は原則的にそれを生産（創作）する人の製品であり，売りものの商品ではないのだから。同時に，普通は民謡の文字による固定化は行われない。民謡の音楽は一定の生活状況を自然発生的に表現するものとして機能し，特殊な音楽的予備知識がなくても演奏されうる。交換価値と使用価値は未だ区別されていない」[3]。

3） Sabine Schutte : Kunstmusik und Trivialmusik. Eine Problemskizze. In : International Review of the Ansthetics and Sociology of Music. Bd. 4 (1973), S. 81—93, うちとくにS. 88.

さてわれわれはひきつづき都市の民謡伝承のための諸基準をつくりだしてみようと思う。主な特徴として，歌の創作と資本主義的商品生産との結びつきを考えてみよう。都市に発生したうたは需要の充足に役立つのみならず，同時に付加価値の生産にも役立つ。それは，近世の初頭以来，都市の中心にあって，自由な使用に供せられた生産手段の助けをかりて大量に印刷され，広告により宣伝され，一定の販売機構により分配され，市場にもたらされ，そしてこの種々な製品は競争し，結局利潤とともに販売される。都市に由来する印刷された過剰製品としてのうたは，——ビラ，パンフレット，漫画新聞，うたの冊子，葉書，レコード，音楽カセット，流行歌（シュラーガー）

帳など，それがどんな現象形態で現われるかということには関係なく――販売の成功や売れ行きや利潤に関してプログラミングされ，商品としての全條件を理想的な方法で充たす。この性質ゆえに――商品としての性質のゆえに――都市の歌謡文化は，それが由来する土地の経済的社会的現実を構成する要素であり，そして現実を表現するものである。われわれは，農村という環境で民謡が死滅しようとしている伝承領域と，都市の歌謡伝承との相違を，おおざっぱ簡単に，古いものと新しいもの，伝統的なものと近代的なものとの間の対立に環元することができる。その際とりわけ「新しいもの」というカテゴリーを，民謡伝承を分類整理するためにひんぱんに用いることは問題である。「新しい」ということは，中世後期以来の宮廷の変愛歌から19世紀のガッセンハウアーにいたるまで，伝統的な伝承を担う社会層の変遷，革新，更新の酵素として作用した[4]。専門語「一つのあたらしいうた」，「二つのあたらしいうた」は16世紀の初頭以来，都市のうたの印刷伝承財におけるきまり文句，商品記号になった。

Walter Salmen : Das gemachte "Neu" Lied in Spätmittelalter. In : Handbuch des Volksliedes, hrsg. von Rolf Wilh. Brednich, Lutz Röhrich und Wolfgang Suppan, Bd. 2, München 1975, S. 407－420 (Motive, I, 2).

うたの研究においては，都市ではじまった商品「うた」が口頭の伝承に与える影響の問題は，比較的早くから認識されている。すでに19世紀初めにL・A・フォン・アルニム，L・ウーラントやL・エルクの様な収集家や研究家は，この大量に普及した安価なうたの印刷物を用いていた。かれらはこれを第一次的資料，口頭伝承と同じ資格のあるものとみなした。そこで「少年の魔法の角笛」以来の古い民謡出版では，口頭による文字を介さない伝承分野からの記録が多様な印刷物から生まれたものと並置され，同等の権利をもったものとされている。われわれは今日この文字による伝承領域に批判的にたちむかっている。われわれはこれをまず商品，利潤をめざす商品生産者

の製品とみなす[5]。この商品を携えて，生産者は一方では口頭の伝承分野に参加した。かれらもまた口頭で伝わるうたを受け入れ，文字を使ってこれを固定するという次元に転移した。そしてまた他方では，かれらはビラ，パンフレットという媒介物を自由に使うことができた。それらは新しく作られたうた，故意に普及されたうたの固定のためにもたやすく用立てることができた。近世初期以来，よく知られたるものとか，親しまれたるものというみかけのもとに，新しいものが絶えず現われたということは注目すべきことである。新しいテキストは，通常よく知られ流布されているメロディーのコントラファクトゥーアとして作られた。それゆえ内容だけが新しかった。形式は新しくはなかった。印刷物をみると，この新しいうたがすでに人気のあるものと対をなしている。それは新しく採り入れられた作品も，すでに広まっている作品の人気を借りて利益をもたらそうがためである。こうした観点は，歴史的音楽文化の証拠としての民謡印刷物を用いる際，批判的な識見を必要とするものである。

5） Rolf Wilh. Brednich : Das Lied als Ware. In : Jahrbuch für Volksliedforschung. Bd. 19 (1974), S. 11—20.

これに加えてなお別の問題もある。民謡研究は過去において，あまりにも種々さまざまな印刷所による印刷資料の占有と解釈に甘じてきた。しかもこの文字による文献分野が，今日生産と分配の入りくんだ過程のほんの表面的で可視的な小さな部分を，言わば永山の一角を反映しているにすぎないということを考えなさすぎた。文書資料を歌謡伝承の革新，分布，受容の諸事件・過程[6]の一部分の証拠として理解することが適当である。われわれは以下にポピュラーなうたの伝承の革新の中心地としてのハンブルクに眼をむけようとおもうが，うたのさまざまな脈絡関連を踏まえた眺望が明らかにされるべきである。データは——われわれの場合，うたの印刷物と記録であるが——一般的にみて，かなり良く記録され入手しやすいものである。これを防げる

要因は，つゝこんで明らかにする必要がある。

6） Günter Wiegelmann : Theoretische Konzept der Europäischen Ethnologie. In : Zeitschrift für Volkskunde 68 Jg. (1972), S. 169—212, うちとくにS. 207の "Realisierung des Kulturellen in Lebensvollzog" の指示.

あらかじめ言っておかなければならないことは，徹底的な研究が基礎にあってこの報告がなされているわけではない，ということである。そうした研究は普通はハンブルクに居住してのみ行うことができるのである。本報告は，ためになりかつ多様な，今後の集中的研究が必要とする資料を提案しておこうというものである。ハンブルクの民謡に関する研究の模範として，ルーカス・リヒターのベルリンのガッセンハウアーについての論文が役立つであろう[7]。この本はベルリンの様な大都市の住民もまた共同創作の多様な形式を通して，歌謡伝承の発生と普及に深い関与をなしうるという事をわれわれに証明する。ベルリンのガッセンハウアーは，大都市のうたのもつ紛れもないある特殊性を持っている。それは批判的で小生意気な言葉によって特徴づけられ，この言葉によって群衆がうごくという効果が発揮される。そして北部，中部ドイツの広範な領域がこのうたの放射を拒否できなかった。ベルリンから発した，あるいはベルリンで変形された，短命の，あるいは時折は実に命のながい流行歌は，19世紀以来すべての技術的手段に支えられていた。娯楽産業は当時すでにこの技術的手段を短期間にうたを大衆化するために利用したのであった。

7） Lukas Richter : Der Berliner Gassenhauer. Darstellung, Dokument u. Sammlung. Leipzig o. J. (1969).

似たようなコミュニケーション伝達路線と散布の手段は，他の都市においても提供されていた。われわれの見聞によれば，ハンザ同盟都市ハンブルクもわれわれがとりあげようとする一連の都市に入る。これらの都市は，その

特殊なかけがえのない歌謡文化を，自分のものだと誇示し，都市周辺のうたの文化生活に決定的に大きな影響を与えていた。ハンブルクに由来する大都市の作品（うた）に対して偏見をもたず査定し，評価するため当然もたなければならない前提は，われわれがあらかじめある評価や先入見をもつということなしにこの作品に取りかゝることである。都市のガッセンハウアーは，うたの研究においては全くすたれたものとみなされていた。そしてまたこのうた自体，60年前にはありふれた評価を受けていたにすぎない。アントーン・ペンケルトはこゝに独特の強烈な光を当てたのであった。かれはいわゆる「音楽のエロ本」に鋭くせまった人である。かれの1911年に発刊された本，「裏街のうた」から引用してみよう。この点に関して啓発的に思えるのである。「古い，小路の多い，もうゆるく傾いた壁〔＝ハンブルクの昔からの部分〕に，最近の，平板きわまりない，低俗至極なうたが響く。そのうたは，やっと数週間まえに印刷所を出て，おそらくあっというほど短い期間に忘れられ，思い出のうたとしてすらほとんど関心を持たれなくなるであろう。文化の継続と価値が保たれる所があるかと思えば，また一方こゝにはうつろいやすさと無価値しかない。最悪なことに，裏町自身は大都市の生活の流れからほとんど置き去られているというのに，その裏町のうた自体は，最も狭いが最も広く行きわたっている。最も古くからありながら最も新しくつくられる裏町通りを通って，自由にそして厚かましく一人よがりにこのうたは流れてゆくのである」[8]。ペンケルトとその同時代人にとって，裏町のうた，ガッセンハウアーは，「高貴なるものではなくなった民謡の末裔」[9]であった。本格的な研究は，こうしたうたにかゝわってはならなかった。―― われわれはこうした前時代研究者をみならおうとはしない。われわれは意識的にハンブルクの裏町のうたを考察の対象に含める。むしろ中心点におきたいと思う。

8） Anton Penkert : Das Gassenlied. Eine Kritik. (Kampf gegen musikalische Schundliteratur. H. I.) Leipzig 1911, S. 5.

9） 同S. 7

大衆的な歌謡諸伝承のイノヴァツィオーンスツェントェルムとしてのハンブルクが機能するための外的な諸前提は，16世紀前半にとゝのえられた。この町に能力のある印刷業者が定住し[10]，この業者がうたの印刷物の拡散にかゝわりをもちはじめたのである。1968年W・カイザーとC・デーンにより，16世紀ハンブルクの印刷物文献目録の中に編集された[11]，最も古いハンブルクのうたの印刷物は，主として中世低地ドイツ語の言葉の装いをした世俗の歌集およびまばらな宗教歌集である。それら印刷物は，ヨーハン・ヴィッケルト d. J.，ヨーハン・ロー（？）やハンス・ビンダーの印刷所で刷られ，木版画の飾りをつけたありふれた八ツ折り判で現われた。それらを本来の新刊ものと呼ぶことはできない。なぜなら，それらは大抵すでに前に南部ドイツの印刷所において，高地ドイツ語で印刷されたものである。ハンブルクで生じた明らかな事実は，低地ドイツ語への変形であった。それは一つの，例えばルターのうた[12]の場合には特に重要な事象で，受容のための本質的な前提であった。16世紀の，部分的にはまた17世紀の歌謡生活におけるハンブルクの状況は，本質的なイノヴァツィオーン（革新）の中心地としてよりも，むしろうたの復活再生の中心地である。17／18世紀のハンブルク研究にとっては，歌謡伝承に関して頼りになる文献的基盤がない。非常に多くのものが失われとり返しがつかなくなってしまったように思われる。なぜならば，うたを一編一編載せた印刷物に関する古事収集の関心は，18世紀から19世紀への転換期にはじめて発生したのである。

10） J. M. Lappenberg : Zur Geschichte der Buchdruckerkunst in Hamburg. Hamburg 1840，とくにS．110 ff.

11） Werner Kayser-Claus Dehn : Bibliographie der Hamburger Drucke des 16. Jahrhunderts.(Mitteilung aus der Hamburger Staats-und Universitätsbibliothek. Bd.6) Hamburg 1968. Lieddrucke S. 157—162, Nr. 351—366；また Conrad Borchling-Bruno Claussen : Niederdeutsche Bibliographie. Bd. 2：1601—1800. Neumünster 1931—1936, Nr. 4697 ff. 参照。

保存されている資料の重点は19世紀にあるから，われわれはこの時代に関心を集中させる。18世紀の終末の状況を簡単に回顧することからはじめよう。こゝでは，新しいものの最も重要な仲介物としてとくに「社交のための（または無邪気な）新しい歌集」に触れておこう。この本は上流階級用の歌集として，全北ドイツに普及した。こゝからわれわれは，この本が社交の集まりの際みなで一緒にうたうテキストとして用いられたことを知る[13]。

13) H. R. Ferber : Die Gesellschafts-und Volkslieder in Hamburg an der Wende des vorigen Jahrhunderts. In : Karl Koppman(Hrsg.) : Aus Hamburgs Vergangenheit. Hamburg 1885, S. 27—75 とくにS. 30 ff.

（昭和51年5月20日受理）

＊） フライブルク大学（西ドイツ）民俗学科教授・ドイツ民謡文庫主任研究員
＊＊） 日本独文学会々員

「ヘンリー八世」地誌考（後篇）

竹　内　　豊

Shakespeare's Place-Names Commentary Henry Ⅷ (Part Ⅱ)

Yutaka Takeuchi

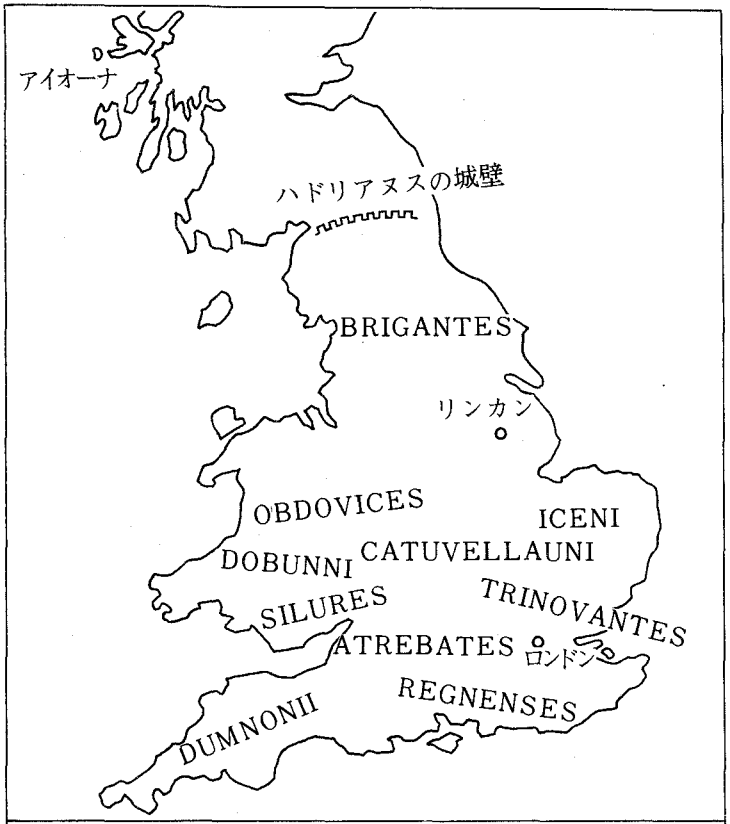
29 Kildare　Ⅱ．Ⅰ．41　　53.10 N　6.55 W

アイルランド語でキル・ダラ Cill Dara。アイルランド共和国レンスター県 Leinster の一州。主都も Kildare でこれも同じくアイルランド語で Cill Dara。首都ダブリン Dublin の南西約 50 km にある。この地には 5 世紀に聖ブリジッドによって建てられた教会がある。今日アイルランドの守護神となっているブリジッド Brigid(または Bridget, Brigit. Brighid, Bride, Brigida, Brigitta)は 451 年から 453 年の間にアイリッシュ海 Irish Sea のダンドーク湾 Dundalk Bay の口にあるダンドーク Dundalk（アイルランド語で Dun Dealgan）の近くで山賊の女奴隷の子として生まれたが，レンスター県の王の力で自由の身となったといわれる。聖パトリック Patrick (ca. 387～ca. 461) に深く師愛した。ブリジッドがこの町に建てた女子修道院はアイルランドの宗教と学問の中心となった。彼女は 523 年の，あるいは 525 年の 2 月 1 日にこの地で没し，その日がその祝日 St. Brigid's Day となっている。パトリックについでのアイルランド守護聖人である。

30 Lincoln　Ⅱ．Ⅳ．ト書　　53.14 N　0.33 W

ローマ占領時代にはリンドム Lindum とよばれた。ローマ皇帝クラウディウス Claudius[1)]が 43 年にブリテン島に親征したが，その 7 年後の 50 年にこ

のリンドムにローマ第9軍団の駐屯地が設けられた。この駐屯部隊は60年頃ローマに対して一大叛乱を起したイケニ王国Iceniの女王ボウディッカ Boudicca[2]の鎮圧に成功はしなかったが勇敢にその叛乱地に向ったのが紫と白の軍服をつけたこのリンドム駐屯の第9軍団ヒスパナ Legio IX Hispanaの精鋭であった。ロンドンから約209 km, 汽車で約2時間半のところに位置する。リンドムの名の由来はローマ時代より更に早くケルト語で *Lindon* とよばれていた。語の前半は *llyn*=pool, lake という地勢上から生じたもので、ノーフォーク州のキングズ・リム King's Lynn 市も同じである。この池・湖の意



ローマ支配期のブリタニア諸国

味は、*Lindon* の場合はこの辺りを流れるウィタム川（またはウィザム川）Witham の川幅が広くなったことを示したことに発している。語の後半も同じくケルト語で小山の砦 hill fort を意味するが，正しくこのリンカン市は高さ約 63 mの丘の中腹に建っている。ローマ時代こゝに植民市が建設されたことから *Lindum colonia* とよばれ，これが縮って今日の Lincoln になったのであるが，その間の変遷は次のように記録される。ベーダーはその『英国民教会史』 *Bede's Ecclesiastical History of the English Nation* の中で *Lindocolina*（ca. 730 年），『アングロ・サクソン年代記』(注 17 参看)は *Lindcylene*（942 年），そして *Domesday Book*[3] には Lincolnia（1086 年）と記録されてきたのである。

ローマ人の後にはサクソン人，デーン人もこゝに拠った。ノルマン人の征服の後，ウィリアム征服王は 1068 年に早くもこの地を戦略上要衝な地としてここに城を築いた。またリンカンは当時既にロンドン，ウィンチェスター（第 38 項参看），ヨークにつぐ重要都市であり，13 世紀頃にはロンドン，ヨークにつぐ大都会（といっても人口 3,000～4,000 人。ただロンドンだけは桁はずれに大きく約 40,000 人）であり，この国 4 番目の海港となっていた。リンカンが海港であったとは驚くことでもあろうが，正しくその通りであって，このウィタム川の川口のボストン Boston は 13 世紀にはイギリス第 2 の海港であったのである。それはこの辺りが沼沢地帯 Fens といわれる海抜 0 ないしマイナスのような低い地帯で，その昔は大陸とつながっていたところで、北海から湾入しているウォッシュ湾 The Wash はかつてライン川の三角洲の一部であった。このように地勢が対岸の大陸のオランダに似ているので早くにオランダ人が移住して風車を作り，レースを編むなどオランダ的生活が行われるばかりでなく，住民にも今もオランダ風の顔立ちが目立つのである。そうしてリンカン州の一部でウォッシュ湾に臨む低地一帯は Holland の名とさえなっているのである。

リンカンの町は既述のように小丘の中腹に出来ているが，この町で一番壮大なものはリンカン大聖堂 Lincoln Cathedral である。これは市内の中心部に

して，しかもどこからでも仰ぎ眺められる位置にあって，ウィリアム征服王の築いた城と対峙する恰好で建てられている。大聖堂の祖たるものは1075年～1090年頃司教レミギィウスRemigius[4]によった初期ノルマン式教会であった。1141年の火災後司教アレクサンダーAlexander[5]の手で後期ノルマン式に建て代わったが，1185年の地震で完全に破壊された。しかしこれは一つの聖堂を全く新しく建直す機会となった。時の司教ヒューHugh[6]の計画によって1192年再建・拡張が始められ，1世紀以上の歳月と莫大な金，それに人足が費されて1307年完成した。これによりヒューの名は英国建築史上にも偉大な建築家の一人として留まることとなった。特に「聖ヒューの合唱席」Choir Stallsと，一対の塔とその背後に更に一つの大きな塔が加っての3つの塔が小高い丘に天を指す西正面は圧倒的景観を呈し，全体はノルマン様式の構想の中にもすぐれたゴシックの初英式Early-Englishと文飾式Decoratedを有し，主塔の高さは約89mとやや低いがイギリスでも最も雄大な聖堂の一つとなっている。ゴシック建築に見られる鬼・怪獣の形の屋根の水の「落し口」（「樋の口」）Gargoyleの中にはフラーFuller[7]によると「ひどくこわい，いかめしい顔付きでリンカンの町を見下している悪魔」'Devil looking over Lincoln with a torve and tetrick countenance' もある。

リンカンは昔ロビン・フッドRobin Food[8]の一味が着用したことで名高い鮮緑色のラシャ，いわゆるリンカン・グリーンLincoln greenを産したところでもある。

31 Ely II. Ⅳ. ト書 52.24 N 0.16 E

語源はOE*æl-gé, él-gé*=eel district。ベーダーは『英国民教会史』の中で「湿地帯で獲れる沢山のウナギからイーリィの名は生まれた。*'Ēl-gé'*が早い時代に*'élég'*，すなわち'eel island'（ウナギの島）となった」（4－19）と述べている。

ケィンブリッヂ市から北へ約26km，ウーズ川Ouse[9]というよりももう既に上流となってケィンブリッヂ川となっている川の左岸（西側）に位する

小さな町である。リンカンの町と同じように今日 Isle of Ely なる名は単なる行政上の一区劃を示す名であるが，その昔にはその名の通り一帯沼沢の中の島で，イーリィの僧院は船で渡ったと記録されている。この地方は今日こそ海から離れていてリンカンの場合と同じように意外と思えることであるが，イーリィより更にあれ程内陸に引込んでいるケィンブリッヂでさえかつては海と結んでいた港であった。さてこの町は大聖堂の町でそれはほんの小高い丘にありながら辺りを睥睨し，その規模の大きさと建築学上の特色で有名である。全長ではウィンチェスター大聖堂の約 158 mに次いで第 2 位の約 156 mである。因みに英国国教の総本山であるカンタベリ大聖堂の全長は約 155 m，カンタベリに次ぐ北の総本山ヨーク大聖堂のは約 146 mである。

大聖堂の原型は 673 年世を厭い人を避け俗界の関心を去って，ただキリストの教えに籠ろうとして，こゝの尼僧院長となったエゼルスリス Ethelthryth[10]がここに修道院を建設したのによっている。1081 年ウィリアム征服王によってここの修道院長に任ぜられた高僧にして大建築家のスィミオン Abbot Simeon が 1083 年聖堂の建設を始め，作業は更に引きつがれて大方完成したのは 16 世紀である。それ故に様式もノルマン式，初英式，文飾式，垂直式が渾然一体となってみられる。特に中央の八角塔 Central Octagon は 4 ヶの大きなアーチからなっていて，ゴシック建築にみられる最も美しく，最もオリジナルな姿を呈している。イーリィの大聖堂もヨーク，リンカン，ダラムの大聖堂と同じく西から東にかけて同じ高さの屋根を有し，それが大きな船の走るような，またライオンが疑視したまゝ休んでいるような均整のとれた美しさと雄壮さを表している。

32 Rochester　II．Ⅳ．ト書　51.24 N　0.30 E

カンタベリ，ドーヴァーに通ずる国道 2 号線をロンドンのハイド・パークを基点としてそこから約 50 km 東南東に下った地で，いわゆる「英国の庭園」The Garden of England[11] といわれる美しいケント州にある町で人口約 55,000 (1971)，メドウェイ川 Medway の右岸にあるが，川は丁度ここでこの町

を囲むように蛇行している。43年クラウディウスのブリタニア遠征軍が苦境に追い込まれたのは実にこの川の手前であった。

Rochesterはローマ時代ドゥロブリーバェ Durobrivaeの名であった。これはローマ人が築いた砦 *duro* = stronghold + *briva* = bridgeから出て 'the bridges of the stronghold', 'walled town at the bridges' の意をあらわしていたように古くにローマの橋があった。OEでは *Hrofescaster* の名となり，ベーダーは『英国民教会史』に *Hrofaescaestre* と誌している。*Hrofi* はローマ人の築いた砦の意で，それにローマ人の住む町をあらわす *caester* がついたものであり，古くからロンドンとドーヴァーを結ぶウォトリング街道 Watling Streetが通っていた要所でもあった。このようにこの辺りはロンドンと大陸とを結ぶケント州の海港と交わる重要な地点であるばかりでなく，地味豊かな「英国の庭園」でもあったので紀元前52年頃ガッリア・ベルギカ Gallia-Belgica（今日のベルギー地方）からこの地に渡ってきたベルガエ人 Belgaeの居住地となり，彼等はこゝで農業を営んでいた。また彼等は大陸のガリア人と絶えず連絡をとりローマ反抗に力を貸していたことが紀元前55年のシーザーのブリタニア遠征を導いたといわれる。

またこの地は王政復古によって流浪先きのフランスから帰国するチャールズ二世が1660年5月25日ドーヴァーに上陸し，ロンドンに都入りする5月29日に一泊したところである。また1688年12月23日チャールズ二世の弟で反動・暴虐・専制の限りをつくしたジェームズ二世がフランスへ亡命する船出の地ともなった。更にこの地はチョーサーの『カンタベリ物語』*The Canterbury Tales* の順礼の一行がカンタベリへの4日の行程の2日目の宿をとった町である。

町には11世紀に，正確には1077年3月19日から1108年3月8日のその死までこの地の司教であって，誠実な信仰の他に優れた建築技術を備えたガンダルフ Gundulf[12]がウィリアム征服王の次子で「赤顔」Rufusの渾名をもったウィリアム二世の命で建てたノルマン様式の城がメドウェイ川に面している。これは更にカンタベリの第38代大司教ウィリアム・ド・コーベル

（またはコルベイ）William de Corbeuil[13]の手によって隅塔Keepが備えられた。その後欠地王ジョン，ヘンリー三世の攻囲にあって壊われ，エドワード四世が修復したが，間もなく衰廃し，今日では厚さ3.6 m，高さ36 mの四角形の隅塔が残る公園となっている。

今一つこの町の建造物に聖堂がある。規模は主塔の高さが約47 mで他の聖堂に比べると可成り低く（英国で最も高いソールズベリ大聖堂の塔は125 m）全体に小さいが，カンタベリ大聖堂と同じように2つの外陣を備え，またその歴史も古い。604年この辺りでキリスト教の布教につとめた聖アウグスティヌスのために当時のケント王エセルベルトが建てたのがその最初であったが，後デーン人によって一部が壊わされた。1082年ガンダルフがこゝに新しい教会堂と修道院を建てた。更に1114年にこゝの司教に任ぜられたエルヌルフ Ernulf[14]が修営し完成させた。その後1125年から5年がかりでノルマン式西正面が，1352年（1343年頃ともいう）に中央塔が建造されたが，更にこの塔の上に尖塔が15世紀になってつけられた。今日見られる主塔は19世紀に旧塔と同じに再建されたものである。

33　St. Asaph　　II. IV. ト書　　53.16 N　3.26 W

北西ウェイルズのフリントシャー Flintshire，クライド川 Clwyd の左岸の人口2,000足らずの小村。また英国で最も小さい聖堂がある。この聖堂は560年頃この地に司教管区がおかれたに始まる。596年頃没したといわれるアサフ Asaph（または Asaaf, Assa, Asa）なる修道士が修道院を開き，それが今日の聖堂の基となった。この地の元の名は Llanelwy（語頭の *ll* の発音はウェイルズ人にしか出来ない）であったが，1100年頃から St. Asaph の名に変わり，大司教がおかれている。St. Asaph その人の祭日は5月1日である。

34　Bayonne　　II. IV. 170　　43.30 N　1.28 W

バイヨンヌ。ビスケー湾に面しスペイン国境に近いフランス最南西に位置する港町であり，交通の要所。人口約45,000（1968）の化学工業都市。ロー

マ時代から開け当時の城壁や中世の城壁も残っている。1199年から1451年までイギリス領であった。

35 Orleans II. Ⅳ. 172 47.54 N 1.54 E

オルレアン。フランスのオルレアン県の中心都市で，パリ盆地の南部。パリから南120 km，フランス最長のロアール川の北岸に,「フランスの庭園」の沃野をひかえ農産物の集散地として発達した町で人口約95,000（1968)。ロワール川とセーヌ川の近接する部分で交通の要所・要害の位置ばかりでなく，大西洋からの帆船の遡航が可能であって長い間パリと競い合い，17世紀にはパリを凌いで栄えた町であった。ローマ時代軍道の渡河点として既に栄え,古来戦略的にも重視されたところで,この町の運命がフランスの国運でもあるとさえいわれた。古くは紀元前52年シーザーのガリア征討に反抗した中心地であって，この時ケナブム Cenabum の名のこの町は破壊された。その後「世界の再建者」 *Restitutor Orbis* と讃えられながらも非業の最後をとげたローマ皇帝アウレリアヌス Lucius Domitius Aurelianus（ca. 214～275. 9. r. 270～275）が再建し，町の名は Aurelianum となった。これが今日の名の由来である。この町は百年戦争の中心地として史上に現われ，この町の抵抗は国民の奮起をよび，更に「オルレアンの少女」の別名をもつ奇蹟の少女ジャンヌ・ダルク Jeanne d'Arc が1429年4月29日突如としてこの町に現われ，祖国を救う転機となった。市の中心広場に彼女の勇壮な騎馬像がある。本劇の Duke of Orleans はフランシス一世（フランソア一世 François 1494. 9. 12～1547. 3. 31. r. 1515～1547）の第2王子のことである。

36 Alençon Ⅲ. II. 85. 48.25 N 0.05 E

アランソン。フランス西部，オルヌ県 Orne の県庁所在地で人口約33,000（1968)。レース・麻・毛織物等の生産を中心とした農産物の主要なる中心地となっている。ル・マン Le Mans の北約50 kmでカーンへの中間に位置している。劇中ウルジーはこのアランソンの女公爵とヘンリー八世との結婚を望

んだが，その時既にこの女公爵は他に嫁いでいた。

37　Asher-house　Ⅲ．Ⅱ．231.

'Asher' というのは 'Esher' の古い呼び名であり，この家はハンプトン・コート（『前篇』注25参看）の近くにあって，ウィンチェスターの司教のものであった。

この時既にこの家はウルジィのものとなっていたものであったが，シェイクスピアはホリンシェド Holinshed[15]の記述を逸脱して誤用した。

38　Winchester　Ⅲ．Ⅱ．231.　51.04 N　1.19 W

今日ではハンプシャー Hampshire (Hants ともいう）の主都であるが，英国で歴史上最も大きな地位を占めた都市の一つで，また古い時代のイングランドの首部でもあった。すなわち519年にウェセックスの首都となり，829年頃にはこゝの王エグバート Egbert[16]が一応イングランドを統一し，更にその後アルフレッド大王 Alfred the Great[17]をはじめ諸代の王の首都たる地位を保った（注26の附図参省)。またデンマークから侵入し1016年イングランド王となったクヌート Cnut[18]はこの地で王冠をいただき，またこの地に埋葬されている。1043年にエドワード証信王もこゝで戴冠し，ウィリアム征服王はロンドンを合せてこゝに首都たる地位を与え，自分の戴冠式をロンドンとこのウィンチェスターで行っている。このように約12世紀までは政治・経済・産業上ロンドンを凌ぐ都市であってヘンリー一世，ヘンリー三世，ヘンリー四世などがこの地で生まれている。今日この町の中心ハイ・ストリートに大きな石の台座に有名な彫刻家ソオニクロフト Thornycroft[19]の手になるアルフレッド大王の大きな立像があるが，町全体はまことに静かで住時の繁栄を偲ぶこのとが出来ない人口僅か62,000（1971）の町に過ぎない。

位置はロンドンから国道31号線を西南西に約97km，鉄道ではロンドンのウオタールー駅から約90分の行程である。ローマ時代はヴエンタ・ベルガルム Venta Belgarum の名であった。Venta の意はかってはラテン語の *ven-*

dere = to sell から生じて 'market town' を意味し，全体は 'market town of the Belgic tribe' と説く筋もあるがケルト語学者はこれを認めていない。別説に *ven-* は enjoy, love を意味するケルト語で，これに Roman fort を意味する *ceaster* がついてサクソン時代に Wintanceaster となったのが今日のこの町名の由来ともされる。ローマ人の砦といわれるのはイチン川 Itchen の谷を見下ろすチョークの丘陵地帯が早くから開け，こゝにローマ人が要塞を築いたからである。

この町の由緒ある建物は大聖堂とパブリック・スクールの Winchester College である。

有名な大聖堂は 648 年に時のウェセックス王ケンウァル Cenwalh[20]がその基である St. Peter 教会堂を建て，852 年から 10 年がかりで拡張され，更に 10 世紀に大々的に建てかえられたが，なかでも 1367 年から 1404 年こゝの司教であったウィカム William of Wykeham（または Wickham）と 1447 年から 1486 年の司教のワンフレット William of Waynflete[21]の力が大きい。そうしてこの聖堂はローマのヴァティカン聖ピエトロ大聖堂の約 186 m を除いては中世の聖堂の中でヨーロッパ随一の長さ約 159 m を誇っている。

ウィンチェスター・コレッヂは 1382 年ウィカム司教の創立するところでイギリスのパブリック・スクールで最古の歴史を有し，ヘンリー六世創立の名門イートン校の範ともなった名門校である[22]。ウィカムはハンプシャーのウィカム Wickham で生まれ，生年は 1324 年の夏のある日、それは 7 月 8 日から 9 月 27 日の間とされている。1367 年から没年の 1404 年 9 月 27 日までウィンチェスターの司教であり，その間 1368 年から 1371 年までと，1389 年から 1391 年までの 2 度大法官を勤めた。この人は教会よりむしろ王の官僚であり，当時の人々の言葉を借りて云えば，キリストよりもむしろカイサルに奉仕したのであった。またこの人は特に教育者としての偉業を残し，先述のウィンチェスター大聖堂の建設，ウェンチェスター・コレッヂの創立，更にオックスフォドのニュー・コレッヂの創立も行っている。ウィンチェスター・コレッヂは規律と古典の学習に重点がおかれ，その気風は世相の荒れ

た今日でも変っていないことをわれわれは町の通りで感じとることが出来る。こゝの卒業生は特にウィカミストとよばれ，オックスフォドのニュー・コレッヂに進むのが多いが，それも当然のことであろう。

39 Flanders　III. II. 319.

ベルギー西部を中心に北はオランダ南部，南は北西フランスの一部にかけての北海に臨む海岸の低平な地帯。9世紀の古くから商業と毛織物工業の栄えた地方で，百年戦争の原因はイギリスからこゝに入る羊毛にあったといわれるが，今日も尚麻・毛織物・綿生産が盛んである。また休閑地をつくらない新しい輪作農法が18世紀にこの地方から広まり，今日ヨーロッパ第一の園芸地域である。住民は主としてフランス人。この地はローマ人やゲルマン人の支配を受けた後様々な支配の変遷を経たが，1830年ベルギー独立後は一部がオランダとフランスに属した他はすべてベルギー領となっている。主要都市はヨーロッパでも中世の面影を最もよく残し，またベルギーのベニスの名でよばれるブリュージュ Bruges と，同じく運河の街の眺望が美しいガン Gand 及びイーペル Ypres。

この地名はわが国ではイギリスの女流作家ウィーダ Ouida（本名 Marie Louise de la Ramée）の作品『フランダースの犬』*A Dog of Flanders* で英語読みの‘フランダース’で知られているが，美術・建築の分野では‘フランドル派’とフランス語読みを通している。尚ベルギーではフランス語が話されるが，1916年頃からそれが政治問題となり始め元来のフラマン語 Vlaams を使用する傾向が強くなってきている。Flanders はフラマン語ではヴラーデレン Vlaanderen である。上記のブリュージュなど3都市はそれぞれフラマン語ではブリュッゲ Brugge，ヘント Gent，イープル Ieper となる。

40 Dunstable　IV. I. 27.　51.53 N　0.32 W

ロンドンからチェスターに向う国道5号線をロンドンから出て間もない約51km北上した地点。ベッドフォードシャーにある。Dunstable の名の由

来はベッドフォードシャー一帯がもともと沼沢地帯の一部であるので大して高くもない地点でも高く感ぜられることにある。すなわち dun = hill + stable = stand, state, -ble である。ウェルズ Wells[23]ならずともわれわれは物事に比率というものがあることを念頭に入れておかねばならないだろう。

ヘンリー一世の建てた修道院があったが，これは後にノルマン様式と初英式を代表する Church of St. Peter and St. Paul に改造された。1533 年 5 月 23 日ここで当時のカンタベリの大主教クランマー Thomas Cranmer はヘンリー八世と王妃キャサリンの婚姻の無効，すなわち離婚を宣言した。クランマーは 1489 年 7 月 2 日に生まれ，ケィンブリッヂのジーザス・コレッヂ Jesus College に進み，卒業後こゝの特待研究員 Fellow となった。ヘンリー八世の離婚問題で王に有利な提言をしたことから王の殊遇を得て，1533 年 3 月プロテスタントとして最初のカンタベリ第 69 代大主教となった。ダンスタブルで王とアラゴンのキャサリンの離婚を宣し，同時に王とアン・ボレーンとの結婚の合法性をも宣告した。奴隷根性のクランマーは更に 1536 年に王とアン・ボレーンの結婚の無効を宣し，1540 年には王とその 4 番目の妃クレーブスのアン Anne of Cleves[24]の結婚と離婚とを認め,1542 年に彼は王の 5 番目の妃キャサリン・ハワード Catherine Howard[25]を姦通罪での死刑を宣している。ヘンリー八世没後エドワード六世の摂政となったが，次に即位したメアリー女王によって母の仇とばかりに反逆罪に問われ，1556 年 3 月 21 日オックスフォドのベイリオル・コレッヂ Balliol College(1266 年創立)の向いの溝に設けられた火刑場で焚刑に処せられたが，その死は毅然とし従容たるものであった。今日その場所を記念して高い「殉教者碑」The Martyrs' Memorial が建てられている。

41 Ampthill Ⅳ. Ⅰ. 28. 52.02 N 0.30 W

ダンスタブルと同じくベッドフォードシャーにある。ダンスタブルとの距離は約 10 km。ロンドンの北西約 67 km。Ampthill Castle はヘンリー六世の治世にこの地の貴族ハアンポープ Fanhope によって建てられたもの。Fan-

hope なる人物については，*The Oxford English Dictionary*（略して*OED*。またの名 *New English Dictionary on Historical Principles; founded mainly on the materials collected by the Philological Society.* 略して*NED*）と並んで英国の国民的大編纂である *Dictionary of National Biography* にも記載がないので不明。

アラゴンのキャサリンは 1531 年から 1533 年までこの地でその失意の日を過した。

42　Dorset　　Ⅳ．Ⅰ．35 からⅣ．1．36 の間

イングランド南部沿海地方の一州でイギリス海峡を距ててフランスのノルマンディ半島に面している。一部がチョーク層の台地からなる豊かな土壌に恵まれたこの州は英国の代表的農産物の生産地である。州の西にあるポートランド島 Isle of Protland は島とはいうものの実は石灰岩からなる長さ 6 km，幅約 3 km の半島で，この国で有名な保養地のウェーマス Weymouth から陸続きである。トーマス・ハーディによって「ウェセックスのジブラルタル」The Gibraltar of Wessex といわれた。島内にウィリアム征服王の建てた荘園が残り，また 1520 年ヘンリー八世の手になる Portland Castle がある。この島は建築石材の産地として有名で，ロンドン大火後，クリストファー・レンがセント・ポール寺院などの建造にこゝの石を大量に使用している。今日尚，石材の生産が行われている。また有名な刑務所があってその囚人は第一次大戦後まで石材の採堀に使われていた。今日刑務所の近くに当時の馬車鉄道の線路の跡が残っている。A・E・ハウスマンは次のように歌っている。

The star-filled seas are smooth to-night
　　From France to England strown;
Black towers above the Portland light
　　The felon-quarried stone.

満天の星をうつした海が今宵ないで
　　フランスからイギリスへ拡がっている。

ポートランドにそそり立つ黒い塔が
囚人が堀り出した石を照らす。 (*A Shropshire Lad* LIX)

43 Cinque-ports Ⅳ. Ⅰ. 35からⅣ. Ⅰ. 36の間

ドーヴァー, サンドウィッチ, ハイス Hythe, ロムニー Romney, ヘースティングズの五港からなる連合町域をいう。チョーク層が海岸にまで迫って砂浜となっていない崖状の地形のところに発達した港で, ノルマン人のイギリス征服以前に開けた。この五港の名はエドワード証信王の時か, あるいはそれより早い時期につけられたものらしい。中世に早くも漁業と, 大陸との交易を掌握していて, それに伴って種々の特権や免除を有する代りに, 一朝有事の際には一定の船舶を王室の用 royal fleets に供する義務があった。五港は大守 Lord Warden の司るところで, その居館はウォールマ Walmer の古城であった。大守の中にはウィリアム・ピット William Pitt (1802～3 在任), ウェリントン公 Duke of Wellington (1829－52 在任), ウィンストン・チャーチル Sir Winston Churchill (1941～1965 在任)がいることからも, この大守の職は国家の元勲に名誉職として与えられる程高いものであることがわかる。

1 Sandwich

町の建物の多くに見られるライオンと船とを組み合わせた紋章がこの町が五港の一つであることを示している。こゝは紀元前 54 年シーザー英国侵改の上陸地点の一つともされている。また 1170 年トマス・ア・ベケットが亡命先きのフランスから帰国したのはこの港にであった。人口約 4,000 人 (以下いずれも 1971 年調査)。

2 Dover

五港のうちで最も主要な都市で現今人口約 34,000 人。この地はローマ時代から重要な地点で今日も大陸との最短距離 (フランスのカレーとの間は約 35 km) の発着港としてその重要性は変らず, またカンタベリを経てロンドンに通ずる道路 (ウォトリング・ストリート) の起点である。ロンドンから鉄道で 124 km。この地を表わす地名が古くから記録されていることもこの地の重

要性を示すものである。すなわち，ラテン語で *Dubrae, Dubris, Portus Dubris,* OE で *Dofre, Dofere* である。

この町の東にある 112 mの白亜層の断崖に立つ Dover Castle はその基が紀元 50 年頃ローマ軍団によって築かれたとされる。また町の西部にある高さ 115 mの断崖の一部は「シェイクスピアの崖」Shakespeare('s) Cliff といわれるところがあるが，これは『リア王』*King Lear* の副筋の主人公グロスター伯 Earl of Gloucester が自殺をはかって果し得なかった（第 4 幕第 6 場）場所とされて今日名所となっている。

3　Hythe

人口約 11,000 人。夏期行楽地として人気がある。この町の役場には五港に関する歴史的諸文書が蔵され，また博物館には中世時代の度量衡の道具が陳列されている。

口頭教授法 Oral Method の主唱者であり，1922 年 3 月文部省語学教育顧問として来朝し，わが国英語教育に絶大な貢献をしたパーマ Harold E. Palmer はこの町に生まれた。

4　Romney

五港の一つであったが 1287 年海嘯に襲われて港は破壊されてしまい，今日港たるの実を失っているが，五港についての多くの記録はこゝにも保存されている。人口約 7,000。今日町名は New Romney と変っている。

5　Hastings

港は浸蝕を受けてなくなり，かつて五港の一つであった面影は今はなく，ドーヴァー海峡に臨む凹地状の斜面にひろがる美しい風景と冬期間温暖な気候のため今日別荘地・行楽地・避寒地として知られ，海岸線に沿ってのたたずまいは地中海沿岸の保養地の様相を呈している。この町が何よりも有名なのは 1066 年 10 月 14 日ウィリアム征服王の戦勝地としてである。人口 72,000。

44　Whitehall　Ⅳ．Ⅰ．97 『前編』20 York Place 参看

45 Northumberland Ⅳ. Ⅱ. 12

アングロ・サクソン時代にノーサンブリアの一部であって今日もその名の通りイングランドの最北部を占める。主都はニュー・カッスル・アポン・タインである。面積 5,180 km², 人口は約 794,000 (1971) の人口稀薄で，特に北部や西部はイギリスの中でも最も機械文明に縁遠いところである。地形・気候共に農業に適さず耕地面積は総面積の 15%に過ぎない。牧羊が主産業であるが，13 世紀頃から東南部に開発された炭田に伴い諸々の工業が興り，工業都市の出現をみた。

ノーサンバーランドにおいてわれわれ英語学徒に関係深いものに次の 3 つがある。

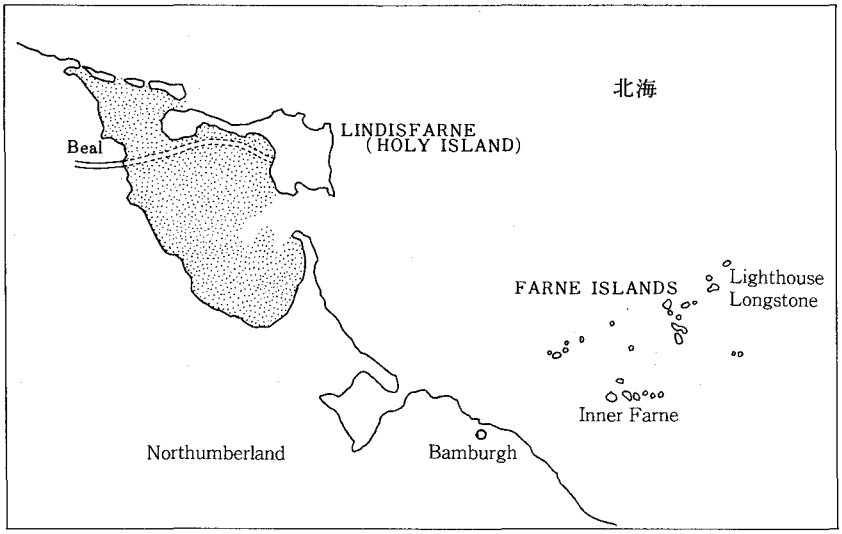
1 この州の北端に近く北海にあるリンディスファーン半島 Lindisfarne である。これは別名聖島 Holy Island といってイギリスにおけるキリスト教の聖蹟である。こゝは満潮時には島となるが，干潮時には徒歩で通れるところであって，こゝに渡るベースの町ベェリック・アポン・ツィード Berwick-upon-Tweed の市内各所にその日の潮の干満表が掲示されている。

かつてノーサンブリアの王であったオズワルド Oswald[26] によってアイオーナから迎えられた修道士エーダン St. Aidan (または Aedan) がこの島に司教座を定めた。彼がノーサンブリアに迎えられたその当時はこの国がローマから派遣されたパウリヌスによってキリスト教に改宗したばかりの頃であった。彼はリンディスファーンに教会堂と修道院を建て，更に宣教師を育てるための学校も建て，12 人の少年が当時教育を受けた。彼はパウリヌスが既に播き育てていた基盤と王オズワルドの友情と理解の上にたってキリスト教を布教することが出来たが，何にもましてその成功は高徳な彼の人柄にあった。人格の高潔さ・学問の深さ・布教の熱心さ・数々の奇蹟についてベーダーはその『英国民教会史』で詳しく讃美している。またエーダンがこの島の司教として赴くことになった経緯もその中に詳しい。ベーダーによると自らアイオーナを訪れて洗礼を受けたオズワルドが，かつて自分と自分の人

民のために宣教師をアイオーナから求めた際に厳格な人が派遣されてきたが，何の成果もあげることなくアイオーナに戻った。そうしてノーサンブリアのあんな頑冥野蛮な心の人間を教化することなどは出来るものではないと報告した。その時そこに居合わせたエーダンは「兄弟よ，あなたはその人たちに余りにも厳しかったのだ。最初にやわらかな牛乳を与えるようにと使徒の教えにもあるではないか」[27]と述べた。同席していたエーダンのこの言葉を聴き入る者が，彼こそ徳の母であるとして彼を推薦し，その派遣が決まったというのである。エーダンはオズワルドが敗死した後もこの地に留まり，17年間の長きにわたり伝道し，651年8月31日リンディスファーンの南，本土にあって今は北海の白波の寄せる断崖絶佳に建って長い間英国王室の夏の離宮となっていたバンバラ城のあるバンバラ Bamburgh で没した。われわれはリンディスファーンの今日廃墟となった11世紀の修道院墓地の北側に十字架を背にして右手に司教の杖を持って立つエーダンの巨像を見ることが出来る。

652年アイオーナの修道士フィナン Finan が次の司教となった。彼はスコット人の習慣に従ってリンディスファーンに全オーク材の教会堂を建てたが，マーシア王ペンダによって焼かれた。フィナンはこゝに10年間司教として勤めたが661年没した。次の司教コルマン Colman（ca. 605～676）の代に664年のかのウィットビィの宗教会議でローマ・カトリック側の指導者ウィルフリッドたちにアイリッシュ系キリスト教の孤立性が批判され論破されるに及んで，コルマンは3年間こゝの司教座に留まっただけで30人の仲間を連れて去り，再び自分の生地であり，ケルト人の住む荒野のメエイオー Mayo に戻った。

コルマンの去った後一時リンディスファーン修道院の副院長を勤めていたカスバード（またはクスベルト）Cuthbert はウィットビィのシノドによる新稜序を受け容れたが，彼はかつて（651年以前）リンディスファーンから遙か洋上約14 km 離れたファーン諸島 Farne Islands —— 主たる小島が17で，極めて小さいのも数えると28の島からなる群島の一つで本土に一番近く



LINDISFARNE 島及びFARNE ISLANDS 諸島

の部分は干潮時には砂土となる
Beal の町からの点線路が干潮時にLindisfarne 島への道路部分

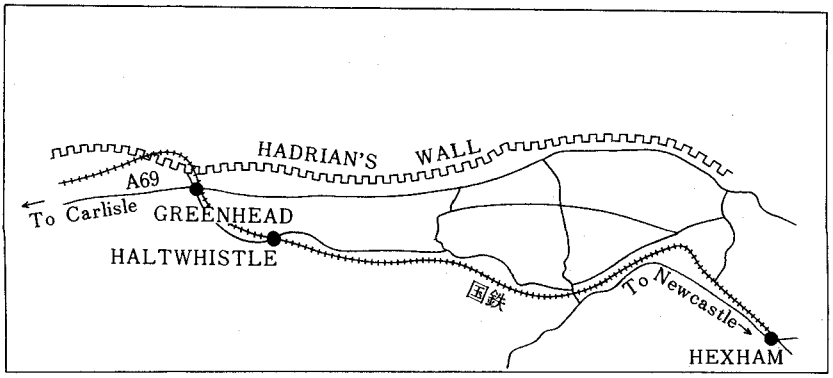
（約2km），一番大きなインナ・ファーン島 Inner Farne で石と芝土の壁に丸太と麦藁の屋根の質素な小舎で長年禁欲と孤独の生活を送っていたのであったが，676年再び彼はこの島に戻った。この島はエーダンも屢々秘かな祈りと観想を求めて訪れたところであった。この島に戻って聖なる仕事に専念していたカスバートは685年リンディスファーンの6代目司教に迎えられた。しかし彼は687年またまたファーン島に戻り，3月20日水曜日にこの世を去った。彼は修道士になる前は牧者であったが，ベーダーも述べているように宗教的天才・予言者的聖者であり，人を愛する徳行の人であった。彼の遺体は11年後堀り返された時に腐敗していることなく眠れるような姿であったと伝えられる[28]。

『アングロ・サクソン年代記』によると793年6月8日デーン人がリンディスファーンを襲った時に，こゝの修道士たちが神に求めた救いの祈りなどは何の利き目もなく，修道院は忽ち破壊され，火を放たれ，信者の寄進になる

宝物や金は奪われ，また聖器は壊され，修道士は虐殺されたり，大陸に連れ去られて奴隷として物々交換された。875年彼等侵入者は再びこの島を襲った。この時修道士はカスバートの遺体を堀り起こし，それを携えて逃げ，8年間の放浪の後883年ニュー・カッスル・アポン・タインの南16kmのチェスター・ラ・ストレット Chester-le-Street にようやく祀り，更に995年ダラムの大聖堂に移し，今日までこゝに安置されている。

リンディスファーンを襲ったデーンのヴィキングの戦士が彼等の最大の武器の大きな鉄の斧をふりかざした当時の姿を刻んだ碑が今日リンディスファーンに建てられている。

2　次は有名なハドリアヌスの城壁 Hadrian's Wall である。これは第14代ローマ皇帝ハドリアヌスが辺境の猛族スコット人やピクト人の南下を防ぐために120年タイン川とソルウェイ川の線，すなわちニュー・カッスル・アポン・タインの東郊外タイン川口に面したウォールゼンド Wallsend（この語義にその意味がある）からカンバーランド Cumberland の主都カーライル Carlisle の西，ソルウェイ湾に臨んだバウネス Bowness に至る地点までにイギリス版の万里の長城を築いた。当時は *Vallum Hadriani* といわれた。完成は126年とも127年ともいわれる。この城壁は二重構造で内側（南側）が土壁 Vallum で，外側が石壁 Murus から成り，その真中が軍用道路となって長さ80ローマン・マイル（約118 km），高さ5 m，幅2.5 mで，1.6 km毎に小城



砦塞を備えたものであったが，今日この城壁が残っているのはカーライルから東へ約29km，国道A69の道路を走ったグリーンヘッドGreenheadの辺りだけである。交通の便は極めて悪い。

3　グレース・ダーリング Grace Darling の物語の舞台でもある。彼女 Grace Horsley Darling（1815.11.24～1842.10.20）はファーン諸島の中でも最も遠い島のロングストーン燈台Longstone Lighthouseの燈台守の娘であった。1838年9月7日の朝蒸気船フォーハァーシャー号Forfarshireがロングストーン島の近くで難破した。彼女と年老いた父ウィリアムは勇敢な精神と卓越した技術とをもって8人の男と1人の女の生命を救った。この父娘の英雄的・人道的行為は忽ち世界に伝えられ，わが国でも昔英語のテキストに扱われた。彼女はその後もこの島の燈台守として残ったが，肺患のためバンバラで短い人生を終えた。

46　Leicester　　Ⅳ．Ⅱ．17　　52．38 N　1.05 W

レスターとよむ。この地名からみて古くローマ軍の駐屯地であったことがわかるように古くから交通の要所で，ローマ時代の遺跡に富む。ロンドンから北西に約145kmで近代工業の中心地。人口は約283,000（1971年）である。本劇のウルジィはこの町の北にある Leicester Abbey で1530年11月29日に急死している。この地はまた『リア王』のリア王と娘たちの居住のあったところとも伝えられている。

レスター市の西にマーケット・ボズワース Market Bosworth（単にBosworthともいう）という町がある。こゝはサミュエル・ジョンソンが助教師をしたところである。当時彼の家はまさに家計困難を極め，更に彼は憂欝病で1731年秋オックスフォドを退学した。しかも父親はこの年12月に貧困の中で他界し，ジョンソンは彼自身の暮しにこと欠く有様であった。彼は1732年7月16日にこのレスターの町までの約20kmを徒歩で赴任したらしい。しかしこの勤め口は彼に極めて不快なものであったためか僅か2，3ヶ月でその職を辞している。

47 Oxford　Ⅳ．Ⅱ．59　51.46 N　1.15 W

わが国ではかつてこの語に「牛津」という漢字を当てたが，これは ox＝牛＋ ford ＝津を以ってであり，「牛の渡し場」のその名の通りテムズ川（この辺りではアイシス Isis と名が変わる）とその支流チャーウェル川 Cherwell とが市の南で合流し，その川水に浸る牧場の広がる中を牛が歩み，また市の紋章も牛の大きな姿そのものである。ロンドンから西北西約 80 km,汽車で約 70 分である。学問の町として有名であるが，近年この町にも近代工業の波が押し寄せ，自動車・印刷・食品などの工業都市に可成り変貌している。人口も年々増加し 1971 年には 1950 年の 100,000 人の約 2 倍 194,000 人となった。

本劇のこのⅣ．Ⅱ．59 で「これら双子の学問所，イプスウィチよ，オックスフォドよ」といっているのは元より地名ではなく所謂大学を指しているように，オックスフォドにウルジィは 1525 年 Christ Church 学寮を建てた。『前篇』に記したようにウルジィはその創建に当って己れの権勢を以ってイギリス全土の僧院からその建設資金を絞り取ったのであった。このコレッヂはウルジィが当時枢機卿 Cardinal であったため Cardinal College ともよばれ，オックスフォドのコレッヂの中の最大のものであり，またこゝの礼拝堂はオックスフォドの本寺で主教座であることなどから 'The House' の名で広く親しまれている。

今日この町にあるコレッヂは 5 つの女子学寮を含めて約 40 程あるが，創立者も創立の年代もそれぞれ異なるところからそれぞれ自主の気風高く，例えばコレッヂの長の名一つにしてもいろいろ異なり，Christ Church は Dean, Magdalen は President, Balliol は Master, Queen's は Provost, Wadham は Warden と称する如きである。創立最古のものは University College で，アルフレッド大王が 872 年に創立したものとして 19 世紀の中頃に至るまで長い間信じられていた。1767 年このコレッヂを卒業した有名な政治家エルドン卿 John Scott, Ist Earl of Eldon（1751.6.4～1838.1.13）が受けた卒業試験でもそのことはわかる。それは「髑髏の地という意味のヘブライ語は何か」と「誰

がユニヴァーシティ・コレッヂを創立したか」であった。彼は「ゴルゴタ Golgotha」と「アルフレッド大王」と答えてヘブライ語と歴史の試験に合格したといわれる[29]。

東洋女子短大助教授の岡田純枝さんの御教示によって今こゝにオックスフォドのコレッヂを記してみる。

(A) For Men (Undergraduate and Graduate)

University College　Merton College
Ballion College　Exeter College
Oriel College　The Queen's College
New College　Lincoln College
Magdalen College　Corpus Christ College
Christ Church　Trinity College
St. John's College　Pembroke College
Worcester College　Keble College
St. Peter's College　St. Edmund Hall

(B) For Men and Women Undergraduates and Men Graduates

Brasenose College　Jesus College
Wadham College　Hertford College
St. Catherine's College

(C) For Men and Women (Graduate)

Nuffield College　St. Antony's College
Linacre College　St. Cross College
Wolfson College

(D) Permanent Private Halls for Men

Campion Hall　St. Benet's Hall
Mansfield College　Regent's Park College
Greyfriars (priority to members of the Franciscan Order)

(E) For Fellows

All Souls College

(F) For Women

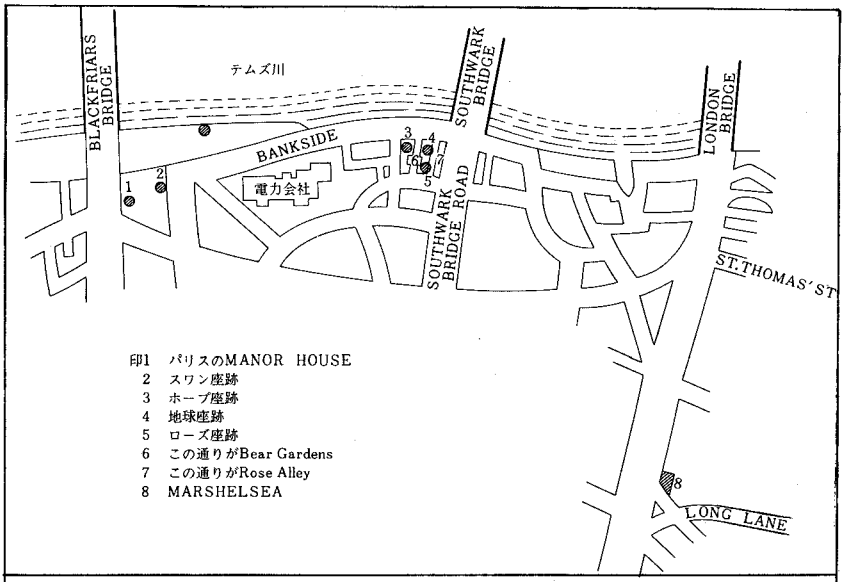
Lady Margaret Hall　　St. Hilda's College

Somerville College　　St. Anne's College

St. Hugh's College

48 Paris-garden　V. III. 2

テムズ川南岸のバンクサイド――今日の Southwark Bridge Road の西にあって，前身は 14 世紀にロベール・ド・パリ Robert de Paris という人の荘園であったものだが，ヘンズロウ Henslowe[30] が 1595 年にこの一帯を入手し，1604 年に「熊いじめ」「牛攻め」bull-and-bear baiting といって，主としてマスティフかグレイハウンドといった猛犬を熊や牛にけしかけたり，あるいは棒杭につないだ熊に犬をけしかける残忍な見世物のリングをもった娯楽施設とし，16 世紀から 17 世紀にかけて繁昌した。この種の娯楽施設はヘン



48 項及び 53 項の地図（サザック地区）

リー八世の時代，あるいは更にそれより早い頃にこの一帯及ぎホワイトホール宮（44 項）で盛んであった。ホワイトホール宮のは大使の歓迎会とかその他の国家的式典に仰々しく行われるものであった。このようなわけでそのパトロンを時には王室が勤めることさえあり，ヘンリー八世は 1526 年パトロンとなったといわれる。16 世紀末にはこの辺りに芝居の上演と bull-and-bear baiting の両方の興行の出来る劇場が沢山建つようになった。1583 年 Paris-garden の桟敷席が崩れ落ちて，観客の数人が死亡し，500 人以上が怪我をするという大事故があった。以前からこのような娯楽を非難していた清教徒たちは，これこそ「神の特別なる審判」が下ったものであり，日曜に「浮かれ騒ぎ」をしていることの「報い」だと大声をあげた。1613 年経営者のヘンズロウはこの Paris-garden を取り壊し，この跡地に 1614 年近くにあったスワン座 The Swan Theatre（1596～1621 年頃までこゝにあった）と形も大きさも似た劇場を建ててホープ座 The Hope Theatre と称した。初演はベン・ジョンソン Ben Johnson の *Bartholomew Fair* であった。

Bull-and-bear baiting の騒ぎは尋常なものでなかったらしいことはこの **V. IV.** 2 からもわかる。見物人は劇場通いの伊達男や Tower Hill（50 項）での首切りや手足切断の処刑を見に群がる連中はもとより，お上品な貴婦人や典雅な紳士までがそうであった。尤も紳士淑女は泰然自若として見物したが，下層の市民達はしゃがれ声を出して自分たちのチャンピオンの動物を声援した。この Paris-garden には当時ハリー・ハンクス Harry Hunks やサッカーソン Sackerson, それにヂョーヂ・ストーン George Stone とかリンカンのトム Tom of Lincoln という名をつけられた有名なチャンピオン熊が人気を呼んでいたのであった。サッカーソンについてはシェイクスピアが *The Merry Wives of Windsor* の第 1 幕第 1 場 310 行で触れている。

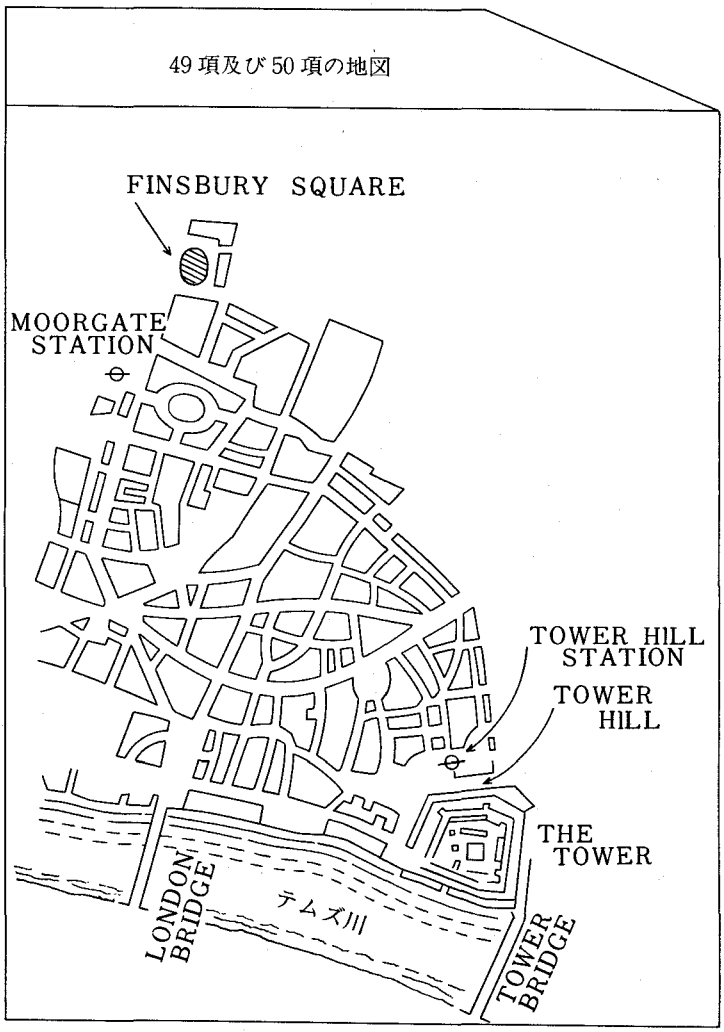
毎日曜に集まる見物人は 200～300 人であって，入場料は平均半ペニーであったからそう安いというものでもなかった。

今日この界隈は当時のいかがわしさや狂騒さは推測することも出来ない程に荒れ，工場・倉庫の建ち並ぶところとなっているが，町の汚さは文明開化

のこの時世のものとは思えない程である。

49　Moorfields　　V. III. 32

昔のロンドンにあった一地区であって，今日の地名で示せばこゝはロンドン塔の北西，更にもっと詳しくいえばバンク Bank（Bank といえばこれはイ



49 項及び 50 項の地図

ングランド銀行 The Bank of Eniland をいう。それは丁度ロンドン塔をただ単に The Tower というのと同じである）の北，ムアゲート地下鉄駅 Moorgate Station のすぐ東にあるフィンズバリ・スクェア Finsbury Square とその近く一帯に当る。この辺りの地名に Moor- のつくのが多いように排水の悪い湿地（荒地）であった。1527 年に初めて排水工事が行われ，1606 年に遊び場となって，古くからロンドン住民の遊技場として使われ，特に棒術の試合場であった。冬にはスケート場ともなった。またこゝは 16 世紀から 18 世紀にロンドンなどの地にあったトレェインバンド Trainband といわれる民兵団の練兵場としても使われたところである。1666 年 9 月 2 日に起ったロンドン大火では多くの人々がここに避難した。

50 Tower Hill V. III. 61

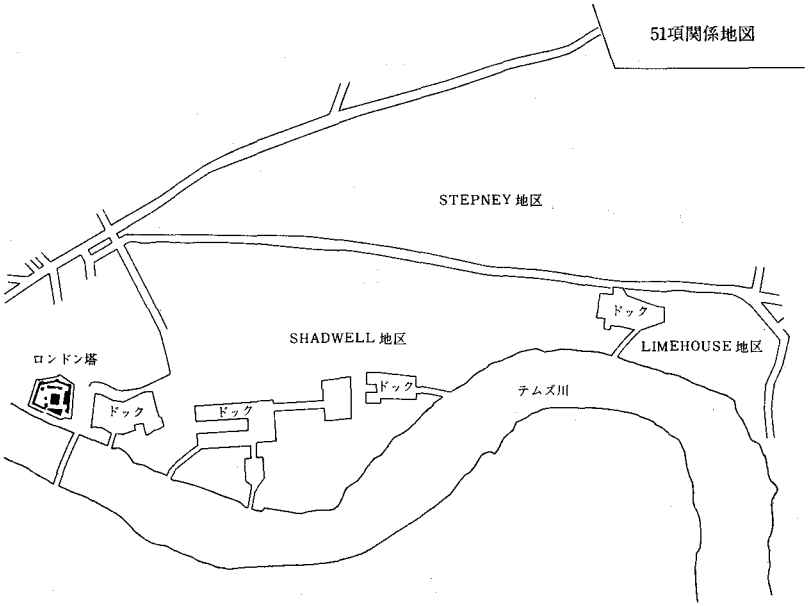
ロンドン塔のすぐ北，地下鉄タワー・ヒル駅 Tower Hill Station を出てすぐ右手一帯がこの場所であったが今は道路となっている。古くから政治犯の処刑の地であった。本文にあるようにその処刑を見に多くの者が集まった。

シェイクスピアは「ロンドン塔」という言葉を全作品中全部で 54 回使っているが —— その中での約半分の 26 回は『リチャード三世』*Richard III* においてである —— 一方 Tower Hill はこの『ヘンリー八世』のこの場で一回使っただけである。

51 Limehouse V. III. 61

ロンドンのテムズ川の北岸沿いにあって 1730 年までステプニィ Stepney 地区の貧民区をなしていた。またロンドン支那人街であり，また長い間国内外の船員のたまり場として知られていた。Limehouse の名の由来は多分石灰焼き釜，すなわち 'lyme oasts' によるらしく，この辺りは煉瓦の製造の行われたところでもあった。

かつてこの辺りは色々の宗派の祈禱所があってその争いの絶えないところであったらしいが，その場所は今日不明である。



この地区はいわゆるロンドンのイースト・エンド，すなわちドックが立ち並ぶ町であるからその環境の程度というものが自ずとわかるものである。またドックがあるためにも第2次世界大戦での被害も大きかった。

この区に近いシャドウェルShadwell地区の光景を描写したテーヌ Taine[31]の『英国覚書』*Notes sur l'Angleterre* の一節を今こゝに石田憲次博士の著書からの孫引で紹介してみる。「私はマルセイユ，アントワープ，パリのひどい場所を見たが，とてもこれとは比較にならない。低い家々，赤い屋根の煉瓦造りのみすぼらしい通りが四方八方に交叉して，陰気そうにテムズの川岸へ下って行っている。乞食と盗人と淫売婦，殊に淫売婦がシャドウェル街に充ち満ちている。地下の酒場できいきいいうような音楽が聞こえる。時とするとバイオリンを弾いているのは黒奴である。開いた窓越しに乱雑になった寝床と踊っている何人かの女が見える。十分間に三度戸口に人だかりがしたのを見た。喧嘩が，特に女共の喧嘩があったのである。その一人は血

まびれの姿になり，両眼に涙を浮かべ，酔払って鋭い嗄れた声で叫び，一人の男につっかろうと思っていた。その場に居合せた者共は笑った。その騒ぎに隣りの小路が，ぼろを着た貧しい子供や淫売婦やらの住民を，一時に人間をはき出す樋の口のように吐き出した。」[32)]

52　Limbo Patrum　　V. III. 63

このように屢々大文字で始められる。The limbo of fathers ともいい，ラテン語では *Limbus patrum* といわれる。カトリック用語で日本で「古聖所」または「孩所」と訳語が当てられている。limbo の原意はラテン語の *limbus*, すなわち辺境の意であって，地獄の辺土をいい，これは天国と地獄の間にあって，自罪によらないで天国に入れない人，すなわちキリスト教に接する機会のなかった人の霊魂や，洗礼を受けない子供・異教徒・白痴などの霊魂が，いまだ昇天せず unsaved のまゝで滞留する場所，またはその状態を指すもので，ダンテは地獄の十界の最初にこれを当てた。これに2種あって，1つがこの *Limbus patrum* であり，今1つが *Limbus infantium* = the limbo of infants である。これらについての解説は冨山房の『カトリック大辞典』第1巻から引用する。「(1)太祖の孩所 (limbus patrum)，古聖所，アブラハムの懐(路 16 ノ 22)とも言われる。ここは旧約時代の義人（及び行い正しき異教徒）がキリストの昇天まで苦痛苦悩を課せられず，一時的に幽開されている場所。太祖の孩所の嘗てありしことは，一部は「第一の幕屋」(来 9 ノ 18) の存する間は天国に入る道の未だ開けないとされることから来ており，一部は古聖所にありし霊魂に救いの喜びを宜べ伝え給うためのキリストの古聖所に下れること(彼前 31 ノ 18 以下)に由来している。(2)嬰児の孩所 (libus puerorum)，原罪のみをもって事の辨へなきうちに死したるものは，天国に入り，超自然的祝福は受け得ないが，ヤンセニウス派に反対して教会が明言しているように，自然的祝福は受け得る。かかる小兒の滞留の場所或はその状態である。」

53　Marshalsea　　V. III. 85

テムズ南岸サザック southwark にあった5つの監獄のうちの1つで，しかも最古のもので，1377年にその記録がある。1813年に廃止されたが，南接した今1つの方は負債者用監獄として New Marshalsea の名で存続したが，1860年負債による投獄が廃止されたのに伴い閉鎖され取り壊された(48項附図参看)。

54 Saba　V. Ⅳ. 23

Sheba のこと。紀元前13世紀頃にすでにミナ王国，ついで紀元前10世紀頃にシバの女王の伝説をもったサバ王国が存在していたところのアラビア南西部にあった古い国で，今のイエメン Yemen 地方をいう。新約聖書のマタイ伝第12章第42節とルカ伝の第11章第31節でイエスが「南の女王」といっているのはこのシバの女王のことであり，またこの地を「地の極」といったのはこの地がエルサレムから約1600 km 以上離れていることを考えれば妥当であろう。古来洋の東西を結ぶ貿易の要地として知られ，香料・宝石などの交易で有名であった。

55 New nations　V. Ⅳ. 52

これは1607年にロンドン会社（通称ヴーヂニア会社）の手で英国の植民地となったヴーヂニアなどをいっている。1608年，時の国王の名をとってジェームズ・タウンが建設された。尚，本劇第5幕第3場の33行目の 'strange Indian' というのも当時アメリカから英国に連れて来られたインディアンをいっていると思われるが，これを印度人と解する向きもあって，坪内逍遙は後者をとっている。

（昭和51年5月21日受理）

注

1）　Tiberius Claudius Drusus Nero. 前10.8.1～後54.10. 13. r. 41～54。小児麻痺で歩行困難・云辞不明瞭と知恵のおくれた子として幼時から愚者扱いされ，母親すら屢々

「化物」とよぶことがあった。血統上はローマ皇統にあったが，このため50歳を過ぎても軍歴も公職も経験することなく，また元老院に議席もなく，ユリウス家の養子とさえなっていなかった。全くの偶然時で第4代皇帝となったがその身体上の欠陥ばかりでなく言動の陳腐噴飯のために世人の笑い草となることが多々とあった。更に政務を多くの解放好隷に任せ，また妻のいいなりでもあったので不評判の渦中の人であった。軍歴のない彼には威信をわが身につけるためにどうしても軍事上の勝利が必要であったので，シーザー以来の課題であったこの遠征を企て一応の成果を収めた。

2） Boudiccaの名はヴィクトリア時代になって詩人のクーパー及びテニスンがこれを美しい口調のBoadicea（ボォアディシア）と変えたが歴史家や語学者はそれを認めていない。尚ボウディッカの像はテムズ川にかゝるウェストミンスター橋のたもと，ビック・ベンに対い合って建立されている。

3） Domesday Book. Doomsday Bookともいわれるが，単にDomesdayあるいはDoomsdayともいわれる。略称はD.B。ウィリアム一世（征服王）の命により1085年かやら1年がかりで作られた英国全土にわたる土地大調査の記録である。この名は古代英語の *dōmes dǽg* ＝day of judgement (Last Judgement) に由来するが，それは豚一匹，牛一匹をも記録するといった調査の厳正ぶりをたとえてのものであった。

4） Remigius。1092年没。リンカンの司教。ウィリアム征服王のイギリス侵攻に際して船1隻と20人の騎士を寄進することによって1067年ドーチェスター Dorchester-on Thamesの司教に任ぜられ，1072年リンカンの司教となった。ランフランクスの2度のローマ旅行（1071年，1076年）に随行している。

5） Alexander。1148年没。生れはノルマン人であった。1123年リンカン司教。1125年カンタベリのウィリアム Williamとヨークのサルスタン Thurstanの大司教及びグラスゴーの司教ジョン Johnに随行してローマに渡った。ヘンリー一世死後，その娘にして神聖ローマ皇帝ハインリッヒ五世の妃であったマティルダMatilda（1102～1167.9.10）とヘンリー一世の甥のスティーヴン Stephen（ca. 1097～1154.10.25）との王位継承の争いの渦中の人となり，そのため一時捕えられた。1145年再びローマに旅した。1146年リンカンでスティーヴンを授冠させたと伝えられる。1147年またもローマに旅して帰国したが，この時患った熱病が因で没した。

6） St. Hugh of Avalon。1135？～1200。St. Hugh of Lincolnともいわれる。フランスのアヴァロンで生まれ，1160年グランド・シャルトルーズ Grande Chartreuse（グルノーブル Grenobleのすぐ北）のカルトゥジオ会（カルト教会）Carthusian house 修道士となったが，ヘンリー二世に招かれて1175年頃イギリスに渡り，王の顧問となった。1186年9月21日から死ぬ迄リンカンの司教であった。1194年ジョン王 John the Lacklandを破門し，また1198年リチャード一世の軍事要求拒否の先頭に立った。祝日は11月17日。尚チョーサの *The Prioress's Tale* やマーローの *Jew of Malta* に出るSt. Hugh of Lincolnとは別人である。

7） Thomas Fuller。 1608.6.19～1661.8.12. 聖職者。ケィンブリッヂを1628年に

出て諸地で聖職についたが，1643年から1644年の内乱で王党に与した。古趣豊かな機知とヒューモアに富んだ才筆を揮った。十字軍や教会の歴史について多くの著作を残した。本文に引用した僅か1行の文にも今日普通の辞書にはない語が2語もある。torve = grim, fierce-looking; tetrick (= tetric, tetrical)= austere, severe である。本文引用の出典は Benn 社の *Blue Guide*（1965年版）の559頁からである。

8）　Robin Hood。1160年から1247年頃にいたといわれる英国の伝説的人物で，古来英国民から最も愛された義賊。一説には彼の本名はロバート・フィッーウース Robert Fitz-Ooth といい，ノッティンガムシャー Nottinghamshire のロックスリ Locksley で生まれたハンティンダン伯 Earl of Huntingdon であったが，故あって国法に触れたおたずね者 Outlaw となり，その後主としてシェッフィールド Sheffield の東南約30 km，ノッティンガムの北約23 km にあって（研究社『英米文学辞典』が示すところはズレがある），嘗って王室領の森林であったが今は Welbeck 公，Clumber 公，Worksop 公，Thoresby 公の私園で通称 Dukeries といわれる一帯の地シャーウッド・フォレスト Sherwood Forest に本拠を構え，自身名にし負う弓の名手であり，部下にこれまた弓の名人で精悍な雲つく大男ながらその名は奇しくもリトル・ジョン Little John，坊主の癖に喧嘩早く，そして肥って陽気なフライア・タック Friar Tuck，それにロビン・フッドの甥ともいわれるウィル・スカーレット Will Scarlet（または Scadlock, Scathelocke）など森の色にまがうリンカン・グリーンの上衣を着けた部下を率いて神仏鬼没，強きを挫いて弱きを助け，自由で陽気な生活をしたいといわれる。彼を主題としたバラッドは非常に多い。またウォルター・スコットの有名な歴史小説 *Ivanhoe* やテニスンの詩劇 *The Foresters* などに扱われている。またロビン・フッドの物語は五月節の祝祭 May-Day festivities と密接な結合をなして，16世紀には 'Robin Hood sports' という特殊な遊戯となり，これは更に 'Morris-dance' といわれる奇怪な田舎踊りに吸収・併合された。ノッティンガム市にある Nottingham Castle の入口外壁の近くにチョーサーの『カンタベリ物語』に出る従士 yeoman のような美しい出立ちで弓を射ったロビン・フッドのブロンズ像と彼の部下のレリーフが見られる。

シェイクスピアの *As You Like It* で前公爵がアーデンの森で陽気な連中と一緒に「昔のイギリスのロビン・フッド同様の生活をしている」'they live like the old Robin Hood of England'（Ⅰ.Ⅰ.116）ことが語られている。また同じく *The Two Gentlemen of Verona* では「ロビン・フッドの肥っちょの坊主（フライア）の頭に誓って」'By the bare scalp of Robin Hood's fat friar,'（Ⅳ.Ⅰ.36）と，更に *Henry the Fourth* でも次のように言われている。「ロビン・フッドとスカーレットとジョンと」'And Robin Hood, Scarlet and John."（*The Second Part of Henry the Fourth,* Ⅴ. Ⅲ. 103）

9）　Ouse の名の川はイギリスにこの他にも数本ある。

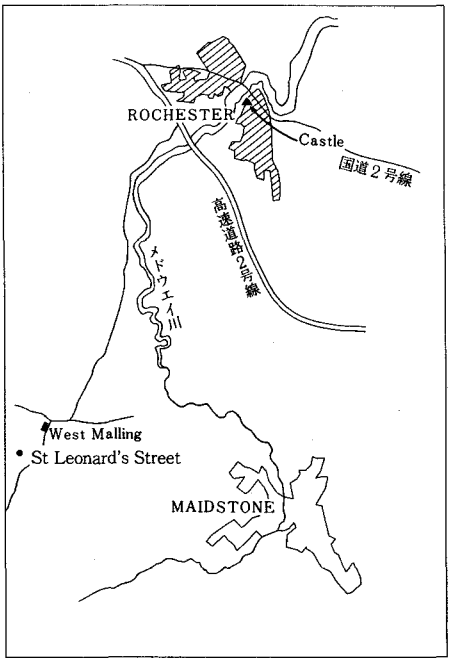
10）　Etheldrida, Etheldreda, Aedilthryd とも綴られ，日本ではエセルドレーダともいわれる。聖人。生年は630年頃といわれる。イースト・アングリアの王アンナ Anna の娘

で，先きに沼沢地方南ギルワ Girvii の王子トンベルト Tonbert と結婚していたが，死別し，その後ノーサンブリアの王で 664 年ウィットビィでのシノドを開いたオズウィの息子にして，当時ノーサンブリアの王を継いでいたエグフリッド Egfrid の妃となった。彼女はこの王と処女のまゝ 12 年間を ―― ベーダーの言葉でいえば「輝かしい状態」を過したという。679 年または 680 年 6 月 23 日に没して木棺に入れられ埋葬されたが，16 年後の 695 年（696 年）10 月 17 日石棺に移すために墓が開かれた時その遺骸は腐敗せず，死した時と全く同じ状態の奇蹟を示したといわれる。エゼルスリスについてのベーダーの讃辞はその著『英国民教会史』（4－19，20）に詳しい（注 26 の附図参看）。

11）　地味豊かな地方に屢々 'garden' の語が与えられる。英国では特にケントとウスターシャー Worcestershire の両地方がこの名でよばれる。*The Oxford English Dictionary* によると 'The Garden of England' の語の古い記録は 1885 年 Farjeon なる劇作家の *Sacred Nugget* の第 1 幕第 7 場に見られる。

'Yes, sir, Kent's my county, but even in the garden of England they can't grow finer roses than them.'

12）　ラテン名はガンドルフス Gundolphus. 1024 年頃フランスのルアーンに生まれ，1059 年ル・ベックの修道士となり，こゝでアンセルムとランフランクスと知己となった。ランフランクスに従ってカーンで修業し，1070 年ランフランクスと共に英国に渡り，ガンダルフはこの年ケント州のウェスト・モーリング Vest Malling の南西約 1 km の地に St. Leonard's Tower を建て，更に 1090 年にはウェスト・モーリングにベネディクト修道院を建てたが，これは今日廃址に留るだけである。彼の大きな遺産は 1078 年頃ウィリアム征服王のために建てたロンドン塔の中心的建造物のうちホワイト・タワー White Tower と聖ヨハネ礼拝堂 St. John's Chapel である。ガンダルフはウィリアム二世に大きな影響を与えた。彼の死は当時カンタベリの大司教であり，またスコラ哲学の父ともいわれるアンセルムに看取られた。



13）　またはWilliam de Corbeil, William de Curbuil。フランスのノルマンディ地方のコルベィ家に生まれ，生地はパリの南約27 km，セーヌ川とエッソンヌ川Essonneの合流点のCorbeilとされる。生年不明。ルアーンの有名なアンセルム師の下で修業した。後ダラムの司教。1123年2月18日から没年の1136年11月21日までカンタベリの大司教。この間1130年5月カンタベリの聖堂を偉容ある大聖堂に完成し，またマティルダとスティーヴンの王位継承では1135年12月22日，ウィンチェスターでスティーヴンに授冠している。本性優柔不断であった。

14）　またはArnulf。1040～1124.3.15。フランス生れのベネディクト修道士。ベック修道院に入り，こゝでランフランクスの教えを受け，またアンセルムを兄と仰いだ。1070年既にカンタベリ大司教となっていたランフランクスの薦めで英国に渡った。1107年アンセルムの推薦でピーターバラの司祭に昇進し，こゝでも彼はカンタベリにおけるのと同じように美しい建物を教会堂に与えたが今は焼失している。1114年9月19日本人及び仲間の意向に反してロチェスターの司教に任ぜられた。彼がこゝの教会の法令・教義を集めて著わした *Textus Roffensis* は有名である。

15）　Raphael Holihshed（またはHollingshed）。ca. 1520 ～ ca. 1580。英国の年代記作者。多分ケィンブリッヂで教育を受け，初めは聖職者であったらしいが，間もなくロンドンに出て職業的翻訳者となり，年代記作成の仕事に取りかゝった。*The Chronicles of England, Scotland, and Ireland* という膨大な年代記を編したことで有名である。但し，彼自身が直接書いた部分は英国の部だけで，他の部分は他人の筆，あるいは翻訳から成るといわれている。彼の死後この年代記は更にJohn Hookerの手で加筆された。シェイクスピアの作品の中 *King Lear, Macbeth* など数篇はこの年代記を元に書かれた。

16）　Ecgberht, Ecgbryhtとも綴られる。ca. 775の生れとされる。802年からウェセックス王であり，829年からはイングランド統一王となった。若い時マーシア王国のオッファや養子たちに追放されて西ローマ皇帝でフランク王のカルルー世（大帝）Karl（英語ではCharlemagne）の宮廷に数年間とどまった。帰国してウェセックスの王となり，更にブリトン人をコーンウォールで破って，ケント，サリ，サセックス，エセックス，イースト・アングリアなど主としてイングランドの南部海岸地方を統一した。これが世にいうエグバートのイングランド統一という偉業であった。37年と7ヶ月間の治世を終えて839年（*Anglo-Saxon Chronicle* ―― 次注参看 ―― は836年とする）に亡くなった（注26の附図参看）。

17）　Alfred the Great. 生年は848年か849年。没年は更に諸説があって899年，900年，901年のそのいづれかの年の10月26日または28日とされる。ケント及びエセックス王エゼルウルフÆthelwulfの第5子として多病・多感に生れた。4歳頃に1人で，また855年頃には父王と共にローマ法王の下に赴いている。871年，邪悪な兄たち3人のそれぞれの短い治世を継いで若冠22歳でウェセックス王となったが，即位前からその生涯は侵略者デーン人との戦争に明け暮れて陣中で過すことが多かった。戦況は不

利ながらも878年遂にデーン人の首長グットルムGuthorm（またはグズルムGuthrum）を破り，ウェドモアWedmoreで和を結び，デーン人のウェセックスからの撤退とグットルムのキリスト教への改宗を盛り込んだアルフレッド＝グットルム協定を締結した。これによりグットルムはイースト・アングリアの王に封ぜられた。

勇気に満ちた武将であると同時に賢明なアルフレッド王は外冠に備えては海を守ることの必要を痛感して海軍を創設するなど兵制を改革した。また戦陣で過すことの日が多かったにも拘らず学問を奨励し，各地の詩寺に命じて国史を編纂させ，自らも執筆者となった。これが今日貴重な年代記 *Anglo-Saxon Chronicle* である。この他にも多くのラテン書を英訳させ，これについてもまた自らもその訳者となった。またアングロ・サクソンの諸法律を集大成させるなど文武両道に卓越した王で「大王」の名を有する唯一の英国王である。この王が戦いに敗れた若い日の挿話は弘く知られている(注26の附図参看)。

18）　デンマーク語でクヌードKnud。英語ではCanuteともいわれる。ca. 995～1035. 11. 12。治世の初めは残虐であったがその後有能にして寛大な君主となり教会の保護にも当った。この王についての伝説・逸話は多い。

19）　William Hamo Thornycroft。1850.3.9～1925.12.18。両親と共に有名な彫刻家。父Thomasの傑作はウェストミンスター橋の西にあるイケニの女王ボウディッカの像である。

20）　またはケンウァルフ。Coinwalch, Kenwealhとも記される。672年頃の没。父キネギルスCynegilsを継いで643年西サクソンの王となる。異教徒で，妻はマーシア王ペンダPendaの妹であったが，これと離婚したことによりペンダによって追われイースト・アングリアに亡命した。645年といわれる。647年または648年キリスト教に改宗して王位を回復し，こゝウィンチェスターにSt. Peterを祀る教会堂を建てた。そうしてガリア生れでアイルランドから来た高位聖職者（司教の身分を有していたと思われる）のアギルベルトAgilberhtを650年こゝの司教に任じながら，662年（660年ともいわれる）王は勝手に国を2つの司教区に分けて，自分と同じサクソン語を話すウイニWiniという司教を密かに連れてきて司教座にすえた。アギルベルトはこれを不満としてその職を辞して去った。アギルベルトは664年のウィットビィのシノドに列席し，666年にはロンドンの司教となり，その後パリ市の司祭となって680年10月11日に没している（注26の附図参看)。

21）　William of Wainfleetともいわれる。ca. 1395～1486. 8. 11。元の名はPatyn。大法官(1456～60)。ウィンチェスター・コレッヂとオックスフォドのニュー・コレッヂ出身。1458年オックスフォドにモードリン・コレッヂSt. Mary Magdalen Collegeを創設した。この学寮はウィカムが創設したニュー・コレッヂを範として建てた貴族的で，最も美しい学寮で，最近亡くなったエドワード八世（退位後のウィンザー公）も皇太子時代こゝで学生生活を過され，また秩父宮も遊学された。本劇の主要人物トーマス・ウルジィ枢機卿はこゝの卒業生である。因みにモードリン・コレッヂの名は

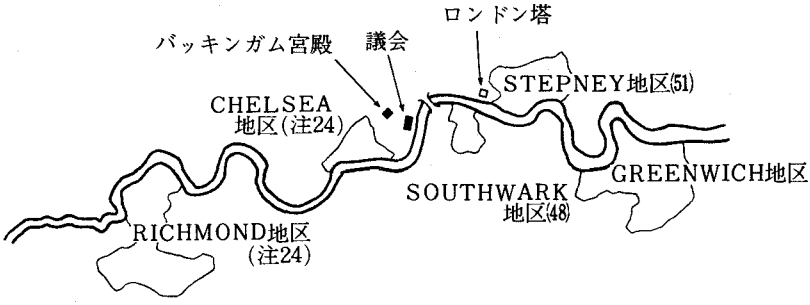
ケィンブリッヂにもあるがその方は Magdalene と綴る。

ワンスレットはヘンリー六世の寵臣でもあってバラ戦争では 1459 年ヨーク家(白バラ）に対立したが，1461 年エドワード四世に服した。しかし彼は自ら 1470 年にヘンリー六世をその幽閉先のロンドン塔から救い出したが，王が 1471 年 5 月エドワード四世に暗殺（？）されると再びエドワード四世に臣従するなど極めて曲折に満ちた身の在り方であった。彼の肖像は今日 Eton College Chapel の外面壁に見られる。

22）　*Time* の 1971 年 7 月 15 日号をみると英国のパブリック・スクールのうちで最も有名なものを特に 'Clarendon Schools' と称するが，その中でもイートン校，ハーロ校，ウィンチェスター校及びラグビー校の 4 つが特に出色であるらしい。

23）　Herbert George Wells。 1866.9.21 ～ 1946.8.13. 英国の小説家・思想家。徒弟奉公をしながらの独学であったが，今日のロンドン大学の前身の Normal School of Science を出た。科学小説を多く書いたが，次第に現代文明の批判に向かい，歴史書を書く一方，多くの小説も書いたが芸術的ではなかった。本文の引用は *A Short History of the World*（1922）からのものである。

24）　Anna von Cleve。 1515.9.22 ～ 1557.7.16。西ドイツのクレーヴェに生まれる。父クレーヴェ公ヨハン Herzog Johann von Cleve が新教徒の指導者であったので当時大司教補佐のクロムウェル Thomas Cromwell の進言で政略結婚としてヘンリー八世の妃に迎えられ，1540 年 1 月グリニッジ離宮で式が挙げられたが，その容貌が王の好むところでなかったため同年 7 月に離婚された。ヘンリー八世の他の妃たちと全く違って終生英国に住むことを条件にして年金 4,000 ポンドを与えられ，その余生を主としてロンドン市内のリッチモンド Richmond で過したが，時々は宮殿にも参上したり，毎日毎日衣裳を取りかえるなど安楽な生活を送り，ロンドン市内チェルシァ Chelsea で没した。ウェストミンスター・アビィに葬られている。



25）　Catherine Howard。ca. 1520 ～ 1542.2.13。イングランドの名門貴族ハワード家に生まれた。クレーヴズのアンと離婚したヘンリー八世と 1540 年 7 月 28 日密かに結婚し，8 月 8 日王妃として公認されたが，生来浮気で，結婚前の愛人との関係と結婚

後の不行跡のために1542年2月10日ロンドン塔に幽閉され，13日に処刑された。

26)　Oswald。ca. 605～641。聖人。ノーサンブリア王。ディラ Deira の王アエレー Aelli の娘アクハ（またはアッカ）Acha とバーニシア Bernicia の王エゼルフリッド Aethelfrith との間に生まれた。しかし616年アクハの兄エドウィンはエゼルフリッドの後を襲って王位に就いたため，オズワルドは弟のオズウェと共にノーサンブリアをのがれてアイオーナで数年を過した。そうしてこの島でキリスト教に改宗した。633年オズワルドは北ウェイルズのグゥイネッド Gwynedd の王カドワロン（またはキャドウォラン）Cadwallon（Caedwalla,Cadwalader）を今日でいえばヘクサム Hexham 付近のラウリ・ウォーター Rowley Water に当るデニセスブルナ Denisesburn の近くの川で殺してその権勢を示した。このカドワロンは自らキリスト教徒の名をもち，キリスト教徒であることを宣言していたが，その心も行いも共に野蛮人と変わることなく，632年エドウィンを今日のドンカスターのハトフィールド Hatfield とされるヒースフィールド Heathfield で殺し，更に634年夏にはエドウィンの従兄弟のオスリック Osric をヨークに襲って殺し，また同年オズワルドの兄でバーニシアの王であったエアンフリッド Eanfrith をも殺した無慈悲にして凶悪な暴君であった。

ノーサンブリアの王となったオズワルドはバーニシアとディラを統合した。彼は統治中特筆すべき最大のことは本文に述べたようにノーサンブリアに（ケルト系）キリスト教を導入したことであった。彼は641年異教のマーシァ王ペンダと戦って今日シュロプシャーのオズワストリ Oswestry という地，当時マーザーフィールド Maserfield で敗死した。因みにこのオズワストリの地名はこのオズワルド王の名に由来するもので，S. Oswald's tree から発したとされる。tree とは木の十字架の意と考え

られている。聖人に叙せられ，祝日は8月5日である。

27）　*Bede's Ecclesiastical History of the English Nation*, Ⅲ－Ⅴ.

28）　*Ibid*, Ⅳ－ＸＸＸ.

29）　石田憲次，『英文学風土記』，ｐ．175，研究社，昭47年。

30）　Philip Henslowe。? ～1616。エリザベス朝の興行主・劇場所有者。ローズ座 The Rose Theatre, ポープ座, スワン座, フォーチュン座 The Fortune Theatre を経営した。彼が1592年から1603年まで書き記した「日記」*Henslowe's Diary* は興行した劇団, 上演作品, 収入, その他公演にともなった諸々の経費の詳しい記録 —— 日記といっても実は会計簿に近いものであって演劇史上貴重な資料である。

31）　Hippolyte Adolphe Taine。 1828. 4. 21 ～ 1893. 3. 5。 フランスの哲学者・歴史家・批評家。彼は，人間及び文学作品は人種 race, 環境 milieu, 時代 moment の3つの要素によって規定されるとする決定論的・唯物論的思想を展開した。『英文学史』*Histoire de la littérature anglaise* などの大作を残した。

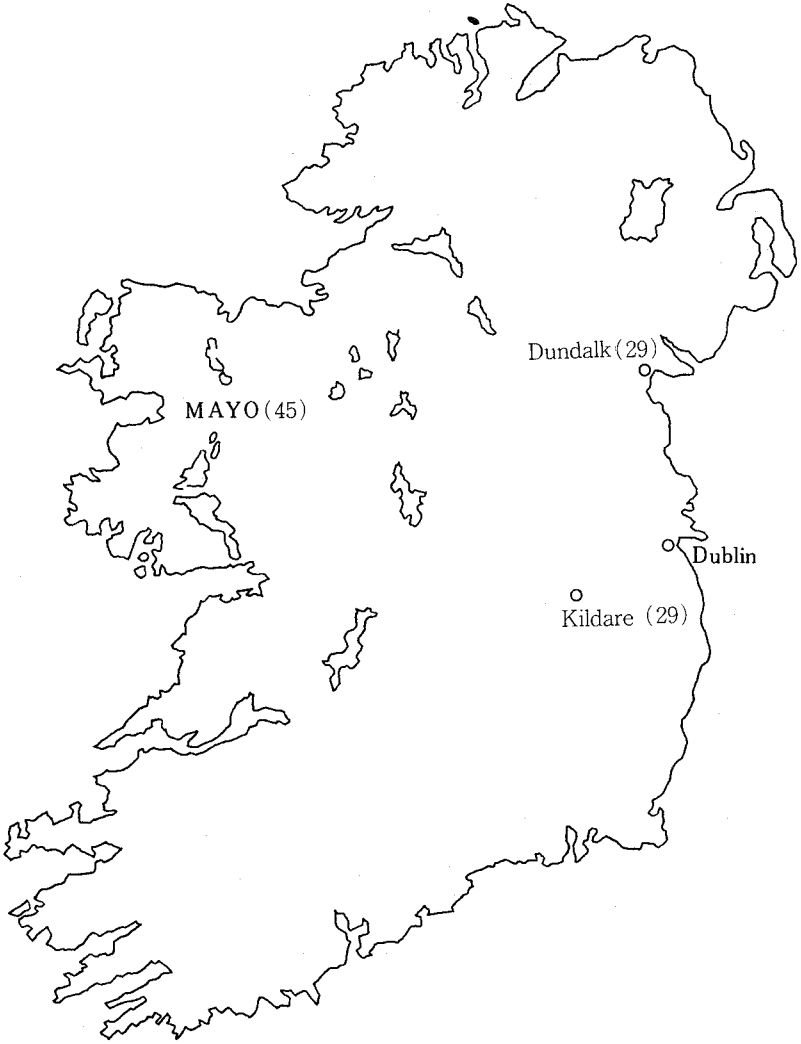
32）　石田憲次，『英文学風土記』，pp. 41 ～41，研究社，昭47年。

附図には知り得た範囲の大方の地名を載せた。地名の後の括弧内の番号は本文の項目番号及び注の番号である。

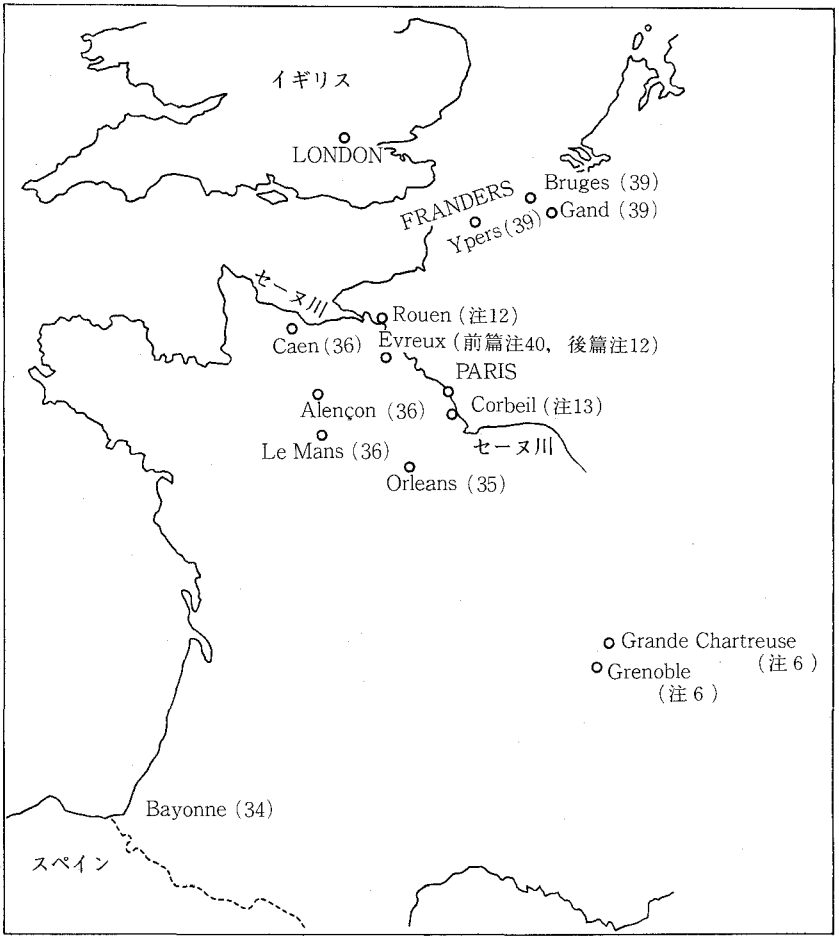
附図 1

Iona (45)
Glasgow
Edinburgh
Berwick-upon-Tweed (45)
Lindisfarne (45)
Farne Islands (45)
Bamburgh (45)
Haltwhistle
Newcastle-upon-Tyne (45)
Hexham (注26)
Chester-le-Street (45)
Carlisle (45)
Durham (45)
Whitby (45, 注27)
York
Hatfield (注26)
Doncaster (注26)
Sheffield (注 8)
Lincoln (30)
Sherwood Forest (注 8)
St Asaph (33)
Chester
Oswestry (注26)
HOLLAND (30)
Leicester (46)
Peterborough (注14)
Market Bosworth (46)
Ely (31)
Cambridge
Ampthill (41)
Dunstable (40)
Oxford (47)
St Albans
Dorchester (注 4)
Cardiff
Bristol
Bath
LONDON
Rochester (32)
Sandwich (43)
Walmer (43)
Canterbury
Dover (43)
Hythe (43)
New Romney (43)
Wedmore (注17)
Winchester (38)
Southampton
Wickham (38)
Hastings (43)
Weymouth (42)
Portsmouth
Isle of Wight
Isl of Portland (42)

附図２　アイルランド島



附図 3


イギリス
LONDON
FRANDERS
Bruges (39)
Ypers (39)
Gand (39)
セーヌ川
Rouen (注12)
Caen (36)
Evreux (前篇注40, 後篇注12)
PARIS
Alençon (36)
Corbeil (注13)
Le Mans (36)
セーヌ川
Orleans (35)
Grande Chartreuse
(注 6)
Grenoble
(注 6)
Bayonne (34)
スペイン

William Blake の *Newton* について

狐　野　利　久

Blake's *Newton*

Rikyu Kono

Abstract

Blake's colour-printed drawing of "Newton" depicts a man in the nude, seated on a rock with some polypus under the water. He leans over the scroll on the sea-floor and measures one side of the triangle with a pair of compasses in his left hand and points to the same side with his right hand.

Such figure of Newton is, of course, neither a portrait of Isaac Newton nor a representation of his life in a certain place of this world.

In this article, I would like to make it clear that Newton was seen by Blake as contributing towards systematizers in eighteenth century who sought in science the assurance that the world could be politically and religiously tidied away.

(1)

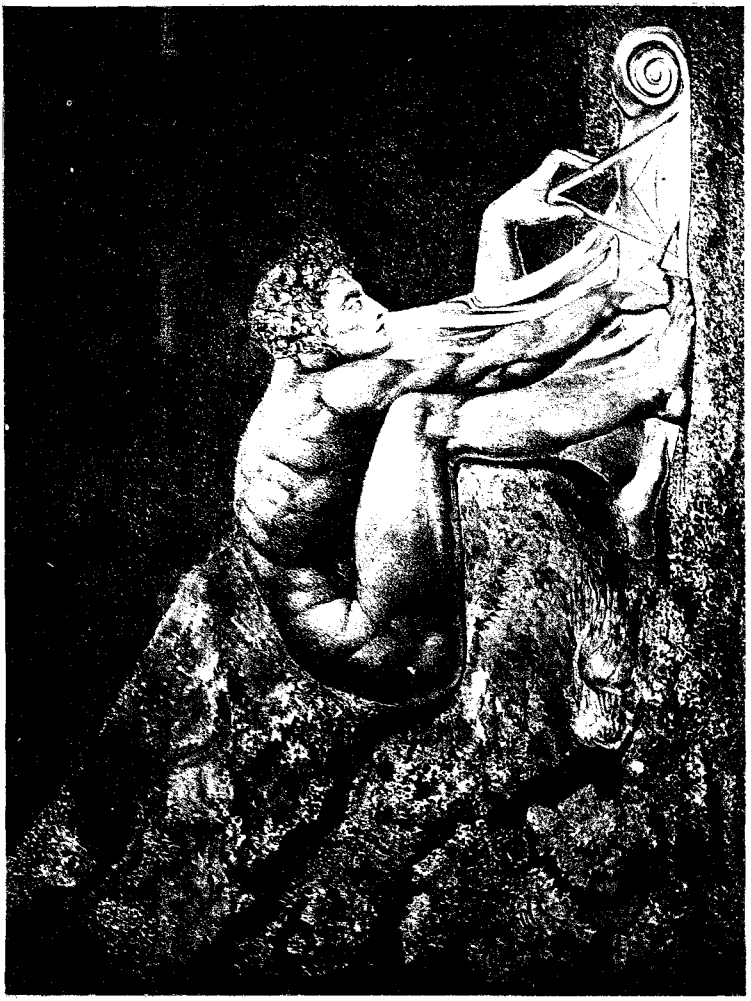
Blake の絵に，*Newton* と題する絵がある。裸の姿の男が岩の上に腰をおろし，足もとにひろげられた巻紙の上に前かがみになって，左手に持ったコンパスで作図している絵である。白いマントのようなものが左肩のあたりから，ひろげられた巻紙の上に垂れ下っている。岩にはイソギンチャクかと思われるような polypus が附着していて，濃い緑色と青色とからなる背景の感じと共に，海底の岩場のシーンを思わせる。従って，吾々がこの絵を見ても，あの偉大なイギリスの物理学者で数学者でもあった Isaac Newton（1643—1727）の肖像画とはとても思えないし，又海底の薄暗い岩場のシーンのようでもあるので，或日或時の Newton を描いたものとも，とうてい云えないのである。しかしながら，このような絵がなぜ*Newton* と名づけられたのであ

ろうか。

詩人 Blake は，イギリス絵画史の上において特異な存在をしめている画家でもある。彼は彼の目に映じた事物や，彼の心に共感をおぼえさせるような外界の出来事を，見たまま，忠実に描く画家ではなかった。それ故彼が住んでいた London の通りも，郊外の風景も，又そこに住む人達も，そのままでは彼の絵の題材にはならなかった。彼はそのようなものを目にしても，彼の魂に映じた impression を，即ち visions を描いたのであった。例をあげて具体的にみてみよう。彼は London の郊外を歩くのが好きであったから，四季折々の花や虫，鳥等目にしていたはずである。ところが彼は自分の目にうつるところのもの，例えば花なら，花の色，形等を見，それを描くということをしなかったのである。彼は彼の心に映じたものを見，描いたのである。*Songs of Innocence* に *The Blossom* という詩があるが，その詩に描かれている花は，吾々が現実に見る花ではなく，花というよりはむしろ炎のような動きを感じさせるものである。彼はおそらく生き生きとした花の生命とでもいうべきものを描いたのであろう。*Infant Joy* という詩にも花が描かれているが，この花は花のような姿，形はしているけれど，現実の花ではなく，Blake の vision の花である。この花の花弁は燃え上る炎のように描かれているので，やはり内の中から燃え上る喜びとでもいうものをあらわしたのであろう。このようにみてくると，吾々が花なら花を見て美しいと感ずる場合，美しいと感じた花は Plato 流に云うならば，実は「永遠なる美の影」とでも云うことになるのであろう。逆に云えば，「永遠なる美」を吾々は見ないで，その影を見て吾々は喜んでいるということになりそうである。Blake は *A Vision of the Last Judgment* において[1]，

> When the Sun rises, do you not see a round disk of fire somewhat like a Guinea?

という問に対して



Newton on the sea floor : colour print (1795)

O no, no, I see an Innumerable company of the Heavenly host crying 'Holy, Holy is the Lord God Almighty.'

と答えている。従って，朝の太陽を描くにしても，太陽を丸い火のかたまりとみて描く吾々とは違って，Blakeは神が天地を創造したもうた時の荘重な一瞬とうけとめ，神の栄光をたたえて乱舞する天使の群をそこにみて描いたのであった。それ故Blakeは次のように云っている。

To Me This World is all One continued Vision of Fancy or Imagination[2].

このようにみてくると，Blakeが*Newton*と題する絵を，——肖像画でもなく又，Newtonの或日或時の出来事を描いたのでもなく，特に*Newton*と題しなくても外に別の名をつけてもよさそうな絵を——かいた理由がはっきりしてくるであろう。即ち，Blakeは彼のimaginationによって*Newton*を描いたのである。別な云い方をすれば，Newtonという人は，これこれの目鼻立ちをした，こういう輪郭の顔をした人という工合に彼の目でとらえ，そしてあらわされたNewton像ではなく，彼の心眼がとらえたNewtonの姿，彼のimaginationによってあらわされたNewtonという人のvisionということになるであろう。

(2)

ところで，このようなBlakeの*Newton*は左手にコンパスをもって幾何学的な図形を作図しているのであるが，これは何を意味しているのであろうか。

Blakeの予言詩*Europe*のFrontispieceに，*The Ancient of Day*と題する絵が描かれているが，ここでも聖書のJehovahに相当するBlakeの神Urizenが黄金のコンパスをもって，天地を創造している様が描かれている。この*The Ancient of Day*の神Urizenの天地創造は，Miltonの*Paradise Lost*の

...in his hand
He took the golden compasses, prepared
In God's eternal store, to circumscribe
This universe, and all created things.[3]

からヒントを得て描いたといわれている。Milton のこの詩句は，云うまでもなく旧約聖書の箴言（Proverb）第8章第27の

> When he prepared the heavens, I was there:
> When he set a compass upon the face of the depth.

によっている。又箴言のこの箇所の前のところには

> The Lord possessed me in the beginning of his way, before his works of old.[4]

とある。知恵は神が万物を創造する前に生み出され，「われはそのかたわらにあって創造者となった(Then I was him, as one brought up with him.)[5]」のであった。それ故，まず万物が作られて，その中から知恵があらわれたのではなく，さきに知恵があって，その知恵から万物がつくられたということである。内村鑑三は，次のように云っている。

> ・・・あたかも美術家が美術品を作るがごとくである。彼は確乎たる意匠を握らずして製品に取りかからない。されどもあるうるわしき理想にかられてカンバスまたは大理石に対するや，彼は万難を排してその理想を実現する。ラフアエルまたはミケル・アンゼローは神の小なる模型にすぎない。されども彼らの創作は神の創造を代表して誤らないのである。神あり知恵ありて宇宙があるのである。しかるに作品を見て作家とその理想とを賞讃する人は，宇宙を見て神とその知恵とを讃美しないのである。のみならず，宇宙は偶然の作であって知恵は宇宙の産であるという。背理もまたはなはだしからずや。人の宇宙観いかんはその人にとり小問題ではない。これによって彼の品性ならびに一生の方針が定まるのである。そして古き箴言の宇宙観は近代人多数のそれにまさり，はるかに健全で深遠である。ことわざにいわく「神を信ぜざる天文学者は狂人なり」と。ひとり天文学者にとどまらず，生物学者，哲学者，文学者，法学者，すべてしかりである。宇宙と人生とに神の知恵を探るのが，すべての学問の目的であらねばならぬ[6]。

このような内村鑑三のコメントを手がかりとして Blake の描いた *Newton* を考えてみると，左手にコンパスを持って作図している *Newton* は，*The Ancient of Day* の Urizen に外ならないということが出来るであろう。なぜな

ら，Urizen は Blake 神話においては理性（ロゴス）であり，一方の Newton は自然科学界における偉人で，The Royal Society の会長として 25 年間その要職にあって，力を誇示した人であるからである。そして又，Urizen は箴言の言葉で云えば

> The Lord by wisdom hath founded the earth; by understanding hath he established the heavens.[7]

であったし，一方の Newton は「宇宙と人生とに神の知恵を探」り，その知恵にもとずいて色々と業績をあげた人であったからである。又S. F. Damon によれば，Blake の *Newton* が作図しているところの巻紙（scroll）は imaginative creation を意味するという[8]。とすれば，Newton の手にした神の知恵は imaginative creation を通じて，*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*（自然哲学の数学的原理）という大著となって現われたわけであるから，左手にコンパスを持って巻紙に作図している *Newton* の姿は，*Principia Mathematica* を書いている Newton をあらわしているとも云う事が出来るであろう。

(3)

Blake の神話に Milton の *Paradise Lost* に相当する話がある。即ち，その昔吾々の先祖であり，又 Atlantic Continent の patriarch でもあった Albion は，四性（Four Senses）の働きを完全に統一して，均整を保って楽園に住していた。四性とは imagination, reason, passion それに instinct の四つである。

> Four Mighty Ones are in every Man; a perfect Unity
> Cannot Exist but from the Universal Brotherhood of Eden,
> The Universal Man, to whom be Glory Evermore.[9]

ところが四性の間で conflict が生じ，そのため Albion は楽園を喪失して，長い眠りに落入ったのである。なぜそのような四性の間での conflict が生じたのであろうか。

Blake は四性のそれぞれを属性とする4人の神を更に作った。即ち imagination を属性とする神を Urthona と名づけ，reason を属性とする神を Urizen, passion を属性とする神を Luvah, そして instinct を属性とする神を Tharmas というようにである。そしてこれらの神々には更に支配する国があって，Urthona の国は北に，Urizen の国は南に，Luvah の国は東に，そして Tharmas の国は西にあった。これら4人の神々は，このように国を支配し，方位を守り，おのおのの職分を発揮しておれば問題はなかったのであるが，Urizen が野心をおこしてLuvah に自分の領有する南の国の支配を暗黙の中に認める代りに，自分が Urthona の領有する北の国を Urthona にとって代って支配することを認めさせようとしたのである(10)。そのために Albion は楽園を喪失することとなり，永遠の眠りに落入ったというのである。

When Luvah assum'd the World of Urizen to the South
And Albion was slain upon his mountains & in his tent,
All fell toward the Center in dire ruin sinking down.(11)

Blake が彼の神話において力を入れて書いているのは，Urizen が全世界を支配しようとするさまのようである。四性が互に均衡を保ち，調和の状態にあった時，Urizenは first born Son of Light(12)，即ち the Prince of Light(13)と呼ばれ，その国は the glorious World(14)で

...sweet fields of bliss
Where liberty was justice, & eternal science was mercy.(15)

であった。ところが四性の均衡が破れて，Urizen が他を支配しようとする時，彼は最早 the Prince of Light ではなく，頑固で冷酷な老人のイメージにかわるのである。そして Blake にとってはそういう Urizen，即ち理性が問題だったのであった。

では Reason がImagination の働きをおさえ，これを支配すると Reason はどうなるのであろうか。

The Spectre is the Reasoning Power in Man, & when separated
From Imagination and closing itself as in a Ratio
Of the Things of Memory, It thence frames Laws & Moralities
To destroy Imagination, the Divine Body by Martyrdom & Wars.[16]

前述の聖書の箴言（Proverbs）の中で，知恵は神のかたわらにあって創造者となって働くということが述べてあったが，Reason が Imagination を支配すると，「私」のかたわらで創造者となって働くようになるのである。その結果世の中のすべての中心がこの「私」であり，「私」以外のすべてのものは「私」から働きかけられる「客体」として，「私」によって分別され，分析されてゆく対象となってしまって，必然的に一つの法則とか公式とかがつくり出されて，それらの法則や公式にもとづいて更に善悪とか，真偽とかという工合に，二元的に分析され，分別されてゆくことになる。

The Combats of Good & Evil is Eating of the Tree of Knowledge
The Combats of Truth & Error is Eating of the Tree of Life.[17]

従って「私」のかたわらで創造者となって働く理性は Satan であり，「私」はエゴそのよのとなってしまうのである。

Satan, the Spector of Albion, Who made himself a God & destroyed the Human Form Divine.[18]

では理性が情熱（passion）を支配するとどういうことになるというのであろうか。情熱とか情念を意味する言葉に enthusiasm という言葉がある。enthusiasm の—thus—はギリシャ語の *theos*（神）ということであるから，「神霊に憑かれる」といった程の意味になる。ところがこの enthusiasm を 18 世紀の偉大なる批評家 Dr. Johonson が彼の編纂した最初の近代的英語辞典で A vain confidence of divine favour or communication（神の恩恵をうけている，神との交信をゆるされているかのように思いこんでいるくだらない妄想）と定義づけたのであった[19]。Henry Crabb Robinson の日記に[20]，Blake が Socrates と会ったとか，Jesus Christ と交ったとかと Robinson にのべた

ことが書かれているし，又 Milton が Blake の前に現われて自分の書いた *Paradise Lost* によって迷わされることのないように注意したとかという話を Robinson が残しているので，Dr. Johnson 流に Blake をみると，「本当にくだらない妄想にとりつかれている男」になってしまうのである。だが，Blake が Socrates や Jesus Christ に合い，Milton と語ったということは，彼等から受けた感動がいかに大きかったかということ，しかもその感動が何時もたびたび起ったということを示すのであろう。ところが 18 世紀は「passion とか enthusiasm というものが人間をして人間たらしめる理性によって統御さるべきものであって，passion とか enthusiasm の命ずるままに隷属化されることは人間としてむしろ恥ずべきものとして考えられていた[21]」時代であったのである。したがって Romanticism の勃興によって，passion とか enthusiasm というものが解放されるまで，情熱の詩人 Blakeは，

We live as One Man, for contracting our infinite senses
We behold multitude, or expanding, we behold as One,
As One Man All the Universal Family, and that One Man,
We call Jesus the Christ, and he in us, and we in him
Live in perfect harmony in Eden, the land of life.[22]

と叫ばなければならなかった。

では理性が本能 (instinct) を支配する場合はどうであろうか[23]。Blake は，

Prisons are built with stones of Law,
Brothels with bricks of Religion.[24]

といっている。宗教は欲望を罪悪とし，本能を sin とみなすから，欲望や本能が宗教に隷属する限り，罪悪感とか罪の意識とかがつきまとうことになる。Brothels は宗教 —— 愛の宗教ではなく裁きの宗教 —— が作り出したものであって，彼女らは宗教のために暗い奈落の底に沈まねばならないのである。神の許しを説かねばならぬ宗教が，どうして欲望のままに生きることを神の怒りにふれるということで禁じ，罪となると考えているのかというのが

Blake の考えのようである。宗教，特に Jehovah の神である Urizen からの解放こそ，人間性の回復となることを彼は確信していたようである。

（4）

このような Blake の神話はとりもなおさず Blake の目に映った 18 世紀のイギリス社会の姿でもあった。18 世紀を一口で云えば，「第 18 世紀の前半は王政復興時代と同じく法則を重んじた時代であり，その後半は因襲の重さに苦しみつつも容易にこれを脱し得なかった時代である」[25]ということになろう。即ち古典や古代の美しい作品を手本として，形式と内容の調和のとれた作品を心掛けていこうとするあまり，やたらと規則や法則にしばられて，「天真爛漫な感情の発露よりも体よく仕上げをつけることこそ肝要と思い，情熱よりも上品を重んじ，想像よりも好奇心に駆られ」[26]た作品が作られたのである。それ故，絵画においては Thomas Gainsborough（1727—88）や Sir Joshua Reynolds（1723—92）などの肖像画家は elegance で severity のある肖像画を描き，特に Reynolds の場合は「天使のように描いてもらいたい女や英雄的な姿をのぞむ男がレノルズの画室に殺到した」[27]程だといわれている。Blake は油彩絵の柔い色調や色彩に幻惑を感じている人達に対して，

> Such Artists as Reynolds are at all times Hired by the Satans for the Depression of Art— A Pretence of Art, To destroy Art.[28]

といっている。又詩についてみても，前述のように rhetoric が重んじられた時代であったため，抒情的情調に富む詩人の容れられるところとはならず，そのため例えば Willam Cowper（1731－1800）や William Collins（1721－50）は狂人となり，Thomas Chatterton（1752－70）は自殺しなければならなかった[29]。1756 年に生れた Blake は多情多感な青年時代にアメリカ独立戦争やフランス革命という時代の変革をもたらす事件を経験しているだけ，法則や因襲にとらわれた時代に勇敢に挑戦し，imagination の古渇した詩や絵画を批判したのであった。Blake の詩集 *The Book of Urizen* に Urizen が水中でお

ぼれているところを描いた絵が入っている。水は Blake においては materialism を象徴しているので，Urizen が水中でおぼれているということは，吾々の知性があまりにも過信されて，もともと知性の持つ融通無碍な働きが枯渇してしまい，硬直したさまをあらわすのであろう。知性の働きが硬直すると何でも彼でも理念とか法則とかで処理することになってしまい，そのため想像や情熱や本能の働きが押えられて，結果的には閉ざされた死の世界となってしまう。Blake にあっては物質界というものはそういう閉ざされた死の世界なのである。

同じようなことが，岩に腰をおろし，左手にコンパスをもって作図している海底の *Newton* についても云えるのではないであろうか。即ち Newton が *Principia Mathematica* で発表した偉大な業績は，世の中一切の事柄すべてを Newton の諸法則にもとずいて処理してゆこうという人達に利用されて，結果的には Newton は物質界に貢献する何ものでもなかったのだということを Blake はこの絵であらわそうとしたのではなかったろうか。

(5)

Jacob Bronowski は Newton の法則が社会を秩序だて，体系づける理論として利用されたとして次のように説明している。

> Isaac Newton's *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica* had been printed in 1687, at the beginning of the Whig age. Richard Bentley, greatest of Whig scholars and bullies, had at once made 'the Eternal Laws of Gravitation' another name for Nature. And Whig society, happy to learn that nature was so ordered, honoured Newton justly. But the honour was not paid to science: it was paid to order. Bentley was not a scientist, but a divine anxious to prove the world held in a god-given order. John Ray and others put their science to the same use. Bentley had Newton's blessing in founding his order on gravitation. He chose gravitation, because he rightly saw that it closed post-Renaissance astronomy. Throughout the Whig age, Newton's and other sciences were not tools for fresh discovery. They were used to close and enclose the world in another system as rigid as that of Aristotle, which the medieval church had put to the same use. It was an age of systematizers, who sought in science the assurance that the world could be tidied away inside the head

of a rational Whig god. This is why Blake held that its atomism was 'to Educate a Fool how to build a Universe with Farthing Balls'.[30]

Bentley は 1692 年 *A Confutation of Atheism* と題して講演した時，神の摂理を証明するのに Newton の法則を用いたのであった。彼は *Principia Mathematica* を理解するだけの数学的知識を持っていなかったにもかかわらず，頭のよい思想家であったから，さっそく神学の説明に利用したのである。

Tory 党支持者の John Wesley は，おのれを無にして神に救いを求めなければならないように，おのれを無にして王に敬意を払い，法に服さねばならないと考えて，

None of us shall either in writing or in conversation speak lightly or irreverently of the Government. We are to observe that the oracles of God command us to be subject to the higher powers; and that honour to the King is there connected with the fear of God.[31]

と主張した。18 世紀はほとんど Whig 党が政権を握っていた時代であり，従って Walpole や Pitt 等の大政治家達が Whig 党から出て内憂外患にあるイギリスの政治にあたっていた時代である。そういう時代に保守主義者の Wesley が Whig 党政府の許で，法秩序や社会秩序を守ろうとしたことは，逆に云えば当時のイギリス社会においては，大衆の風紀が如何に乱れていたか，又宗教心を持たない下層階級の人々が如何に不平不満を抱き，そして反抗する機運にあったかということを示すものである。事実この頃の風紀の乱れは William Hogarth（1697—1764）の描いた「好色一代女（*Harlot's Progress*）」（1732）や「好色一代男（*Rake's Progress*）」（1765），「当代結婚風俗（*Marriage-à-la-Mode*）」（1743）等をみればよくわかるであろう。又 Hogarth の絵に「ジン横丁（*Gin Lane*）」（1750）というのがある。これは当時のイギリスの下層階級の人々が昼間から仕事をせずにジンを飲んでいるさまを描いたものであるが，1720 年から 1750 年までの 30 年間，London での死亡率は出生率をうわまわったという記録も残っているので[32]，当時の人々はうっ憤を晴らすためにジンを飲み，そしてジンにうつつをぬかしていたことがこの絵

によって理解されるのである。

Riot and Slaughter once again
Shall their career begin:
And ev'ry parish sucking babe
Again be nurs'd with Gin.[33]

という Sir Chales Hanbury Williams の言葉も当時の社会をよくあらわしていると思われる。

従って，Newton の法則は 17 世紀末頃から世界像の転換をひきおこすきっかけをつくり，それをうけついで次の 18 世紀では科学と結びついて技術のいちぢるしい進歩をうながして産業革命へと至るのであるが，一方において当時の宗教界や世俗社会の混乱をおさめるよりどころにも又，利用されたのであった。それ故 18 世紀は，文学においても神学においても，又政治社会の面においても，いわゆる astronomical morality[34]とでもいうような，強い tradition の許にすべてがあったわけである。そして Blake はそういう tradition に反抗し，Newton の法則をはじめ，色々な規則，因襲等が人々の自由な活動に足かせをはめ，又時間空間の中に imagination や passion, instinct を閉じ込めておこうとする限りにおいて，最早それらの法則や因襲は形骸に等しいと断じたのである。Blake の *Newton* が海の底で作図しているのは，そういう Blake の主張を表現したものなのである。

(6)

ここで吾々には一つの疑問が残る。それは人間の自由を拘束する規則とか法則とか因襲に反抗し，imagination や passion, instinct の解放を叫んだ Blake 自身が 14 才の時 James Basire の許に徒弟として住みこみ，7 年間の間 Basire の許で engraving の技術を学んだということについてである。当時イギリスにおいて，画家は無教育な手職人とみなされていた。そういう時代にあって engraving の技術を学び，画家という一人前の手職人になるためには，やはりちゃんとした一つの技法を身につけなければならないし，技法を身

につけるためには勝手気ままは許されず，むしろ tradition にもとずく束縛やきびしい因襲の許におかれていなければならないはずである。そして Blake の場合，徒弟時代に Basire の命をうけて Westminster 寺院等でゴシック様式の monument 像を模写させられたということであるが，模写するためには自由創意とか，自由な観察，規範にとらわれぬ表現等，とうてい許されぬことであったろう。ところが Blake は忠実に模写するというというこの仕事を，5年間打ち込んでやったということである。このような若い頃の Blake を考える時，彼が規則や法則，因襲，或は伝統に反抗するのは，どういう事からなのであろうかという疑問が起ってくる。

Blake の *Annotations* to *Reynolds* に次のような言葉がある。

> To learn the Language of Art, 'Copy for Ever' is My Rule.(35)

この言葉にもとずいて，彼が Westminster 寺院等で monument 像を模写するため5年間もこもったということを考えてみると，模写するということは，要するに，彼にとっては「芸術の言葉を学ぶため」であったのだということになるであろう。それから又，同じ *Annotations to Reynolds* に

> Imitation is Criticism.(36)

という言葉もあるので，おそらく模写しながらも，彼は独自の表現様式を求めて創意工夫が彼なりにされていたことであったろう。この場合の Criticism はそういうように解釈したい。そうすれば Sir Anthony Blunt 教授の次のような説明に，うなずけるのである。

> When he borrows a pose from some other artist, he so completely transforms the figure that it seems to be wholly Blakean and shows at first sight no trace of its alien origin. Indeed it seems probable that Blake was often unaware that he was borrowing, and, when he was once challenged on an individual case, he denied that he had ever seen the original which he was accused of imitating. The evidence to show that he did borrow extensively is, however, overwhelming, and one is forced to conclude that Blake's visual memory was so remarkable that, if he had once seen an image, it was retained in the great

Abias, by Ghisi after MICHEL ANGELO

Abias, by Blake after GHISHI

> storehouse of his imagination, together with thousands of other images derived from nature, or other works of art, or the invention of his own fantasy.[37]

又, Blunt教授によれば,芸術家というものは偉大な作品を研究し,それらの作品からモチーフを借用し，自己の絵の中にとり入れてゆくべきものはとり入れて行くべきだという考え方が16世紀以来,芸術家の間で受け入れられていたということである[38]。従って今日問題にされるような盗作とか, plagiarismとかということは芸術の勉強のためには問題にされなかったのであった。Blakeはそういう当時の伝統というか，慣習というか，そういうものに従って，Westminster寺院等で中世のゴシック様式のmonument像を模写し，或は敬愛し心酔していたRaphaelやMichelangeloの絵を学び，借用し，そして自分のものとして描いていったのであった。

Blakeの*Newton*について云えば，Blunt教授の説明によると，これはSistine Chapelのルネット(*lunettes*)の一つにあるMichelangeloの*Abias*の像にもとずいて出来ているということである。というのは，このMichelangeloの*Abias*をGhisiという人がengravingしているのであるが,このGhisiのengraringをBlakeが正確にcopyしたのが現在大英博物館にあるからだというのである。そしてBlunt教授は，Blakeが*Newton*を描く時*Abias*の像のposeを少し変え，又腕や体の筋肉を描くのに，Michelangeloのオリジナルのものよりも，ずっと強調してengravingしてあるGhisiの方にならって，更に諷刺的に描いていると云っている[39]。そう云えばBlakeの*Newton*は背中のあたりの筋肉が少しヘビのうろこのような感じがするのは，Newtonに対するcaricatureなのであろうか。更にBlunt教授は，

> ...however much he was basically indebted in his poetry to dictation from an external source, he was not a slave to it and like all poets he altered and improved his first drafts.[40]

と云っている。それ故，Blakeの詩においても，多数の哲学者，神学者，詩人達等から借用した思想や言葉，表現等が彼の心の中に呼収され，混ぜ合され，

変形されて，抒情詩となり或は，予言書となったということが考えられる。

そこで，前述の疑問に対しての解答であるが，BIake は彼の imagination や passion，或は instinct が reason によって拘束される限りにおいて，彼は猛烈に反抗したのであるけれども，法則とか，tradition とかが reason の手先とならない場合は，すなおにそれらに従いながら芸術の言葉を学び，一方において自由に imagination の翼をのばし，passion をもやし，或は instinct そのものであったのだというように説明出来るのではないだろうか。事実，Westminster 寺院で模写の仕事をしていた時も，彼の imagination は自由に翼いたればこそ，Shakespeare をまねて，未完ながらも詩劇 *King Edward the Third* 等を書いてみたのであった[41]。ところが逆に彼の imagination なり，passion なり，或は instinct なりが束縛されると，彼は我慢しきれなくなって爆発するのであった。例えば，Royal Academy の Library で Moter に Blake が，Raphael や Michelangelo を勉強するのをやめて，Le Brun や Rubens を勉強しなさいと instruction された時，Blake は

How I did secretly Rage![42]

と述懐している。色彩よりも線に生命を見出していた Blake にとって Le Brun や Rubens の絵は完成した作品（Finishd Works of Art）どころか，始まりでもなかったのである。そういう Blake であったから，劃一的な教育の場となる学校にもなじめず，そのためか彼自身小学校にも入学せず，長じて自ら進んで入った Royal Academy も中退したのであった。次の *The School Boy* という詩は，彼の心をよくあらわしているというるであろう。

The School Boy
I love to rise in a summer morn
When the birds sing on every tree;
The distant huntsman winds his horn,
And the sky-lark sings with me.
O! what sweet company.

But to go to school in a summer morn,

O! it drives all joy away;
Under a cruel eye outworn,
The little ones spend the day
In sighing and dismay.

Ah! then at times I drooping sit
And spend many an anxious hour,
Nor in my book can I take delight,
Nor sit in leaning's bower,
Worn thro' with the dreary Shower

How can the bird that is born for joy
Sit in a cage and sing!
How can a child, when fears annoy,
But droop his tender wing,
And forget his youthful spring?

O! father & mother, if buds are nip'd
And blossoms blown away,
And if the tender plants are strip'd
Of their joy in the springing day,
By sorrow and care's dismay,

How shall the summer arise in joy,
Or the summer fruits appear?
Or how shall we gather what griefs destroy,
Or bless the mellowing year,
When the blasts of winter appear?(43)

生の喜びのために生れて来たBlakeにとって，理性の籠の中に閉じ込められては，歌うことも描くことも出来なかったのである。だがBlakeの生れた18世紀はNewtonの科学を新しい発見のための道具として用いるよりも，むしろ社会全体を硬直した体系の中に閉じこめるのに利用した時代であった。或はBronowskiの言葉で云えば，Blakeの時代は

It was an age of systematizers, who sought in science the assurance that the world could be tidied away inside the head of a rational Whig god.(44)

であったのである。従って Newton はそういう体系化をめざす人達の代表と Blake は考え，そして又，当時の詩，絵画，思想，社会すべてを象徴化して

A dark black Rock & a gloomy Cave[45]

とも考えたのであった。そして，そういう「暗い黒い岩とゆううつな洞窟」はとりもなおさず彼の *Newton* でもあったのである。従って Blake の *Newton* という絵は，18 世紀のすべての問題をとらえ，あらわしているということが出来るであろう。

以上考察してきたことをまとめて結論づければ，政治的にも，宗教的にも，又風俗的にも，色々混乱していた 18 世紀のイギリス社会に，何とか秩序をもたらしたいと願った人達が科学にそのよりどころを求め，その結果 Newton がそれらの人達に利用されて，自由のない窒素するような社会の形成に彼自身貢献することとなったというように Blake は考えていたので，その結果 *Newton* と題するこのような絵が生まれたのだと思うのである。

（昭和 51 年 5 月 21 日受理）

（註）

1）　Geoffrey Keynes: *The Complete Writings of William Blake.* The Nonesuch Press. 1957. p.617
2）　*Ibid.,* p.793
3）　*Paradise Lost,* VII, ll.224—227
4）　*Proverbs,* 8:22
5）　*Ibid.,* 8:30
6）　内村鑑三聖書註解全集　第 5 巻　教文館．昭和．p.183
7）　*Proverbs,* 3:19
8）　S.F.Damon: *A Blake Dictionary,* Brown University Press. 1965. p.299
9）　G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake.* p.264
10）　*Ibid.,* pp.277—278
11）　*Ibid.,* p.500
12）　*Ibid.,* p.283
13）　*Ibid.,* p.326

14) *Ibid.*, p.524
16) *Ibid.*, p.714
17) *Ibid.*, p615
18) *Ibid.*, p.512
19) 中野好夫：英文学夜ばなし．新潮社．昭46．pp.63—64
20) 狐野利久：詩と神話．室蘭工業大学研究報告．文科編．第6巻第2号．昭43．参省．
21) 中野好夫：英文学夜ばなし．p.63
22) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake,* pp.664—665
23) 狐野利久：W.Blakeの詩 *Visions of the Daugters of Albion* について．室蘭工業大学研究報告．文科編．第8巻第3号．昭51参省．
24) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake.* p.151
25) 斉藤 勇：英文学史．研究社．昭28．p.216
26) *Ibid.*
27) 岡本謙次郎：ブレイク．美術家評伝双書．岩崎美術社．1970．p.108
28) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake.* p.452
29) 斉藤 勇：英文学史．pp.223—224
30) Jacob Bronowski: *William Blake and the Age of Revolution.* Routledge & Kegan Paul. London. 1965. p.137
31) *Ibid.*, p.146
32) Dorothy George: *London Life in the XVIIIth Century.* London. 1925. p.27
33) *Ibid.*, p.36
34) Blackstone: *English Blake.* Archon Books, 1966, p.329
35) G.Keynes: *Tie Complete Writings of Writings of William Blake.* p.446
36) *Ibid.*, p.453
37) Anthony Blunt: *The Art of William Blake.* Columbia University Press. 1959. p.32
38) *Ibid.*, p.32
39) *Ibid.*, p.35
40) *Ibid.*, p.22
41) 狐野利久：Blakeの詩劇 *King Edward the Third* について．北海道英語英文学．第17号．参省．
42) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake.* p.449
43) *Ibid.*, p.124
44) Jacob Bronowski: *William Blake and the Age of Revolution.* p.137
45) G.Keynes: The Complter
45) G.Keynes: *The Complete Writings of William Blake.* p.817

バドミントン選手の平衡機能の検討

小　成　英　寿

A study on the function of equilibration for badminton players

Abstract

Of the basic adilities and aptitudes of athletes, it needs. The particular function of equilibration for badominton players.

This paper is a study of how the function acts by some stimulations thich are given to the trained and the untrained to examine if there are any differences between them.

I　目　的

Badminton 競技選手の，基礎能力及び適性は他の多くの sport 選手のそれと著しく異なるものではないと考えられるが，その能力，適性として挙げられるものは，先ず，体位，筋力，運動神経支配（反応速度），瞬発性，柔軟性，呼吸循環機能（最大酸素摂取能），全身持久性，スピード持久性，情緒支配性，平衡能力等が考えられるであろう。競技選手を観察するに，情緒支配性や平衡能力を除外すれば前記の機能がほぼ等しい data を示すにもかかわらず彼等の競技能力に明らかに差異を感ずることがある。それは skill の差異なのか，sensitive な違いなのか判然としない。その違いの一つの要因として平衡能力が関与しているのではないか，彼等の平衡能力はどのようなのか，競技者の差異はどうなのかという等々のことについて検討を加え選手の traning の指針を得ることを目的としたものである。

1，平衡能力について

我々は種々の生体情報を得て sport traning に活用しているが身体の動揺

も又そのうちの一つである。健康人の日常動作のなかで身体動揺を特に異和感をもって感ずることは少いが，労働やsportが過度になると身体が廻るような廻転性の感じ，転倒感，浮動感，身体の沈み込む感じ，立ちくらみなどを感ずることがある。sport競技中選手は激しい動揺刺激にさらされるが，それは運動負荷姿勢とその反射のパターンに迷路に対する回転や直線速度刺激，視覚刺激が影響を与え空間（space orientatiin）を形成することになる。もともと重心が高く支持面が狭い物理的に不安定なヒトの直立姿勢が安定に維持できるのは，立直り反射により，体の傾きに対して常に立直りが行われ動揺しながら平衡が保たれている（dynamic equilibrum）からである。動きに抗して重心を元の重心線に戻らせようとする姿勢の調整は，筋の自己受容器，腱器官を介しての反射，前庭器官，視覚による調整が関与するが，この反射を更に高次に制御するのが小脳を中心とする，中枢神経系である，又錐体路系の運動神経は錐体外路や小脳によって調整されるだけでなく，脳幹の運動核，情動脳によっても影響があり，大脳皮質領野の影響も又重要である。迷路は全身の骨格筋に一定の緊張を与えているが刺激の適否により，身体の平衡が保たれたり，平衡が破綻すると骨格筋の運動失調が生じたりする。選手は競技中激しい平衡破綻にさらされながら最大の安定度を得るための立直りが必要であり，高速度(active)な運動中で次に必要な動きを考慮しながら，安定面を広くし，かつ，或る方向に速やかに動くため，身体の重心を高くし同時に重心線が安定面外周の運動方向に対する上縁に近くなければならない。このような姿勢を保つため運動反射（moter reflex）が重要な部分を占めるがこの中で平衡機能の関与する分野も又重要である。前述した，迷路，視器，自己受容器，外受容器，これを統合する中枢神経が合理的に働き，運動における協調（coordination）とか積分作用（integrative action）を生み出し目的にかなった運動動作が行われたり均勢のとれた姿勢を保つことができるのである。

II 調査方法

調査対象は：UBER CUP 国際女子 Badminton 競技強化選手 11 名（U群）と対照群として，北海道女子短期大学 Badominton 部学生（H，G，C，S）（T群）11 名計 22 名で，北海道大学 traning center における強化合宿中に調査を実施したものである。使用測定機器は，平衡機能計（static sensograph／IGO1,／IGO2）三栄測器製で，osillograph 及び X,Y recorder に記録する方法をとり data analyzer により重心移動量を数量化し表示したものである。

III　測定項目及び手順

(1)　体力測定U群 20 項目　T群については 21 項目を測定した。（表 1，及び表 2）

(2)　平衡機能の測定は，立位時（standing）の身体動揺（重心の移動）度を前記した機器により身体の左，右，方向，前，後，方向，及び左右，前後方向合成図として，安静立位時の身体動揺度を測定し次いで，運動負荷を与えその変化の様相を知ろうとした。運動負荷としては競技中 spin 様の動作が多くみられることから右廻り spin360°回転 10 回，次いで左廻り spin360°回転 10 回，次の刺激として，Badoominton court 中央から，右前角—中央—前左角—中央，左後角—中央—右後角にそれぞれ早く移動し，racket を swing する。以上を 1 set とし連続 10 set を負荷として与えた。

測定に際し被験者は台上の足形に合せ位置（posture）を統一した。片足立は片足を約 30°前方にあげる両腕は体側に保持し 30 秒間測定した。spin 負荷後の片足立（one leg standing test）は同様の方法で台上から平衡がくずれ両足が着地するまで測定した。foot worke 後の両足立ち（natural standing）では僅かに両足平行に開き自然な姿勢を維持（steady setting）するよう指示した。

測定は次の順序で行った。

1　開眼　右片足立ち 30 秒間（O,E,R,F）

2　開眼　左片足立ち 30 秒間（O,E,L,F）

3　閉眼　右片足立ち無制限（S,E,R,F）

4 閉眼 左片足立ち無制限 (S,E,L,F)

5 開眼 右片足立ち Jump spin 右廻転 10 回無制限 (R,T,S)

6 開眼 左片足立ち JumP spin 左廻転 10 回無制限 (L,T,S)

7 開眼 両足立ち footwork 10set 無制限 (F,T)

表1 ユーバー杯強化選手体力測定成績

測定項目 / No. Sub	体重 kg	身長 cm	ローレル指数	座高 cm	胸囲 cm	右上腕囲(伸・屈) cm	左上腕囲(伸・屈) cm	前腕囲(伸・屈) cm	大腿囲(右・左) cm	下腿囲(右・左) cm
1. H・Y	60.1	161.5	144	87.0	86.0	25.7 29.2	24.9 27.0	23.9 21.7	55.0 51.4	34.9 33.8
2. E・T	54.5	164.6	122	88.3	83.1	24.4 26.0	22.0 25.1	23.3 21.2	52.0 51.5	32.7 33.3
3. M・A	53.1	163.5	121	87.2	80.5	23.7 26.0	20.9 23.6	22.5 20.5	51.0 50.2	33.9 33.2
4. M・I	65.2	166.4	143	87.8	85.2	25.5 27.6	23.6 25.5	24.6 22.1	59.0 57.8	40.2 40.5
5. M・S	57.3	163.4	129	88.0	83.8	25.0 25.7	23.3 21.4	23.1 21.4	54.6 52.2	35.1 35.0
6. S・I	55.0	154.6	148	82.0	84.0	25.7 27.8	25.0 26.0	24.7 23.5	54.8 51.8	35.9 36.0
7. K・S	51.2	162.0	118	90.0	78.0	25.6 25.0	21.5 23.6	22.0 25.0	52.0 49.9	34.5 35.5
8. M・I	50.5	151.8	143	82.0	79.1	22.5 25.9	22.0 24.2	22.0 21.0	52.4 50.5	32.3 32.3
9. M・N	60.3	158.5	152	85.2	82.8	23.1 28.2	23.7 27.0	24.0 22.1	60.0 57.8	27.5 37.0
10. Y・A	58.1	154.5	159	86.3	84.3	25.8 28.0	24.0 26.0	24.0 22.0	57.0 54.6	36.0 36.0
11. S・F	52.8	154.0	146	83.5	81.0	23. 26.6	22.6 25.0	23.3 21.0	54.1 52.0	34.0 34.5

X，Y方向の記録は台上に乗ってから始めの2秒間をcutし以後20秒間の記録を表示した。従って移動量は20秒間の数値である。X，Y合成図は終始記録したものである。X，Y記録計測定range lv／cm及び0.1v／cm oscillo速度5mm／s

指極 cm	背筋 kg	握力（右・左）kg	腕力（右・左）kg	脚力（右・左）kg	垂直跳 cm	サイドステップ E/20″	ジャンプスピン E/30″	上体おこし cm	段階点	体前屈 cm	段階点
159.2	110	37.0 28.0	23.0 21.5	77.5 51.0	36	44	22	48	2	19.0	3
167.0	140	37.5 34.5	22.0 19.5	59.0 58.5	51	45	貧血	71	5	20.0	4
164.0	108	34.5 30.0	26.0 22.5	56.0 46.0	49	45	捻挫	56	3	11.0	2
169.2	119	41.5 34.0	21.5 17.5	56.5 53.0	40	40	22	46	2	19.0	3
166.8	114	39.0 32.0	20.5 18.5	57.5 60.0	43	45	26	67	4	17.0	3
157.4	110	38.5 32.5	20.5 20.0	62.5 58.0	34	42	30	48	2	15.0	3
156.2	111	36.5 29.5	19.0 19.0	46.0 47.0	36	45	19	51	2	11.0	2
158.0	103	32.5 33.0	17.0 16.5	54.0 43.5	42	44	13	46	2	25.0	5
156.2	120	33.0 31.1	23.0 18.5	88.0 71.5	40	44	欠	68	4	12.0	2
152.2	111	37.5 30.0	21.0 17.5	73.5 69.0	50	46	28	77	5	20.0	4
154.0	116	35.5 32.0	19.0 18.0	84.0 68.0	50	44	26	65	4	17.0	3

Ⅳ－1 測定結果と考察

1，基礎体位，形態，筋力，運動速度能力，柔軟性等について

両群の体位，体力測定成績を比較検討するこのとは本調査の主題ではない

表2 短期大学バドミントン選手体力測定成績 (H. G. C. S)

測定項目 / No. Sub	体重 kg	身長 cm	ローレル指数	座高 cm	胸囲 cm	(右)上腕囲伸・屈 cm	(左)上腕囲伸・屈 cm	右前腕囲 cm	左前腕囲 cm
1．M・K	47	152.3	134	81	76	25.0 26.5	24 25	24	23
2．M・A	50	154.0	136	83	80	26.0 27.0	25.0 26.5	24	23
3．A・S	52	153.0	145	83	81	27.0 28.0	25.0 26.0	24	23
4．U・O	53	154	145	84	83	26.0 27.0	25.0 25.5	24	23
5．K・K	47	150	139	79	76	23.0 25.0	23.0 24.5	24	23
6．M・T	54	156	142	81	84	26.0 28.5	25.0 27.0	24	23
7．S・K	47	154.5	128	81	80	21.0 23.5	23.0 24.0	23	22.5
8．Y・M	49	157	126	84	79	25.0 26.0	24.0 25.0	23	22
9．U・Y	51	152.2	145	83	83	26.5 28.0	26.0 27.0	24	23
10．T・S	62	159	154	88	84	29.0 20.0	27.0 29.0	27	25
11．K・K	57	159	141	86	85	27.0 28.5	25.0 27.0	25	24

が，平衡能力が競技力の一部を担当するとしたならば，競技能力の主要部分を占める前記諸事項と交錯しているに違いない。そのためにも相互に影響しあう基礎体位等々を検討することは意義があるであろう。

表1，表2により両群の成績を比較すると概要次のとおりである。U群の

下腿囲 右左・cm	大腿囲 右・左 cm	握力 左・右 kg	指極 cm	背筋 kg	腕力 右・左 kg	脚筋力 kg	垂直とび cm	サイドステップ E/20″	ジャンプスピン E/30″	上体おこし cm	体前屈 cm
33.5 32.5	50.5 49.4	35 28	153.0	82		105	43	49	17	62	22
35.0 34.0	51.0 50.0	41.5 34.0	152.5	92		105	41	40	17	51	12
35.0 35.0	53.0 52.0	31.0 28.0	153.0	85		110	48	48	23	64	21
36.0 35.5	52.0 52.5	35.0 33.0	152.5	89	20 18	96	36	51	25	59	15
34.0 34.0	46.0 48.0	32.0 28.0	150.0	85	15 13	93	39	44	24	38	13
35.0 35.0	53.0 52.0	26.0 27.0	155.0	92	18 15	94	37	49	26	61.5	19
34.5 35.0	48.0 48.0	25.0 25.0	155.0	72	17 17	74	36	45	21	58	14
34.5 34.0	50.0 49.0	31.0 29.0	154.0	83	16 14	94	47	53	19	59	14
38.0 39.0	56.0 56.0	21.5 35.0	151.0	97	18 15	111	45	47	27	58	18
39.0 39.0	56.0 56.0	34.0 29.0	155.0	114	28 23	122	39	47	25	46	15
37.0 37.5	50.0 52.0	30.0 35.0	158.0	83	15 15	93	37	48	26	62	19

身長平均 159.7cm，体重 56.8kg，ローレル指数 139（但し表1にのっていない候補3名を含む 14 人）となり座高，胸囲を考え合せるとほぼ均整がとれているといえる。表2のT群では身長がかなり低く体重はほぼU群と変らないこと胸囲がやや狭いことなどからずんぐり型で上体の発達と持久性（心臓の働き，特に酸素摂取能，回復能力）等に劣るのではないから考えられる。上腕囲，伸屈，前腕囲等は太さの問題と，伸，屈それぞれ太さの差は筋瞬発生に関連するもので，U群では右上腕囲に著明な差が認められ，左上腕囲にもU群が僅かに優位にたっている。これはよく鍛練されていることを語るものであろう。大腿囲と下腿囲の測定値についても，大きいものは脚筋瞬発性が大きいと考えられるが，U群の大腿囲が特にT群より優っている，同時にU群の右，左の差が著しいが利足と関連があるのではないかと考えられる。指極もU群がまさっているが reach の長い種競技には有利になるのではないだろうか。次の背筋力，握力，腕力，脚力，は Badominton 競技についても必須の筋力でありその優劣は競技力そのものである。U群の右腕と背筋力は共にT群を大きく上廻って優秀であり脚筋力は共にすぐれているとはいえない。運動速度と柔軟性は Badominton 競技の技術と speed に影響を与える基礎的な能力であるが垂直とびではU群がかなり Jump 力があると思われる，Side stepe でもU群の成績は高い能力を示している。spin 運動でも僅かにU群がまさっていることを示している。以上の体力測定の成績を総括すると，基礎体位で僅かにU群が均勢がとれていることで競技の性質上より望ましい線に近いことを示している。筋力，運動速度，柔軟性においてはU群はT群を各項目とも上まわり，特に激しい traning の結果大腿の発達と利腕とそれに関連する背筋に著しく強力な発達をみることができる。又敏捷性と動的平衡性でもU群優位性は動かない。U群の経歴から長年に亘る traning の結果比較的 career の短いT群とこのような差が示されたものであろう。

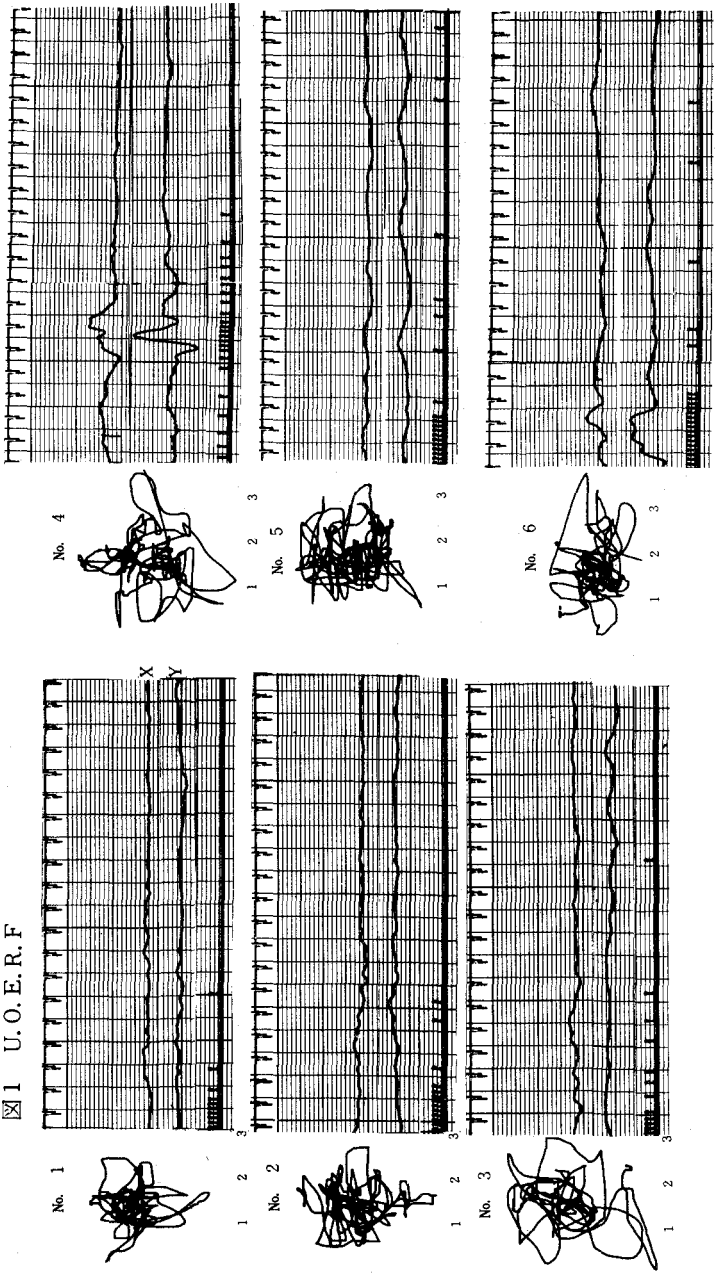


図1　U.O.E.R.F

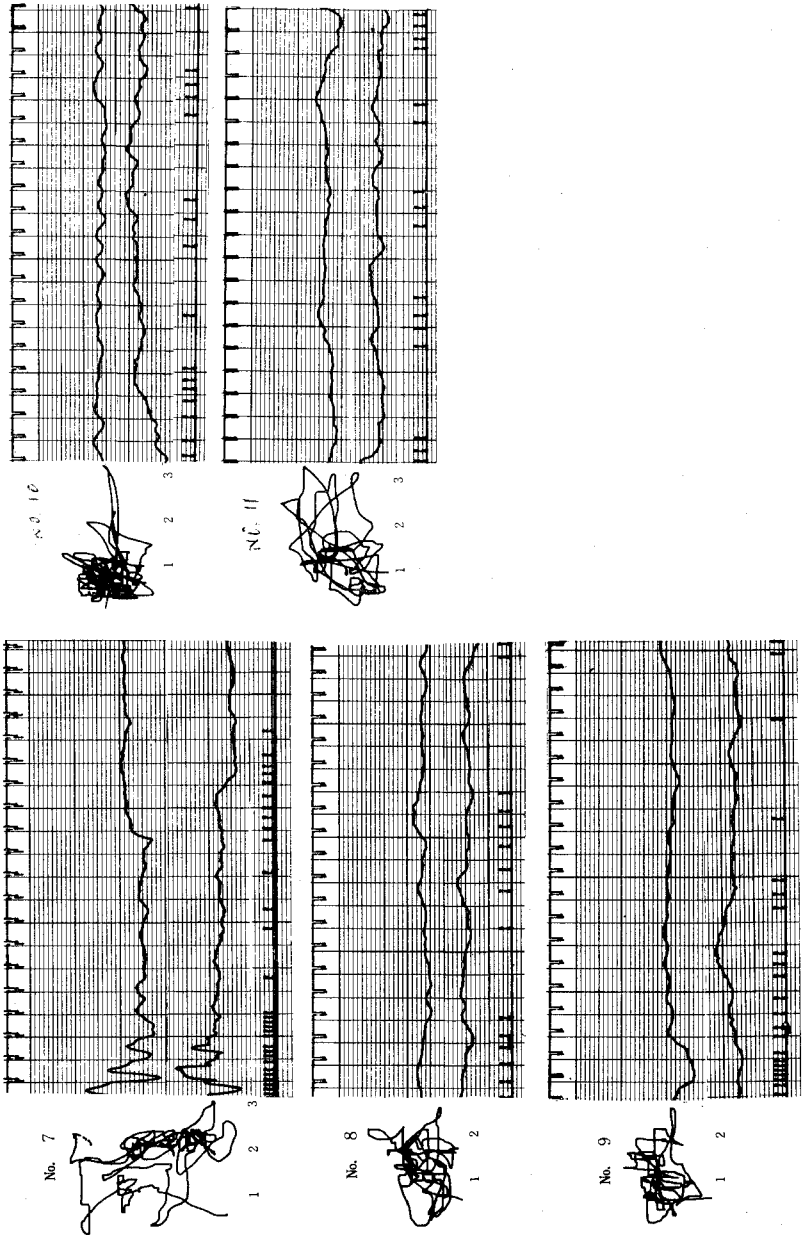
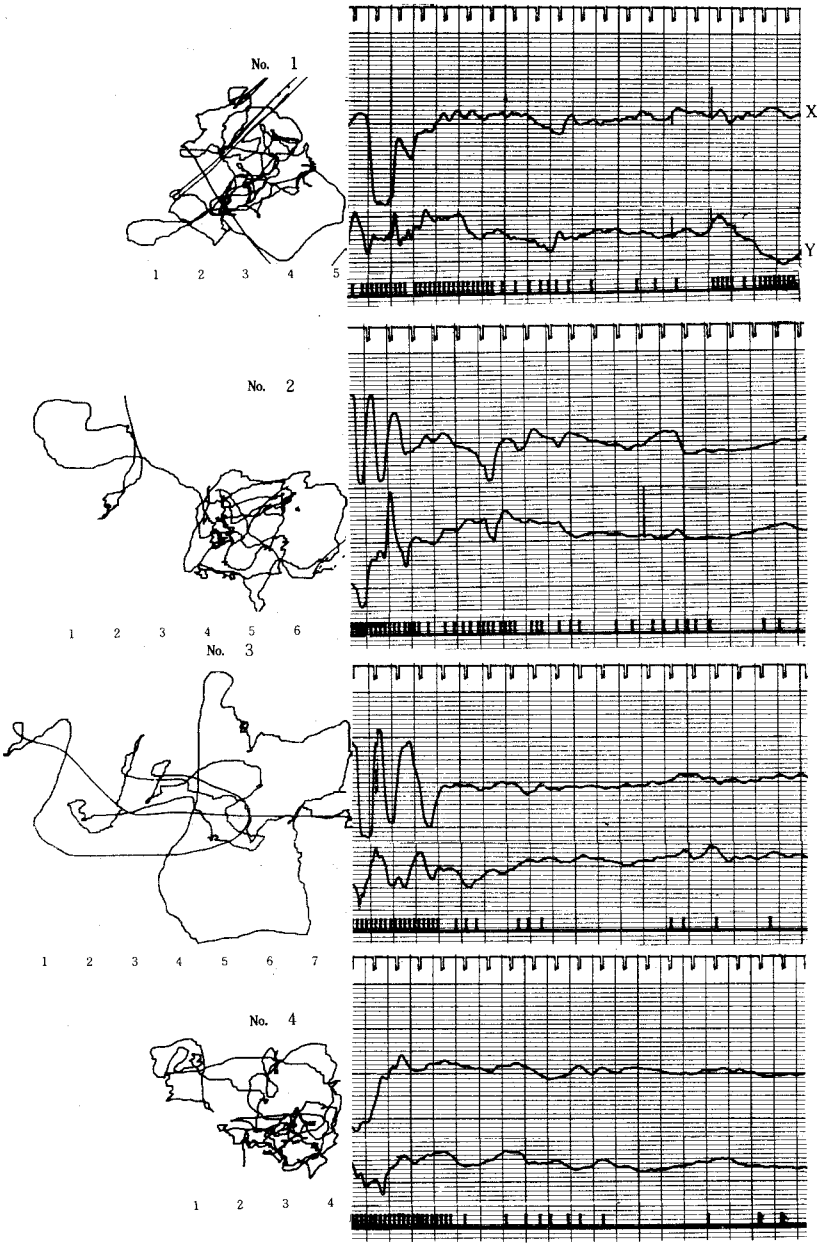
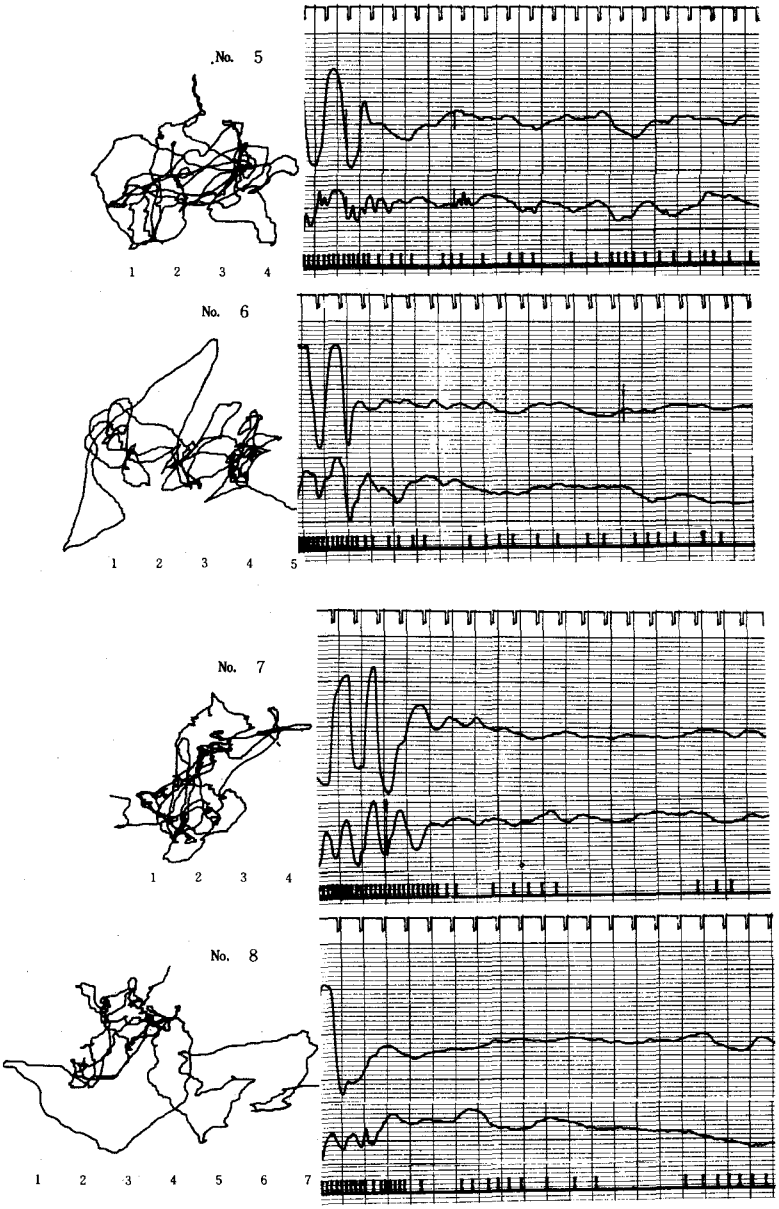

No. 7
No. 8
No. 9
No. 10
No. 11
1
2
3

図2　T. O. E. R. F




No. 5
1 2 3 4
No. 6
1 2 3 4 5
No. 7
1 2 3 4
No. 8
1 2 3 4 5 6 7

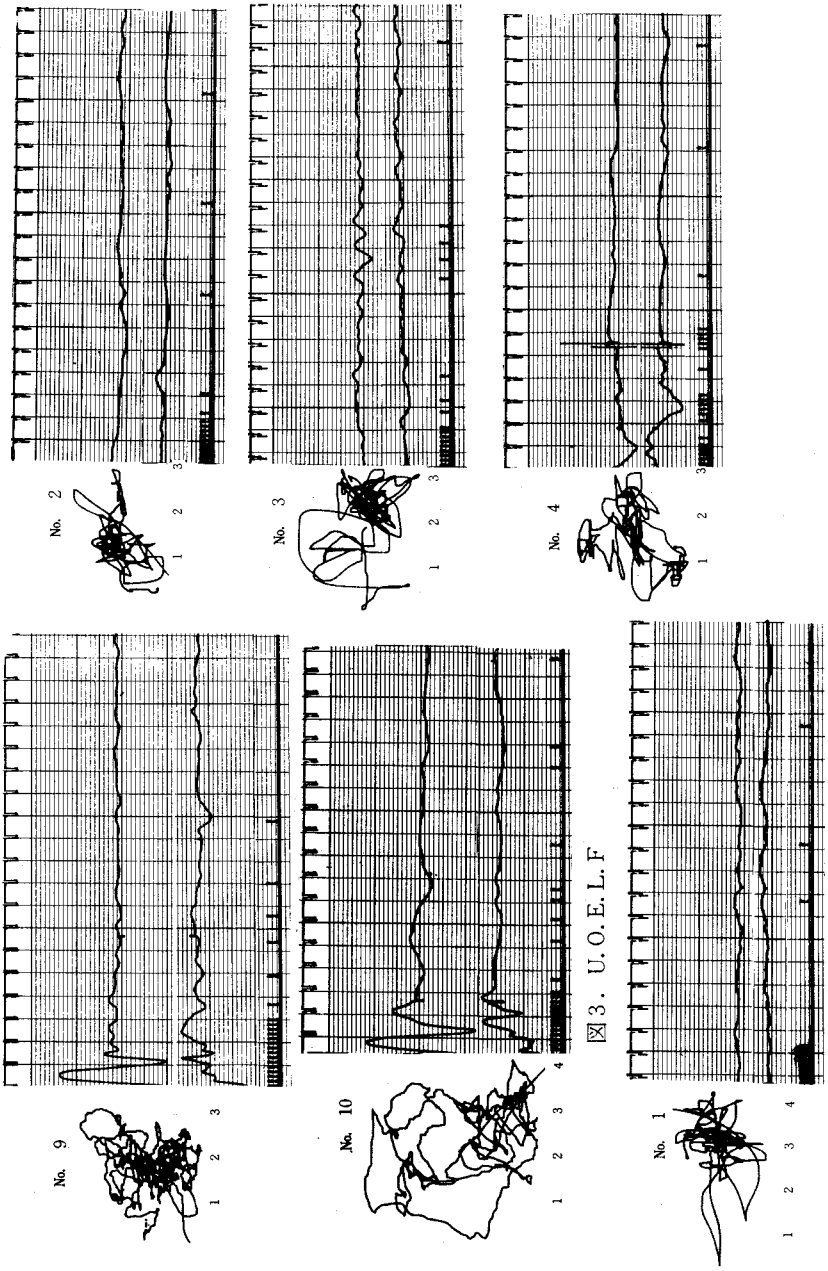


図3. U.O.E.L.F

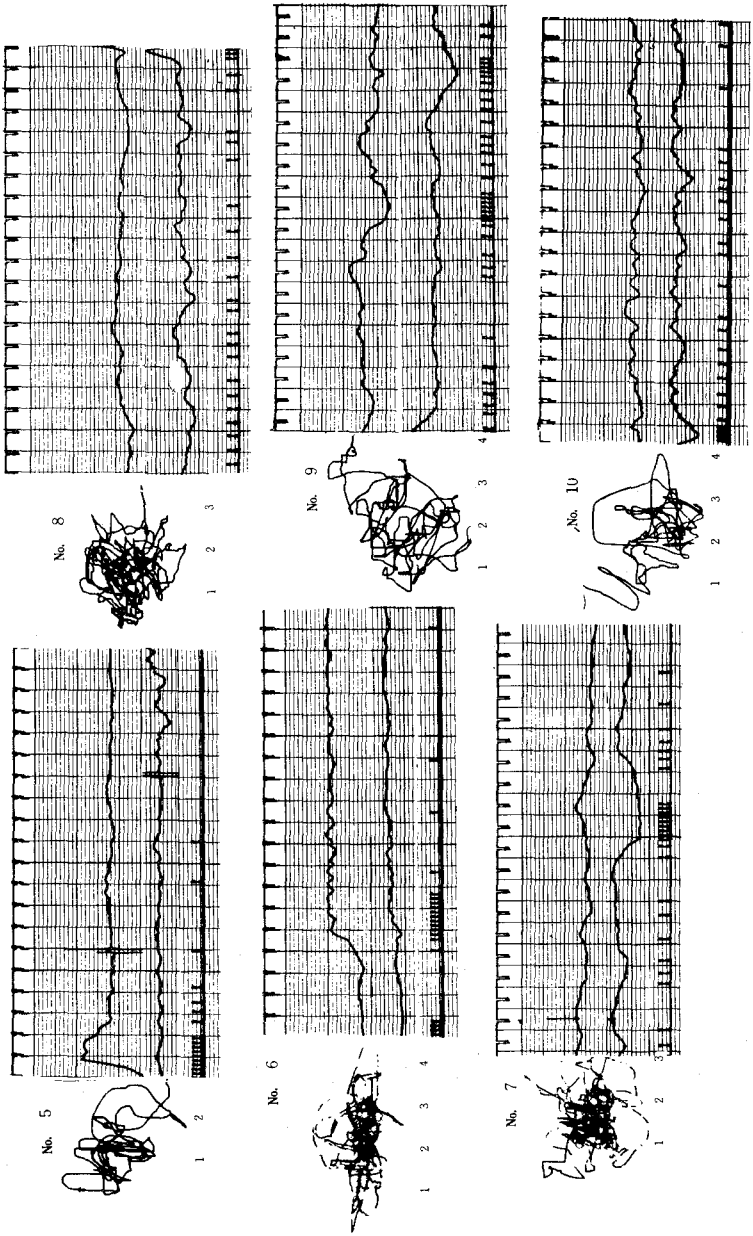
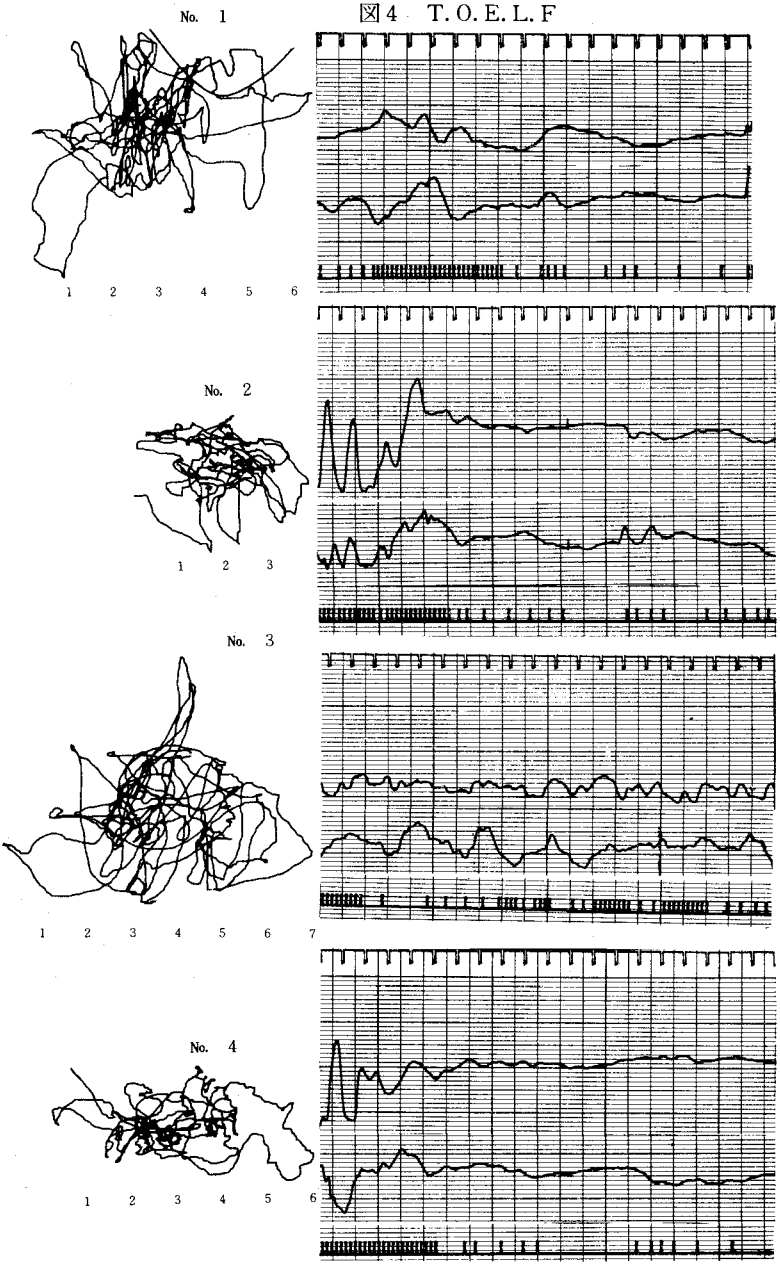
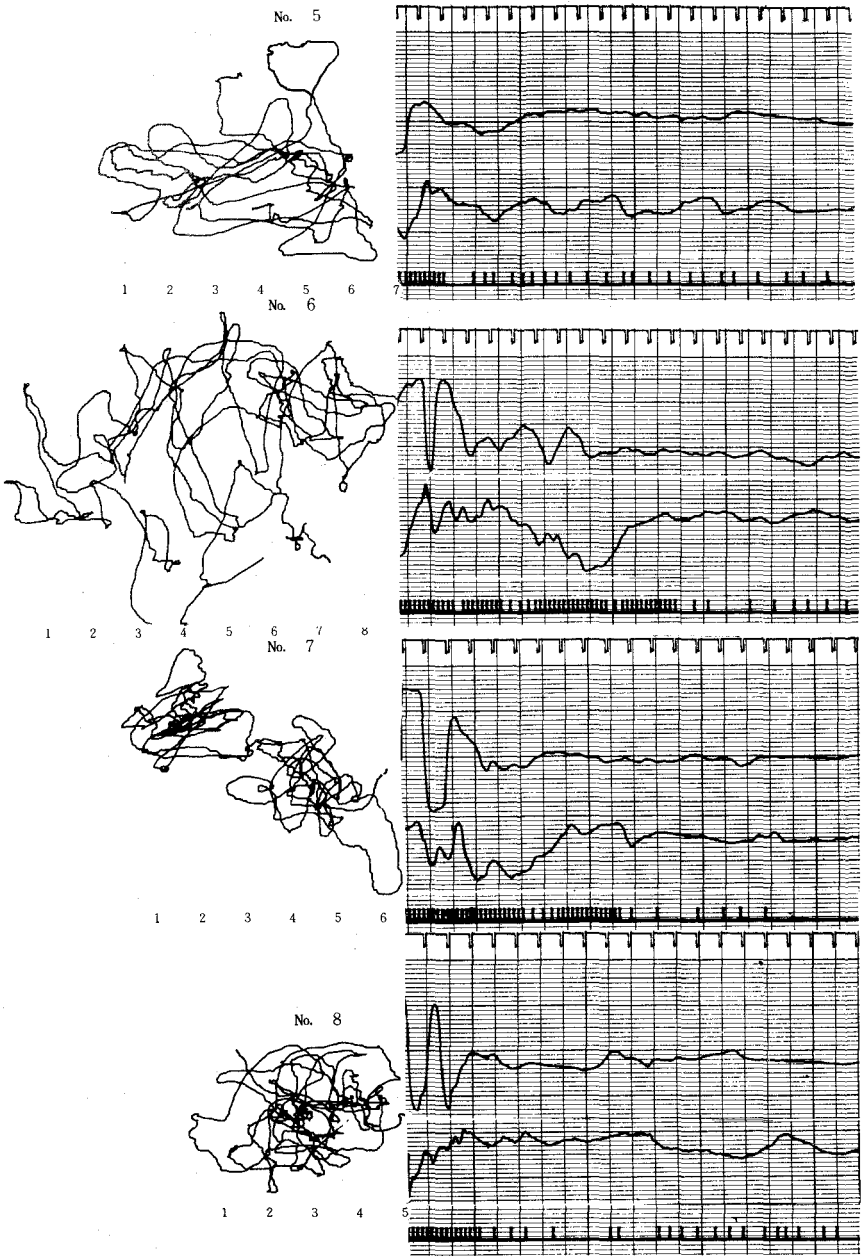
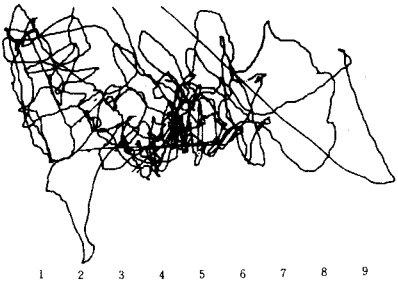

No. 5
No. 6
No. 7
No. 8
No. 9
No. 10

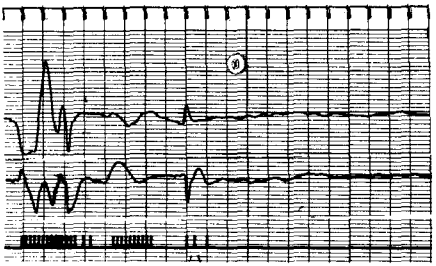
図4　T.O.E.L.F



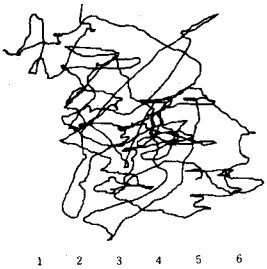

No. 5
1 2 3 4 5 6 7
No. 6
1 2 3 4 5 6 7 8
No. 7
1 2 3 4 5 6
No. 8
1 2 3 4 5

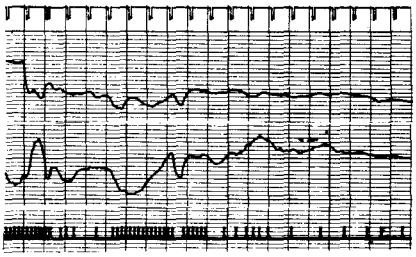
No. 9



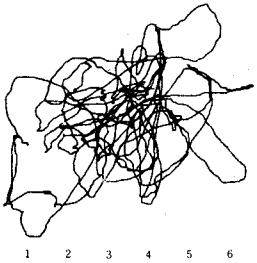


No. 10





No. 11



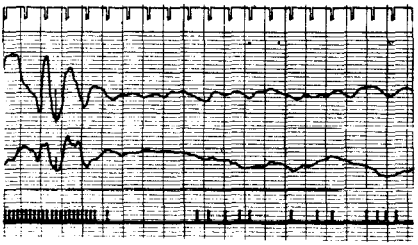
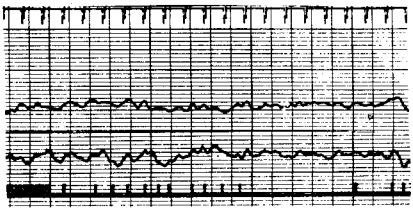
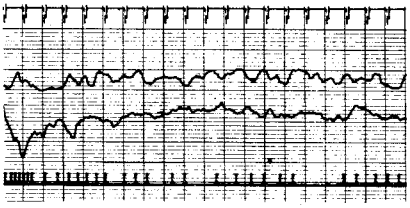


図5 U.S.E.R.F

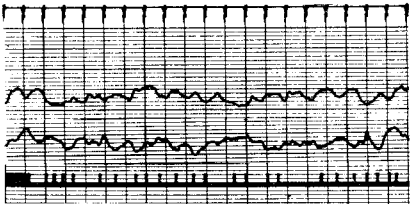
No. 1



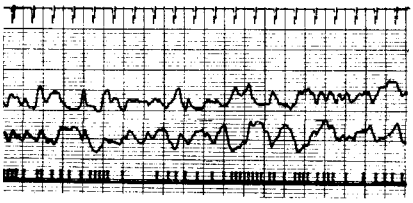
No. 5



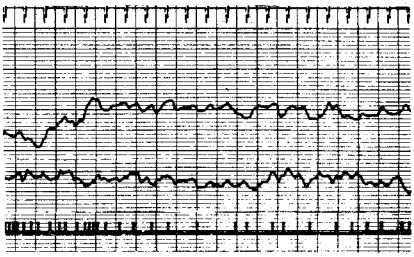
No. 2



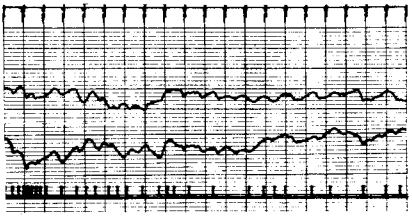
No. 6



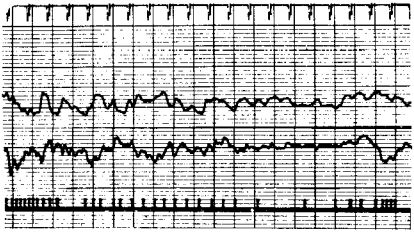
No. 3



No. 7



No. 4



No. 8

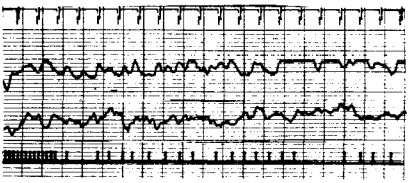
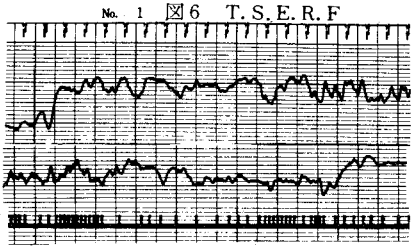
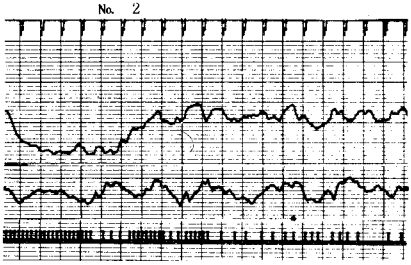


図6　T.S.E.R.F

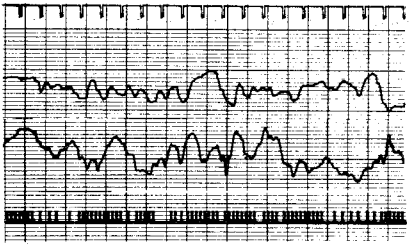
No. 1



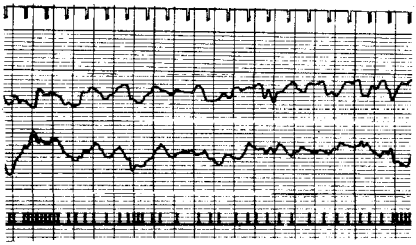
No. 2



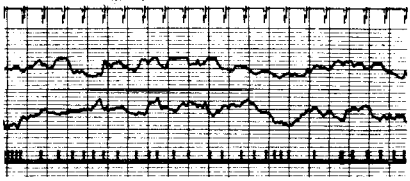
No. 3



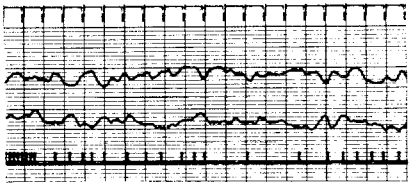
No. 4



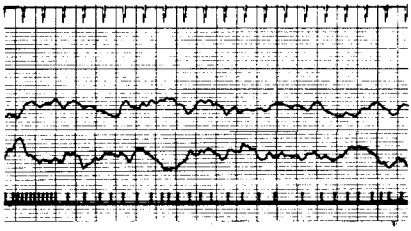
No. 9



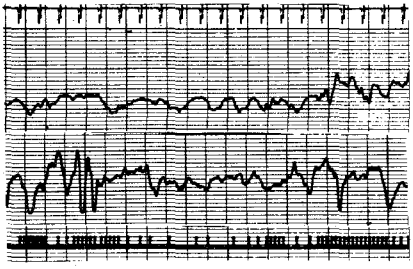
No. 10



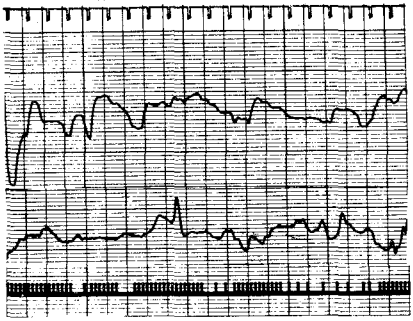
No. 11



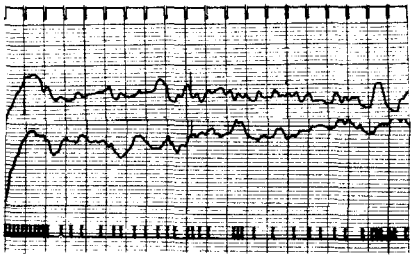
No. 5



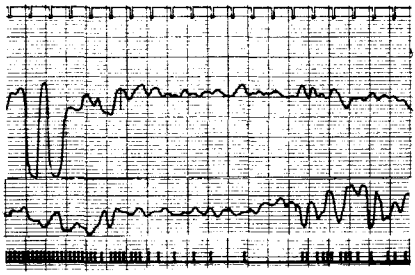
No. 6



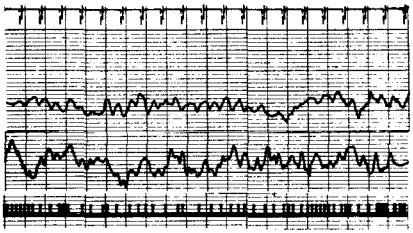
No. 7



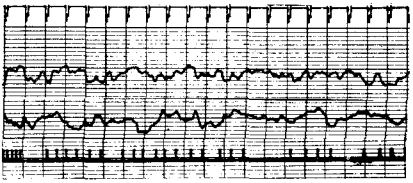
No. 8



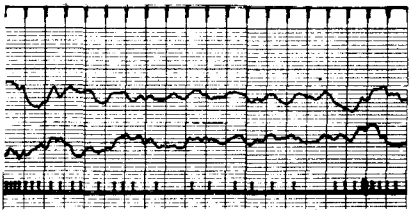
No. 9



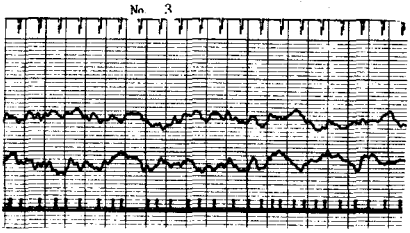
No. 1 図7 U. S. E. L. F



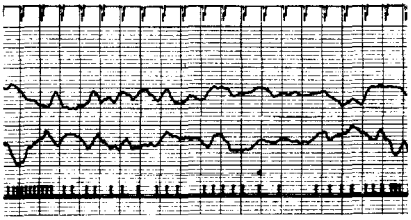
No. 2



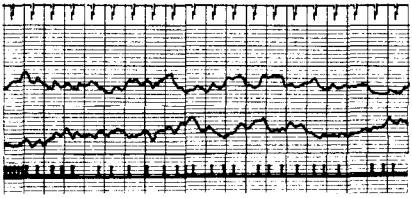
No. 3



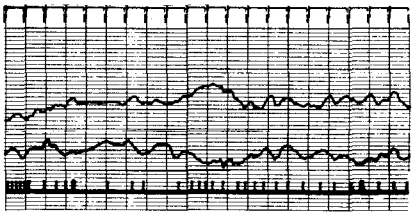
No. 4



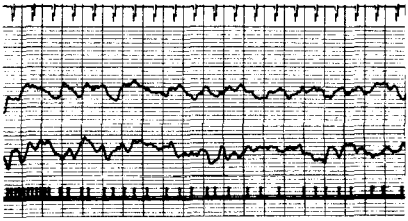
No. 5



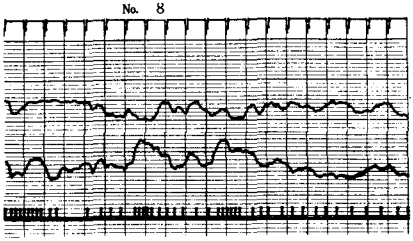
No. 6



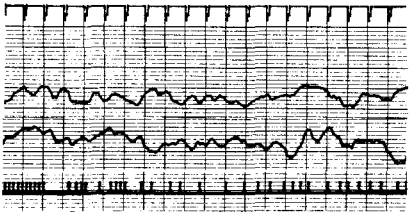
No. 7



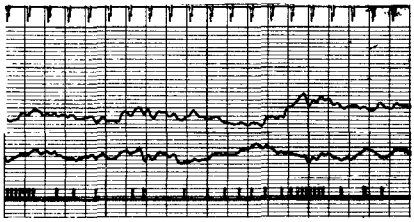
No. 8



No 9



No. 10



No. 11

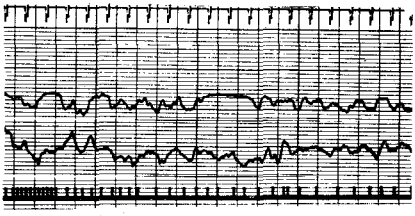
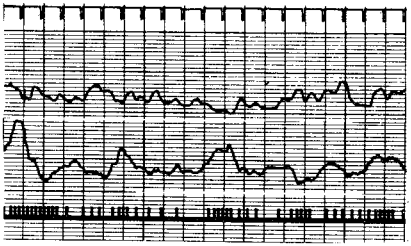
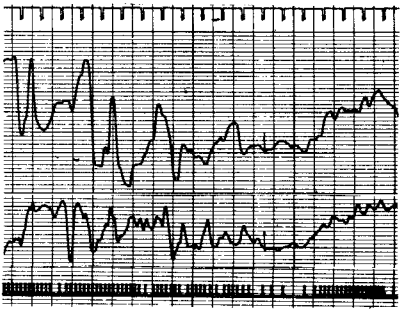


図8 T.S.E.L.F

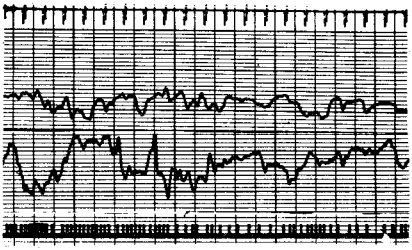
No. 1



No. 2

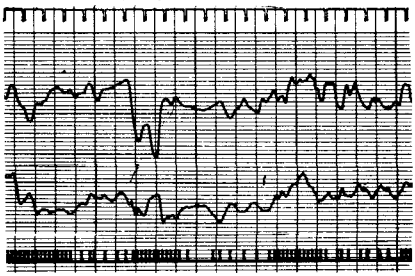


No. 3

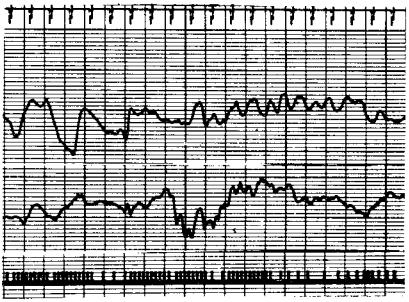


No. 4

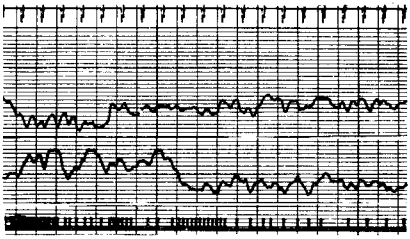
No. 5



No. 6



No. 7



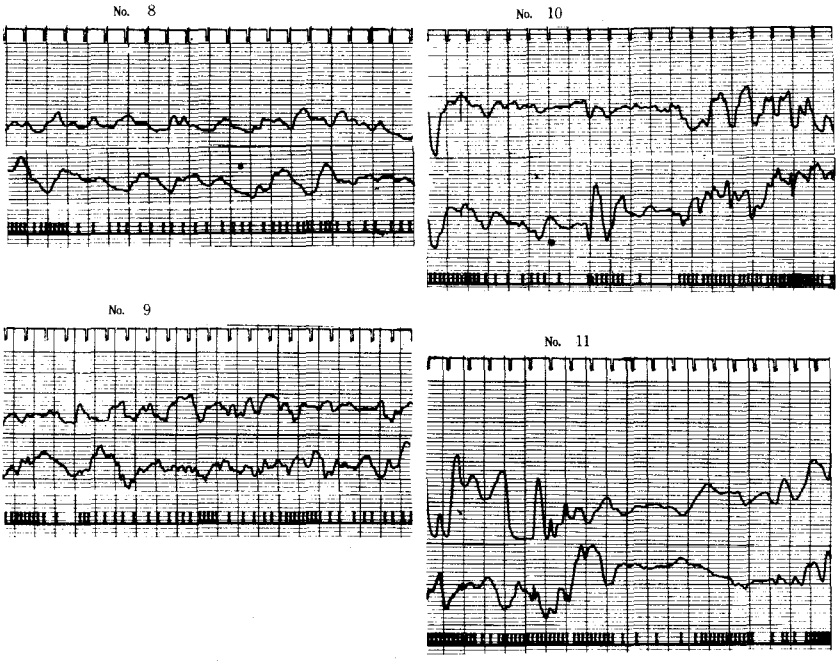
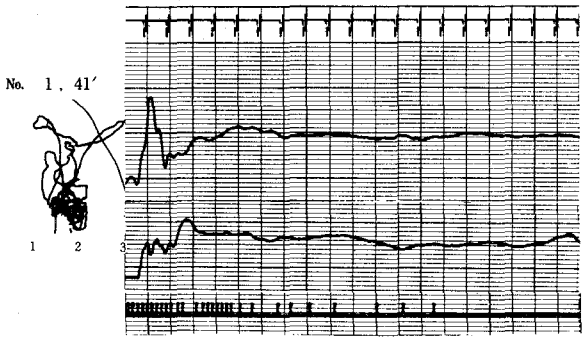
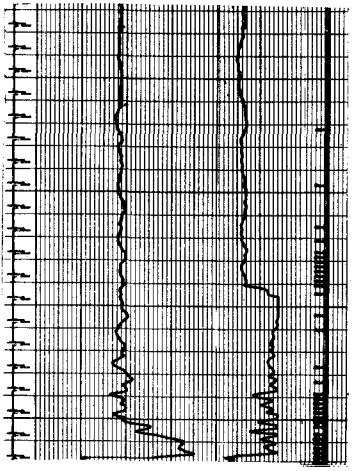
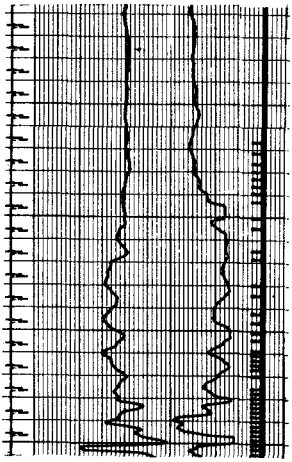
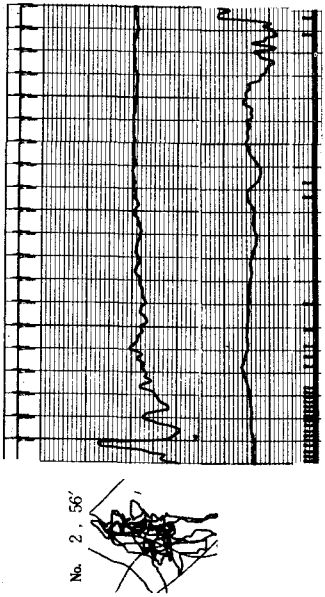


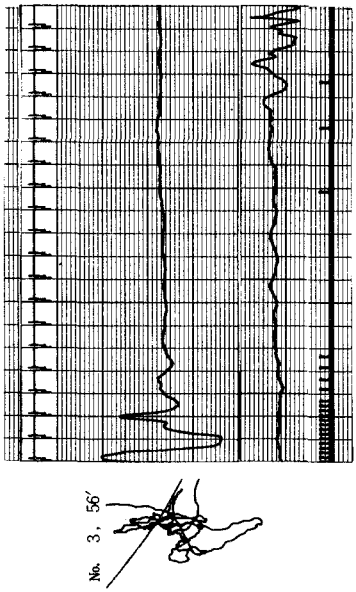
図9　U.R.T.S




No. 4, 45′


No. 5, 44′


No. 2, 56′


No. 3, 56′

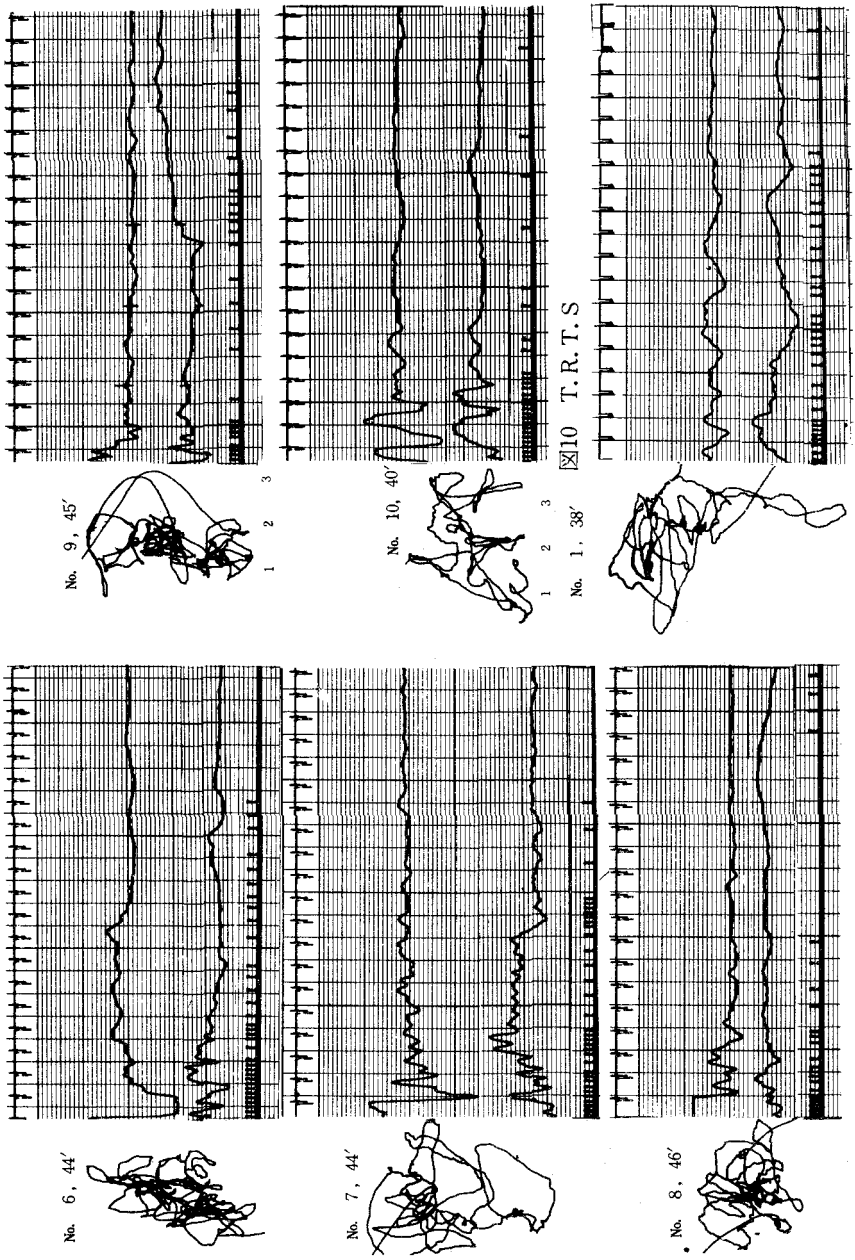
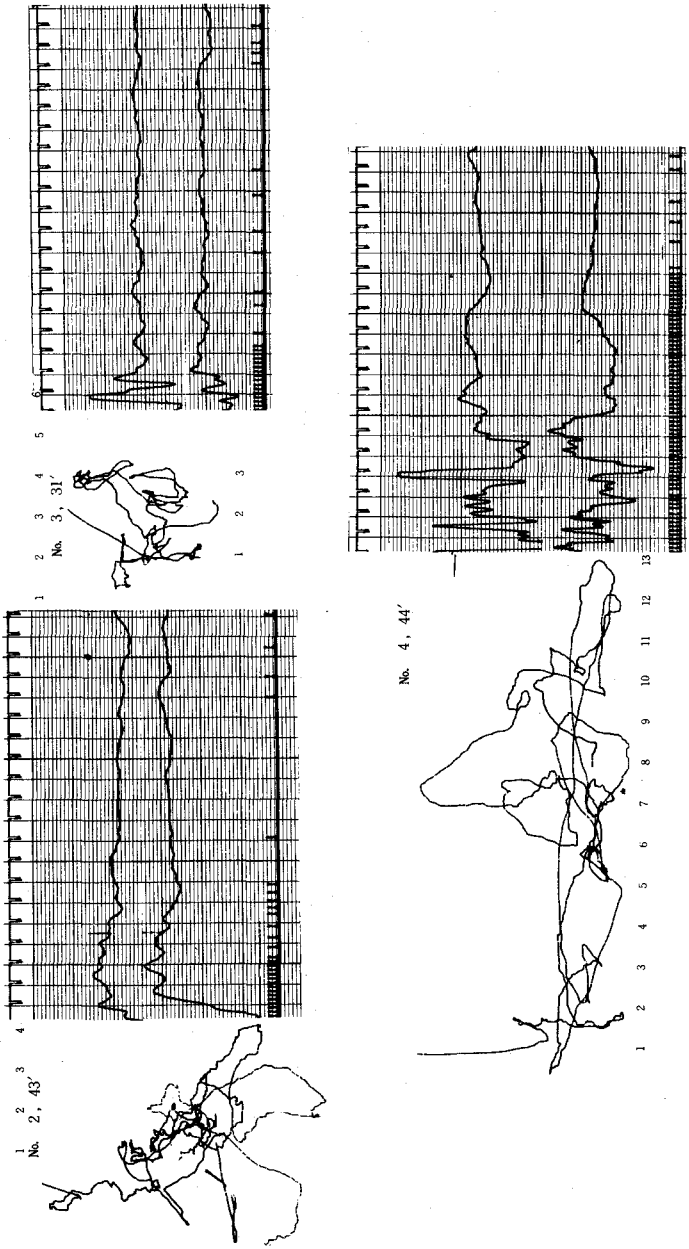
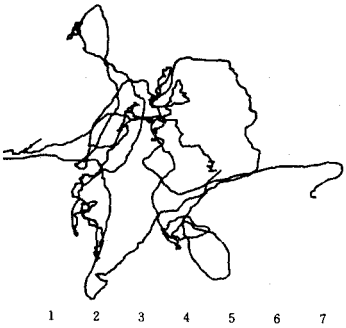
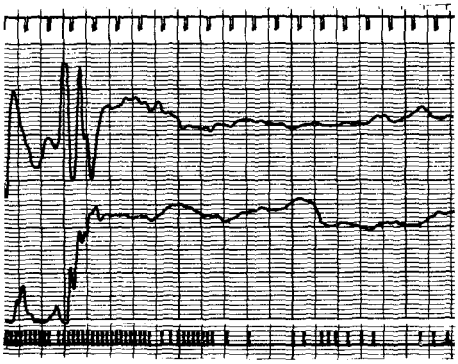


図10　T. R. T. S

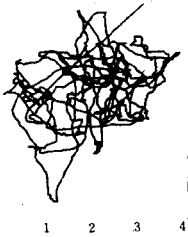

No. 2, 43′
No. 3, 31′
No. 4, 44′

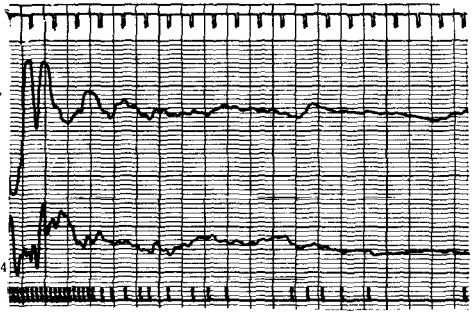
No. 5, 42′



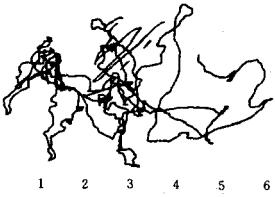


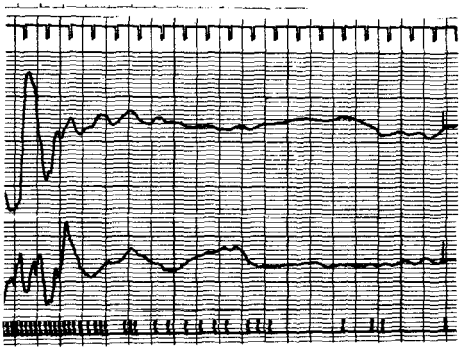
No. 6, 42′

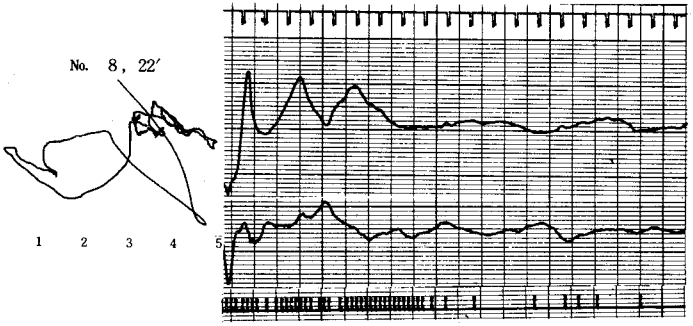


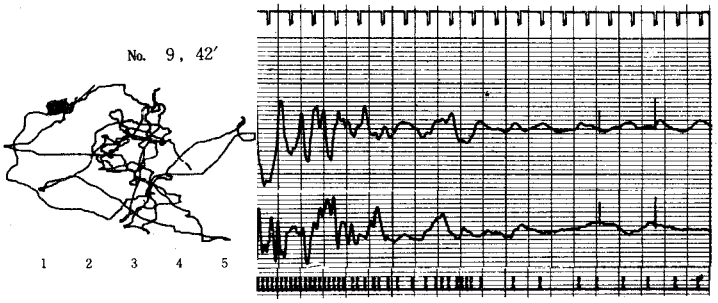


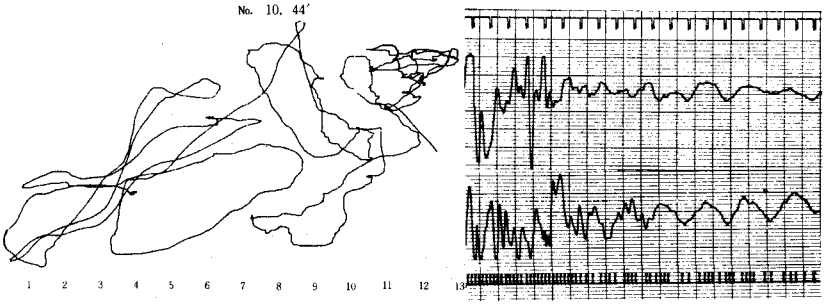
No. 7, 43′






No. 8, 22′
1 2 3 4 5


No. 9, 42′
1 2 3 4 5


No. 10, 44′
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

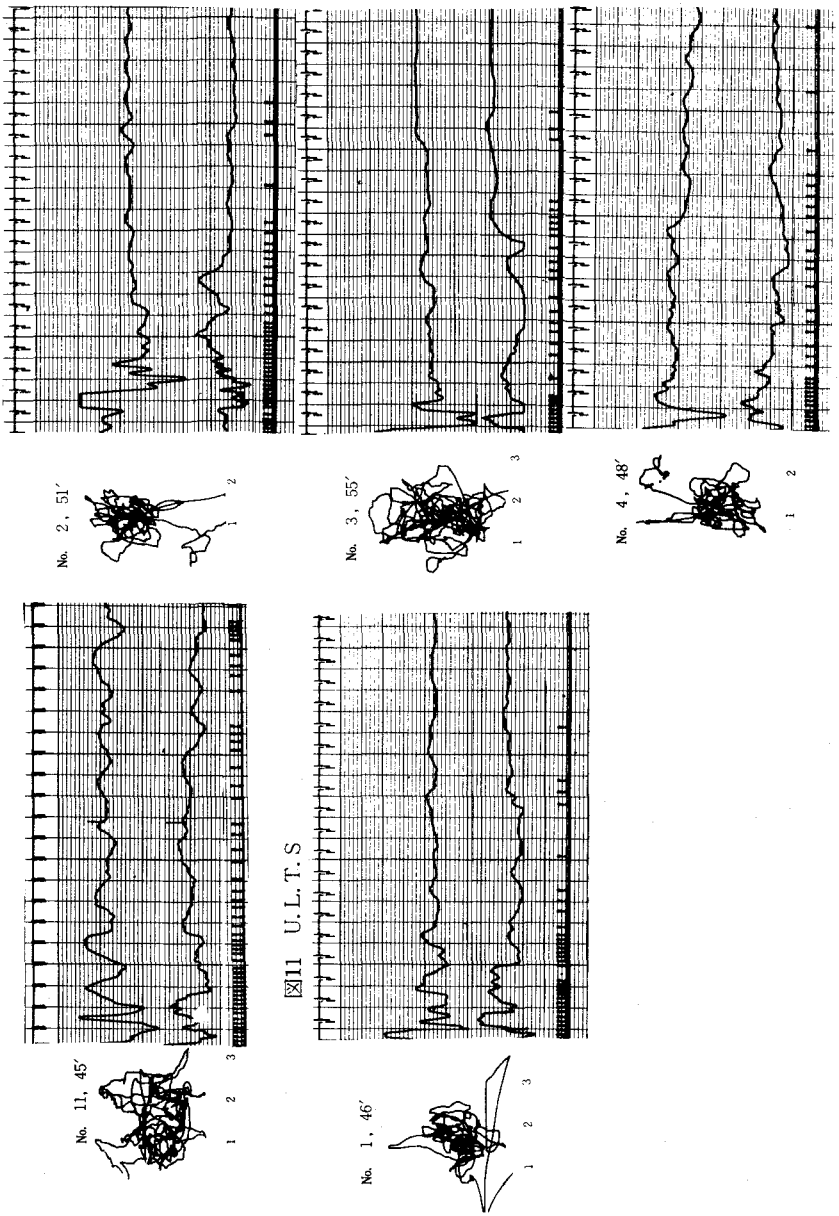
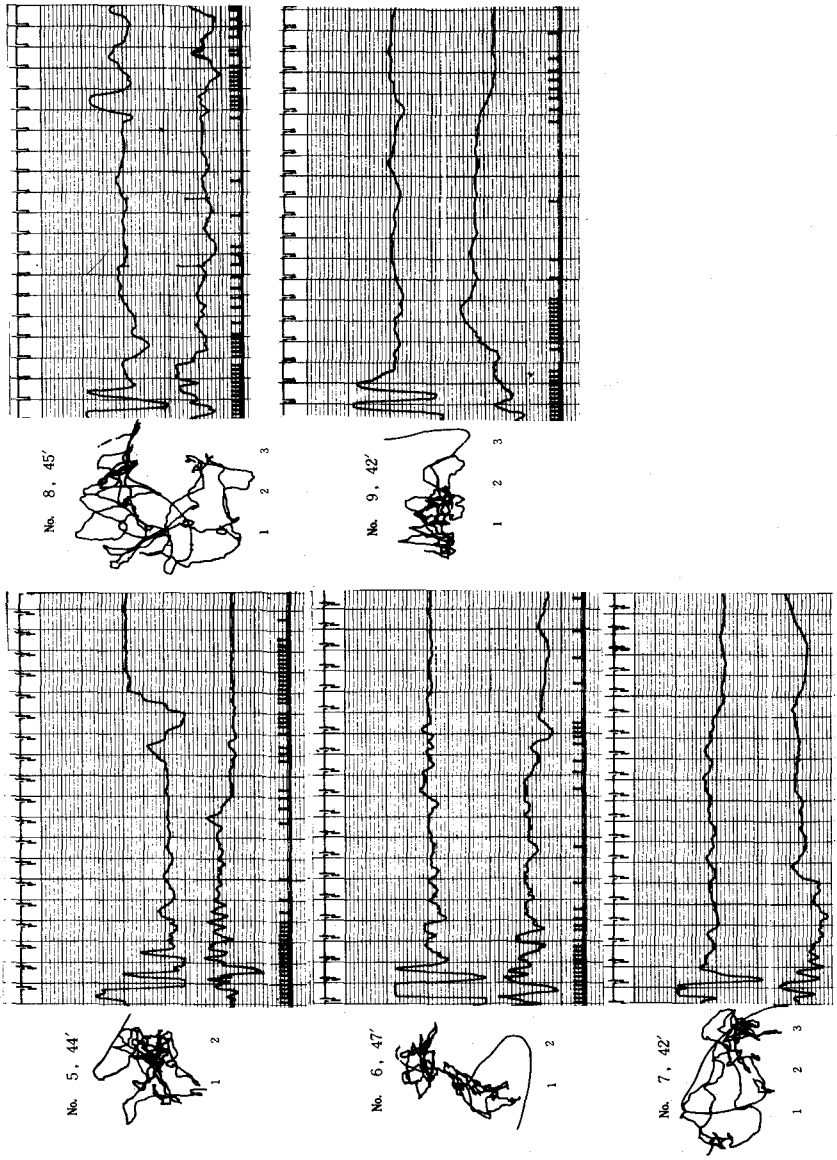


図11　U.L.T.S


No. 5, 44′
1
2
No. 6, 47′
1
2
No. 7, 42′
1
2
3
No. 8, 45′
1
2
3
No. 9, 42′
1
2
3

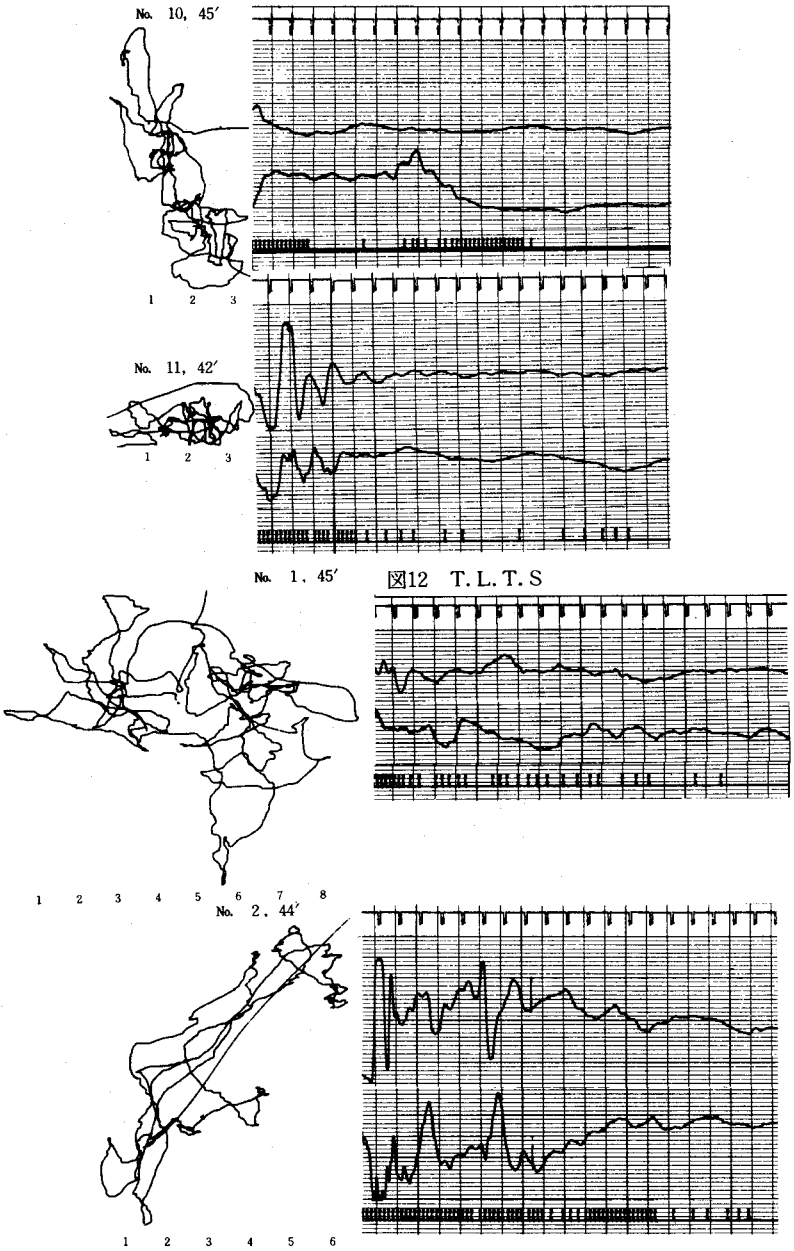
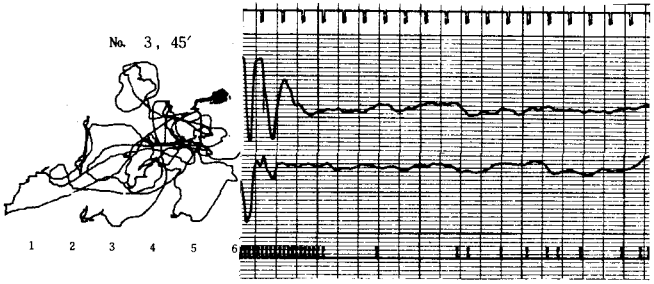
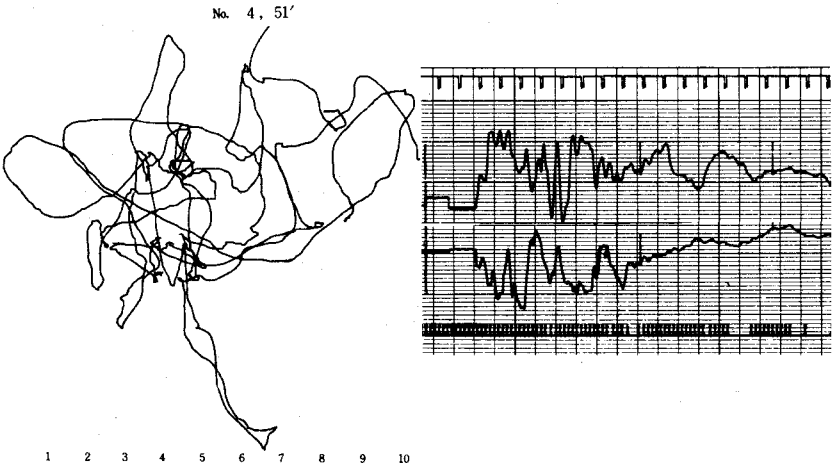
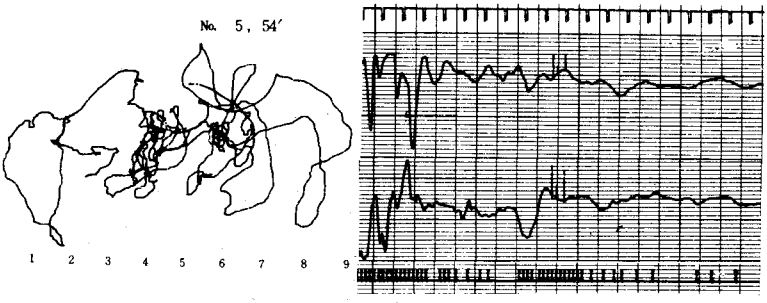
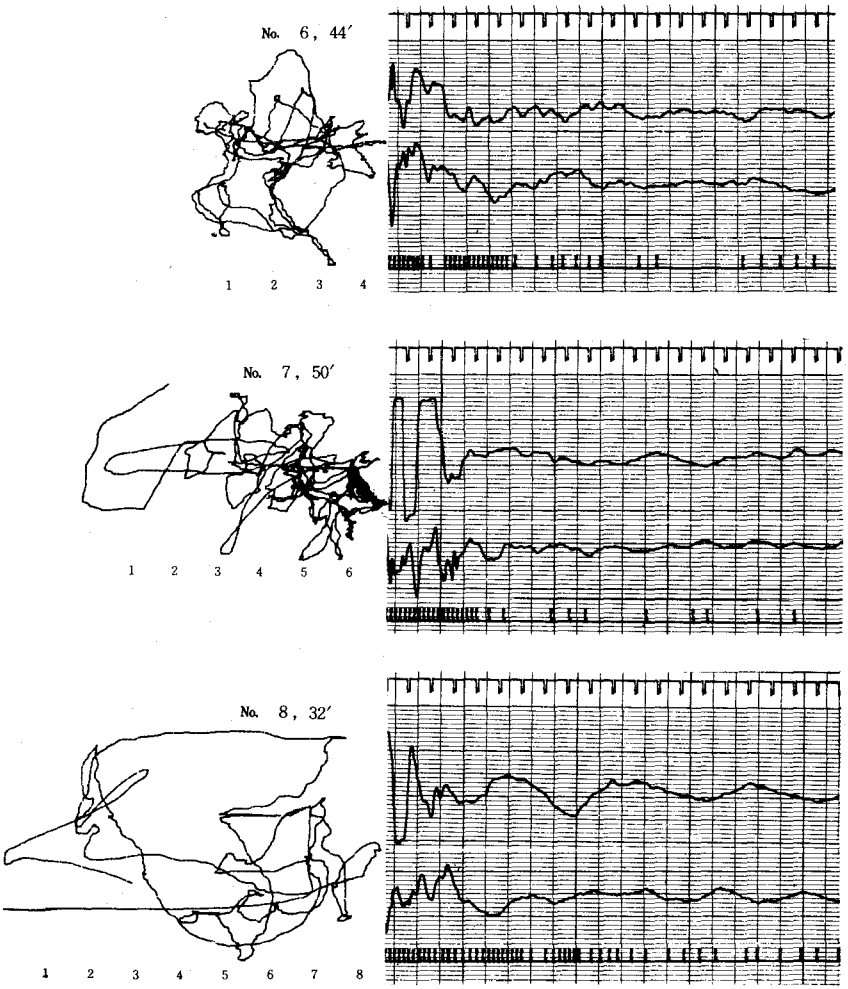


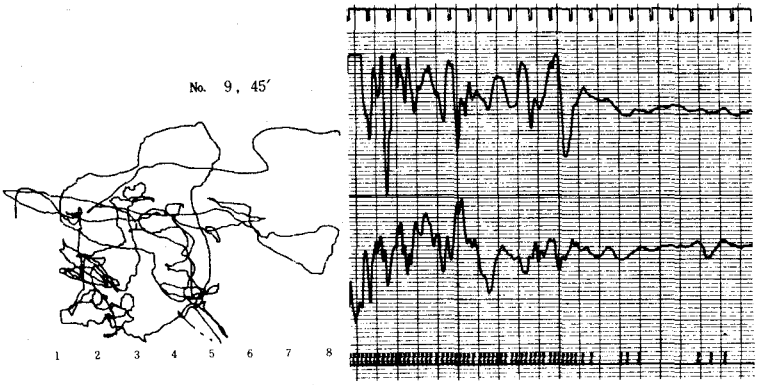
図12　T. L. T. S

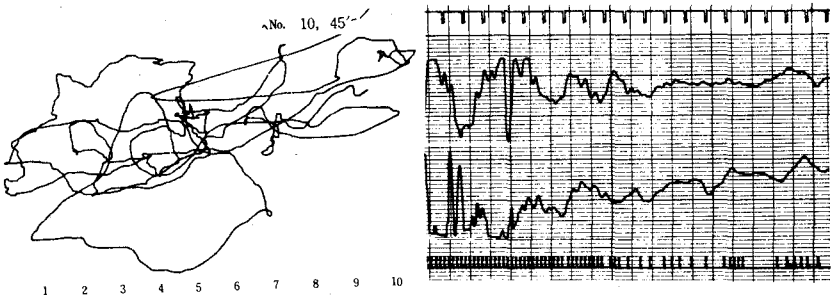

No. 3, 45′
1 2 3 4 5 6

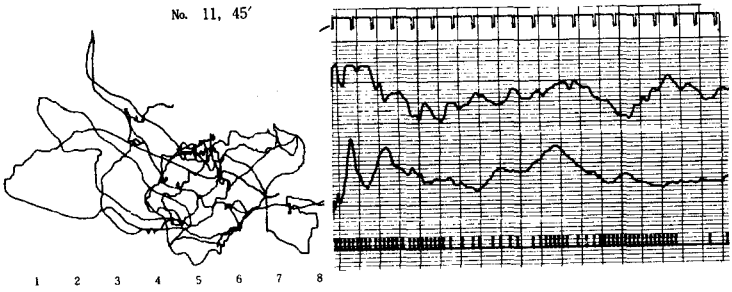

No. 4, 51′
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10


No. 5, 54′
1 2 3 4 5 6 7 8 9


No. 6, 44′
1 2 3 4
No. 7, 50′
1 2 3 4 5 6
No. 8, 32′
1 2 3 4 5 6 7 8


No. 9, 45′
1 2 3 4 5 6 7 8


No. 10, 45′
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10


No. 11, 45′
1 2 3 4 5 6 7 8

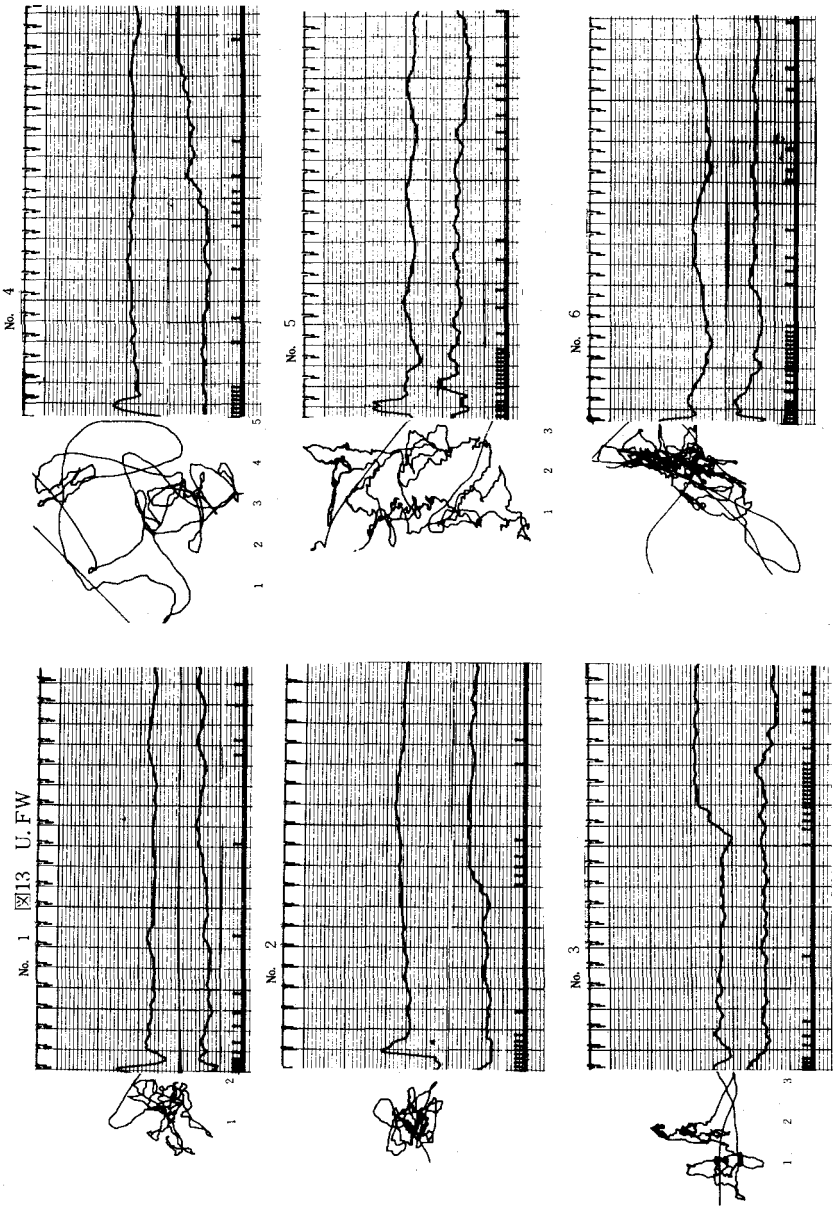
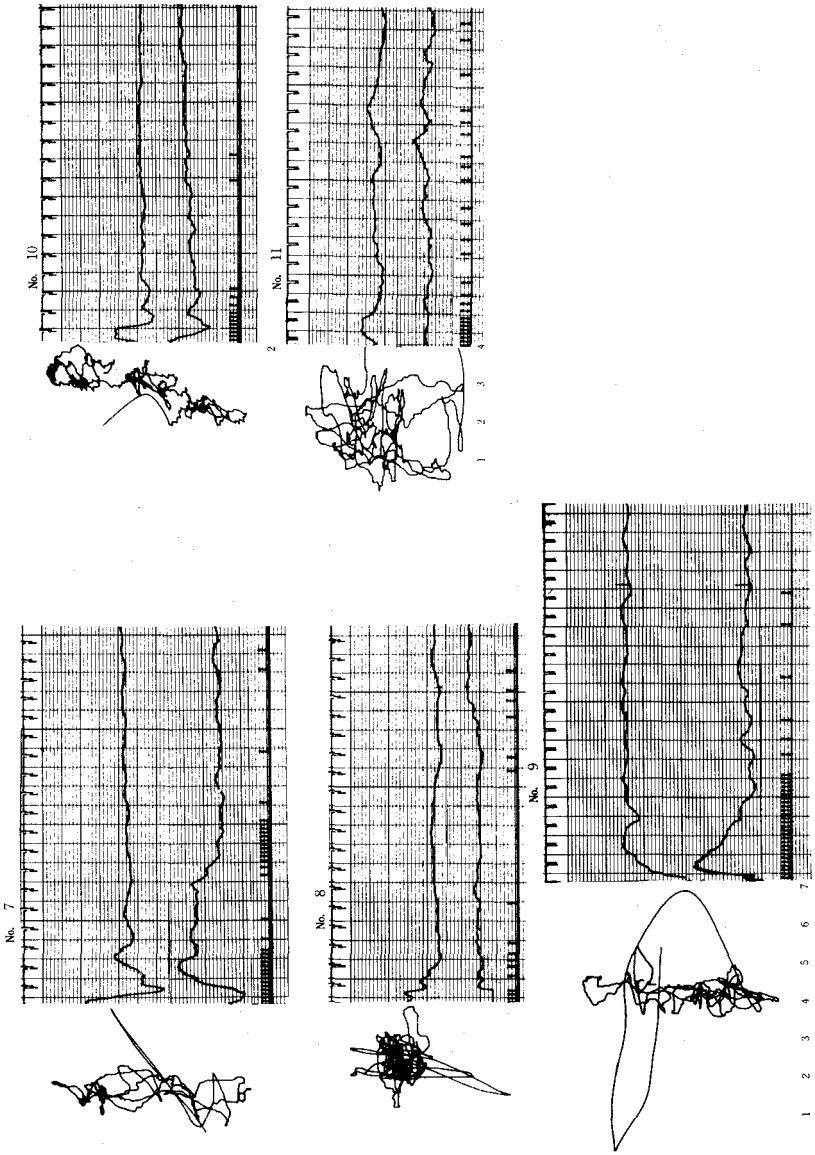
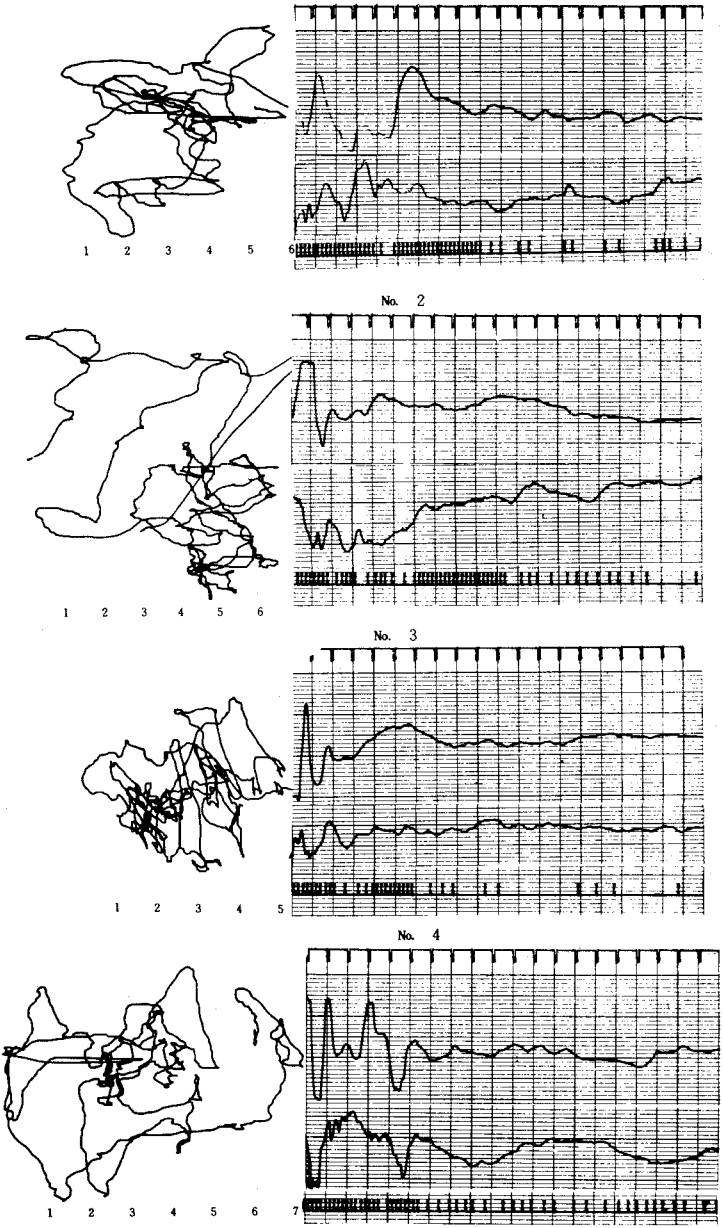
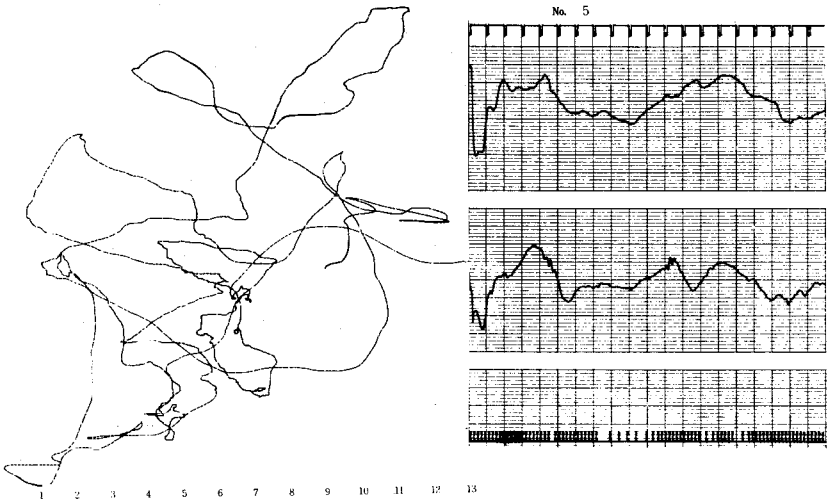


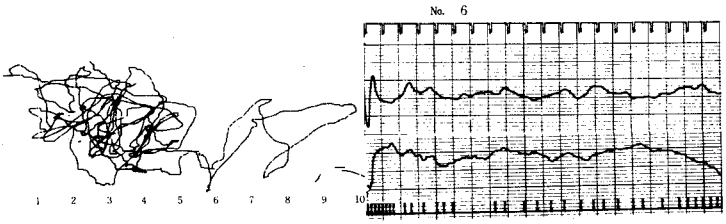
図13 U. FW

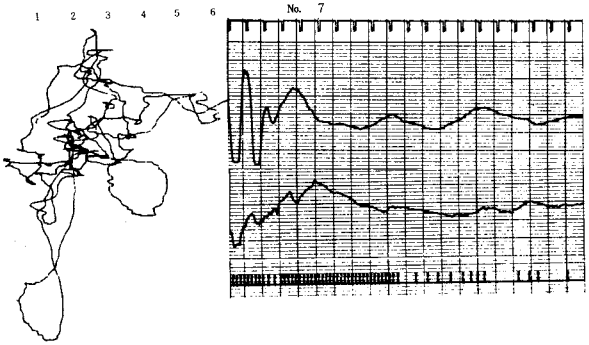

No. 7
No. 8
No. 9
No. 10
No. 11

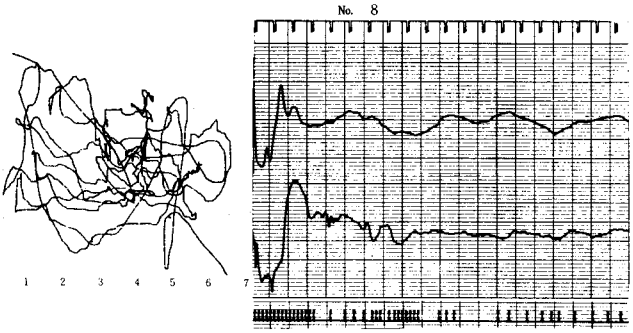
No. 1 図14 T. FW

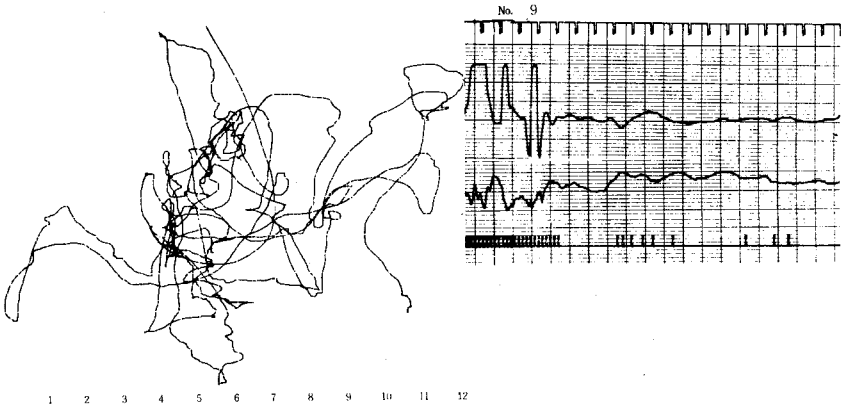


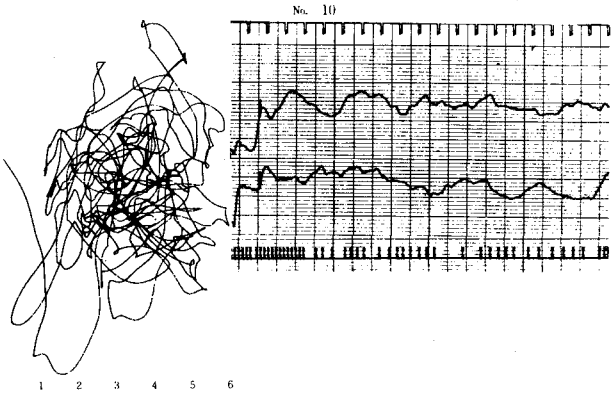

No. 5
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13


No. 6
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10


No. 7
1 2 3 4 5 6


No. 8
1 2 3 4 5 6 7


No. 9
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12


No. 10
1 2 3 4 5 6

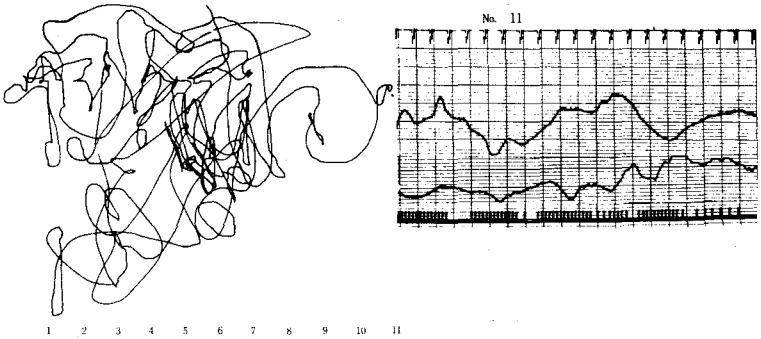
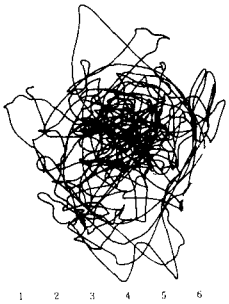
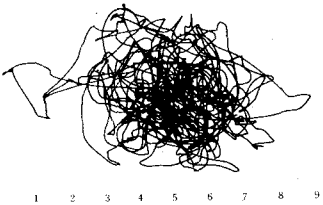


図15 U. S. E. R. F

1

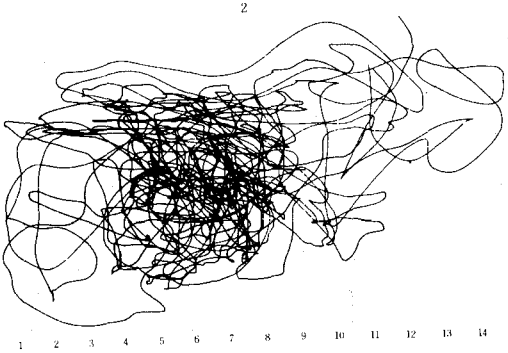


2



L. F 1

2



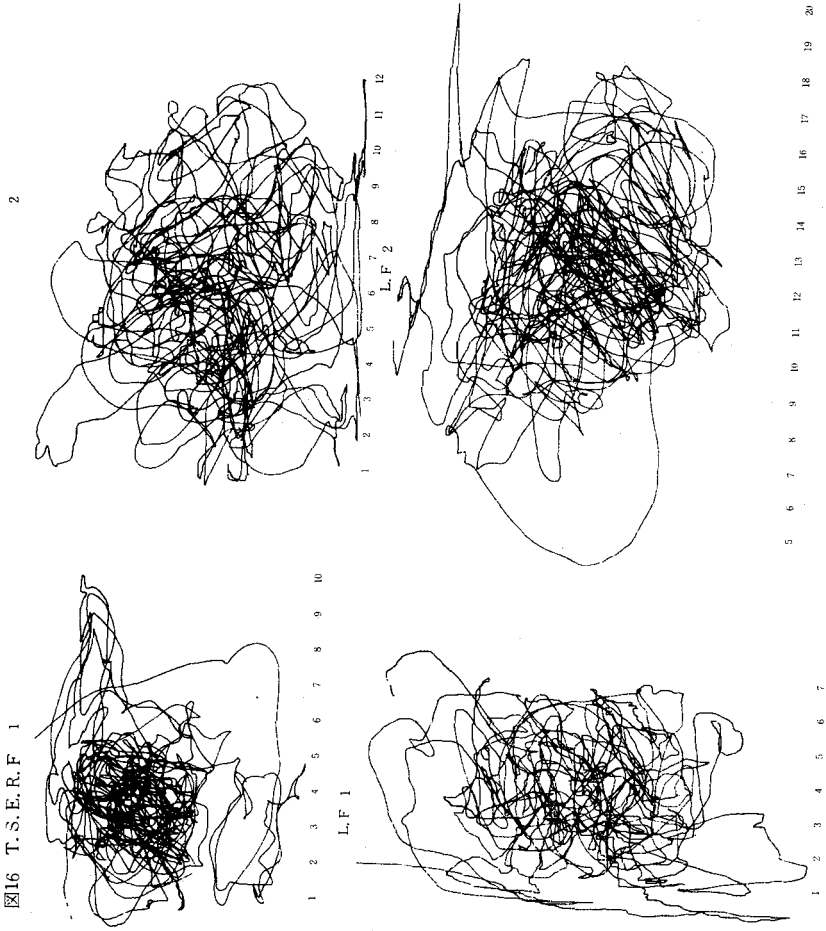


図16 T.S.E.R.F 1 2

Ⅳ－1 結果と考察

(1) 両群の体力測定成績について先きの章で検付したが，総括するならば，各測定項目ともU群がすぐれている。すぐれているもののうち指極はリーチ

表3－1 ユーバー杯強化選手平衡能力測定成績

	氏 名	No.	開眼右 20Sec	kg cm	開眼左 20Sec		閉眼右 20Sec		閉眼左 20Sec
U群	H・Y	1	10	111	12	13322.2	25	277.5	29
	E・T	2	13	144.3	15	166.5	29	321.9	30
	M・A	3	13	144.3	17	188.7	31	344.1	30
	M・I	4	23	255.3	20	222.0	36	399.6	38
	M・S	5	18	199.8	17	188.7	30	333.0	32
	S・I	6	21	233.1	21	233.1	49	543.9	34
	K・N	7	30	333.0	26	288.6	31	344.1	37
	M・A	8	14	155.4	24	266.4	33	366.3	45
	M・N	9	22	244.2	36	399.6	32	355.2	39
	Y・A	10	17	188.7	24	266.4	27	299.7	29
	N・F	11	16	177.6	14 26	155.4 3	37	410.7	30
	MEAN		17.909		20,545		32,727		33,909
	MAXIMUM		30.0		36.0		49.0		49.0
	MINIMUM		10.0		12.0		25.0		25.0

という面から考えるならば有利な材料であろう。筋力全般にU群がすぐれているが特に背筋にすぐれていることは，スタミナとパワーを形成し瞬発力を発揮できる要因であろう。(表1と表2より)

(2) 平衡機能の検討として各検査項目毎のU群とT群間のT—TESTを試

	開眼右 20Sec 右廻り ジャンプ スピン		開眼左 20Sec 左廻り ジャンプ スピン		開眼 両足 20Sec フット ワーク		背筋 kg	脚力 (右+左) kg
321.9	26	288.6	30	333.0	15	166.5	110	129
333.0	29	321.9	39	432.9	17	188.7	140	118
333.0	20	222.0	29	321.9	26	288.6	108	102
421.8	31	344.1	50	555.0	18	199.8	119	110
355.2	36	399.6	50	555.0	26	288.6	114	118
377.4	32	355.2	33	366.3	30	333.0	110	121
410.7	33	366.3	32	355.2	31	344.1	111	93
499.5	22	244.2	45	499.5	16	177.6	103	98
432.9	24	266.4	34	377.4	13	144.3	120	160
321.9	26	288.6	32	355.2	26	288.6	111	143
333.0	23	255.3	37	410.7	33	366.3	116	152
	27,455		37,455		22,818		114.727	122.182
	36.0		36.0		33.0		140.0	160.0
	20.0		20.0		13.0		103.0	93.0

みた（表3，表3－1，表4，表4－1）及び（表5）結果全検査項目間に有意の差を認めた。表3－1，表4－1の数はIGO2の方向出力（X，Y）を微分し二乗後加算し平方根を求め，v－f変換しパルス数として示し更にパルス数を較正し移動量Kg cmで表示した。

表4－1　短期大学バドミントン選手平衡能力測定成績（H. G.

	氏　名	No.	開眼右 20Sec		開眼左 20Sec		閉眼右 20Sec		閉眼左 20Sec
T群	M・K	1	49	543.9	43	477.3	51	566.1	50
	M・A	2	42	466.2	42	466.2	57	632.7	74
	A・S	3	28	310.8	49	543.9	72	799.2	65
	U・O	4	58	643.8	33	366.3	46	510.6	46
	K・K	5	39	432.9	32	355.2	56	621.6	61
	M・T	6	32	355.2	33	366.8	68	754.8	66
	S・K	7	36	399.6	48	532.4	46	510.6	50
	Y・M	8	34	377.4	34	377.8	47	521.7	63
	U・Y	9	21	233.1	28	310.8	56	621.6	52
	T・S	10	22	244.2	48	532.8	62	688.2	76
	K・K	11	46	510.6	34	377.4	57	632.7	68
	MEAN		37.000		38.545		56.182		61.000
	MAXIMUM		58.0		49.0		72.0		76.0
	MINIMUM		21.0		28.0		46.0		46.0

(3) 表3－1U群では重心移動量の最も少くないのは開眼立位時で次いでフットワーク負荷時，閉眼立位時，スピン負荷後となっている。

(4) 表4－1（T群）では重心移動量の最も少くないのは，開眼立位時次いでフットワーク負荷後，スピン負荷後，閉眼の順である。

C. S)

	開眼右 20Sec 右廻り ジャンプ スピン		開眼左 20Sec 左廻り ジャンプ スピン		開眼 両足 20Sec フット ワーク		背筋 kg	脚力 (右＋左) kg
555.0	32	355.2	30	333.0	53	588.3	82	105
821.4	28	310.8	64	710.4	54	599.4	92	105
721.5	26	288.6	30	333.0	32	355.2	85	110
510.6	79	876.9	82	910.2	51	566.1	89	90
677.1	52	577.2	65	721.5	78	865.8	85	93
732.6	33	366.3	37	410.7	33	366.3	92	94
555.0	36	399.6	30	333.0	55	610.5	72	74
699.3	45	499.5	47	521.7	43	477.3	83	94
577.2	44	488.4	60	666.0	33	366.3	97	111
843.6	68	754.8	64	710.4	47	521.7	114	122
754.8	49	543.9	65	721.5	66	732.6	83	93
	44.727		52.182		49.545		88.545	99.182
	79.0		82.0		78.0		114.0	122.0
	26.0		30.0		32.0		72.0	74.0

表—3

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 2

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE UBER

VARIABLE VAR001

MEAN	17.909	STD ERROR	1.729	STD DEV	5.735
VARIANCE	32.891	KURTOSIS	-0.180	SKEWNESS	0.666
RANGE	20.000	MINIMUM	10.000	MAXIMUM	30.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR002

MEAN	20.545	STD ERROR	2.055	STD DEV	6.817
VARIANCE	46.473	KURTOSIS	0.394	SKEWNESS	0.918
RANGE	24.000	MINIMUM	12.000	MAXIMUM	36.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR003

MEAN	32.727	STD ERROR	1.940	STD DEV	6.436
VARIANCE	41.418	KURTOSIS	1.840	SKEWNESS	1.452
RANGE	24.000	MINIMUM	25.000	MAXIMUM	49.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 3

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE UBER

VARIABLE VAR004

MEAN	33.909	STD ERROR	1.575	STD DEV	5.224
VARIANCE	27.291	KURTOSIS	-0.334	SKEWNESS	0.862
RANGE	16.000	MINIMUM	29.000	MAXIMUM	45.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR005

MEAN	27.455	STD ERROR	1.540	STD DEV	5.106
VARIANCE	26.073	KURTOSIS	-1.157	SKEWNESS	0.177
RANGE	16.000	MINIMUM	20.000	MAXIMUM	36.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR006

MEAN	37.364	STD ERROR	2.321	STD DEV	7.698
VARIANCE	59.255	KURTOSIS	-0.983	SKEWNESS	0.706
RANGE	21.000	MINIMUM	29.000	MAXIMUM	50.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 4

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE UHER

VARIABLE VAR007

MEAN	22.818	STD ERROR	2.161	STD DEV	7.167
VARIANCE	51.364	KURTOSIS	-1.538	SKEWNESS	0.006
RANGE	20.000	MINIMUM	13.000	MAXIMUM	33.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR008

MEAN	114.727	STD ERROR	2.927	STD DEV	9.707
VARIANCE	94.218	KURTOSIS	2.346	SKEWNESS	1.621
RANGE	37.000	MINIMUM	103.000	MAXIMUM	140.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR009

MEAN	122.182	STD ERROR	6.625	STD DEV	21.972
VARIANCE	482.764	KURTOSIS	-0.979	SKEWNESS	0.403
RANGE	67.000	MINIMUM	93.000	MAXIMUM	160.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

表—4

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 5

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE HGCS

VARIABLE VAR001

MEAN	37.000	STD ERROR	3.427	STD DEV	11.367
VARIANCE	129.200	KURTOSIS	-0.721	SKEWNESS	0.250
RANGE	37.000	MINIMUM	21.000	MAXIMUM	58.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR002

MEAN	38.245	STD ERROR	2.290	STD DEV	7.594
VARIANCE	57.673	KURTOSIS	-1.498	SKEWNESS	0.235
RANGE	21.000	MINIMUM	28.000	MAXIMUM	49.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

VARIABLE VAR003

MEAN	56.182	STD ERROR	2.600	STD DEV	8.623
VARIANCE	74.364	KURTOSIS	-0.760	SKEWNESS	0.455
RANGE	26.000	MINIMUM	46.000	MAXIMUM	72.000

VALID OBSERVATIONS - 11
MISSING OBSERVATIONS - 0

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 6

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE HGCS

VARIABLE VAR004

MEAN	61.000	STD ERROR	3.069	STD DEV	10.178
VARIANCE	103.000	KURTOSIS	-1.268	SKEWNESS	-0.065
RANGE	30.000	MINIMUM	46.000	MAXIMUM	76.000

VALID OBSERVATIONS = 11
MISSING OBSERVATIONS = 0

VARIABLE VAR005

MEAN	44.727	STD ERROR	5.040	STD DEV	16.716
VARIANCE	279.418	KURTOSIS	-0.283	SKEWNESS	0.847
RANGE	53.000	MINIMUM	26.000	MAXIMUM	79.000

VALID OBSERVATIONS = 11
MISSING OBSERVATIONS = 0

VARIABLE VAR006

MEAN	52.182	STD ERROR	5.470	STD DEV	18.143
VARIANCE	329.164	KURTOSIS	-1.307	SKEWNESS	-0.033
RANGE	52.000	MINIMUM	30.000	MAXIMUM	82.000

VALID OBSERVATIONS = 11
MISSING OBSERVATIONS = 0

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 7

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE HGCS

VARIABLE VAR007

MEAN	49.545	STD ERROR	4.316	STD DEV	14.313
VARIANCE	204.873	KURTOSIS	-0.440	SKEWNESS	0.466
RANGE	46.000	MINIMUM	32.000	MAXIMUM	78.000

VALID OBSERVATIONS = 11
MISSING OBSERVATIONS = 0

VARIABLE VAR008

MEAN	88.545	STD ERROR	3.229	STD DEV	10.709
VARIANCE	114.073	KURTOSIS	1.218	SKEWNESS	1.020
RANGE	42.000	MINIMUM	72.000	MAXIMUM	114.000

VALID OBSERVATIONS = 11
MISSING OBSERVATIONS = 0

VARIABLE VAR009

MEAN	99.182	STD ERROR	3.924	STD DEV	13.014
VARIANCE	169.364	KURTOSIS	-0.238	SKEWNESS	-0.110
RANGE	48.000	MINIMUM	74.000	MAXIMUM	122.000

VALID OBSERVATIONS = 11
MISSING OBSERVATIONS = 0

(5)　両群の検査各項目とも左脚より右脚立位時のほうが重心移動量即ち動揺量が少ない。

(6)　各検査項目ともT群の移動量はU群の移動量よりもかなり多く，その量は60%～100%に達している。

(7)　表3－1，表4－1の動揺量の記録は最初の2秒間をカットし以後20秒間の記録をもって検討した。その理由は計測台上に上る巧拙のため被験者によって始めの記録が大巾に異る数を示すためである。又立位姿勢を保ってから時間が長く経過するに伴い筋疲労による失調が記録に混入し易いためである。

図1，以下の左の図はX，Y（左右前後方向の動揺）で右の図は上のラインがX（左右）下のラインはY（前後）方向を示す，尚動揺度の振幅の大きさは体重によって左右されるためSTATIC SENSOGRAPHで補正したものである。

(8)　第1図～第16図にみられるように，各被験者の動揺パターンや周期に差異がみられ特にU群の開眼片脚立位時の重心移動量が少く，動揺周期も短く，常に微調整をしながら静止状態を保っている。T群は比較的に動揺周期も長く大きくバランスを乱すものが多くみられる。

(9)　普通時の平衡能力と運動負荷後の平衡能力との間にどのような差が示すかを知るため競技中に行われる動作に近い動作負荷を与えその示すところを検討したのが第13図，第14図である。一般的に普通時の動揺量と比較し負荷刺激後の動揺量は多くはなるが一様にではなく個人により差がある。フットワーク負荷後の立位姿勢が両脚立ちでもあるところから，かなり安定的で負荷の影響も多く受けない。T群においては著明に負荷の影響を受け記録時後半の乱れは激しい。

(10)　第9図～第12図は被験者にスピン様の負荷を与えた後単脚で記録したものである。動揺量は開眼立位時と比べ多くなり右脚立ちが左脚立ちよりも安定したものを示していることが両群に共通している。U群ではT群ほどスピン様の運動負荷の影響を受けないことは明らかであり（X，Y）の合成図

から判るようにT群の記録時後半の動揺は著しく特に左脚立位時の動揺が激しい。

(11) 立位姿勢の保持には前述のように視覚による調整が行われている。開眼立位時と閉眼立位時の動揺を比較すると，U群において（図1，3）と（図5，7）によると例外なく動揺量は開眼時に比べて多く運動負荷時より多くなるのが認められる。但しスピン様運動負荷時の場合よりは少くない。T群においては，運動負荷時よりも動揺が大きく，特に左脚単脚閉眼立位時にの動揺量は著しく図16にみられるようにX，Y合成図は大型図形として記録され記録途中大きくバランスを崩すものが多い。開眼時動揺の少い選手は閉眼時に視覚による調整が庶断された場合にも筋，腱器官，の反射，前庭器官，小脳等の調整によって平衡を保ってコントロールしている。U群はこのことからT群と比較すると深部感覚や前庭など平衡器官による調整機能が優れているといえよう。開眼立位時に動揺量の多い選手は閉眼時の動揺量も多いが，これは視覚による調整の割合が多く閉眼時に視覚からの情報のフイードバックが庶断され平衡が保ちにくくなるためであろう。T群において，開眼立位時にT群より動揺が多いことは，視覚による情報のフイードバックも充分活用されないことを示し，閉眼時には更に動揺量が多いことは，深部感覚や前庭器官の平衡調整も機能的に働いていないことを示すものであろう。

(12) 閉眼時に両群に認められる傾向として，記録時後半重心が，つま先寄りに移動する傾向があり，動揺周期も開眼立位時に比して長くなる。開眼立位時には動揺周期は短くなり視覚から情報を受けて絶えず微調整を行っているようである。

(13) 表3－1 a 表4－1 からKENDALL CORRELATION COEFFICLENTS（ケンダールの順位相関）を求めたのが表6，表7であり，それをまとめたのが表6－1，表7－1である。ここではU群別，T群別に各検査項目間にいかなる差があるかを検討することにより，バドミントン選手の平衡能力の特徴的事項を把握しようと試みた。

(14) U群の各検査項目間に相関関係を認められたものは36項目中5項目で

表—5

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI　　MAY 28, 1975　　PAGE 6

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE UBER
HGCS

T-TEST

GROUP 1 - FIRST　11 CASES
GROUP 2 - NEXT　11 CASES

VARIABLE		NUMBER OF CASES	MEAN	STANDARD DEVIATION	STANDARD ERROR	F VALUE	2-TAIL PROB.	POOLED VARIANCE ESTIMATE T VALUE	DEGREES OF FREEDOM	2-TAIL PROB.	SEPARATE VARIANCE ESTIMATE T VALUE	DEGREES OF FREEDOM	2-TAIL PROB.
VAR001	GROUP 1	11	17.9091	5.735	1.729	3.93	0.042	-4.97	20	0.000	-4.97	14.78	0.000
	GROUP 2	11	37.0000	11.367	3.427								
VAR002	GROUP 1	11	20.5455	6.817	2.055	1.24	0.739	-5.85	20	0.000	-5.85	19.77	0.000
	GROUP 2	11	38.5455	7.594	2.290								
VAR003	GROUP 1	11	32.7273	6.436	1.940	1.80	0.370	-7.23	20	0.000	-7.23	18.50	0.000
	GROUP 2	11	56.1818	8.623	2.600								
VAR004	GROUP 1	11	33.9091	5.224	1.575	3.80	0.067	-7.85	20	0.000	-7.85	14.93	0.000
	GROUP 2	11	61.0000	10.178	3.069								
VAR005	GROUP 1	11	27.4545	5.106	1.540	10.72	0.001	-3.28	20	0.004	-3.28	11.85	0.007
	GROUP 2	11	44.7273	16.716	5.040								
VAR006	GROUP 1	11	37.3636	7.698	2.321	4.56	0.013	-2.49	20	0.022	-2.49	13.49	0.027
	GROUP 2	11	52.1818	18.143	5.470								
VAR007	GROUP 1	11	22.8182	7.167	2.161	3.99	0.040	-5.54	20	0.000	-5.54	14.72	0.000
	GROUP 2	11	49.5455	14.313	4.316								
VAR008	GROUP 1	11	114.7273	9.707	2.927	1.22	0.761	6.01	20	0.000	6.01	19.81	0.000
	GROUP 2	11	88.5455	10.709	3.229								
VAR009	GROUP 1	11	122.1818	21.972	6.625	2.85	0.114	2.99	20	0.007	2.94	16.25	0.009
	GROUP 2	11	99.1818	13.014	3.924								

ある。T群では8項目に有意を認めた。U群とT群に共通する検査項目に有意を認めたものは1項目で閉眼右脚立と閉眼左脚立ちである。このことからU群とT群の平衡能力は言うかえれば平衡機能のパターンは異質なものであるといえよう。

(15)　U群において（開眼右と左）（開眼右と閉眼右）（開眼右と閉眼左）（開眼左と閉眼左）（閉眼右と閉眼左）（閉眼左と閉眼右）の6項目中4項目に相関がある。このことは，開眼時の基本立ちに対して閉眼時の場合にも同様のパターンが認められるというよう。T群においては，閉眼右と閉眼左の1項目に有意が認められるにすぎず，開眼立位時と閉眼立位時には一定の傾向は認められない。

(16)　T群において，開眼立位時とスピン負荷左及びスピン負荷右と左に相関があり，フットワーク負荷後と開眼右に相関がみられたが，これはU群より

表—6

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 9

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE UBER

KENDALL CORRELATION COEFFICIENTS

VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR	
VAR001	0.5234	VAR001	0.3519	VAR001	0.4764	VAR001	0.4259	VAR001	0.1869	VAR001	0.2453
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR002	SIG .013	VAR003	SIG .066	VAR004	SIG .021	VAR005	SIG .034	VAR006	SIG .212	VAR007	SIG .147
VAR001	0.1869	VAR001	-0.0926	VAR002	0.1869	VAR002	0.5578	VAR002	0.0748	VAR002	0.0189
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR008	SIG .212	VAR009	SIG .346	VAR003	SIG .212	VAR004	SIG .008	VAR005	SIG .374	VAR006	SIG .468
VAR002	-0.0189	VAR002	-0.0189	VAR002	-0.1495	VAR003	0.4954	VAR003	-0.0185	VAR003	0.2617
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR007	SIG .467	VAR008	SIG .468	VAR009	SIG .261	VAR004	SIG .017	VAR005	SIG .468	VAR006	SIG .131
VAR003	0.2831	VAR003	-0.0374	VAR003	-0.0556	VAR004	0.0191	VAR004	0.3655	VAR004	-0.1165
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR007	SIG .113	VAR008	SIG .436	VAR009	SIG .406	VAR005	SIG .467	VAR006	SIG .059	VAR007	SIG .309
VAR004	0.0577	VAR004	-0.2668	VAR005	0.1869	VAR005	0.2453	VAR005	0.2243	VAR005	-0.2037
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR008	SIG .402	VAR009	SIG .127	VAR006	SIG .212	VAR007	SIG .147	VAR008	SIG .168	VAR009	SIG .192
VAR006	-0.0381	VAR006	0.3774	VAR006	-0.0748	VAR007	-0.0762	VAR007	-0.0944	VAR008	0.3365
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR007	SIG .435	VAR008	SIG .053	VAR009	SIG .374	VAR008	SIG .372	VAR009	SIG .343	VAR009	SIG .075

A VALUE OF 99.0000 IS PRINTED IF A COEFFICIENT CANNOT BE COMPUTED.

表—7

HEIKOKINOSEKIBUNCHI NO SHOTOKEI MAY 28, 1975 PAGE 11

FILE NONAME (CREATION DATE = MAY 28, 1975)
SUBFILE HGCS

KENDALL CORRELATION COEFFICIENTS

VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR		VARIABLE PAIR	
VAR001	-0.0374	VAR001	-0.3366	VAR001	-0.2936	VAR001	0.1273	VAR001	0.2670	VAR001	0.4037
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR002	SIG .436	VAR003	SIG .075	VAR004	SIG .104	VAR005	SIG .293	VAR006	SIG .126	VAR007	SIG .042
VAR001	-0.3740	VAR001	-0.4862	VAR002	0.1731	VAR002	0.2453	VAR002	-0.2992	VAR002	-0.4118
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR008	SIG .055	VAR009	SIG .014	VAR003	SIG .229	VAR004	SIG .147	VAR005	SIG .100	VAR006	SIG .039
VAR002	-0.0386	VAR002	-0.2692	VAR002	0.2115	VAR003	0.3850	VAR003	-0.2618	VAR003	-0.0981
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR007	SIG .404	VAR008	SIG .125	VAR009	SIG .183	VAR004	SIG .006	VAR005	SIG .131	VAR006	SIG .337
VAR003	-0.3268	VAR003	0.3654	VAR003	0.4808	VAR004	-0.0367	VAR004	0.1155	VAR004	-0.0556
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR007	SIG .085	VAR008	SIG .059	VAR009	SIG .020	VAR005	SIG .438	VAR006	SIG .311	VAR007	SIG .406
VAR004	0.3586	VAR004	0.3586	VAR005	0.6102	VAR005	0.2936	VAR005	0.1870	VAR005	-0.2992
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR008	SIG .062	VAR009	SIG .062	VAR006	SIG .004	VAR007	SIG .104	VAR008	SIG .212	VAR009	SIG .100
VAR006	0.3657	VAR006	0.2942	VAR006	-0.2961	VAR007	-0.2831	VAR007	-0.3963	VAR008	0.4808
WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)	WITH	N(11)
VAR007	SIG .059	VAR008	SIG .104	VAR009	SIG .201	VAR008	SIG .113	VAR009	SIG .045	VAR009	SIG .020

A VALUE OF 99.0000 IS PRINTED IF A COEFFICIENT CANNOT BE COMPUTED.

表6－1　ユーバー杯強化選手 (KENDALL CORRELATION COEFFICIENTS)

	開　右 1	開　左 2	閉　右 3	閉　左 4	S　右 5	S　左 6	F両脚 7	脚筋力 8	背筋力 9
1 開　右		※ ※	※	※ ※	※ ※	—	—	—	—
2 開　左	0.5234 0.013		—	※ ※ ※	—	—	—	—	—
3 閉　右	0.3519 0.066	0.1869 0.212		※ ※	+	—	—	—	—
4 閉　左	0.4764 0.021	0.5578 0.008	0.4954 0.017		—	※	—	—	—
5 S　右	0.4259 0.034	0.0748 0.374	−0.0185 0.468	0.0191 0.467		—	—	—	—
6 S　左	0.1869 0.212	0.0189 0.468	0.2617 0.131	0.3655 0.059	0.1869 0.212		—	※	—
7 F両脚	0.2453 0.147	−0.0190 0.467	0.2831 0.113	−0.1165 0.309	0.2453 0.147	−0.0381 0.435		—	—
8 脚筋力	0.1869 0.212	−0.0189 0.468	−0.0374 0.436	0.0577 0.402	0.2243 0.168	0.3774 0.053	−0.0762 0.372		※
9 背筋力	−0.0926 0.346	−0.1495 0.261	−0.0556 0.406	−0.2668 0.127	−0.2037 0.192	−0.0748 0.374	−0.0944 0.343	0.3365 0.075	

表7－1　短期大学バドミントン選手 (H. G. C. S)
(KENDALL CORRELATION COEFFICIENTS)

	開　右 1	開　左 2	閉　右 3	閉　左 4	S　右 5	S　左 6	F両脚 7	脚筋力 8	背筋力 9
1 開　右		—	※	—	—	—	※ ※	※	※ ※
2 開　左	−0.0374 0.436		—	—	※	※ ※	—	—	—
3 閉　右	−0.3366 0.075	0.1731 0.2229		※ ※ ※	—	—	※	※	※ ※
4 閉　左	−0.2936 0.104	0.2453 0.1447	0.5850 0.006	03	—	—	—	※	※
5 S　右	0.1273 0.293	−0.2992 0.100	−0.2618 0.131	−0.1167 0.438		※ ※ ※	—	—	※
6 S　左	0.2670 0.126	−0.4118 0.039	−0.0981 0.337	0.0555 0.311	0.6102 0.004		※	—	—
7 F両脚	0.4037 0.042	−0.0566 0.404	−0.3208 0.085	−0.3556 0.406	0.2936 0.104	0.3657 0.059		—	※ ※
8 脚筋力	−0.3740 0.055	−0.2692 0.125	0.3685 0.059	0.3586 0.062	0.1870 0.212	0.2942 0.104	−0.2871 0.1113		※ ※
9 背筋力	−0.4862 0.099	0.2115 0.183	0.4808 0.020	0.3586 0.062	−0.2992 0.100	−0.1961 0.201	−0.3963 0.045	0.4808 0.020	

も負荷の影響をT群は受けているというよう。即ち開眼時，閉眼時とも動揺量の大きいものは運動負荷後の動揺量も又大きい傾向を示すものであろう。

(17) T群において背筋力と検査項目間に8項目間中3項目に相関を認めたがU群には認められない。このことは明らかではないがT群の中には筋力の支持による平衡保持が多く他の平衡器官が機能的に働いていないのではないかと考えられるが定かではない。

V まとめ

バドミントン選手の重心移動量にみられる平衡機能から判別する一方法として視覚によって，フイードバックされた情報により補正する度合の大きい選手と深部感覚に依存する割合の多い選手とに大別され，このケースでは視覚に依存する型のほうが動揺量は多いといえる。又視覚の関与する，筋力を補正に機能させる選手は非鍛練未熟練者に多く認められる傾向がある。左右の動揺量の比較では僅かに右脚立位時に動揺が少いという傾向もあり，右足の巧徴性と関連があるのではないかと考えられる。又非鍛練者程運動負荷後の動揺量が大きいことは明らかである。これらのことからバドミントン競技プレー中に激しく瞬間的に体位が変化し，反転する変化に対応し，立直り，動的バランスを保ち，視覚による調整を加えプレーに適正に対するための平衡を保たねばならない。このような点から平衡能力は序に述べた如くバドミントン選手の適性の1つの柱とも考えられる。平衡能力は生得的資質もあろうが，対照群との比較にも示されたように，トレーニングによって強化されることも明らかであることから平衡能力の強化には筋感覚や平衡機器を刺激し鋭敏に反応し調整させるトレーニングを課する必要があると考えられる。

（昭和51年5月21日受理）

文 献

(1) 日本平衡神経学会編：平衡神経の検査法 1970
(2) 日本体育協会スポーツ科学委員会 No,1：研究報告集 1969
(3) 日本体育協会：スポーツ科学研究報告 1972
(4) 奈良健三，北村優明：ユーバー杯国際女子バドミントン競技選手の基礎体力について

1974
(5) 福田　精：運動と平衡の反射生理　1957
(6) 猪飼道夫：直立姿勢の研究　日本生理誌　1944
(7) 時田　喬：平衡機能検査法　耳鼻臨床　1968
(8) 福田精也：前庭機能検査法　臨床鼻咽喉科検査法　1965
(9) 猪飼道夫：生体の運動機構とその制御　1972
(10) 藤森聞一：生理学体係III　1966
(11) P．V．カルボビッチ：運動の生理学　1963

教官学術研究発表集録

文　科　編

（昭和50.4.1～51.3.31）

人文科学

馬場雄二	交通騒音と断続性人工騒音との認知再生して及ぼす影響	第16回日本人間工学会発表論文集	50. 5
馬場雄二	疲労作業後の騒音が及ぼす２重提示刺激の再認性	第39回日本心理学会発表論文集	50. 9

外国語

豊国　孝	『処女とジプシー』―母親の没落	北海道英語英文学ＸＸ	50. 6.30
坂西八郎	レーニンの「スイス民謡」	北方圏調査会（会長：堂垣内北海道知事）雑誌「北方圏」	51. 1. 1
坂西八郎	アルプの俳句だより・（スイス人俳句作家のドイツ語俳句の和訳および民俗学的解説）	デーリィマン誌（酪農専門誌）1976年１月号～10月号連載	51. 1.10
坂西八郎	ドイツの民謡（民俗民芸双書78巻）第三刷（訳書）	岩崎美術社	51. 2.20

保健管理センター

田中豊典	新広範囲抗生物質 Versapen の治験成績	新日本製鉄株式会社室蘭製鉄所病院医誌第16巻，第１号	50. 4
田中豊典	青年期の健康の諸問題について（第２報）：第１部：青年期，特に大学生の保健意識調査	新日本製鉄株式会社室蘭製鉄所病院医誌第16巻，第１号	50. 4
田中豊典	青年期の健康の諸問題について（第２報）：第２部：青年期，特に大学生の健康障碍調査	新日本製鉄株式会社室蘭製鉄所病院医誌第16巻，第１号	50. 4
田中潜次郎	Sorting 法にもとづく多数の特性形容詞の意味分析	東北心理学会第29回大会	50. 6.29

田　中　潜次郎	形容詞の評価性に及ぼす副詞・否定詞の効果	日本心理学会第39回大会	50．9．5

CONTENTS

Dec., 1976

Vol. 9 **No. 1**

Die Kurze Zusammenfassung über das Gewissen
.....von Y. Ishiyama (1) 1

Materialian deutscher Volksliedsammlungen
.....Hachiro Sakanishi (21) 21

Japanische Übersetzung Lutz Röhrich : Die Textgattungen
des popularen Liedes .....Hachiro Sakanishi (103)103

Japanische Übersetzung Ernst Schade : Ludwig Erks
kritische Liedersammlung und sein „Volkslied" — Begriff.
Erstes Kapitel, Leben und Wirken Ludwig Erks.
.....Hachiro Sakanishi (133)133

Japanische Übersetzung Rolf W. Brednich : Hamburg
als Innovationszentrum popular Lieder
.....Hachiro Sakanishi (147)147

Shakespeare's Place-Names Commentary Henry VIII (Part II)
.....Yutaka Takeuchi (157)157

Blake's *Newton* .....Rikyu Kono (197)197

A study on the function of equilibration for badminton players
.....Hidetoshi Konari (217)217

Other Achievements in Studies for 1975
by Professors in this Institute ..... (273)273

昭和51年12月10日　印　刷
昭和51年12月18日　発　行　（非売品）

編集兼発行者　室蘭工業大学

印刷所　協業組合　高速印刷センター
営業所／札幌市中央区北4条西3丁目
北洋相銀ビル6F
TEL 271－5101（代）
工　場／札幌市西区手稲稲穂472
TEL 682－1325